

栃木県埋蔵文化財調査報告第 349 集

仲 内 遺 跡 2

—国土交通省による湯西川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2012.3

栃 木 県 教 育 委 員 会
(財)とちぎ未来づくり財団

なか うち 仲 内 遺 跡 2

—国土交通省による湯西川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2012.3

栃 木 県 教 育 委 員 会
(財)とちぎ未来づくり財団



遺跡遠景（東上空から）



SI-1180 炉跡（北西から）



SI-1239 炉跡（北から）



SI-1272 炉跡（北から）



SI-1289 炉跡（南西から）



左列 上：SI-1239 炉埋設土器
中：SX-1291 出土土器
下：包含層第Ⅳ層出土土器 735

右列 上：SX-1282 出土土器
下：包含層第Ⅳ層出土土器 523

序

栃木県の北西に位置する日光市栗山地区は、そのほとんどが日光国立公園に含まれ、四季を通じて変化に富んだ自然環境に恵まれています。また、当地区は、本県最大の流域面積をもつ鬼怒川の最上流域にあたり、溪谷や大小の様々な滝などの景観、良質な温泉地にも恵まれ、観光地として大きく発展してきました。

このたび、国土交通省による湯西川ダム建設に先立ち、事業地内に所在する仲内遺跡・川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡の取り扱いについて、関係機関と協議の上、平成10年度から記録保存を目的とした発掘調査を行ってきました。本報告書は、このうち仲内遺跡の2次調査に係わる調査成果をまとめたものです。

出土した多くの資料につきましては、現地での発掘調査と並行して平成12年度より整理作業を開始し、その成果を発掘調査報告書として順次刊行してまいりましたが、本年度をもちましてすべて発刊し、湯西川ダムに係わる発掘調査事業が終了いたします。

本書が県民の皆様にとって、郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なるご協力をいただきました国土交通省関東地方整備局湯西川ダム工事事務所、日光市教育委員会などの関係機関、並びに関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

栃木県教育委員会
教育長 須藤 稔

例 言

1. 本書は、栃木県日光市湯西川字井戸沢地内に所在する仲内遺跡の発掘調査報告書であり、平成 17 年度刊行の栃木県埋蔵文化財調査報告第 296 集「仲内遺跡」に続く第 2 分冊である。発掘調査は、国土交通省関東地方整備局による、湯西川ダム建設関連工事に伴う事前調査である。
2. 発掘調査は、平成 18～20 年度の 3 カ年に渡って実施し、栃木県教育委員会事務局文化財課の指導により財団法人とちぎ生涯学習文化財団が、また平成 23 年度からは組織改編により新たに発足した財団法人とちぎ未来づくり財団が国土交通省関東地方整備局と受託契約を締結し、埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
3. 発掘調査から整理作業・報告書作成までの担当者は、以下のとおりである。



平成 18 年度（発掘調査・整理作業）	平成 21 年度（整理作業）
調査第二担当 係長 藤田典夫	整理第二担当 副主幹 田代 隆
主査 塚本師也	主査 片根義幸
主任 福田智保	主任 藤田直也
平成 19 年度（発掘調査・整理作業）	平成 22 年度（整理作業）
調査第二担当 副主幹 藤田典夫	整理第一担当 副主幹 田代 隆
主査 片根義幸	主査 片根義幸
主任 福田智保	
平成 20 年度（発掘調査・整理作業）	平成 23 年度（整理・報告書作成作業）
調査第二担当 係長 芹澤清八	整理第一担当 主査 片根義幸
主査 片根義幸	
主任 藤田直也	
4. 本書の作成・執筆・編集は片根義幸が行った。
5. 国家座標の移設・航空写真・測量は中央航業株式会社に委託し、遺構の写真撮影については調査担当者が行った。遺物の写真撮影は整理担当者が行い、一部小川忠博氏に委託した。
6. 本遺跡に係わる石器石材の肉眼鑑定については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。また、黒曜石の産地同定分析については、文化庁文化財部美術学芸課の建石徹氏に依頼した。
7. 発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたっては、栃木県教育委員会文化財課の指導を受けると共に、日光市教育委員会の御協力を賜った。
8. 発掘調査協力者は次のとおりである。

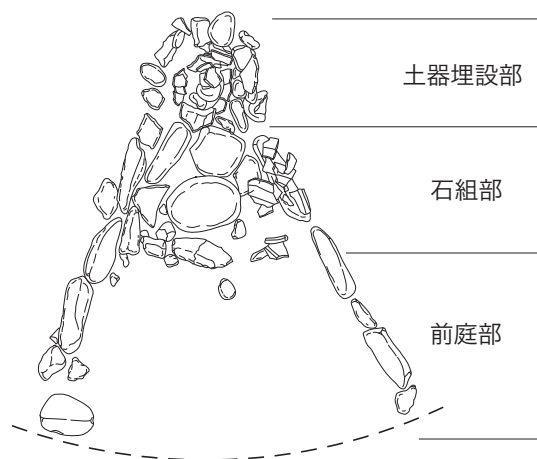
阿久津清美 阿久津幸司 阿久津トシエ 阿久津秀夫 阿久津葵 阿部サチ 阿部征子 阿部正司
阿部久次 阿部浩 池田龍夫 大島福三郎 君島邦子 鈴木映子 鈴木五郎 鶴羽宣子 手塚傳
中川秀子 長谷川貴壽 伴文彦 伴光弘 福田彰 森晃子 山城正夫 山口敏行 山口平男 吉野真弓
9. 整理作業・報告書作成作業の参加者は次のとおりである。

石口優子 石濱有希子 出井百合子 大谷小穂 菅野路子 鶴見里子 野口昌子 広瀬裕美 福田貴子
松本美穂 村田沙織 茂呂由美
10. 本遺跡の調査概要については埋蔵文化財センター年報、栃木県埋蔵文化財保護行政年報などで報告されているが、本書をもって正式報告とする。
11. 本遺跡に係わる出土遺物・実測図・写真等の資料は、日光市教育委員会で保管している。

凡 例

遺構

1. 仲内遺跡2の略号はKR-NU2 (KURIYAMAMURA NAKAUCHI2) である。
2. 発掘調査時の遺構は、遺跡ごとに竪穴住居跡：SI、土坑：SK、土器埋設遺構およびその他の不明遺構：SXの略号で表し、種別によらず確認された遺構順に番号を発番した。本報告掲載にあたっては、調査時に付された遺構番号が既刊行の報告書に掲載した番号と重複が認められたため、整理作業の段階で別表1のとおり振り替えた。また、調査時に発番したひとつの番号で重複が明らかとなった遺構については、古い時期の遺構からA・B・Cのアルファベットを付して区別した。
3. 遺構実測図は原則として、竪穴住居跡：縮尺1/60、土坑：縮尺1/40、土器埋設遺構：縮尺1/30で掲載した。また、土器や礫などの遺物出土状態、炉跡については縮尺1/30に拡大して掲載した。
4. 遺構実測図中に示したスクリーントーンは、地山、焼土または加熱による硬化面を表す。
5. 土器埋設複式炉の各部名称は右図のとおりである。
6. 遺構実測図中の断面水準線数値は、海拔標高を示す。
7. 仲内遺跡の調査は、平成11年度から複数年度に渡って実施しており、国土座標第IX系（日本測地系）による座標値で運用していた。平成14年4月より施行の測量法改正によって世界測地系に変更となったが、本書においては既刊行の報告書と合わせるため、日本測地系による座標値を引き続き採用している。遺構実測図に示した方位は、国土座標第IX系（日本測地系）による座標北である。



遺物

1. 遺物実測図は大きさに応じて、縄文土器：1/3、1/4、1/5、1/6とした。縄文時代石器は石鏃2/3、尖頭器・石匙・石錐・搔削器類1/2、石錘・磨石・凹石1/3、大型の石皿や多孔石は1/5とした。
2. 土器断面図のうち、縄文時代で網をかけたものは胎土に繊維を含むものである。また、土器内面及び外面に赤・黒色塗彩が施されていたものや、石器の表面に付着物が認められるものはスクリーントーンで示した。
3. 縄文土器の拓影で両面のものは、左に外面、右に内面を示した。
4. 遺物観察表及び計測表における法量の{ }は推定値、()は残存値を表す。
5. 遺物出土位置図内の土器番号及び写真図版内の遺物番号は、遺物実測図の番号と一致する。
6. 遺物写真図版の縮尺は不統一である。

別表 1 遺構番号振り替え表

縄文時代竪穴住居跡

	遺構旧番号	遺構新番号	位置
1	SI-1051	SI-1180	A区 A3-18・19・23・24
2	SI-1113a	SI-1239	A区 A3-23・24、B3-3・4
3	SI-1149	SI-1272	B区 C3-13・14・18・19
4	SI-1168	SI-1289	B区 D3-7・8・12・13

縄文時代焼土遺構

	遺構旧番号	遺構新番号	位置
1	SK-1061	SX-1189	A区 A3-24
2	SK-1064	SX-1190	A区 B3-12
3	SK-1138	SX-1262	A区 B3-3

縄文時代土坑・陥し穴・土器埋設遺構

	遺構旧番号	遺構新番号	位置
1	SK-1052	SK-1181	A区 A3-18・19
2	SK-1054	SK-1182	A区 A3-18
3	SK-1055	SK-1183	A区 A3-18
4	SK-1056	SK-1184	A区 A3-17・18
5	SK-1057	SK-1185	A区 A3-17・18
6	SK-1058	SK-1186	A区 A3-17・22
7	SK-1059	SK-1187	A区 A3-17
8	SK-1060	SK-1188	A区 A3-22・23
9	SK-1065	SK-1191	A区 A3-23
10	SK-1066	SK-1192	A区 B3-3
11	SK-1067	SK-1193	A区 B3-3
12	SK-1068a	SK-1194	A区 B3-2
13	SK-1068b	SK-1195	A区 B3-2
14	SK-1069	SK-1196	A区 B3-7・8
15	SK-1070a	SK-1197	A区 B3-2・3・7・8
16	SK-1070b	SK-1198	A区 B3-3
17	SK-1071	SK-1199	A区 B3-8
18	SK-1072	SK-1200	A区 B3-8
19	SK-1073	SK-1201	A区 B3-8
20	SK-1074	SK-1202	A区 B3-2
21	SK-1075	SK-1203	A区 B3-7
22	SK-1076a	SK-1204	A区 B3-7
23	SK-1076b	SK-1205	A区 B3-7
24	SK-1077	SK-1206	A区 B3-2・7
25	SK-1078	SK-1207	A区 B3-7
26	SK-1079	SK-1208	A区 B3-7・12
27	SK-1080	SK-1209	A区 B3-12・13
28	SK-1081	SK-1210	A区 B3-12
29	SK-1082	SK-1211	A区 B3-8
30	SK-1083	SK-1212	A区 B3-12
31	SK-1084	SK-1213	A区 B3-17
32	SK-1085	SK-1214	A区 B3-12・17
33	SK-1086	SK-1215	A区 B3-17
34	SK-1088	SK-1216	A区 B3-17・18
35	SK-1089a	SK-1217	A区 B3-17
36	SK-1089b	SK-1218	A区 B3-17
37	SK-1089c	SK-1219	A区 B3-17
38	SK-1089d	SK-1220	A区 B3-17
39	SK-1091	SK-1221	A区 B3-18
40	SK-1093	SK-1222	A区 B3-13
41	SK-1094	SK-1223	A区 B3-17・18・22・23
42	SK-1096	SK-1224	A区 B3-7・8
43	SK-1097	SK-1225	A区 B3-8
44	SK-1099	SK-1226	A区 B3-3
45	SK-1100	SK-1227	A区 B3-3
46	SK-1101	SK-1228	A区 B3-3
47	SK-1103	SK-1229	A区 B3-3
48	SK-1104	SK-1230	A区 B3-12
49	SK-1105	SK-1231	A区 A3-18
50	SK-1106	SK-1232	A区 A3-18
51	SK-1107	SK-1233	A区 B3-22
52	SK-1108	SK-1234	A区 B3-22
53	SK-1109	SK-1235	A区 B3-17
54	SK-1110	SK-1236	A区 B3-17・22
55	SK-1111	SK-1237	A区 A3-22・23

	遺構旧番号	遺構新番号	位置
56	SK-1112	SK-1238	A区 A3-23
57	SK-1113b	SK-1240	A区 A3-23
58	SK-1115	SK-1242	A区 A3-23
59	SK-1116	SK-1243	A区 B3-3
60	SK-1117	SK-1244	A区 B3-3
61	SK-1118	SK-1245	A区 B3-3
62	SK-1119	SK-1246	A区 B3-3
63	SK-1120	SK-1247	A区 B3-3
64	SK-1122	SK-1248	A区 B3-3・8
65	SK-1123	SK-1249	A区 A3-23
66	SK-1124	SK-1250	A区 A3-24
67	SK-1125	SK-1251	A区 B3-3
68	SK-1126	SK-1252	A区 B3-3
69	SK-1127	SK-1253	A区 B3-6
70	SK-1128	SK-1254	A区 A3-21
71	SK-1129	SK-1255	A区 B3-8
72	SK-1132	SK-1256	A区 B3-3
73	SK-1134	SK-1258	B区 D3-8
74	SK-1135	SK-1259	B区 D3-3
75	SK-1142	SK-1266	B区 A4-14
76	SK-1144	SK-1268	B区 A4-19・24
77	SK-1145	SK-1269	B区 A4-19・24
78	SK-1146	SK-1270	B区 B4-4
79	SK-1150	SK-1273	B区 C3-3・4
80	SK-1151	SK-1274	B区 C3-13・18
81	SK-1152	SK-1275	B区 C3-12
82	SK-1153	SK-1276	B区 C3-7・8・12・13
83	SK-1154	SK-1277	B区 C3-3
84	SK-1155	SK-1278	B区 B3-23、B3-3
85	SK-1157	SK-1279	B区 C3-9・10・14・15
86	SK-1159	SK-1280	B区 C3-4
87	SK-1160	SK-1281	B区 C3-22
88	SK-1161	SX-1282	B区 C3-18
89	SK-1162	SK-1283	B区 C3-18・23
90	SK-1163	SK-1284	B区 C3-19
91	SK-1164	SK-1285	B区 D3-4
92	SK-1165	SK-1286	B区 D3-9
93	SK-1166	SK-1287	B区 D3-3・8
94	SK-1167	SK-1288	B区 D3-16・17
95	SK-1169	SK-1290	B区 C3-14・19
96	SK-1170	SX-1291	B区 C3-18
97	SK-1171	SK-1292	B区 D3-3
98	SK-1172	SK-1293	B区 D3-4

縄文時代小穴

	遺構旧番号	遺構新番号	位置
1	SK-1087	P-8	A区 B3-18
2	SK-1090	P-2	A区 B3-13
3	SK-1092	P-3	A区 B3-13
4	SK-1095	P-4	A区 B3-8
5	SK-1096	P-5	A区 B3-3・8
6	SK-1098	P-10	A区 B3-3
7	SK-1102	P-1	A区 B3-3
8	SK-1114	P-9	A区 A3-23
9	SK-1121	P-6	A区 B3-3・8
10	SK-1130	P-7	A区 B3-8

近世土坑

	遺構旧番号	遺構新番号	位置
1	SK-1133	SK-1257	B区 D3-12・13
2	SK-1136	SK-1260	B区 D3-14・15
3	SK-1137	SK-1261	B区 D3-9
4	SK-1139	SK-1263	B区 C3-24・25
5	SK-1140	SK-1264	B区 C3-15
6	SK-1141	SK-1265	B区 A4-16
7	SK-1143	SK-1267	B区 A4-15
8	SK-1147	SK-1271	B区 A4-10・15

目 次

序

例言

凡例

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯	1
第2節 発掘調査の方法と経過	3
1. 発掘調査の方法	4
2. 発掘調査の経過	6

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	11

第3章 確認した遺構と遺物

第1節 遺跡の概要	13
第2節 縄文時代の遺構と遺物	14
1. 竪穴住居跡	14
2. 土坑	24
3. 小穴	43
4. 陥し穴	45
5. 土器埋設遺構	47
6. 焼土遺構	49
7. 包含層出土遺物	
(1) 縄文土器	51
(2) 石器	115
第3節 古代以降の遺構と遺物	
1. 土坑・墓坑	136

第4章 調査の成果

第1節 縄文時代の遺構と遺物について	
1. 遺構	
(1) 竪穴住居跡	138
(2) 土坑	139
(3) 土器埋設遺構	140
2. 遺物	
(1) 土器	141
(2) 石器	141

付章 自然科学分析

栃木県仲内遺跡出土黒曜石資料の産地分析	143
---------------------------	-----

挿 図 目 次

第 1 図	事業概要図	1	第 50 図	第Ⅲ層出土土器 (2)	55
第 2 図	事業地内遺跡位置図	2	第 51 図	第Ⅲ層出土土器 (3)	56
第 3 図	調査地区配置図	3	第 52 図	第Ⅲ層出土土器 (4)	57
第 4 図	基本土層図	4	第 53 図	第Ⅲ層出土土器 (5)	58
第 5 図	グリッド配置図	5	第 54 図	第Ⅲ層出土土器 (6)	59
第 6 図	遺跡位置図	9	第 55 図	第Ⅲ層出土土器 (7)	60
第 7 図	栃木県地形図	10	第 56 図	第Ⅲ層出土土器 (8)	61
第 8 図	周辺の遺跡	12	第 57 図	第Ⅲ層出土土器 (9)	62
第 9 図	仲内遺跡全体図	13	第 58 図	第Ⅲ層出土土器 (10)	63
第 10 図	周辺の地形	14	第 59 図	第Ⅲ層出土土器 (11)	64
第 11 図	SI-1180 実測図	15	第 60 図	第Ⅲ層出土土器 (12)	65
第 12 図	SI-1180 遺物実測図	15	第 61 図	第Ⅲ層出土土器 (13)	66
第 13 図	SI-1239 実測図 (1)	16	第 62 図	第Ⅲ層出土土器 (14)	67
第 14 図	SI-1239 実測図 (2)	17	第 63 図	第Ⅲ層出土土器 (15)	69
第 15 図	SI-1239 遺物出土図	18	第 64 図	第Ⅳ層出土土器 (1)	71
第 16 図	SI-1239 遺物実測図	19	第 65 図	第Ⅳ層出土土器 (2)	72
第 17 図	SI-1272 実測図 (1)	20	第 66 図	第Ⅳ層出土土器 (3)	73
第 18 図	SI-1272 実測図 (2)	21	第 67 図	第Ⅳ層出土土器 (4)	74
第 19 図	SI-1272 遺物実測図	21	第 68 図	第Ⅳ層出土土器 (5)	76
第 20 図	SI-1289 実測図 (1)	22	第 69 図	第Ⅳ層出土土器 (6)	77
第 21 図	SI-1289 実測図 (2)	23	第 70 図	第Ⅳ層出土土器 (7)	78
第 22 図	SI-1289 遺物実測図 (1)	23	第 71 図	第Ⅳ層出土土器 (8)	79
第 23 図	SK-1181 ～ 1183・1231・1232 実測図	25	第 72 図	第Ⅳ層出土土器 (9)	80
第 24 図	SK-1184 ～ 1188 実測図	26	第 73 図	第Ⅳ層出土土器 (10)	81
第 25 図	SK-1191 ～ 1196・1199 ～ 1201 実測図	27	第 74 図	第Ⅳ層出土土器 (11)	82
第 26 図	SK-1197・1198・1203 ～ 1205・1207 実測図	28	第 75 図	第Ⅳ層出土土器 (12)	83
第 27 図	SK-1202・1206・1209 ～ 1211・1213 ～ 1215 ・1222・1224 実測図	29	第 76 図	第Ⅳ層出土土器 (13)	84
第 28 図	SK-1208・1212・1216 ～ 1221 実測図	30	第 77 図	第Ⅳ層出土土器 (14)	85
第 29 図	SK-1223・1225 ～ 1230・1233・1235 ・1242 ～ 1244 実測図	31	第 78 図	第Ⅳ層出土土器 (15)	86
第 30 図	SK-1234・1236 ～ 1238・1240・1245 ・1248・1256 実測図	32	第 79 図	第Ⅳ層出土土器 (16)	87
第 31 図	SK-1246・1247・1249 ～ 1255・1258 ・1259 実測図	33	第 80 図	第Ⅳ層出土土器 (17)	88
第 32 図	SK-1266・1268・1273・1274 ・1277 ～ 1280 実測図	34	第 81 図	第Ⅳ層出土土器 (18)	89
第 33 図	SK-1275・1276・1281・1284・1288 ・1290 実測図	35	第 82 図	第Ⅳ層出土土器 (19)	90
第 34 図	SK-1286・1287・1292・1293 実測図	36	第 83 図	第Ⅳ層出土土器 (20)	91
第 35 図	SK-1182・1187A・1187B (1) 遺物実測図	38	第 84 図	第Ⅳ層出土土器 (21)	93
第 36 図	SK-1187B (2)・1188・1191・1192 ・1196・1197 遺物実測図	39	第 85 図	第Ⅳ層出土土器 (22)	94
第 37 図	SK-1201・1203・1206・1208 ～ 1211 遺物実測図	40	第 86 図	第Ⅳ層出土土器 (23)	96
第 38 図	SK-1216 ～ 1218・1222・1230・1232・1233 遺物実測図	41	第 87 図	第Ⅳ層出土土器 (24)	97
第 39 図	SK-1234・1235・1238・1240・1253 (1) 遺物実測図	42	第 88 図	第Ⅳ層出土土器 (25)	98
第 40 図	SK-1253 (2)・1276・1278・1286・1293 遺物実測図	43	第 89 図	第Ⅳ層出土土器 (26)	99
第 41 図	小穴 (P-1 ～ P-10) 実測図	44	第 90 図	第Ⅳ層出土土器 (27)	101
第 42 図	SK-1269・1270 実測図	45	第 91 図	第Ⅳ層出土土器 (28)	103
第 43 図	SK-1283・1285 実測図	46	第 92 図	第Ⅳ層出土土器 (29)	104
第 44 図	SX-1282・1291 実測図	47	第 93 図	第Ⅳ層出土土器 (30)	105
第 45 図	SX-1282・1291 遺物実測図	48	第 94 図	第Ⅳ層出土土器 (31)	106
第 46 図	SX-1189・1190・1262 実測図	49	第 95 図	第Ⅳ層出土土器 (32)	107
第 47 図	SX-1262 遺物実測図	49	第 96 図	第Ⅳ層出土土器 (33)	108
第 48 図	包含層出土土器分布図	50	第 97 図	第Ⅳ層出土土器 (34)	109
第 49 図	第Ⅲ層出土土器 (1)	54	第 98 図	第Ⅳ層出土土器 (35)	111
			第 99 図	第Ⅳ層出土土器 (36)	113
			第 100 図	第Ⅳ層出土土器 (37)	114
			第 101 図	遺構外出土石器 (1)	116
			第 102 図	遺構外出土石器 (2)	117
			第 103 図	遺構外出土石器 (3)	118
			第 104 図	遺構外出土石器 (4)	119
			第 105 図	遺構外出土石器 (5)	120
			第 106 図	遺構外出土石器 (6)	121
			第 107 図	遺構外出土石器 (7)	122
			第 108 図	遺構外出土石器 (8)	123
			第 109 図	遺構外出土石器 (9)	124

第110図	遺構外出土石器 (10)	125	第114図	SK-1261・1267 実測図	137
第111図	遺構外出土石器 (11)	126	第115図	仲内遺跡2 住居跡集成	138
第112図	遺構外出土石器 (12)	127	第116図	仲内遺跡2 土坑集成	139
第113図	SK-1257・1260・1263～1265・1271 実測図.....	136	第117図	分析対象黒曜石製石器・剥片等実測図.....	143

表 目 次

第1表	調査経過表 (平成18年度～23年度)	8	第10表	縄文時代遺構出土石器計測表	127
第2表	周辺の遺跡一覧	11	第11表	縄文時代包含層出土石器計測表	129
第3表	縄文時代竪穴住居跡一覧.....	23	第12表	古代以降土坑一覧	137
第4表	縄文時代土坑一覧	36	第13表	仲内遺跡縄文時代石器集計表	141
第5表	縄文時代小穴一覧	44	第14表	分析対象黒曜石製石器・剥片等一覧.....	143
第6表	縄文時代陥し穴一覧	46	第15表	蛍光X線分析の測定条件.....	144
第7表	縄文時代屋外土器埋設遺構一覧	47	第16表	東日本の主な産地黒曜石の6元素組成	144
第8表	縄文時代焼土遺構一覧	49	第17表	仲内遺跡出土黒曜石資料の産地分析結果	145
第9表	縄文時代石器集計表	115			

図 版 目 次

巻頭図版一

遺跡遠景 (東上空から)
SI-1180 炉跡 (北西から)
SI-1239 炉跡 (北から)
SI-1272 炉跡 (北から)
SI-1289 炉跡 (南西から)

巻頭図版二

SI-1239 炉埋設土器
SX-1282 出土土器
SX-1291 出土土器
包含層第IV層出土土器 523
包含層第IV層出土土器 735

図版一 航空写真

仲内遺跡A区全景 (南東上空から)
仲内遺跡B区全景 (南東上空から)

図版二 縄文時代 遺構 (竪穴住居跡)

SI-1180 炉跡 (北西から)
SI-1239 炉跡 (北から)

図版三 縄文時代 遺構 (竪穴住居跡)

SI-1272 炉跡 (北から)
SI-1272 完掘状況 南半分 (東から)
SI-1272 調査状況 (東から)
SI-1289 調査状況 (北東から)
SI-1289 炉跡 (南西から)

図版四 縄文時代 遺構 (土坑)

SK-1182 土層堆積状況 (南から)
SK-1182 完掘状況 (西から)
SK-1187 土層堆積状況 (南から)
SK-1187 確認面遺物出土状況 (南西から)
SK-1187 完掘状況 (南西から)
SK-1187 遺物 (石器) 出土状況 (南から)
SK-1201 遺物出土状況 (南から)
SK-1202 完掘状況 (南東から)

図版五 縄文時代 遺構 (土坑)

SK-1197・1198 遺物出土状況 (南から)
SK-1204・1205 完掘状況 (南東から)
SK-1216 遺物出土状況 (東から)
SK-1218 遺物出土状況 (北から)
SK-1237・1240 完掘状況 (東から)
SK-1253 土層堆積状況 (南から)
SK-1253 完掘状況 (南から)
SK-1274 土層堆積状況 (南から)

図版六 縄文時代 遺構 (土坑・小穴・陥し穴)

SK-1275 遺物出土状況 (西から)
SK-1276 土層堆積状況 (東から)
SK-1287 完掘状況 (北西から)
P-9 遺物出土状況 (東から)
SK-1269 完掘状況 (東から)
SK-1270 完掘状況 (西から)
SK-1283 完掘状況 (南から)
SK-1283 土層堆積状況 (南から)

図版七 縄文時代 遺構 (土坑・陥し穴・土器埋設遺構)

SK-1285 完掘状況 (南東から)
SK-1285 土層堆積状況 (北東から)
SK-1286 完掘状況 (北から)
SK-1286 土層堆積状況 (北から)
SX-1282 埋設土器確認状況 (北西から)
SX-1282 埋設土器出土状況 (北から)
SX-1291 埋設土器出土状況 (北東から)
B3-10 グリッド 遺物出土状況 (西から)

図版八 縄文時代 調査風景

C3-4 グリッド 遺物出土状況 (東から)
C3-4 グリッド 遺物出土状況 (南から)
C3-18 グリッド 遺物出土状況 (南西から)
C3-18 グリッド 遺物出土状況 (北東から)
H19 発掘調査風景 (西から)
H20 発掘調査風景 (北東から)

H20 包含層グリッド全景（南東から）
H19 発掘調査風景（南西から）

図版九 古代以降（土坑）

SK-1257 完掘状況（南から）
SK-1261 完掘調査状況（南から）
SK-1263 完掘状況（東から）
SK-1264 完掘状況（東から）
SK-1265 完掘状況（南から）
SK-1267 埋葬人骨出土状況（西から）
SK-1267 土層堆積状況（東から）
SK-1271 土層堆積状況（南から）

図版一〇 縄文時代 遺物（土器）
遺構出土縄文土器（1）

図版一一 縄文時代 遺物（土器）
遺構出土縄文土器（2）

図版一二 縄文時代 遺物（土器）
包含層出土縄文土器（1）

図版一三 縄文時代 遺物（土器）
包含層出土縄文土器（2）

図版一四 縄文時代 遺物（土器）
包含層出土縄文土器（3）

図版一五 縄文時代 遺物（土器）
包含層出土縄文土器（4）

図版一六 縄文時代 遺物（土器）
包含層出土縄文土器（5）

図版一七 縄文時代 遺物（石器）
遺構出土石器（搔削器類・剥片・使用痕のある剥片）

図版一八 縄文時代 遺物（石器）
遺構出土石器（使用痕のある剥片・石匙・打製石斧・磨石類・石皿）

図版一九 縄文時代 遺物（石器）
包含層出土石器（石鏃・石槍・石錐・石匙・搔削器類）

図版二〇 縄文時代 遺物（石器）
包含層出土石器（使用痕のある剥片・石錘・石核・打製石斧）

図版二一 縄文時代 遺物（石器）
包含層出土石器（打製石斧・磨製石斧・磨石類）

図版二二 縄文時代 遺物（石器）
包含層出土石器（磨石類）

図版二三 縄文時代 遺物（石器）
包含層出土石器（磨石類）

図版二四 縄文時代 遺物（石器）
包含層出土石器（磨石類・石皿）

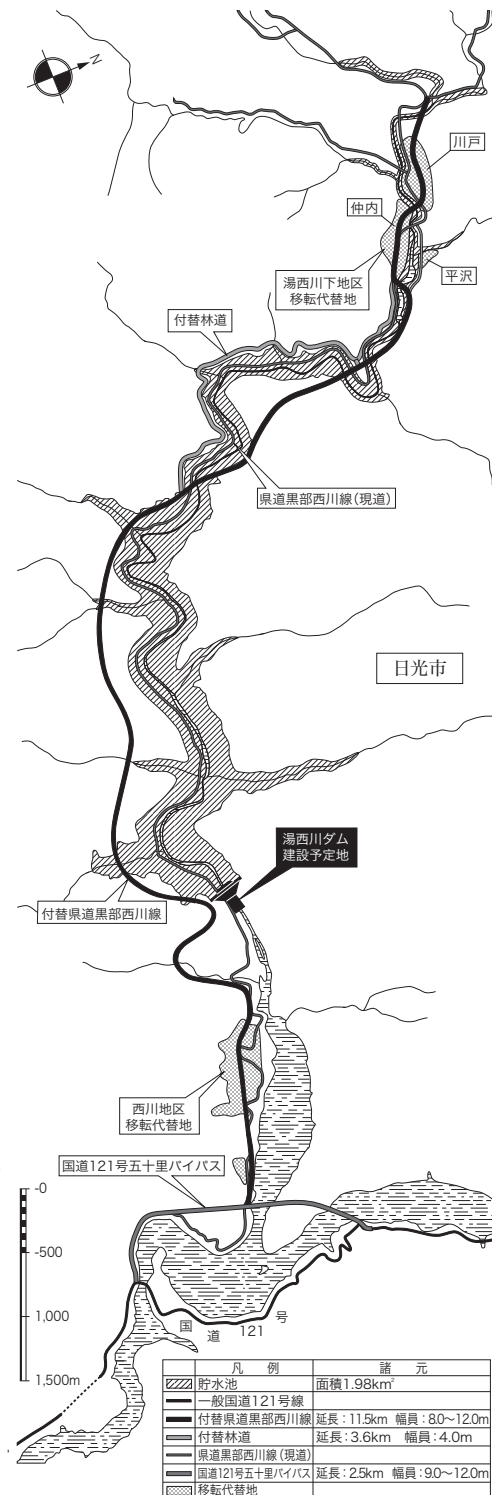
図版二五 縄文時代 遺物（石器）
包含層出土石器（石皿・多孔石）

第1章 調査に至る経緯と経過

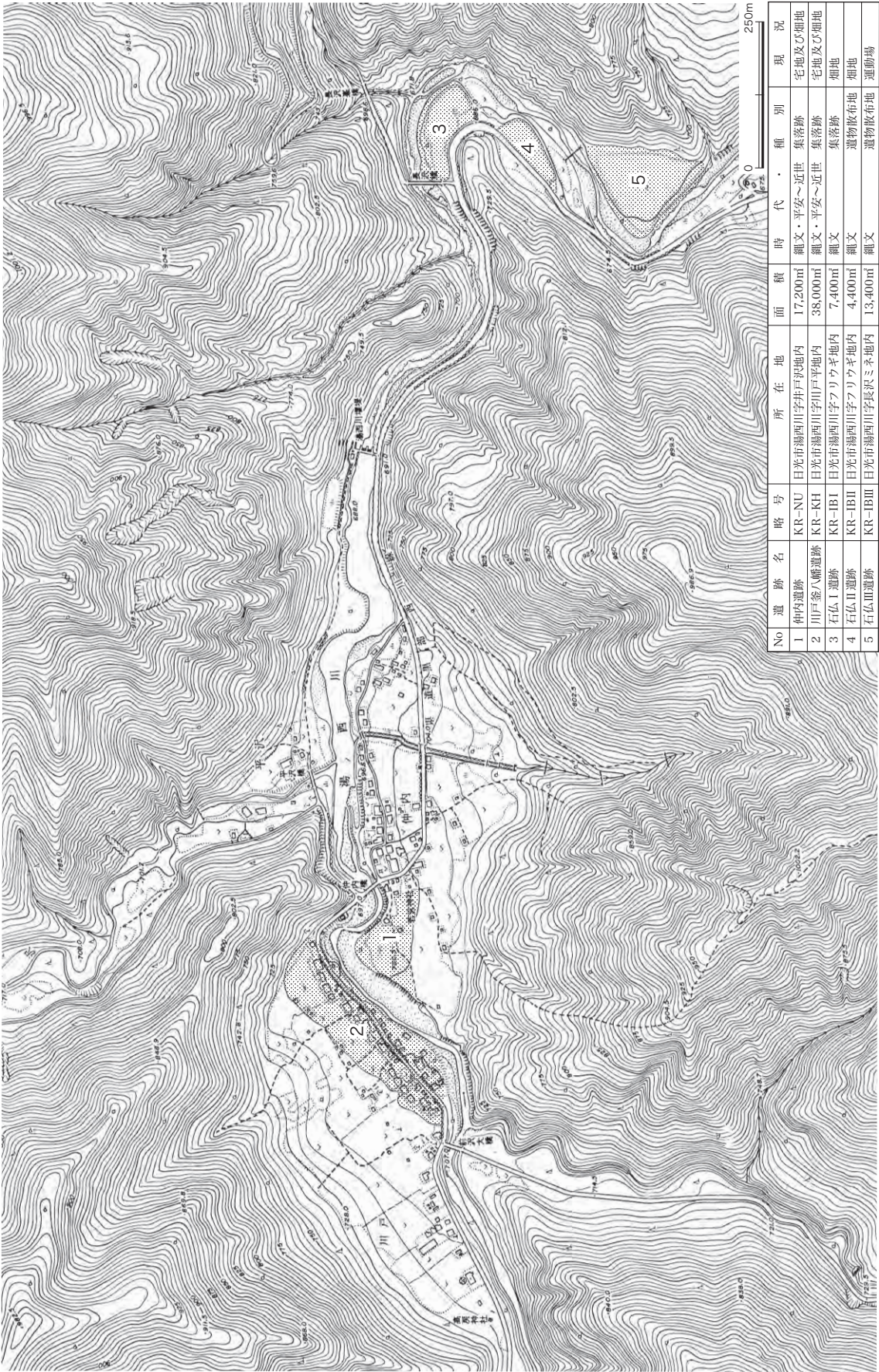
第1節 調査の経緯

首都圏としての発展がめざましい鬼怒川や利根川下流域は、近年の急速な都市化や生活様式の変化に伴い、水の需要が急増するなどの問題が浮上している。こうした状況のなか、湯西川ダムは日光市西川地内に建設予定のダムで、鬼怒川及び利根川下流域における洪水被害の軽減、栃木県田川沿岸約2,000haの水田・畑地の灌漑、また宇都宮市を始め千葉県、茨城県などへの水道用水供給、工業用水取水等を主な目的とし、鬼怒川上流域における4番目の直轄多目的ダムとして計画された。当ダム建設の経過については、昭和47年4月から予備調査を開始し、以後、基本計画の告示、水源地域対策特別措置法に基づく「指定ダム」としての告示、自然公園法に基づく包括協議の同意、土地・物件調査等を経て、平成6年度には関連工事に着手し、平成23年度の完成を目指している。

一方、ダム建設に係わる埋蔵文化財の取り扱いについては、昭和 59 年 10 月に建設省（現国土交通省）関東地方建設局湯西川ダム工事事務所から県教育委員会文化課（現文化財課）に照会があり、所在分布調査が実施された。その結果、仲内・川戸釜八幡・石仏の 3 遺跡を確認し、この結果を昭和 60 年 1 月 18 日付けで回答した。ダム建設が具体化した平成 8 年度、当初の確認調査から 12 年が経過しているため、平成 8 年 6 月に再度、文化課による詳細な所在分布調査が行われた。その結果、新たに縄文時代の遺物が散布する 2 地点を加えた 5 遺跡（石仏Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・仲内・川戸釜八幡）の総面積約 80,400 m²を確認し、この結果を平成 8 年 6 月 17 日付けで回答した。当初の計画では、この所在分布調査の結果から平成 9 年度内に文化課による各遺跡の試掘調査が行われる予定であったが、土地交渉の遅れから 10 月の協議により、試掘調査は中止となった。このため、平成 10 年度以降、移転代替地造成及び付替県道に係わる緊急度の高い遺跡から順に試掘と本調査を合わせ財団法人栃木県文化振興事業団（現財団法人とちぎ未来づくり財団）が行うこととなった。これに基づき、平成 10 年 3 月には建設省・文化課及び事業団の三者協定締結、4 月には埋蔵文化財発掘調査の委託契約を締結すると共に、地権者の承諾のもと 8 月から川戸釜八幡遺跡の試掘調査を開始する運びとなった。



第1図 事業概要図



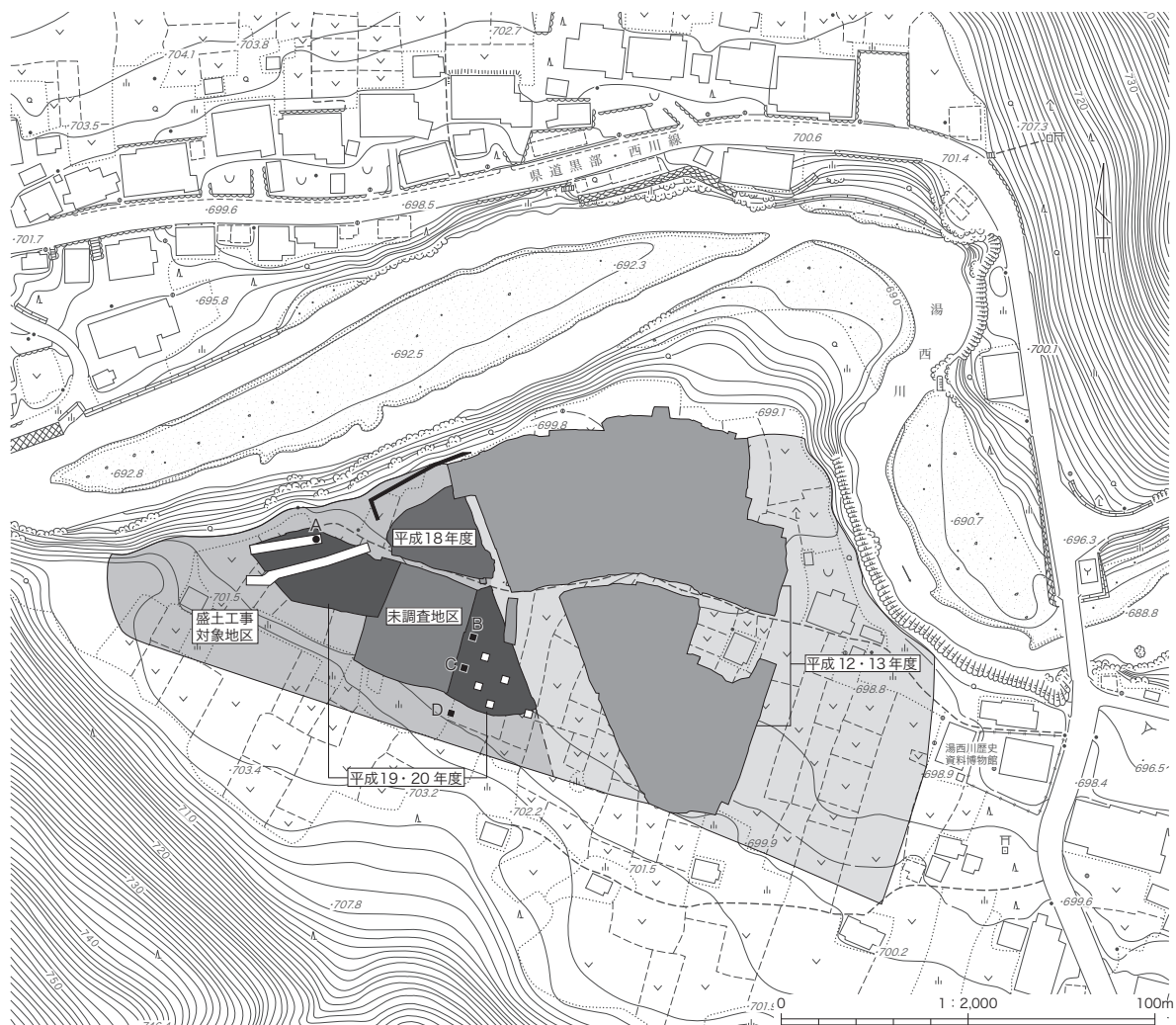
第2図 事業地内遺跡位置図

第2節 発掘調査の方法と経過

開発地内に所在する仲内遺跡の発掘調査については、平成11年度から13年度まで行った東側部分（第1次調査）と、平成12年4月1日施行の「栃木県埋蔵文化財発掘調査等取扱い基準」で調査の対象となり、平成18年度から20年度の都合3年間に渡り調査を行った西側部分（第2次調査）に分けられる。

第1次調査の成果については、平成12年度から川戸及び石仏地区の発掘調査と並行して整理作業を行い、平成17年3月末日に栃木県埋蔵文化財調査報告第296集「仲内遺跡」として報告書を刊行している。

今回報告する西側の農地部分については、平成11年4月の三者協議で畑地利用の目的から現状変更もなく、造成も盛土のみであるため、工事計画に合わせ原則として事前に試掘調査を行い、取り扱いについては協議・調整することで合意を得ていた。その後、平成17年度以降に盛土及び要壁工事を実施する計画が浮上し、発掘調査の計画についても協議が進められた。具体的には、先ず平成18年度内にA区とした既調査範囲の西側隣接地である川際部分の本調査に加え、護岸工事に伴う部分及びA区南側の試掘を行い、調査範囲を確定することとなった。試掘調査の結果、遺構・遺物の分布が西側と南側に延びていることが判り、この部分を含めた約3,500㎡を遺跡の範囲とした。この結果を受け、A区南側及び西側の部分をB区とし、平成19年度以降本調査を進めていくこととなった。ここでは、平成18年度以降の調査方法と経過について概観する。



第3図 調査地区配置図

1. 発掘調査の方法

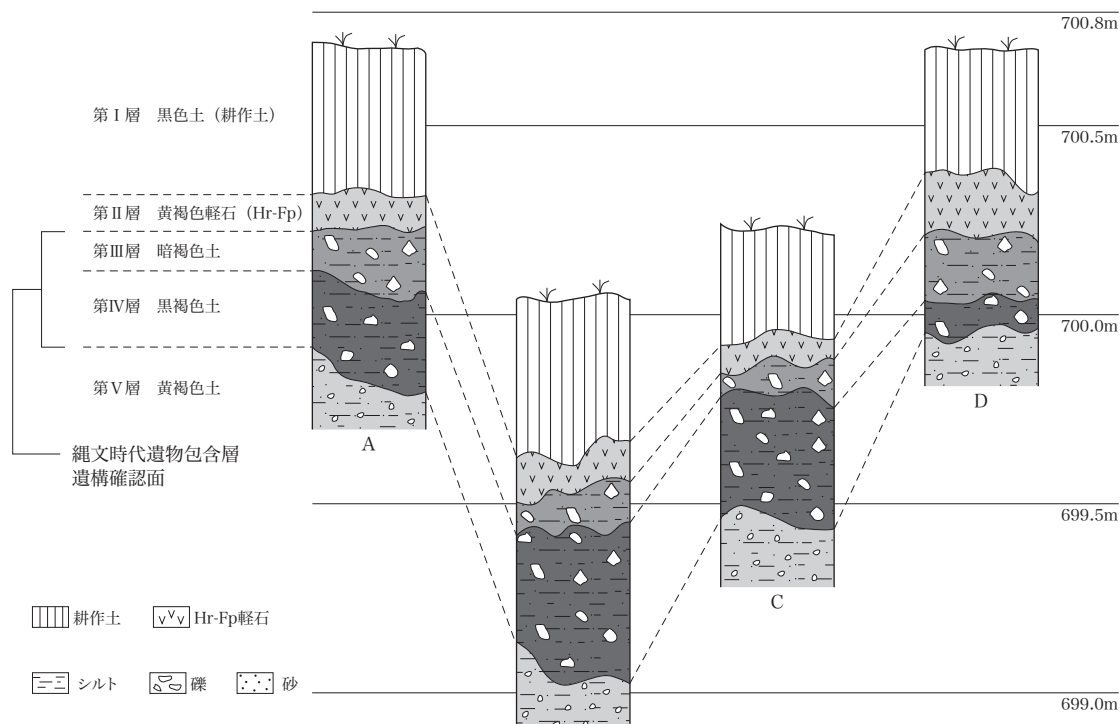
発掘調査は先ず、A区の表土除去後、その西側にある護岸工事に伴う試掘調査予定箇所に対して、重機バケット幅のトレンチ2本を掘削した。また、B区の東側については、2m×2mのグリッドを8箇所設定し人力で掘り下げ、遺跡範囲の確認にあたった。第4図には、B区4地点の壁面で観察した基本土層を示した。

これら調査地内における土壌の堆積状況は、各トレンチにおいて厚さに違いがみられるがほぼ同質であり、以下、その特徴を簡略的に述べる。第Ⅰ層は現表土で、層厚は約40cm前後である。第Ⅱ層は亜角礫を少量含んだしまりのない砂質土壌である。土壌分析の結果、6世紀中葉頃に降下したHr-Fpであることが判明している。層厚は最も厚い調査区の南側で20cm前後の堆積が認められ、降下したテフラが比較的良好に保存された状態で確認できる。第Ⅱ層以下は全体的に亜角礫を多く含む第Ⅲ層暗褐色シルト層、第Ⅳ層黒褐色シルト層が堆積し、第Ⅴ層の黄褐色シルト層となる。このうち、遺構・遺物が確認できる層位は、第Ⅲ層上位～第Ⅴ層上位で、この間の第Ⅲ・Ⅳ層が本遺跡の主要な縄文時代遺物包含層に相当する。この2層には縄文時代中期中葉から後葉を主体に、早期中葉から後期後葉までの遺物が含まれる。調査区中央のB地点が最も厚く50cmほど堆積しており、山側のD地点に向かって薄くなるため、遺構・遺物の出土は北側から中央部で密であり、南側及び西側に向かうほど疎らである。また、古代以降の遺構は、縄文時代の包含層を掘り込んでつくられており、第Ⅱ層から確認することが可能である。

表土除去は時間的な制約から、まず古代以降の遺構確認面である第Ⅱ層まで重機を使用し、この段階で人力による確認面の精査に切りかえ、それと同時にグリッドを設定した。

調査グリッドは業者に委託して基準点及び水準点の測量を行い、国家方眼座標第Ⅸ系のX=+106.97m、Y=-19.380mの交点を起点として、20m四方のグリッドを設定した。また、グリッドの東西ラインにはアルファベットを、南北ラインにはアラビア数字を付し、西及び南方向に昇順となるよう設定した（第5図）。

縄文時代の調査は、第Ⅱ層上面の遺構精査後、20mグリッドを更に分割した4m四方の小グリッドにより



第4図 基本土層図

包含層を掘り下げ、層内に存在する遺物の取り上げ、土層の観察や遺構の確認、精査という手順で行った。

各遺構について調査基準を述べれば、遺構と判断した段階で、住居跡は十字にベルトを設定し、土坑は二分法で覆土を掘り下げ堆積土の観察を行った。住居跡については、ベルト除去後に遺物を取り上げ、炉跡や柱穴の掘り込みなど住居内施設の精査にあたった。

平面図及びセクション図については、基本的に縮尺 1/20 で行い、各遺構の平面図は、平板またはグリッドにのせた水系を 1 m メッシュの方眼に設定して実測した。炉跡は、半截ないしは形状によって任意にベルトを設定して掘り込むとともに、1/10 の平面図を作成しレベルを記録した。また、土層の状況・遺物出土状態・遺構掘り上がり状態については、それぞれ写真撮影を行い記録保存した。全体図作成に関しては、空中写真撮影と合わせて業者に委託した。



2. 発掘調査の経過

平成18年度（発掘調査）

今回の調査は、平成11年4月の協議で除外された西側の農地部分約8,000㎡が、平成12年4月1日施行の「栃木県埋蔵文化財等取り扱い基準」により、「恒久的な盛土・埋立ての厚さが原則として現地表面から3mを超える」箇所であるため発掘調査が必要となり、調査の対象となった部分である。

調査に先立ち、5月8日にダム工事事務所と現地確認、試掘箇所及び本調査区の測量後、6月6日から遺構の広がりが見込まれる川際の本調査区（A区）の約900㎡に対して、重機による表土除去を開始した。

A区の表土除去後、6月9日からA区西側の護岸工事に伴う部分の800㎡に対して試掘調査を行った。また、6月22日からは、A区の南側部分（B区）に試掘グリッドを設定し掘り下げを行い遺跡範囲の確認にあたった。この結果、遺構・遺物の分布が南側と西側に延びており、約3,500㎡が遺跡範囲となることが判った。

試掘調査の結果を受け、7月5日には三者協議を行い、仲内遺跡農地部分における記録保存必要箇所の選定および今後の調査計画を確認し、7月6日からはA区の遺構確認作業に着手した。A区については、後世の攪乱が著しく、縄文時代の遺物包含層はごく薄くしか残っていなかった。また、地山は砂質土に大小の礫が多量に入った層であったため遺構確認作業は難航した。

A区からは、住居内に複式炉が付設される縄文時代中期後葉の竪穴住居跡2軒のほか、縄文時代中期後半～後期前半の土坑72基、小穴10基、焼土遺構などを確認した。これら遺構の調査終了後、10月27日にラジコンヘリによる空中写真撮影、写真測量を実施した。

A区の調査終了後、11月6日からB区東側部分から中央部分の約1,300㎡の表土を重機で除去し、このうちの約200㎡を調査した。遺物包含層からは少量の遺物が出土したが遺構は全く発見されず、11月24日をもってこの部分の調査を終了し、18年度は残りの約1,100㎡が降雪や土壌の凍結のため未了となった。

平成19年度（発掘調査）

平成18年度未了部分の1,100㎡を対象とした。調査は、5月24日から着手した川戸釜八幡遺跡の遺構確認、遺構の掘り込み作業がほぼ終了した7月6日から作業員を仲内遺跡へ投入し、先ずB区東側約400㎡の縄文時代遺物包含層の掘り下げ及び遺構確認作業を開始した。

遺物包含層の掘り下げに関しては、平成18年度に設定した20m四方のグリッドを細分した4m四方のグリッドを基本に土層観察のためのベルトを残して掘り下げ、遺物を層位ごとに取り上げていった。この部分からは縄文時代の土坑4基、近世の土坑3基を確認したのみで、8月29日に調査を終了した。また、当初予定していたB区中央部分の約700㎡が用地の関係で調査不可能となったため、東側の調査と平行して8月8日から平成20年度に調査予定であったB区西側部分約650㎡の表土を重機で除去した。調査は9月3日か



仲内遺跡B区発掘作業風景



地元小学生を対象とした発掘体験（平成19年10月）

ら遺構確認作業、包含層の掘り下げを開始したが、9月7日に上陸した台風9号の直撃により現地までの道路が寸断され、約2週間ほど作業不能となった。その後、9月19日から調査を再開し11月まで作業を進めたが、11月下旬の降雪のため除雪を繰り返しての作業となった。このため、12月以降の作業を断念し、調査区内遺構の養生、現場撤収作業を行い、12月3日をもって19年度の調査を終了した。

19年度の調査は、西側約250㎡の縄文時代遺物包含層の掘り下げ及び遺構の精査まで終了し、中央部分約700㎡と西側約400㎡の縄文時代遺物包含層の調査を合わせた約1,100㎡が未了となった。

平成20年度（発掘調査）

平成19年度未了となったB区西側部分約400㎡の本調査を行った。調査は平成19年度に表土除去および第Ⅱ層であるHr-Fp降下以降の調査を終了しているため、7月10日から縄文時代の遺物包含層を掘り下げ、層内に存在する遺物の取り上げや遺構の確認作業を開始した。包含層の調査終了後、9月9日から土層観察用のベルト除去作業を開始し、同月16日からは縄文時代の最終的な生活面である第Ⅴ層上面の遺構確認作業を行った。調査の結果、新たに石囲炉が備わる縄文時代中期中葉の竪穴住居跡1軒のほか、土坑11基、屋外の土器埋設遺構2基などを確認し、10月7日より遺構の掘り下げ及び精査を開始した。

各遺構の覆土除去・炉跡の断ち割り作業・図面作成・写真撮影等の作業終了後、10月30日にはラジコンヘリによる空中写真撮影、写真測量を行い平成20年度の現地調査を終了した。

なお、B区中央の未調査部分については、平成21年度内に調査を予定していたが地権者の同意が得られないため、平成20年10月14日の協議により発掘調査は中止となった。また、今後この箇所の取り扱いについては、工事計画の変更で対応することとなり、仲内遺跡における現地での発掘調査は全て終了となった。したがって、当初予定の遺跡範囲約3,500㎡のうち、本調査の対象とした面積は約2,850㎡（A区900㎡、B区1,950㎡）であったが、中央部の約700㎡が調査不可能となり、本調査実施面積は約2,150㎡となった。

平成18～23年度（整理作業・報告書作成）

整理作業・報告書作成は各遺跡の調査と並行して行い、4月から12月までを現地での発掘調査、1月から3月までを整理作業に重点を置き、主に出土遺物の水洗・注記のほか、遺構図作成や写真の整理作業を行った。

現地調査終了後、土器については分類・接合作業を行い、遺構内及び包含層出土土器との後接合も試みた。石器について、特に剥片石器に関しては、出土した全てに対して器種毎の分類後に写真撮影を委託し、これを基に実測を行った。また、石器石材に関しては、産出地を推定するため肉眼鑑定を委託した。遺構図に関しては、現地で作成した平面図と断面図を修正し、デジタルトレース・編集作業を行った。

本年の報告書作成作業に関しては、原稿執筆、遺構・遺物の版組、写真図版作成、作表などを主な作業として行い、3月末日の本報告書の刊行をもって仲内遺跡及びダム事業に係わる遺跡の調査はすべて完了となる。



整理作業風景（縄文土器の分類作業）



整理作業風景（コンピュータートレース）

第1章 調査に至る経緯と経過

なお、仲内遺跡に係わる出土遺物や実測図、写真などの調査資料は日光市教育委員会で保管しており、遺物の一部は地元湯西川の観光施設として川戸地区に建設された「湯西川水の郷」の文化資料展示施設「湯西川くらし館」で展示されている。



「湯西川くらし館」

「湯西川くらし館」に展示された仲内遺跡の遺物

第1表 調査経過表（平成18年度～23年度）

遺 跡 名	調 査 工 程	平成18年度						平成19年度					
		4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	当初面積	実施面積	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	当初面積	実施面積
仲内遺跡 対象総面積 3,500㎡	試掘調査 本調査 整理作業 報告書作成					800㎡	800㎡					1,100㎡	750㎡
川戸釜八幡遺跡 対象総面積 38,000㎡	試掘調査 本調査 整理作業 報告書作成					300㎡	100㎡					200㎡	200㎡
石仏1遺跡 対象総面積 7,400㎡	試掘調査 本調査 整理作業 報告書作成												

遺 跡 名	調 査 工 程	平成20年度						平成21年度					
		4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	当初面積	実施面積	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	当初面積	実施面積
仲内遺跡 対象総面積 3,500㎡	試掘調査 本調査 整理作業 報告書作成					400㎡	400㎡						
川戸釜八幡遺跡 対象総面積 38,000㎡	試掘調査 本調査 整理作業 報告書作成												
石仏1遺跡 対象総面積 7,400㎡	試掘調査 本調査 整理作業 報告書作成												

遺 跡 名	調 査 工 程	平成22年度						平成23年度					
		4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	当初面積	実施面積	4～6月	7～9月	10～12月	1～3月	当初面積	実施面積
仲内遺跡 対象総面積 3,500㎡	試掘調査 本調査 整理作業 報告書作成												
川戸釜八幡遺跡 対象総面積 38,000㎡	試掘調査 本調査 整理作業 報告書作成												
石仏1遺跡 対象総面積 7,400㎡	試掘調査 本調査 整理作業 報告書作成												

※ 仲内遺跡の調査対象面積は、2次調査の対象面積
川戸釜八幡遺跡・石仏1遺跡は、当初の対象面積

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

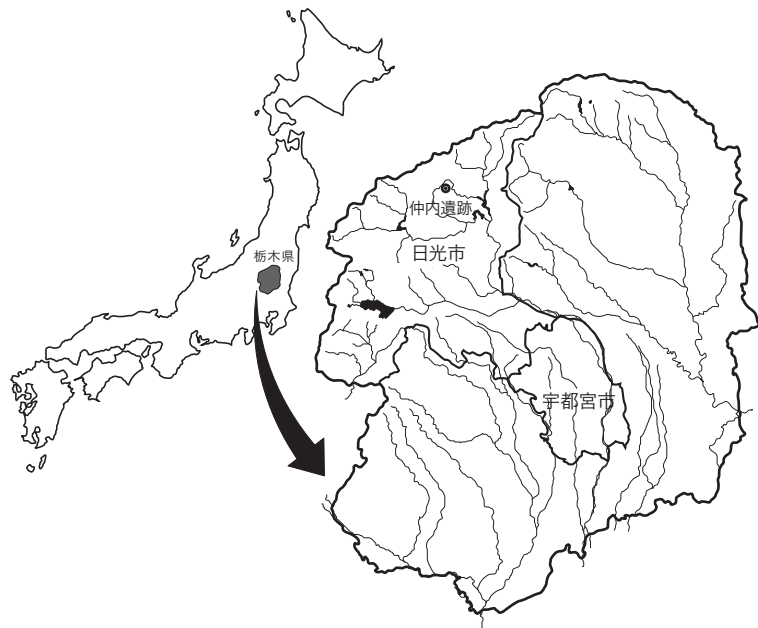
栃木県は関東平野の北部、いわゆる北関東のほぼ中央に位置し、北は福島県、西は群馬県、南は群馬県と一部埼玉県、東は茨城県に接する内陸県である。地形的には阿武隈山地の南に連なる八溝山地などのある東部山地、関東平野の最奥部となる中央部平地、帝釈山地と連なる足尾山地及びこれらの間的那須火山帯からなる西部山地に大別され、南流する河川を含めた全体の形状は南に開けた地形をなしている。

仲内遺跡は、栃木県日光市湯西川字井戸沢地内に所在する。日光市は栃木県の北西端に位置しており、平成18年3月20日に2市2町1村（旧今市市、旧日光市、旧藤原町、旧足尾町、旧栗山村）の合併により新行政区として誕生した。合併後の市域は県土面積の約1/4を占め、西は群馬県片品村、北は福島県檜枝岐村及び南会津町と接している。地形は標高200mほどの平坦な市街地から2,000mを超す山岳地域まで起伏に富んでおり、また日光国立公園を中心とする山間部の多くは、水源涵養や自然環境保全等の機能を担う振興山村地域に指定されているほか、一部の地域は水源地域にも指定されている。

本遺跡が所在する旧栗山村地区は、県都として本県の中央部に位置する宇都宮市の北西約70kmの距離にあり、旧村域の東端を栃木県益子町から福島県会津若松市を経て山形県米沢市に至る国道121号線が南北に貫通する。これに主要地方道川俣温泉－川治線及び県道黒部西川線が東西方向で接続し、山間の集落を結ぶ主要な交通路となっている。また、東武鉄道鬼怒川線を介して新藤原駅と会津高原駅（福島県南会津郡南会津町）を結ぶ野岩鉄道会津鬼怒川線が国道121号線と並行して敷設され、首都圏と東北地方を結んでいる。

当地は林野面積が全体の約95%以上を占めており、またその大半が日光国立公園に含まれる県内有数の山岳地である。各集落は鬼怒川とその支流である湯西川両河川に沿った河岸段丘上の僅かな平坦地に点在する溪谷型の山村であり、宅地及び農地の割合は全体の1%程度にすぎない。このため、豊富な森林資源を生かした林業をはじめ、高冷地野菜、特用林産物、木工工芸品などを主な生業としている。また、上流域には川俣、奥鬼怒、湯西川などの温泉が数多くあり、鬼怒川や湯西川あるいはその支流が刻み込んだ溪谷や大小様々な滝、五十里ダム、川治ダム、川俣ダムなどによって人工的に作り出された湖などの多様な景観とともに、平家落人伝説も加え近年秘境的観光地としてその価値を高めている。

遺跡周辺の地形を概観すると、本地域は鬼怒川水系の源流域にあたり、旧村域の中央部を西から東に流れる鬼怒川によって北部及び西部の帝釈山地と南部の日光火山山地に大別できる。帝釈山地は主峰である帝釈山（標高2,060m）をはじめ、男鹿岳、荒海山、安ヶ森山、田代山、黒岩山、鬼怒沼山など標高1,500～2,000m級の山々が連



第6図 遺跡位置図

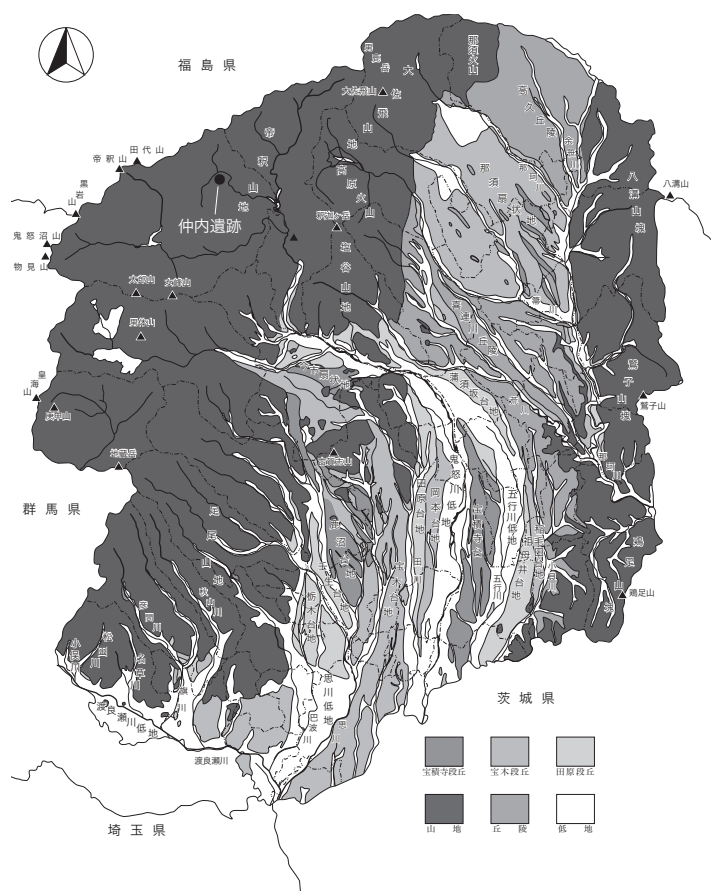
なって栃木・福島両県の県境をなし、利根川及び阿賀野川水系との分水界になっている。地質的には、古生代から中生代の堆積岩と白亜紀の花崗岩及び第三紀の火山活動によって噴出した流紋岩類が広く分布しており、比較的なだらかな山容を形成している。山頂付近には高層湿原も多く田代山には田代山湿原、鬼怒沼山と物見山の中間には鬼怒沼湿原が形成される。日光火山山地は、最高峰（標高2,483 m）の女峰山をはじめとする成層火山や小真名子山、太郎山、於呂俱羅山、山王帽子山などの標高2,000 mを超える山々からなる。これらの火山はいずれも第四紀に活動したものであり、その溶岩類や火山破砕物によって第三紀及びそれ以前の岩石を不整合に覆っており、溶岩円頂丘や溶岩台地などの火山地形がみられる。

こうした地形環境のなか、旧栗山村地区周辺の気候は背後に控える山々が

脊梁山脈となる峠の一部をなしており、日本海側気候から太平洋側気候へ移行する接点にあたる。標高が高いため県内で最も寒冷であるが、夏の最高気温は30℃近くにも達する。冬季の気象条件は厳しく、最低気温は-15℃程度にもなり、寒暖の差が激しい内陸性気候である。降水量は山地への気流の上昇などによって平野部より年間を通じて多く、冬季は北西季節風が山岳部まで及んで積雪量が多い豪雪地帯となる。

本地域の植生は山地帯から亜高山帯までの標高に応じた植物の分布がみられる。村域の大部分はブナやミズナラを主とする落葉広葉樹林が占め、初夏の新緑から秋の紅葉など美しい景観となっている。また沢筋にはトチノキ、サワグルミ、カツラ、ハルニレなどの溪畔林が発達している。奥鬼怒や日光火山山地地域には、コメツガ、アスナロ、オオシラビソなどの亜高山帯針葉樹林がみられるほか、特徴的なものとして林床にチシマザサの繁殖が顕著であり、ハイイヌガヤ、チョウジギクなどの多雪条件による日本海型の植生が認められ、県内でも特殊な植物相が成立している。また、大小48の沼からなる鬼怒沼湿原には、県内ではここだけに産するホロムイソウなどの高山植物が確認されている。これらの森林などには、ツキノワグマ、ニホンジカ、ニホンカモシカなどの大型哺乳類をはじめ30種に及ぶ多様な動物が生息するほか、クマタカ、オオタカなどの猛禽類、人工湖を生息地とするカモ類など116種の鳥類、また河川にはイワナ、ヤマメ、ニジマス、カジカ、コイ、ワカサギなどの放流魚種を含め12種の魚類が確認されており、豊富な動物相を有している。

今回の調査では、縄文時代の遺構・遺物が多量に発見された。上述した遺跡の立地条件や自然環境は、県北西端に位置する当地域において当時の人々の生活や文化に大きな影響を与えたといえよう。



第7図 栃木県地形図

第2節 歴史的環境

現在までに確認されている旧栗山村地区の遺跡は僅か10箇所のみであり、第8図中において近隣の遺跡を含めても20遺跡に満たない数である。これらの遺跡は発掘調査がなされておらず、遺跡の範囲や時代は遺物の表面採集によるものであるが、旧石器時代の遺物は今のところ確認例がなく、当地域の歴史を語るうえで縄文時代がその出発点となる。縄文時代遺物の確認例は、湯西川流域に仲内遺跡(1)、川戸釜八幡遺跡(2)、石仏Ⅰ遺跡(3)、石仏Ⅱ遺跡(4)、石仏Ⅲ遺跡(5)、湯平遺跡(6)の6遺跡、鬼怒川流域に松木平遺跡(7)、日陰遺跡(8)、黒部遺跡(9)、向原遺跡(10)の4遺跡が河岸段丘上に分布する。これらの遺跡からは早期～晩期にかけての遺物が確認されており、その特徴を銘記すれば、まず東北地方南部との関連が指摘できる。特に縄文時代中期以降は、大木式土器文化の影響が強くなり、また南関東を中心として関東地方全域に分布する同時期の加曽利E式土器文化圏との接点になっており、両文化の影響を受けた土器が数多く出土している。この影響は縄文時代後期にも引き続きみられ、両文化を取り込んだ特異な様相を示すが、晩期になると南関東地方の影響はあまり伝播せず、東北地方の亀ヶ岡式文化圏に取り込まれるといった特徴が看取される。また、当地域は中期の馬高式土器や後期の三十稲葉式に代表される北陸系土器の確認例が多く、その出土量は県内においても際立っており、東北地方南部を介した日本海側との関連を強く示している。

弥生時代の遺跡は2箇所が確認されており、縄文時代後期から晩期の遺物が多く出土する黒部遺跡(9)や向原遺跡(10)から弥生時代中期前半に比定される土器が確認されている。しかし、弥生時代中期後半から平安時代に至る遺構・遺物は皆無に等しく、今回の開発による発掘調査で平安時代末期の竪穴住居跡及び土師器や鉄製品などの遺物が仲内遺跡(1)、川戸釜八幡遺跡(2)の両遺跡から僅かに確認されたにすぎない。このように、弥生時代以降の遺跡数が減少する背景には、本地域の周辺一帯が急傾斜面をもつ山裾が広がる山がちな地形であるため、水稻耕作に適した土地が少なく、主たる生産基盤を持ち得なかったことなどがひとつの要因として挙げられる。なお、古代律令制下の旧栗山村地区は塩屋郡に属していたが、「和妙抄」にみられる郷は設置されていなかったようである。

第2章参考文献

栃木県史編さん委員会	1984	『栃木県史 資料編 考古Ⅰ』	栃木県
栃木県企画部土地対策課	1998	『土地分類基本調査 川治』	
栗山村史編さん委員会	1998	『栗山村史』	栗山村
藤原町史編さん委員会	1980	『藤原町史 資料編』	藤原町

第2表 周辺の遺跡一覧

No	遺 跡 名	所 在 地	時 期	種 別	備 考
1	仲内	日光市湯西川井戸沢	縄文・平安～近世	集落跡	平成11～13年度及び平成18～20年度調査。縄文時代中期後半を中心とした集落跡
2	川戸釜八幡	日光市湯西川川戸	縄文・平安～近世	集落跡	平成10～19年度調査、縄文時代後期後半～晩期中葉を中心とした集落跡
3	石仏Ⅰ	日光市湯西川フリウギ	縄文	集落跡	平成13年度調査、縄文時代前期～中期の遺物が出土
4	石仏Ⅱ	日光市湯西川フリウギ	縄文	散布地	平成12年度調査、縄文時代遺物散布
5	石仏Ⅲ	日光市長沢ミネ	縄文	集落跡	昭和54年度の村営運動場造成時に縄文時代の遺物が出土、平成12年度調査
6	湯平	日光市湯西川湯平	縄文	集落跡	中期(阿玉台・EⅠ)～後期(堀之内Ⅰ)の土器、石鏃・石匙・石斧等の石器が出土
7	松木平	日光市日向松木	縄文・弥生	散布地	時期不明
8	日陰	日光市日陰	縄文	散布地	縄文時代後期前半を中心に多量の遺物が散布
9	黒部	日光市黒部	縄文・弥生	集落跡	縄文時代後期～晩期、弥生時代中期の遺物が出土
10	向原	日光市黒部向原	縄文・弥生	散布地	時期不明
11	滝の原	日光市中三依	縄文	散布地	縄文時代後期(堀之内Ⅰ)土器・石器などの遺物が出土
12	中道	日光市中三依中道	縄文・弥生	散布地	縄文時代後期を中心とした遺物が出土
13	中棒	日光市中三依中棒	縄文・弥生	集落跡	縄文時代中期～後期の遺物が広範囲に散布、弥生時代中期の壺が改田時に出土
14	橋向	日光市中三依	縄文・弥生	集落跡	中期(EⅠ)～後期(堀之内Ⅰ)の土器・石器のほか、弥生中期土器出土
15	中三依小学校敷地内	日光市中三依	縄文	集落跡	三依小学校新築工事の際に早期～後期の遺物が出土
16	清水端	日光市中三依	縄文	集落跡	中期後半(EⅢ)～後期にかけての土器、土偶などの遺物が出土
17	大塩沢	日光市五十里大塩沢	縄文	集落跡	洞窟遺跡であったが、明治35年の暴風雨により崩壊、晩期(大洞C2)の土器が出土



第8図 周辺の遺跡

第3章 確認した遺構と遺物

第1節 遺跡の概要

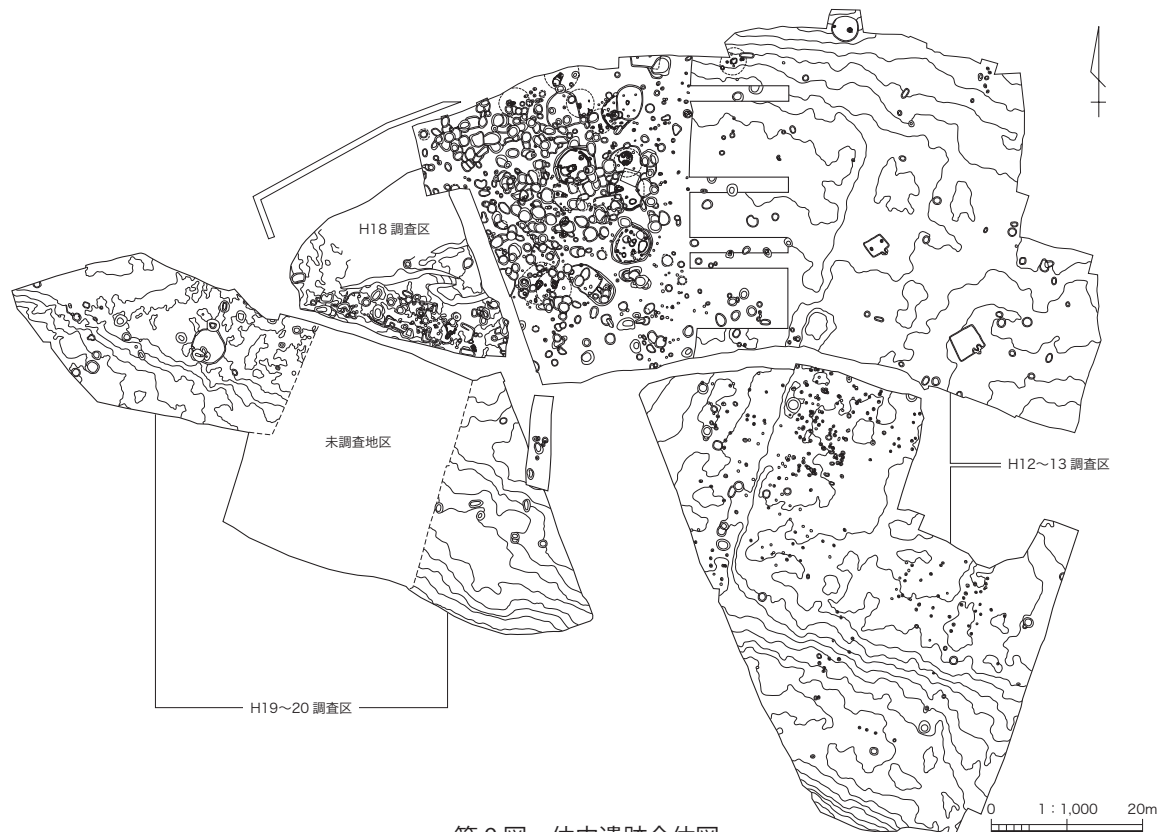
仲内遺跡は、鬼怒川の支流の一つである湯西川源流域の右岸に位置し、帝釈山地の一部を構成する明神ヶ岳（標高 1,594.5 m）北麓の河岸段丘上に立地する。遺跡の標高は 700 m 前後で、北側の湯西川に向かって緩やかに傾斜する。湯西川河床との比高は約 7 m である。

前回の第1次調査では、竪穴住居跡 23 軒、土坑 375 基、土器埋設遺構 4 基などからなる縄文時代中期中葉から後葉を中心とした時期の環状集落を確認した。集落の立地については、湯西川に面した狭い河岸段丘上の平坦部を効率よく利用して形成されており、今回の調査区はこの環状集落の西側部分に相当する（第9図）。

確認した遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 4 軒、土坑 96 基、屋外土器埋設遺構 2 基、焼土遺構 3 基、近世以降の土坑 8 基などで、A 区を中心に遺構の密度が高く重複も著しい。A 区の北側は要壁工事によって大きな削平を受けているが、遺構の分布状況からこの部分にも多くの遺構が存在したと思われる。

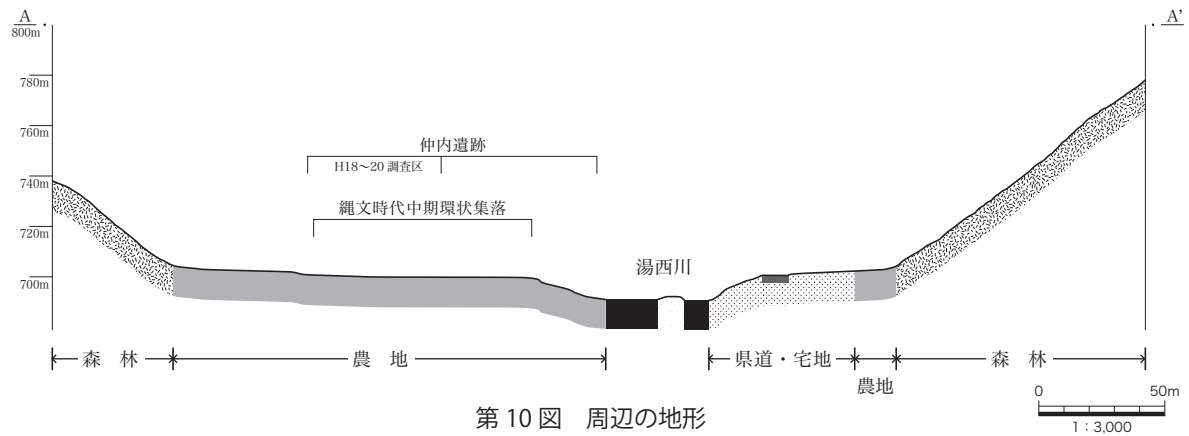
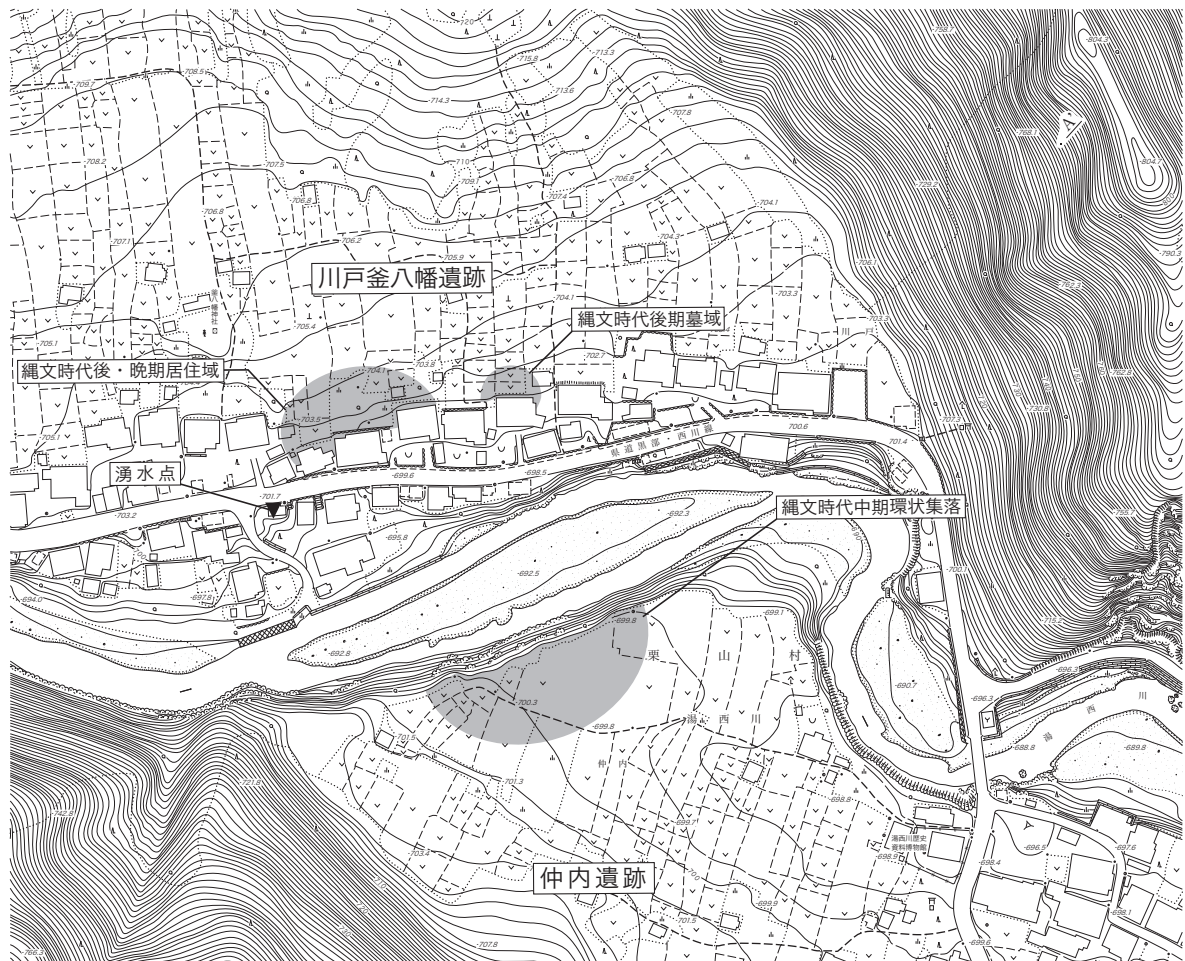
縄文時代の竪穴住居跡は中期中葉から後葉のもので、壁の明瞭なものは少ないが、中期後葉の住居には複式炉が付設されているのが特徴である。土坑は中期中葉から後期前半までのものが確認されている。貯蔵穴や墓坑と考えられるもののほか、小穴や陥し穴などがある。このなかには、多量の礫が入った土坑や石器を埋納した小穴も存在する。屋外土器埋設遺構は、土坑内に中期中葉の深鉢形土器を正位に埋設したものがある。

遺物は包含層及び遺構内から土器と石器を合わせ遺物収納中箱換算で約 100 箱分出土した。土器は中期中葉から後葉を主体に、早期中葉から後期後半までのものを少量含む。石器は石鏃・尖頭器・石匙・石錐・搔削器類・打製石斧・磨製石斧・磨石類・石皿などがあり、磨石類が組成の大半を占めている。



第9図 仲内遺跡全体図

第3章 確認した遺構と遺物



第10図 周辺の地形

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

SI-1180 (第11・12図、図版二)

位置 A区A3-24グリッド内で炉跡を確認したことにより住居とした遺構である。

重複関係 SI-1232の東側と重複ないしは近接して構築していたものと考えられる。このほかSK-1171・1249の土坑、SX-1189の焼土遺構と重複する。

規模・形状 覆土及び壁などについては、包含層と同時に掘り下げてしまい消滅させてしまったため明確ではないが、炉の位置関係から判断して直径4m前後の円形プランを想定した。

床面の状況 炉の確認面は第Ⅴ層上であるが、炉石上端の状況から本来の床面は確認面から5cmほど上方の第Ⅳ層内にあったものと考えられる。

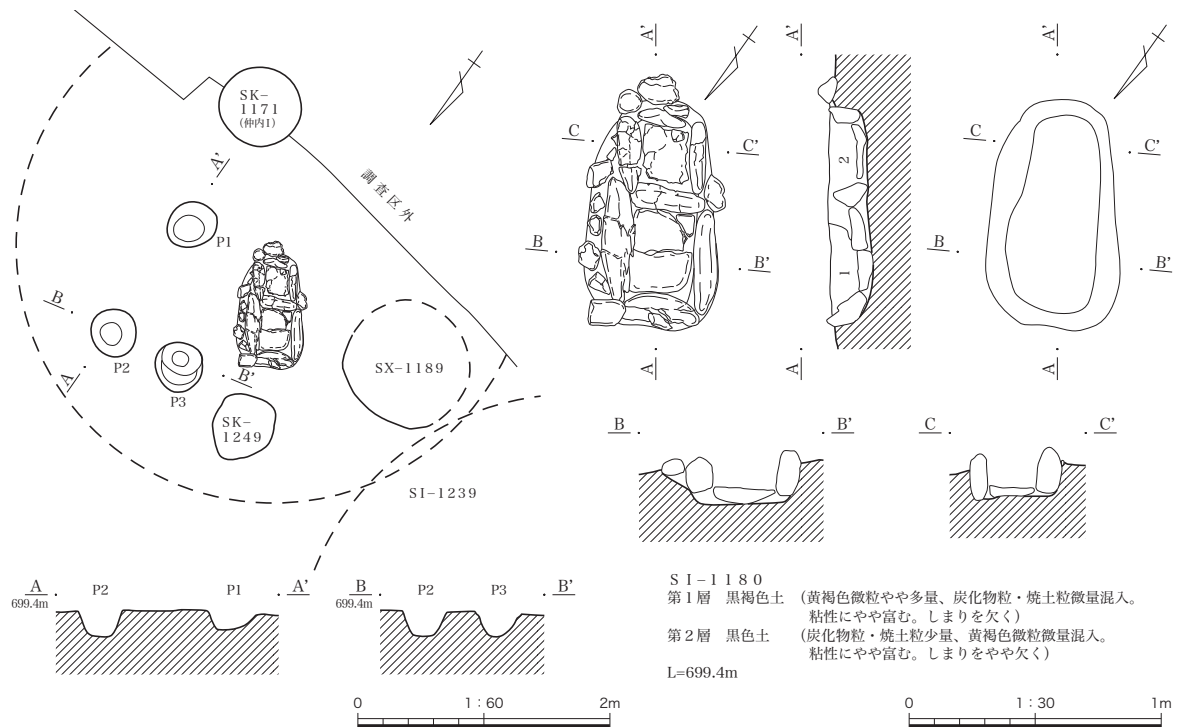
柱穴 住居と想定される範囲内から3個のピットを確認した。これらのピットは40cmほどの円形で床面からの深さは20cmほどであり、支柱穴とは判断し難い。

炉跡 二室構造の石組複式炉である。石組部の規模は奥室の長さ40cm、幅35cm、前室の長さ50cm、幅50cmで、前室がやや幅の広い長方形をなしている。石組は奥室・前室ともに扁平な河原石をそれぞれ平坦面をほぼ垂直に立てて組まれているが、奥室と前室の境と前室手前側の石はやや傾けて設置している。東側壁と掘方の隙間には小石を充填している。底面は扁平な石の平坦面を水平にして両室とも1枚ずつ敷かれている。

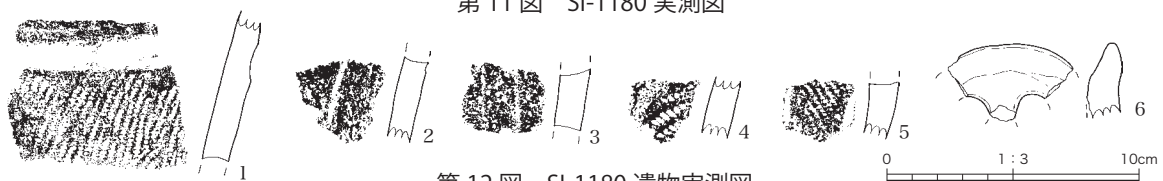
炉内の覆土は焼土粒や炭化物を少量含む黒褐色土主体の2層に分層され、焼土ブロックなどは確認されなかったが、炉石の内側は被熱により赤色化しており、風化や敷石のひび割れが著しい。

出土遺物 炉及びその周辺から出土した土器片5点、土製品1点を図示した。2・4が炉内から、それ以外は炉の周辺から出土したものである。1は口頸部に横位の凹線を巡らし、以下には2段RLの縄文を縦方向に施文する。胎土に雲母片を多く含んでいる。2～5は磨消懸垂文を垂下させた体部破片である。6は蓋と思われる円盤状の土製品で、約1/4が遺存する。復元径は約7.4cmの円形で、残存部に2つの円孔が確認できる。

時期 時期を確定するような遺物の出土は少ないが、炉の形態及び炉内から出土した土器片などから、中期後葉の加曽利EⅢ式期と考えられる。



第11図 SI-1180 実測図



第12図 SI-1180 遺物実測図

SI-1239 (第13～16図、図版二・一〇)

位置 A区南東端部のA3-23及びB3-3グリッド内で炉跡を確認したことにより、住居の存在が明らかとなった。重複は不明であるが、東側にはSI-1180が近接した位置にある。

重複関係 SK-1238・1240・1242・1243・1244・1245・1250・1251・1252の土坑、P-9の小穴と重複する。また、住居の規模が明らかでないが、東側のSX-1189とも重複するかもしれない。このうち、新旧関係が判断できるものは、炉の前庭部で切り合うSK-1238・1240で、本住居跡より古い遺構である。

規模・形状 炉の大きさなどから直径4.5m内外の円形プランを想定する。

壁・壁溝 壁は包含層の掘り下げによって炉を確認した段階で既に消滅しており、壁溝も確認できなかった。床面の状況 第V層を平坦に削り床面としており、特に硬化した部分は認められなかった。

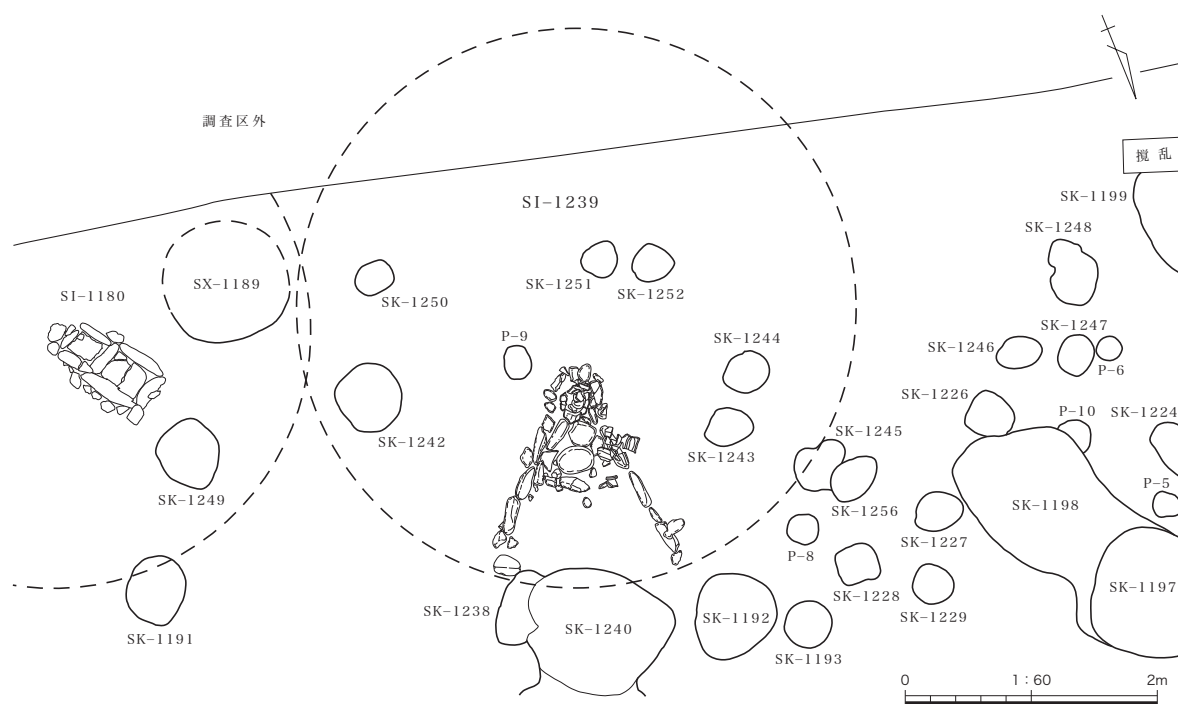
柱穴 住居と想定される範囲内からは、P-9と土坑とした6基の遺構を確認したのみである。いずれも直径40cm、深さ15cmほどの規模であり、支柱穴と判断できるものではない。

覆土 微量の黄褐色土粒と少量の炭化物粒を含む黒褐色土で、包含層との識別は困難であった。

炉跡 土器埋設部・石組部・前庭部からなる複式炉で、土器埋設部から石組部までの長さは1m、土器埋設部幅48cm、石組部最大幅90cmで、平面形はほぼ正三角形状である。炉は2×1.5mの不整な楕円形をなす大きめの掘方を掘り、第5層で整地した後に東側の壁石を掘方のラインに寄せて構築している。西側の壁石と掘方の隙間には、裏込めとして小型の石を多量に充填している。

埋設土器は、底面に数個の石を置いた上に深鉢形土器の胴部を石組部に向けてやや斜位に埋設している。埋設土器と堀方との間を黒色土で充填した後、周囲には床面とほぼ同じ高さに楕円形で拳大の石を巡らしている。埋設土器は火熱により脆くなっているが、覆土内に焼土の堆積はみられなかった。

石組部の側石には、扁平な河原石や板状の割石を用い、石の平らな面を内側に向け、比較的垂直に立てて組んでいる。奥壁には平石を埋設土器から傾斜を持たせて敷いており、また手前側には河原石や板状の割石を用いて斜めに組んでいる。底面には楕円形の河原石の平らな面を上にして敷いている。炉石は火熱によっ

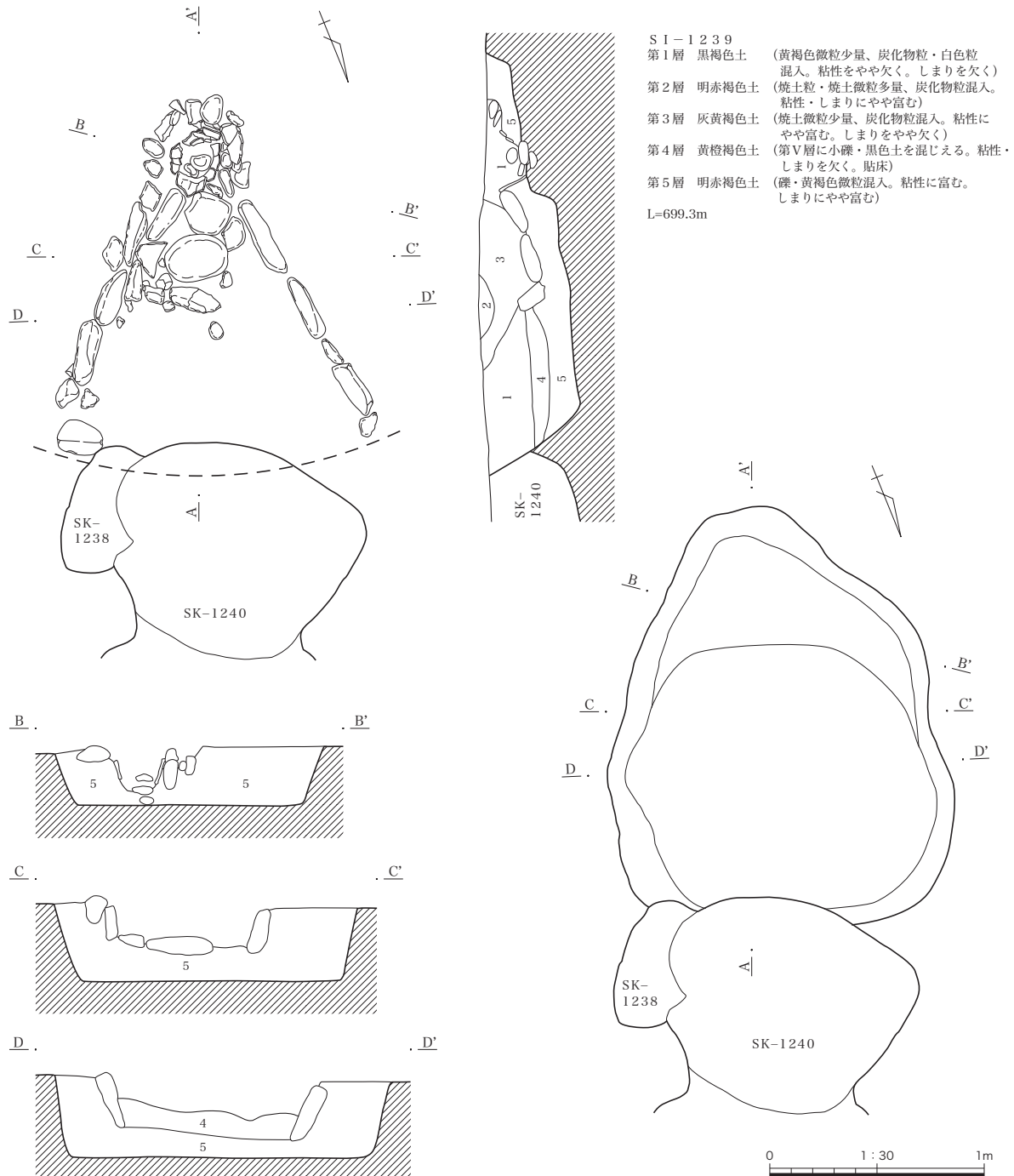


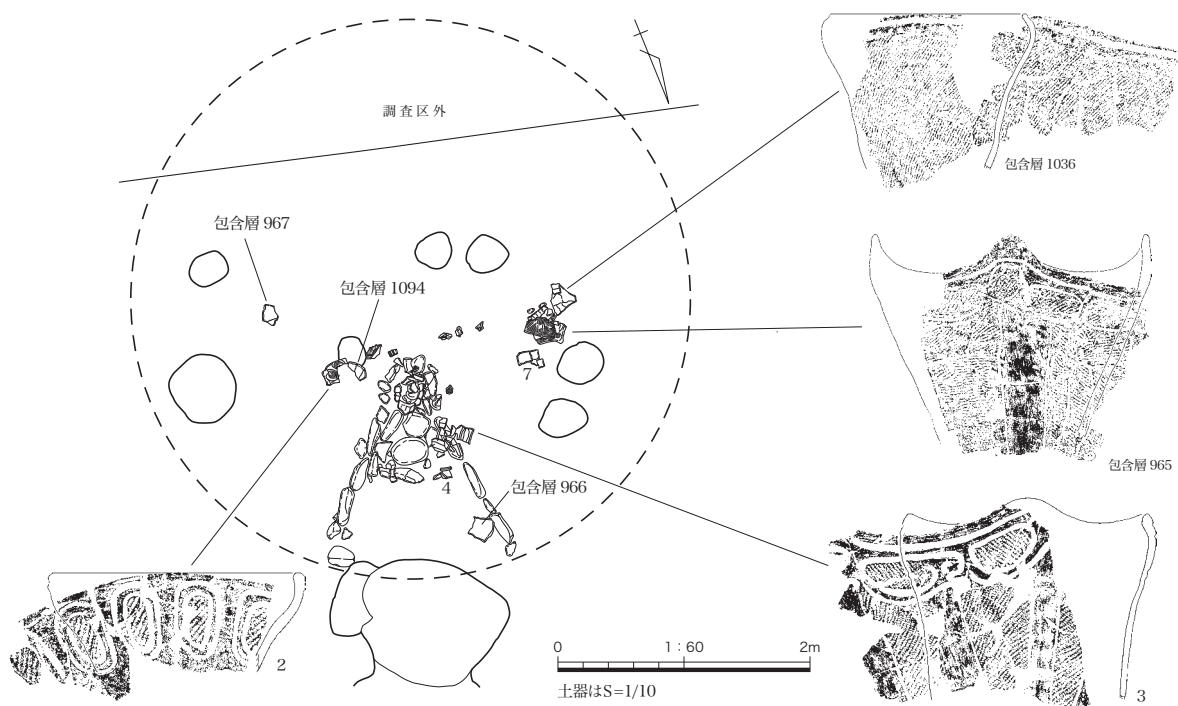
第13図 SI-1239実測図(1)

て脆くなっており、赤色化しているものもある。

前庭部は石組部の側線に沿って大きく「ハ」字状に開く深さ 15 cm ほどの掘り込みで、両側には 30 cm ほどの平石を上面が床面と同じ高さになるように、やや外側に傾けて埋置している。底面は第Ⅴ層の黄褐色土で平坦に貼床しており、周辺の床面と比較して締まりがある。なお、石組部の石敷下から焼骨が出土しており、また、掘方内から扁平な石が上端を水平にして出土していることから、炉を作り替えている可能性がある。

出土遺物 炉の埋設土器のほか、炉の覆土内及びその周辺で出土した土器 18 点を図示した。1 は炉の埋設土器である。深鉢形土器の胴部上半で、3 条の沈線（1 単位のみ 2 条）を垂下させ、沈線間の狭い部分を磨り消





第15図 SI-1239 遺物出土図

している。2は口縁部に幅広の沈線で縁取られた縦長の楕円文が横方向に展開する平縁のキャリパー状深鉢形土器で、埋設土器東側の床面とP-9から出土した破片が接合した。3は12と同一個体の器形復元可能な大型の破片で、9～11の破片と共に石組部の西側から出土したものである。4単位の波状口縁をなす深鉢形土器で、口縁部には凹線による楕円形区画文と連繋する渦巻文を配し、胴部には幅広の磨消懸垂文が展開する。13は埋設土器内から出土したもの、その他は炉の周辺で散在していたものである。また、包含層の掘り下げ時には、本住居内と想定される範囲から器形復元可能な土器や大型の破片が出土しており、包含層（第IV層）出土の土器として4点掲載した。包含層の966・967は土器埋設部の東側から、965・1036は住居の中央からやや北に寄った位置でそれぞれ床面から3～5cm浮いた状態で出土しており、時期的にも本住居跡に伴う可能性が高い。これらの土器は、概ね包含層出土の第III層第11群及び第IV層第12群の土器に対応する。

時期 炉の埋設土器は古い様相を示しているが、炉の形態及び住居内と想定される床面付近から出土した土器から、中期後葉の加曽利EⅢ式期と考えられる。

SI-1272（第17～19図、図版三・一〇・一七）

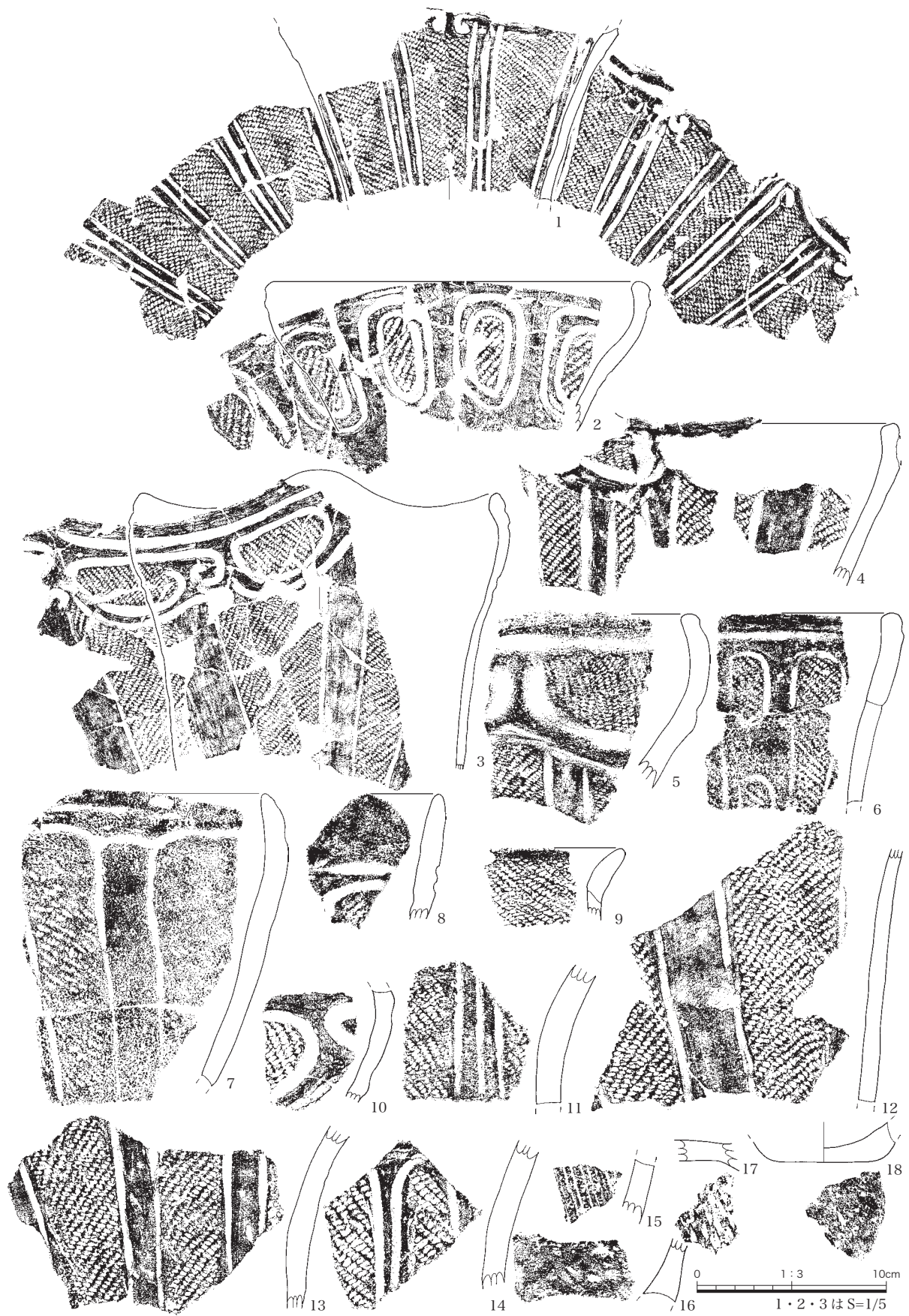
位置 B区C3-13・14・18・19グリッドに位置する。

重複関係 北側でSK-1274、南側でSK-1284・1290の土坑に切られる。

規模・形状 東西4.5m、南北4.7mのほぼ円形プランである。

壁・壁溝 壁高は確認面から5cmほどであり、第IV層内で明確な壁の立ち上がりは確認できなかった。壁溝は存在しなかったものと考えられる。

床面の状況 包含層の掘り下げにより、住居の確認段階では既に掘方まで下げてしまったが、土層観察では第V層の黄褐色土を平坦に削り、その上に黒色土を貼って床面としている状況が確認された。全体に軟弱であるが炉の周辺で僅かに硬化している部分が認められる。



第16図 SI-1239 遺物実測図

柱穴 床面の精査を行った結果、炉以外の住居内施設はなく、柱穴などのピットも確認されなかった。

覆土 少量の炭化物や焼土粒を含む黒褐色土で、上位の第IV層との識別は難しい。

炉跡 住居跡のほぼ中央に位置する。土器埋設部・石組部からなる複式炉である。土器埋設部の縁石と石組部の側石が抜き取られているが、規模は土器埋設部から石組部までの長さ 61 cm、石組部幅 48 cmが遺存する。

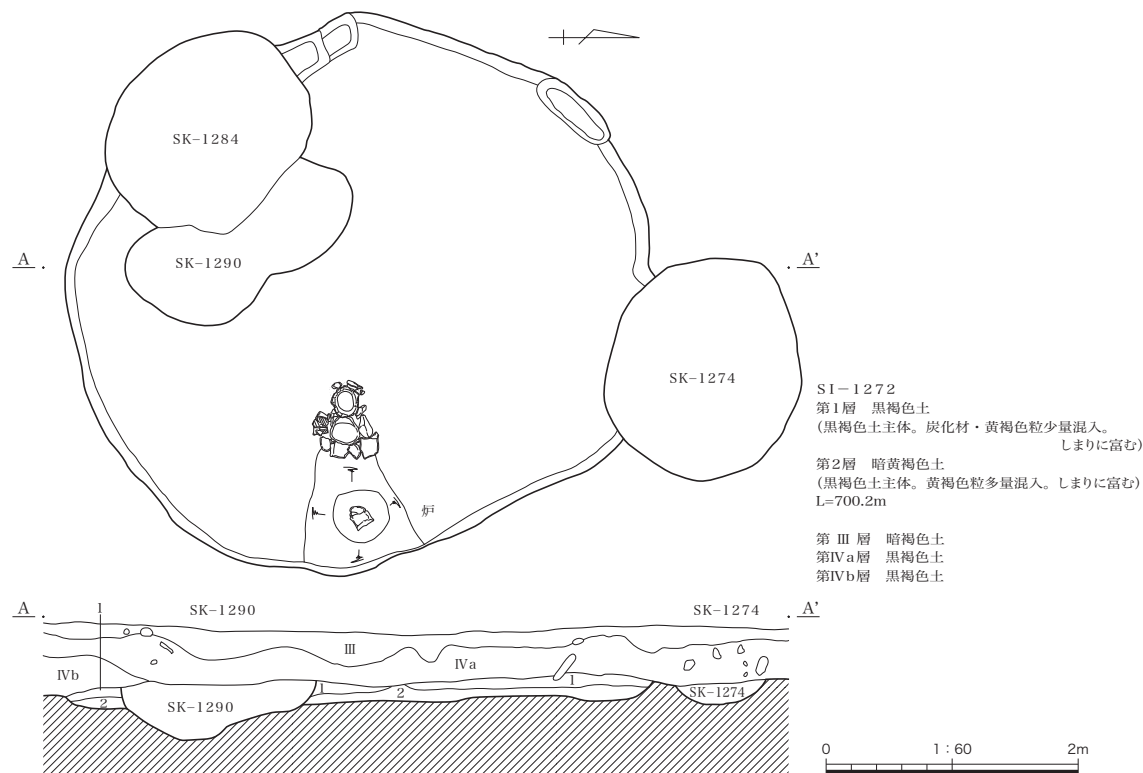
土器埋設部は深鉢形土器の胴部上半をほぼ正位に埋設し、周囲には小型の礫や河原石を巡らしている。埋設土器の覆土内は下位に炭化材が、上位に焼土ブロックを多量に含む暗褐色土が堆積する。土器は被熱により脆くなっており、また、埋設土器周囲の充填土も焼土化していた。

石組部は側石の殆どが抜かれており、敷石が残るのみである。埋設土器に接する奥壁には、20 cmほどの扁平な河原石 1 個を埋設土器から傾斜を持たせて設置し、その周囲には 10 cm前後の礫や河原石の平らな面を上にして敷いている。敷石は火熱によって脆くなっており、赤色化が著しい。

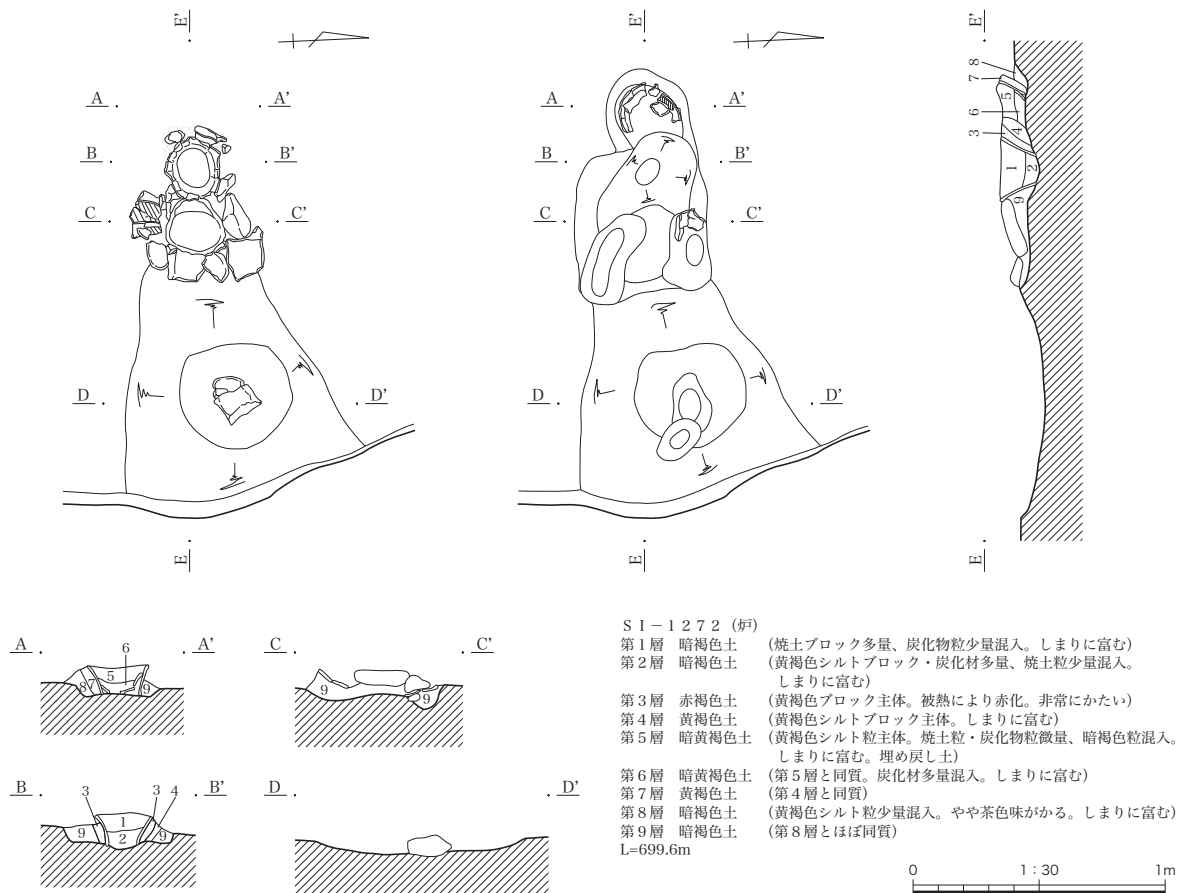
炉の前面は包含層掘り下げ時に削ってしまったが、石組部から小さく「ハ」字状に開いて壁に接続する前庭部状の窪みがある。底面は周辺の床面と比較してやや締まりがあり、炉に使用されたと考えられる礫の一部が混入している。なお、埋設土器の西側から、古い炉の埋設土器が埋設土器と縁石に切られた状態で半分ほど出土した。深鉢形土器の胴部を正位に埋設したもので、炉の作り替えが確認された。

出土遺物 炉の埋設土器 2 点と炉内出土の土器片 3 点、住居の覆土内から出土した石器 1 点の合計 6 点を図示した。土器はいずれも縄文と磨消懸垂文を交互に配す胴部破片である。1 は旧炉の埋設土器で、新炉に切れ半月状になった部分と、新炉南側の掘方から出土した破片が接合してほぼ全周したものである。2 は新炉の埋設土器で、深鉢形土器の胴部を幅 12 cmほど使用している。3・4 は旧炉の埋設土器内から、5 は新炉の北側の敷石下から出土した。6 は縦長剥片を素材とする珪化頁岩製の剥片で、両側縁に使用痕が認められる。

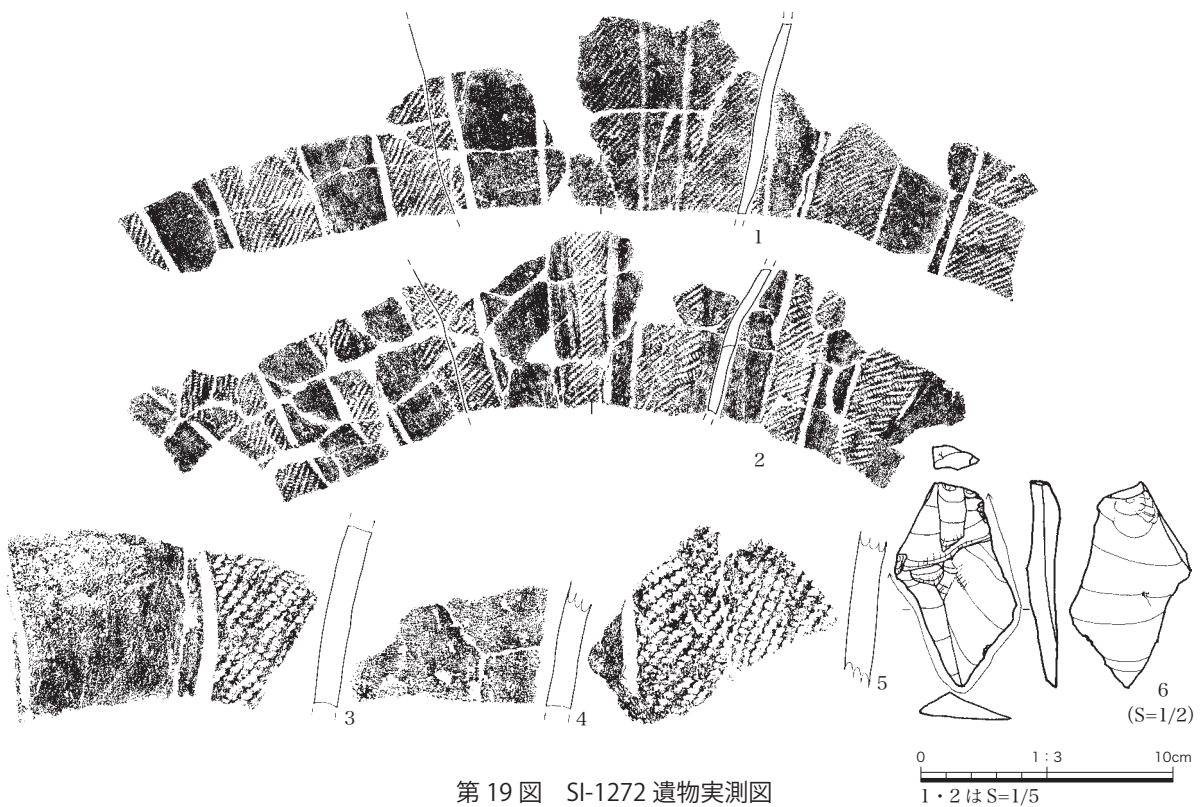
時期 炉の形態および埋設土器などから、中期後葉の加曽利 E III 式期と考えられる。



第17図 SI-1272 実測図 (1)



第18図 SI-1272 実測図 (2)



第19図 SI-1272 遺物実測図

SI-1289 (第20～22図、図版三)

位置 B区D3・7・8・12・13グリッド内で確認した。住居群のなかで最も西の端に構築されており、東側に位置するSI-1272とは12mの距離がある。

重複関係 南壁の中央部で本住居より新しいSK-1257と重複する。また、西壁の北半分と北壁の大部分は、護岸工事に係わる部分の試掘トレンチによって削平を受けている。

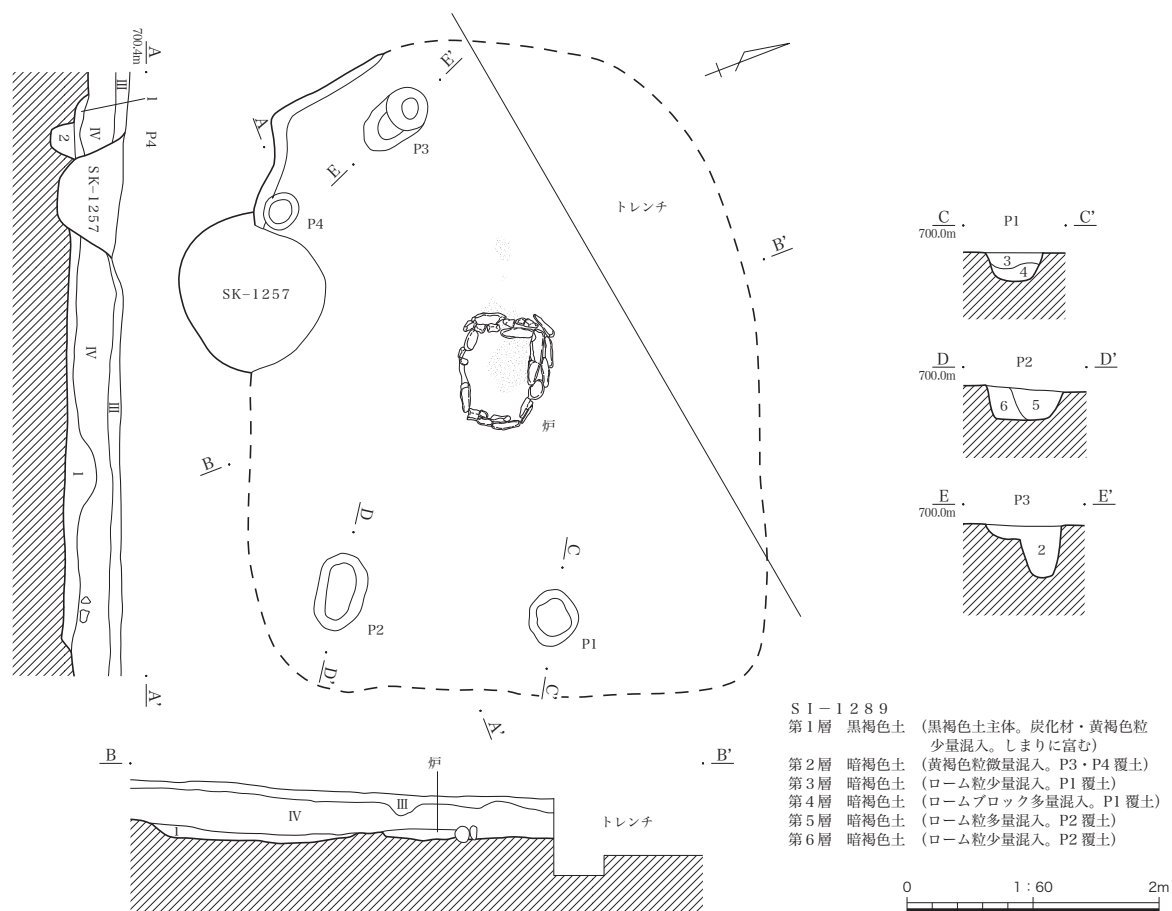
規模・形状 炉を中心とした東西5.1m、南北4.0mの楕円形プランを想定した。

壁・壁溝 壁は南西コーナーが床面から8cmほど遺存しているのみで、大部分が包含層の掘り下げによって消滅させてしまった。包含層と住居内覆土は同質で分別が困難であり、セクションベルトによる土層観察においても明確な壁の立ち上がりは確認できなかった。壁溝は存在しなかったものと考えられる。

床面の状況 第IV層下位の黒褐色土を平坦に削って床面としており、炉の西側で焼土の広がりや硬化した部分が僅かに認められる程度で、踏み締めなどによる明確な硬化面は確認できなかった。

柱穴 住居と想定した範囲内で4個のピットを確認した。炉を挟んだ東側で対峙するP1とP2、また西側においては試掘トレンチの掘削により消失してしまい明確ではないが、P3に対峙するピットの存在が想定できる。柱穴間の距離はP2-P3の東西方向が長く3.8m前後、P1-P2の南北方向が1.7mである。床面からの深さはP1・P2・P4が20～25cmと同規模であるが、P4は40cmとやや深い。

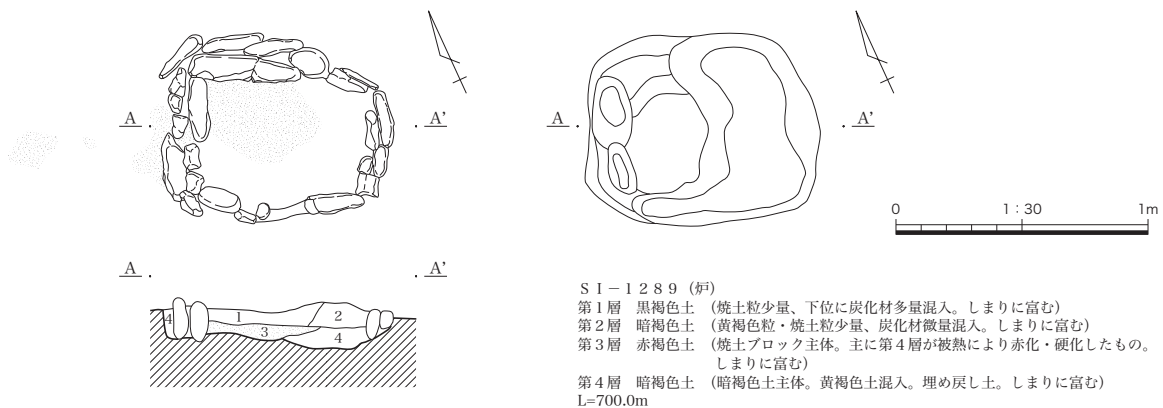
覆土 炭化物和黄褐色土粒を少量含む暗褐色土で、包含層との識別は困難であった。



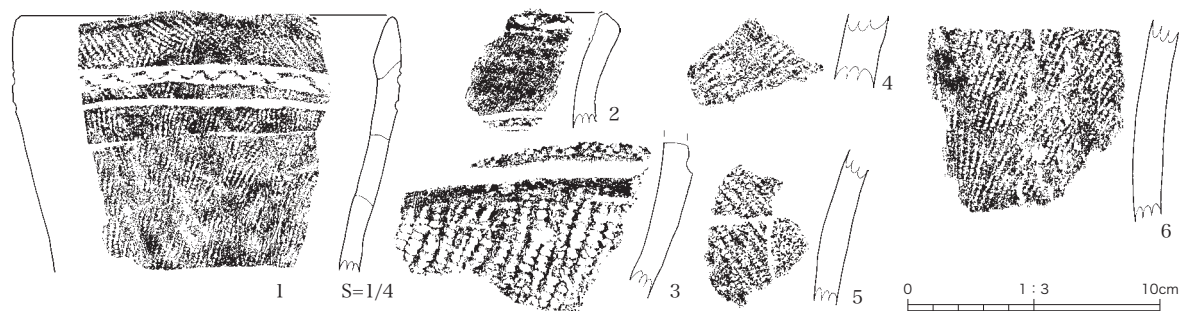
炉跡 南の側石が抜かれているが、東西 90 cm、南北 75 cm の石囲炉である。炉石は幅 20 ～ 40 cm の扁平な河原石を半分に折って板状にしたものを使用している。側石は大小の割石を用いて長さを調整しながら二重に巡らしており、折った面を下にしてほぼ垂直に立てて長方形に組み、コーナー部は「ハ」字状に据えて丸みを持たせている。炉の内側の石は、いずれも河原石の平らな礫面を内側に向けて据えているが、北西コーナーの比較的大型の石は礫面に加工して平に仕上げている。底面は火熱を受け硬化しており、中央から北西部にかけて焼土化していた。また、炉石はひび割れや内面が赤色化しているものもある。

出土遺物 炉の確認後、住居と認識した段階で取りあげた器形復元可能な土器 1 点と炉やピット内から出土した土器片 5 点の合計 6 点を図示した。1 は住居の南壁際から出土した平口縁の深鉢形土器である。口縁に沿って交互刺突文と 1 条の横位の沈線を巡らす。地文には 2 段 RL の縄文が口縁部は横方向に、胴部は縦方向に施される。内面には、お焦げまたは煤とみられる多量の炭化物が付着している。2・3 は頸部に横位の沈線を巡るもので、炉の覆土内から出土した。これ以外は地文に縄文のみが施された破片で 4 は炉の掘方内、5 は P4 の覆土内から出土した。6 は 1 と同一個体と思われる胴部破片で、1 と同様に炭化物の付着が著しい。

時期 中峠式に比定される復元可能な 1 の土器から概ね中期中葉の住居跡と考える。



第21図 SI-1289 実測図 (2)



第22図 SI-1289 遺物実測図

第3表 縄文時代竪穴住居跡一覧

{ } : 推定 単位 : m

遺構番号	位置	平面形	規模	壁溝	柱穴	炉跡	時期	備考
SI-1180	A3-18・19・23・24	{円形}	{4.1×4.1}	なし	不明	石組複式炉	中期後葉	SK-1239 と重複ないしは近接。
SI-1239	A3-23・24、B3-3・4	{円形}	{4.4×4.4}	なし	不明	土器埋設複式炉	中期後葉	SK-1238・1240 より新。
SI-1272	C3-13・14・18・19	円形	4.7×4.5	なし	なし	土器埋設複式炉	中期後葉	SK-1274・1284・1290 より古。
SI-1289	D3-7・8・12・13	隅丸長方形	{5.1×3.2}	なし	3本確認	方形石囲炉	中期中葉	SK-1257 より古。

2. 土坑（第23～40図、図版四～七・一〇・一一・一七・一八）

ここでは、貯蔵穴や墓坑の可能性のある土坑について掲載し、このほかの小穴・陥し穴については次項で取り上げる。なお、個々の土坑については実測図を提示し、また出土遺物を可能な限り図示したが、記述については概要と特徴的な土坑を中心に行い、その他のものについては、計測値・形状など一覧表で示した。便宜的に直径30 cm以上のものを土坑として取り上げたが、比較的小型のものは小穴との分別が困難である。

今回の調査で土坑としたものは92基で、前回の調査と合わせた総数は467基に達する。これらの土坑の分布をみると、環状集落の西縁にあたるA区に密集しており、住居跡や土坑同士が切り合って確認されている。B区においては、未調査地区を挟んだ東側で縄文時代の遺構は殆どみられず、西側でも数基が散在する程度であり、住居跡より山際の南側には広がらないようである。遺物が出土した土坑は少なく時期の特定は難しいが、概ね中期中葉から後葉のものが主体で、このほか数は少ないものの後期前半期の土坑2基を確認した。

平面形は概ね円形、楕円形、長方形と大別し、また形状が整っていないものは不整形ないしは各形状の前に「不整」を付けて表した。断面形は底面から壁が外傾して立ち上がるものが主体で、このほか底面から壁が垂直に立ち上がる筒型のものや、底面から壁がオーバーハングして立ち上がる袋状土坑も少数確認した。

底面がオーバーハングする、所謂「袋状土坑」はSK-1199・1205の2基である。これらは口径が1 mほどの比較的小型のもので、それぞれ南北方向で3.5 mほどの距離がある。いずれも確認面である壁上部の地山は第V層で、下部は第V層下の砂礫層に達していた。覆土は自然堆積で壁の砂礫層の崩落がみられないことから比較的堅固な壁であったものと思われる。また、底面は場所によって地山に大型の礫が多く含まれており、大きく外側へ掘ることが困難であるため、オーバーハングも部分的で小さいものである。

覆土内に多量の礫が入った土坑を多数確認した。これらは直径60 cm～150 cm前後の円形ないしは楕円形の土坑内に多量の小型礫、数個の大型礫、大小の礫が混入するものなど様々である。時期的には出土遺物から中期後葉から後期前葉におよぶ。地山に礫が多いためか、単に礫を廃棄したといった状況ではなく、意図的に多量の礫を埋めたと思われるものもあり、このなかには墓坑の可能性もあるものも含まれている。

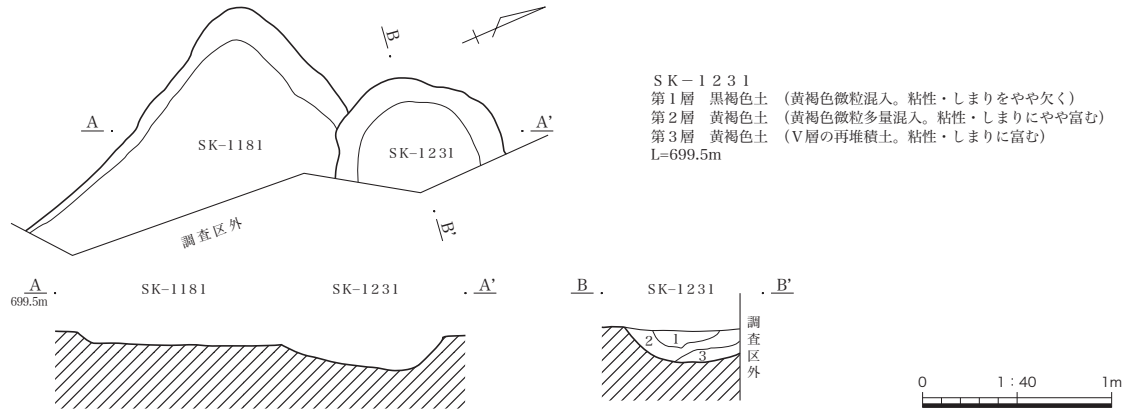
先ず、自然堆積による埋没後に礫を廃棄する例としてSK-1182・1188・1197・1275がある。SK-1182はレンズ状を示す最下層の自然堆積後、多量の礫と深鉢形土器の胴部を土坑内に入れており、SK-1188は自然堆積の過程で礫と共に大型の多孔石を廃棄している。SK-1197は壁際の崩落土の状態から機能停止後は暫く開口していたものと思われ、自然堆積によって埋没した後、礫と共に埋め戻されていた。

また、礫を廃棄した後に自然堆積によって埋没した例としてSK-1201・1237・1274・1276がある。これらは最下層に比較的大型の礫を廃棄し、上位は地山に含まれる小礫を含んだ壁の崩落土と自然堆積土に覆われている。このほか、礫と伴に土坑全体を人為的に埋め戻す例としてSK-1198・1203・1204・1207・1208・1240・1253などがある。このうち、SK-1198・1204・1207・1208・1240は径4・5 cmから人頭大の礫が覆土内に含まれる単一層で、人為的に埋め戻された状況が看取される。

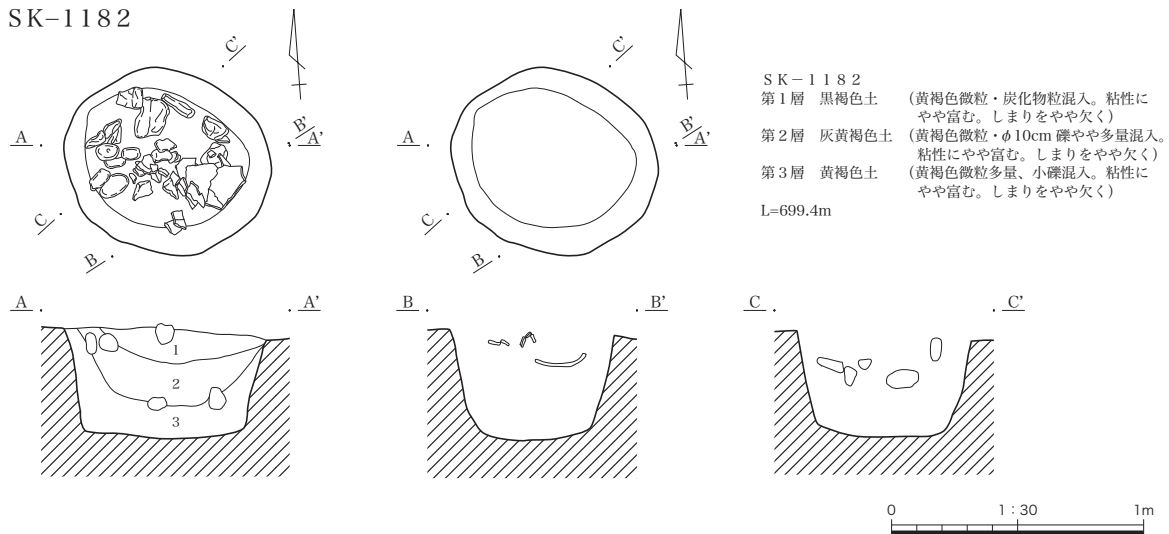
遺物が出土した土坑は少ないが、中期ではSK-1218から縦位の密な沈線を充填する火炎系深鉢形土器の下半部が出土している。後期ではSK-1253から人為的に入れたと思われる多量の礫の上から後期初頭の器形復元可能な3個体分の土器片が出土した。また、SK-1187Bと重複するSK-1187Aは長軸1.48 mの不整円形で、覆土の上位から堀之内式土器と焼土の散布が認められた。

特徴的な遺構としては、石器埋納遺構がある。SK-1187Bは直径40 cmほどの円形で、覆土の状態からSK-1187Aより新しい時期のものである。土坑内の底面付近に頁岩製の剥片（使用痕のある剥片6点、剥片1点）と珪岩製搔器の破損品の合計8点を入れており、炭混じりの土で埋められていた。

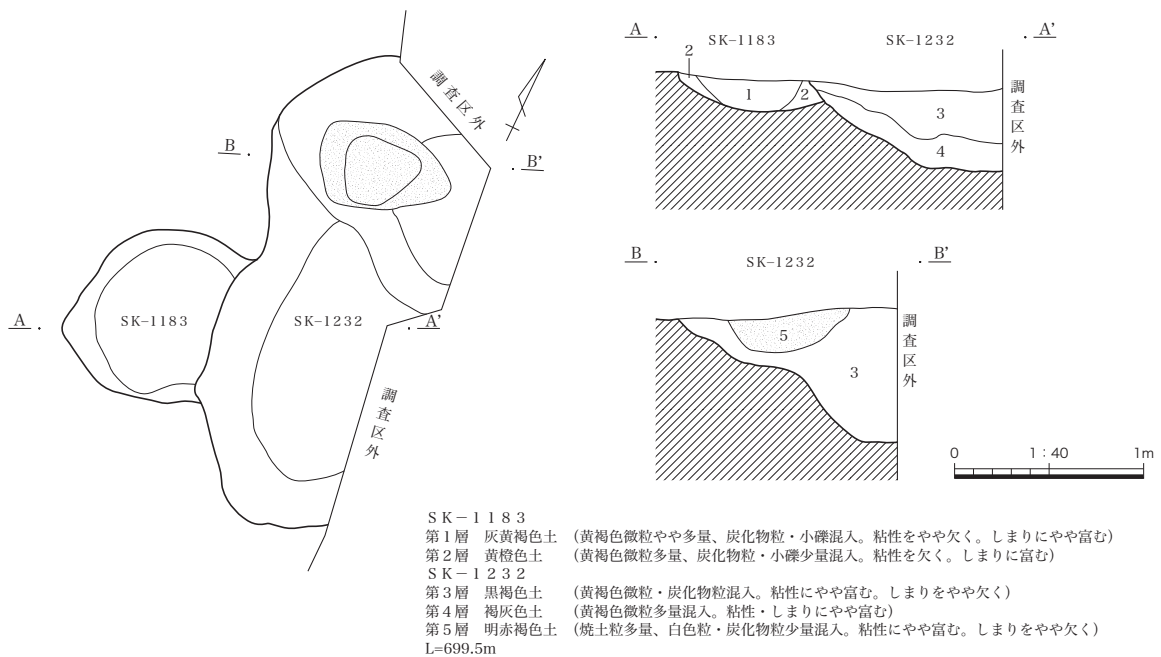
SK-1181・1231



SK-1182

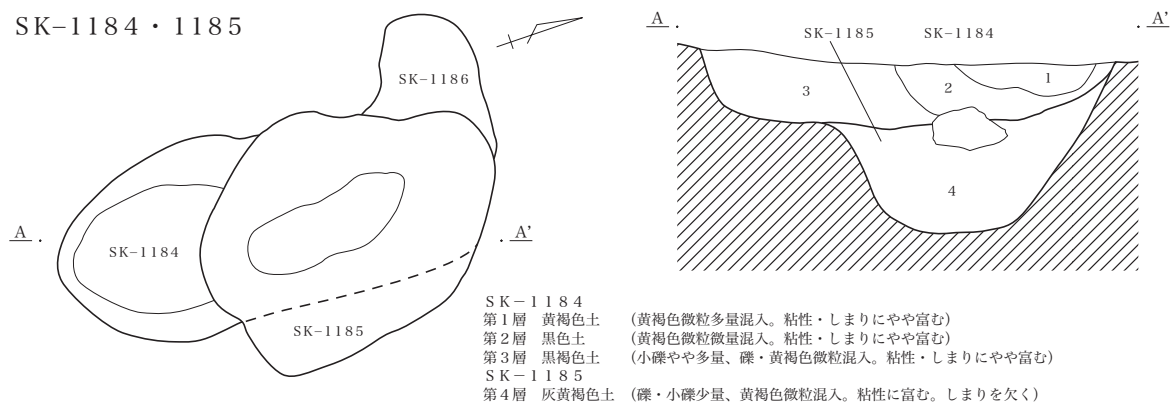


SK-1183・1232

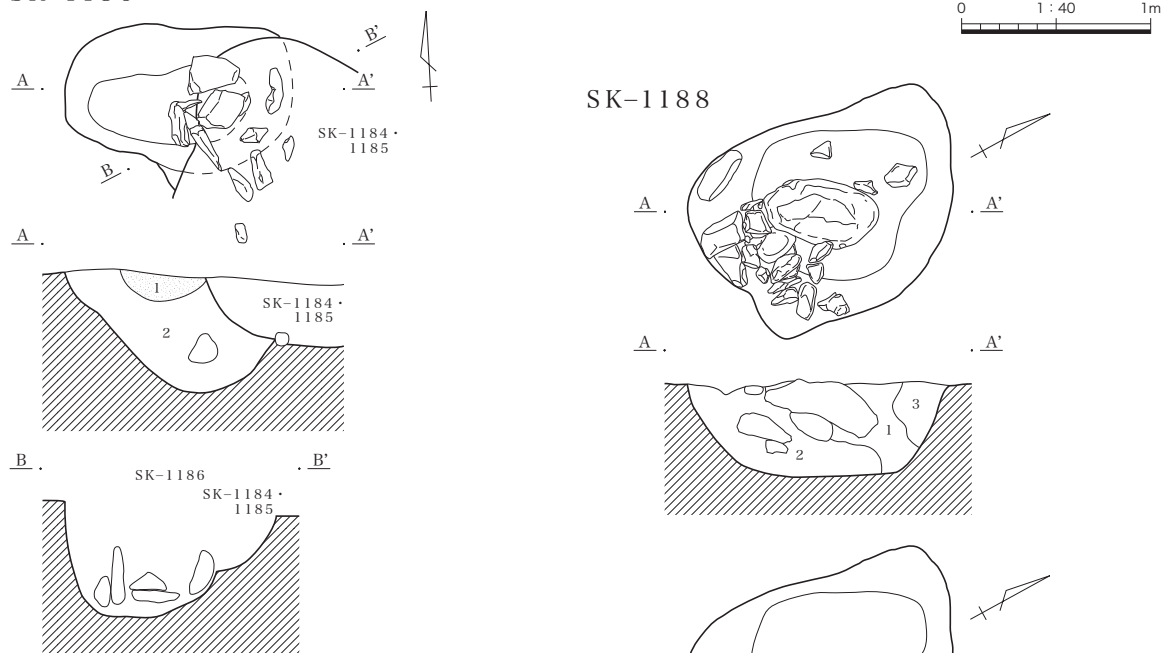


第23図 SK-1181～1183・1231・1232 実測図

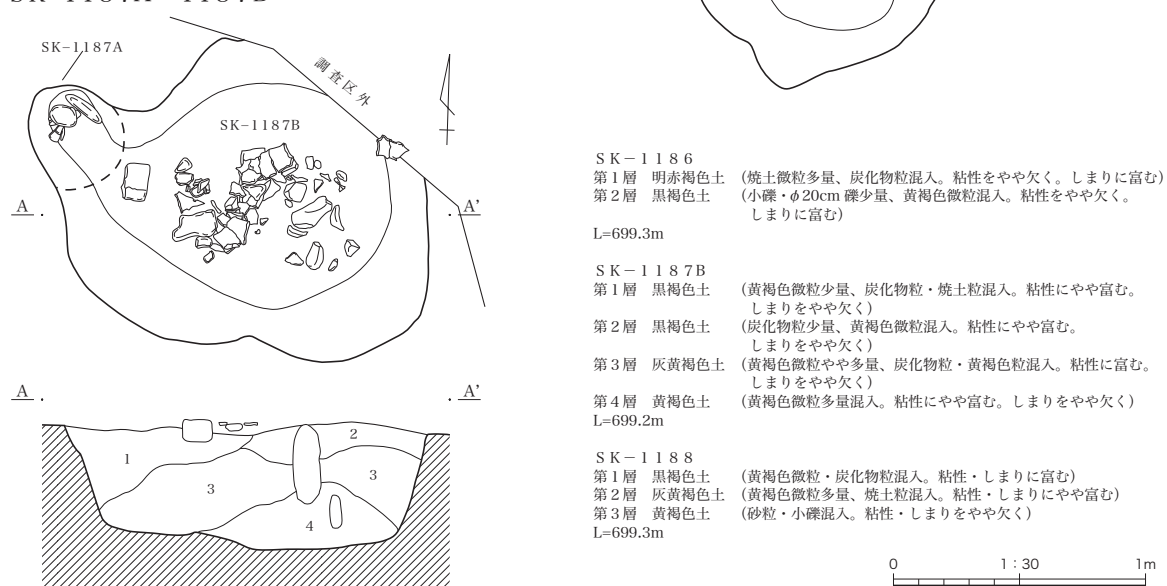
SK-1184 • 1185



SK-1186

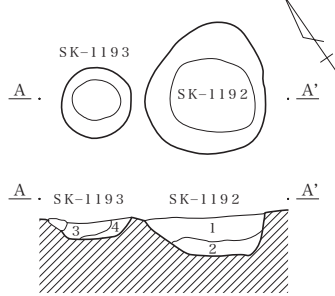


SK-1187A • 1187B

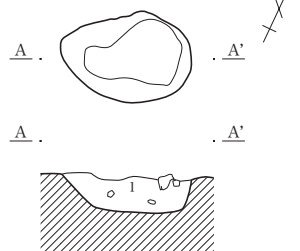


第24図 SK-1184～1188実測図

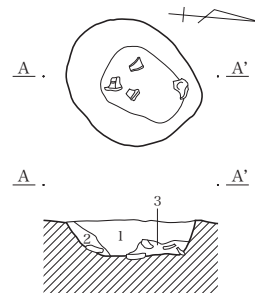
SK-1192・1193



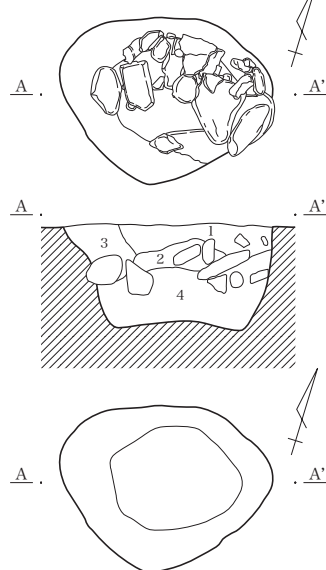
SK-1200



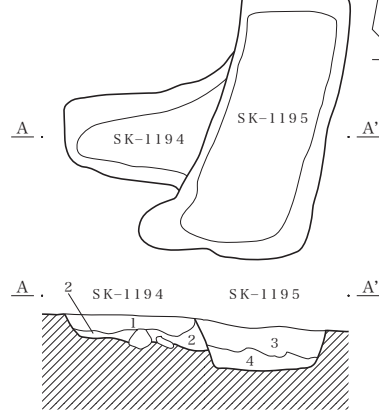
SK-1191



SK-1201



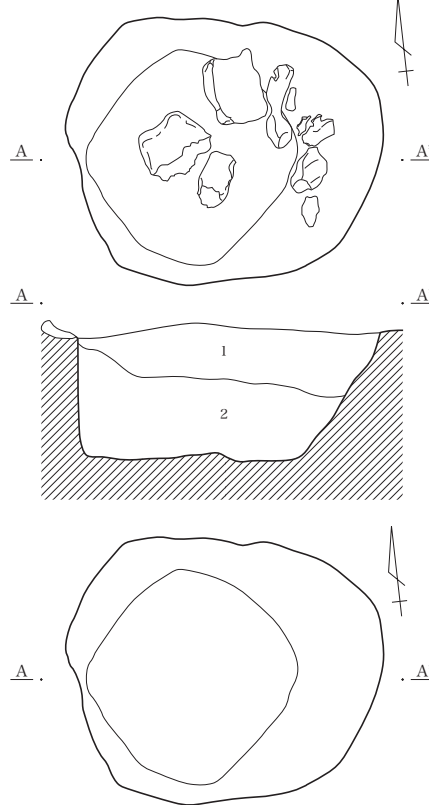
SK-1194・1195



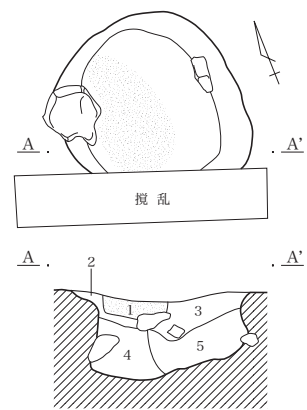
SK-1192
第1層 黒褐色土 (黄褐色微粒微量、小礫混入。粘性・しまりにやや富む)
第2層 黒色土 (黄褐色微粒少量混入。粘性・しまりにやや富む)
SK-1193
第3層 黒褐色土 (黄褐色微粒・小礫微量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第4層 黄褐色土 (黄褐色微粒多量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
L=699.3m

SK-1194
第1層 灰黄褐色土 (白色粒少量混入。粘性・しまりにやや富む)
第2層 黄褐色土 (黄褐色微粒多量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
SK-1195
第3層 黒褐色土 (礫・白色粒混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第4層 褐色土 (砂礫多量混入。粘性・しまりに富む)
L=699.3m

SK-1196



SK-1199



SK-1199
第1層 赤褐色土 (焼土主体)
第2層 黒褐色土 (炭化物粒・焼土粒少量混入。粘性にやや富む。しまりに富む)
第3層 黒褐色土 (炭化物粒・焼土粒少量、礫・小礫混入。粘性にやや富む。しまりに富む)
第4層 黄褐色土 (黄褐色微粒やや多量、炭化物粒・焼土粒少量混入。粘性・しまりにやや富む)
第5層 黒褐色土 (小礫・焼土粒・炭化物粒・黄褐色微粒少量混入。粘性・しまりにやや富む)
L=699.5m

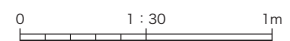
SK-1200
第1層 黒褐色土 (小礫・白色粒少量、炭化物粒・黄褐色微粒混入。粘性にやや富む。しまりに富む)
L=699.5m



SK-1191
第1層 灰黄褐色土 (白色粒・炭化物粒・小礫混入。粘性・しまりにやや富む)
第2層 黄褐色土 (黄褐色微粒多量、礫少量混入。粘性・しまりにやや富む)
第3層 黒褐色土 (黄褐色微粒微量、φ3~5cm 礫混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
L=699.4m

SK-1196
第1層 灰黄褐色土 (礫・小礫少量、黄褐色微粒微量混入。粘性をやや欠く。しまりにやや富む)
第2層 黄褐色土 (黄褐色微粒多量、礫・小礫少量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
L=699.3m

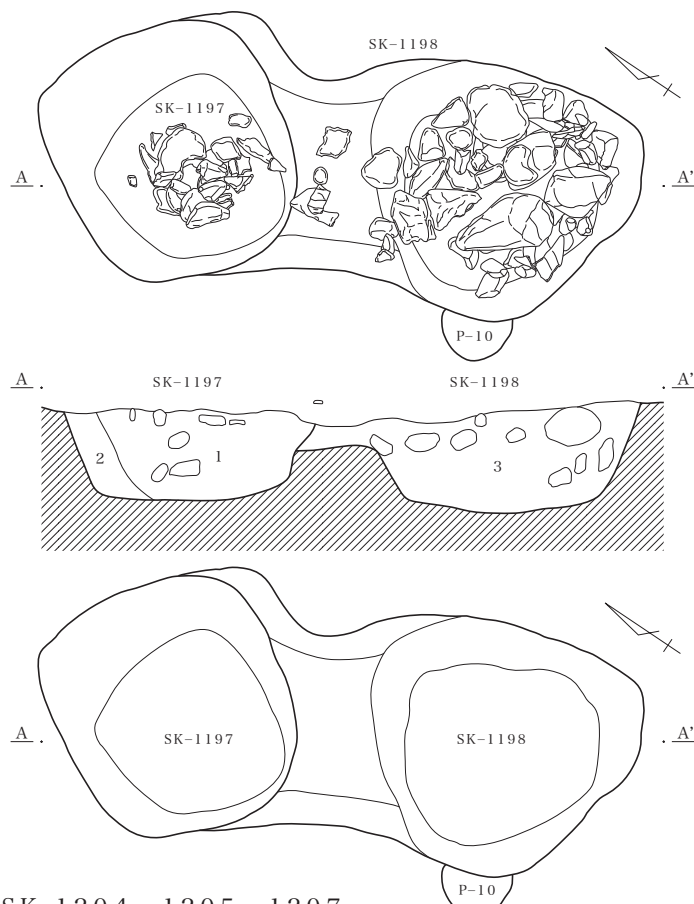
SK-1201
第1層 黒褐色土 (礫・炭化物粒・焼土粒少量、白色粒混入。粘性・しまりにやや富む)
第2層 黒色土 (炭化物粒多量、白色粒・焼土粒混入。粘性・しまりにやや富む)
第3層 灰黄褐色土 (小礫少量、黄褐色微粒混入。粘性・しまりにやや富む)
第4層 黒褐色土 (大礫多量混入。粘性に富む。しまりをやや欠く)
L=699.4



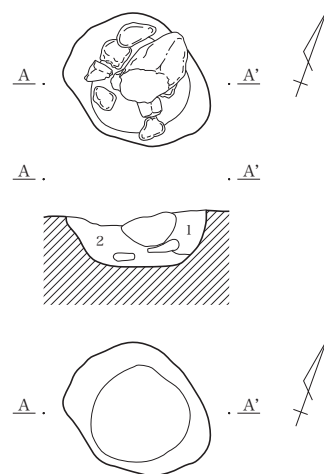
第25図 SK-1191～1196・1199～1201 実測図

第3章 確認した遺構と遺物

SK-1197・1198

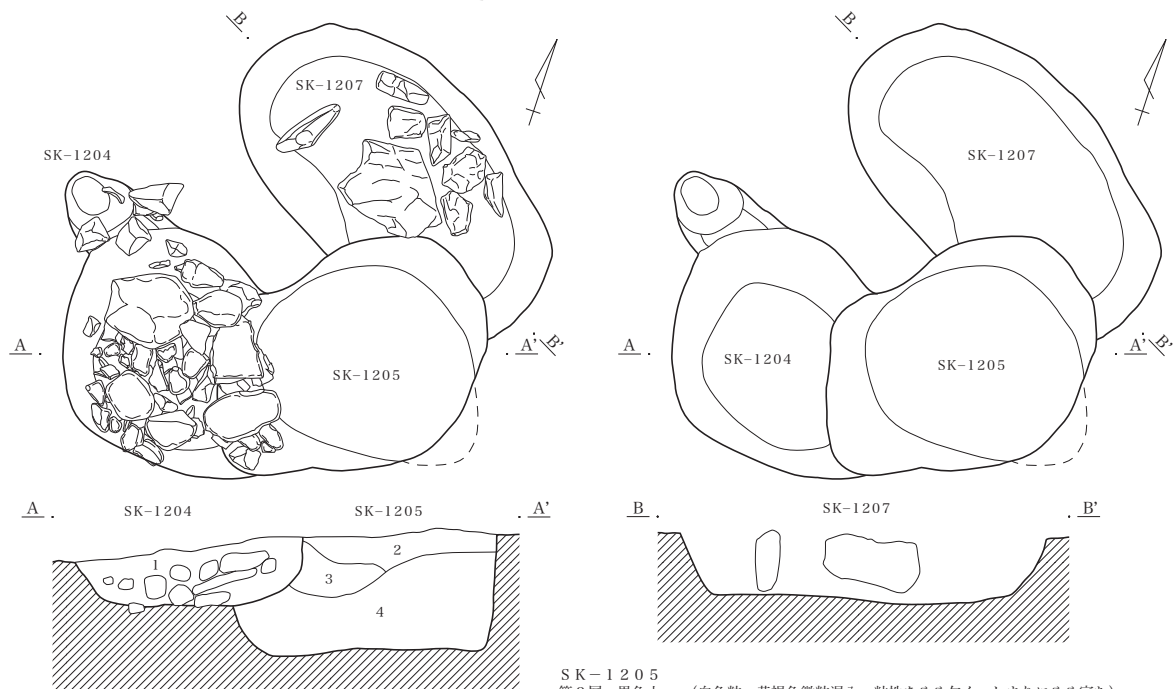


SK-1203



- SK-1197
第1層 黒褐色土 (黄褐色微粒少量、大～小礫混入。粘性・しまりにやや富む)
第2層 灰黄褐色土 (黄褐色微粒やや多量、小礫少量混入。粘性・しまりにやや富む)
- SK-1198
第3層 黄褐色土 (大礫・黄褐色微粒多量、小礫少量混入。粘性を欠く。しまりにやや富む)
L=699.3m
- SK-1203
第1層 黄褐色土 (黄褐色微粒多量、炭化物粒混入。粘性を欠く。しまりに富む)
第2層 灰黄褐色土 (炭化物粒・黄褐色微粒混入。粘性をやや欠く。しまりに富む)
L=699.4m

SK-1204・1205・1207

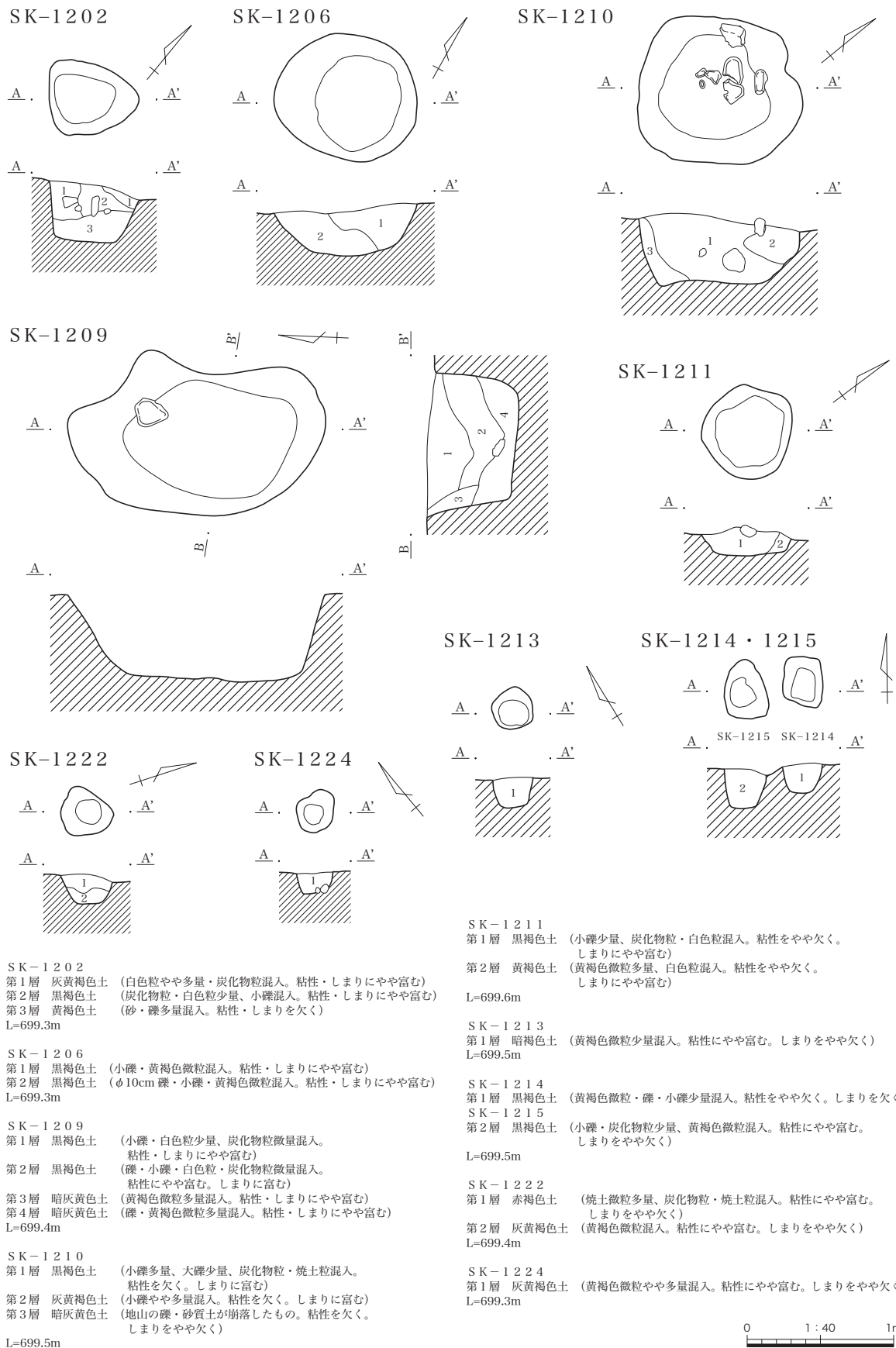


- SK-1204
第1層 黒褐色土 (φ20cm 礫多量、黄褐色微粒・小礫混入。粘性を欠く。しまりに富む)

- SK-1205
第2層 黒色土 (白色粒・黄褐色微粒混入。粘性をやや欠く。しまりにやや富む)
第3層 黒褐色土 (小礫・白色粒・黄褐色微粒混入。粘性をやや欠く。しまりにやや富む)
第4層 褐灰色土 (小礫多量、白色粒・黄褐色微粒混入。粘性をやや欠く。しまりにやや富む)
L=699.3m

0 1:30 1m

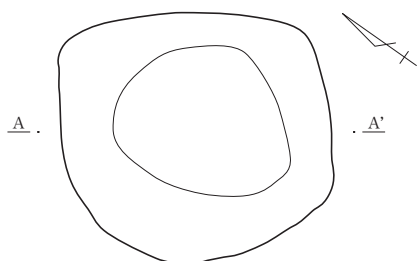
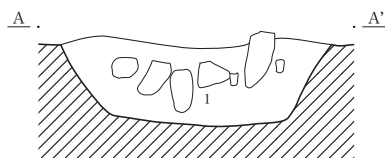
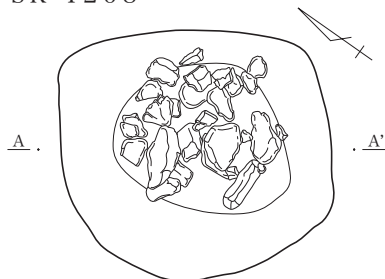
第26図 SK-1197・1198・1203～1205・1207 実測図



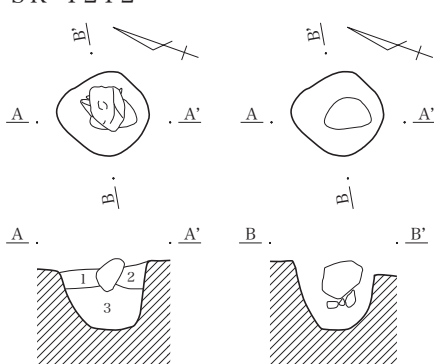
第27図 SK-1202・1206・1209～1211・1213～1215・1222・1224 実測図

第3章 確認した遺構と遺物

SK-1208



SK-1212

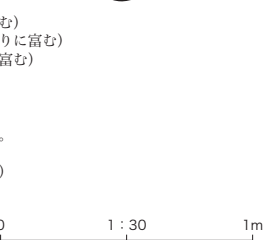
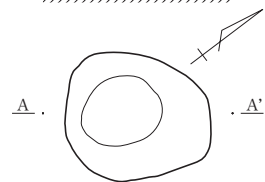
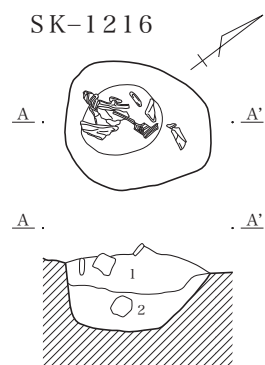


SK-1208
第1層 黒褐色土 (大～小礫多量、黄褐色微粒少量混入。
粘性にやや富む。しまりに富む)
L=699.2m

SK-1212
第1層 黒褐色土 (黄褐色微粒少量混入。粘性・しまりにやや富む)
第2層 黄褐色土 (黄褐色微粒多量混入。粘性をやや欠く。しまりに富む)
第3層 褐灰色土 (砂多量、礫混入。粘性をやや欠く。しまりに富む)
L=699.4m

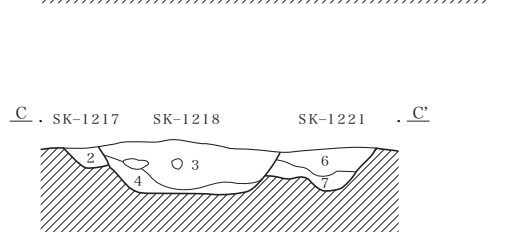
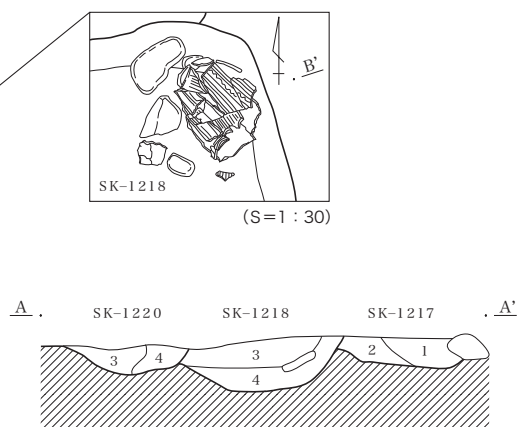
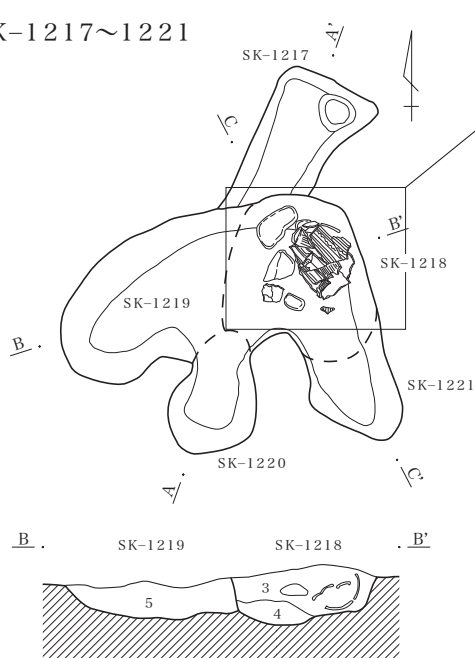
SK-1216
第1層 黒褐色土 (小礫・黄褐色微粒少量混入。粘性にやや富む。
しまりをやや欠く)
第2層 黒色土 (礫混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
L=699.4m

SK-1216



0 1:30 1m

SK-1217~1221



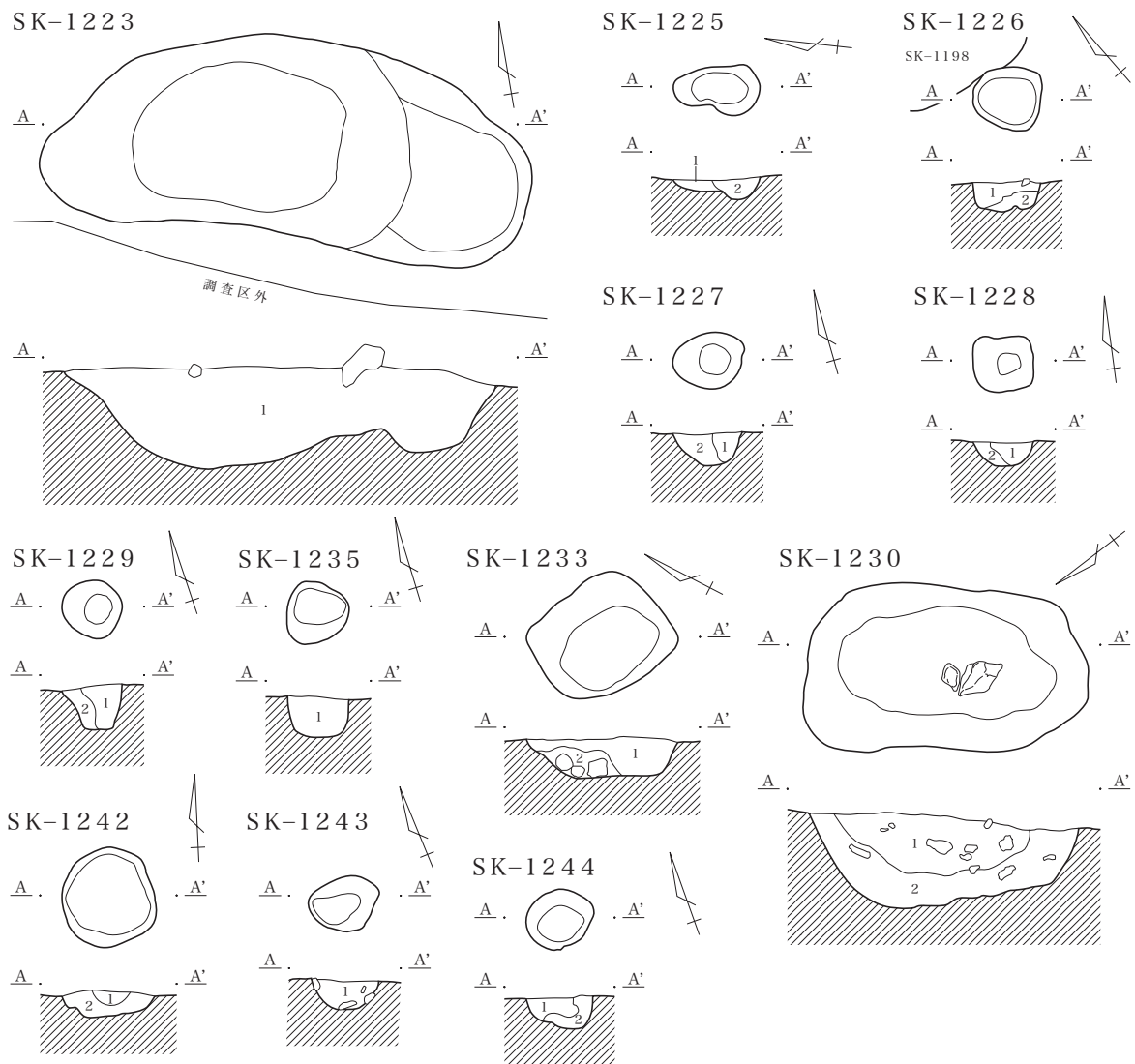
SK-1217
第1層 黒褐色土 (礫・黄褐色微粒混入。粘性・しまりにやや富む)
第2層 黄褐色土 (小礫・黄褐色微粒多量混入。粘性・しまりにやや富む)
SK-1218・1220
第3層 黒褐色土 (礫・黄褐色微粒少量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第4層 灰黄色土 (黄褐色微粒少量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)

SK-1219
第5層 灰黄褐色土 (炭化物粒少量、小礫混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)

SK-1221
第6層 灰黄褐色土 (黄褐色微粒混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第7層 黒褐色土 (小礫混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
L=699.5m

0 1:40 1m

第28図 SK-1208・1212・1216～1221 実測図



SK-1223
第1層 黒褐色土 (中〜大礫多量、小礫・白色粒混入。粘性をやや欠く。しまりにやや富む)
L=699.5m

SK-1225
第1層 黄褐色土 (黄褐色微粒やや多量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第2層 灰黄褐色土 (白色粒・ローム粒混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
L=699.4m

SK-1226
第1層 灰黄褐色土 (白色粒・黄褐色微粒混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第2層 黒褐色土 (黄褐色微粒やや多量、白色粒・炭化物粒混入)
L=699.4m

SK-1227
第1層 灰黄褐色土 (黄褐色微粒・炭化物粒混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第2層 黒褐色土 (黄褐色微粒・炭化物粒少量、白色粒混入。粘性をやや欠く。しまりにやや富む)
L=699.3m

SK-1228
第1層 黄褐色土 (黄褐色微粒・炭化物粒やや多量混入。粘性・しまりをやや欠く)
第2層 灰黄褐色土 (黄褐色微粒・炭化物粒混入。粘性・しまりをやや欠く)
L=699.3m

SK-1229
第1層 黒褐色土 (黄褐色微粒少量、炭化物粒混入。粘性・しまりにやや富む)
第2層 灰黄褐色土 (黄褐色微粒やや多量混入。粘性・しまりにやや富む)
L=699.3m

SK-1230
第1層 灰黄褐色土 (φ10cm 礫・小礫・白色粒・炭化物粒混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第2層 黒褐色土 (礫・小礫少量、白色粒混入。粘性・しまりをやや欠く)
L=699.3m

SK-1233
第1層 灰黄褐色土 (小礫・黄褐色粒混入。粘性・しまりにやや富む)
第2層 褐灰色土 (砂礫層の再堆積土。粘性・しまりをやや欠く)
L=699.5m

SK-1235
第1層 灰黄褐色土 (砂粒多量、礫混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
L=699.4m

SK-1242
第1層 黒褐色土 (白色粒・黄褐色微粒・炭化物粒混入。粘性・しまりをやや欠く)
第2層 灰黄褐色土 (小礫・白色粒・黄褐色微粒やや多量混入。粘性・しまりをやや欠く)
L=699.3m

SK-1243
第1層 灰黄褐色土 (ローム微粒多量、礫・小礫混入。粘性を欠く。しまりをやや欠く)
L=699.3m

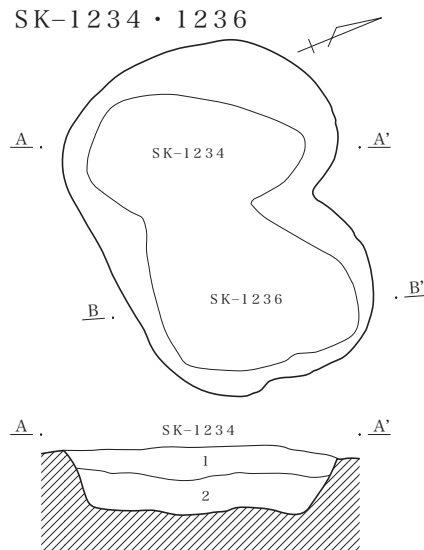
SK-1244
第1層 黒褐色土 (炭化物粒・黄褐色微粒混入。粘性に富む。しまりにやや富む)
第2層 黄褐色土 (黄褐色微粒多量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
L=699.3m

0 1:40 1m

第29図 SK-1223・1225～1230・1233・1235・1242～1244 実測図

第3章 確認した遺構と遺物

SK-1234・1236



SK-1234

第1層 黒褐色土 (小礫少量、白色粒混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第2層 灰黄褐色土 (礫・小礫・白色粒混入。粘性・しまりにやや富む)
L=699.5m

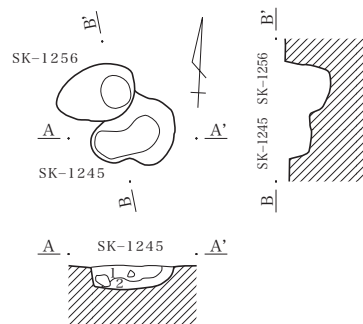
SK-1236

第1層 灰黄褐色土 (礫・小礫多量、黄褐色粒・炭化物粒混入。粘性をやや欠く。しまりにやや富む)
L=699.4m

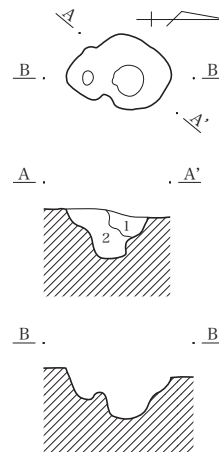
SK-1245

第1層 灰黄褐色土 (黄褐色微粒やや多量、白色粒・炭化物粒混入。粘性をやや欠く。しまりにやや富む)
第2層 黄褐色土 (黄褐色微粒多量、白色粒・炭化物粒混入。粘性にやや富む。しまりに富む)
L=699.3m

SK-1245・1256

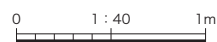


SK-1248

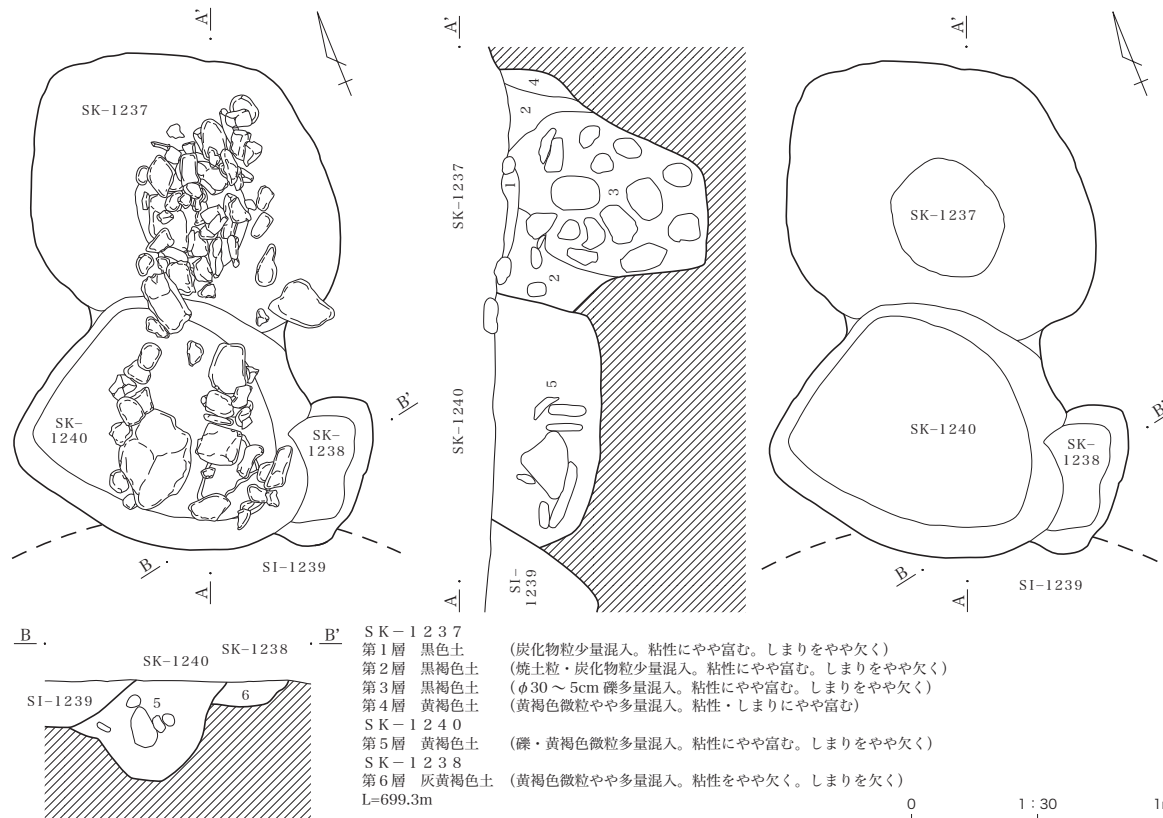


SK-1248

第1層 黒褐色土 (白色粒・炭化物粒・黄褐色微粒少量混入。粘性にやや富む。しまりを欠く)
第2層 黄褐色土 (黄褐色微粒多量混入。粘性にやや富む。しまりを欠く)
L=699.5m



SK-1237・1238・1240



SK-1237

第1層 黒色土 (炭化物粒少量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第2層 黒褐色土 (焼土粒・炭化物粒少量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第3層 黒褐色土 (φ30～5cm 礫多量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)
第4層 黄褐色土 (黄褐色微粒やや多量混入。粘性・しまりにやや富む)

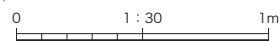
SK-1240

第5層 黄褐色土 (礫・黄褐色微粒多量混入。粘性にやや富む。しまりをやや欠く)

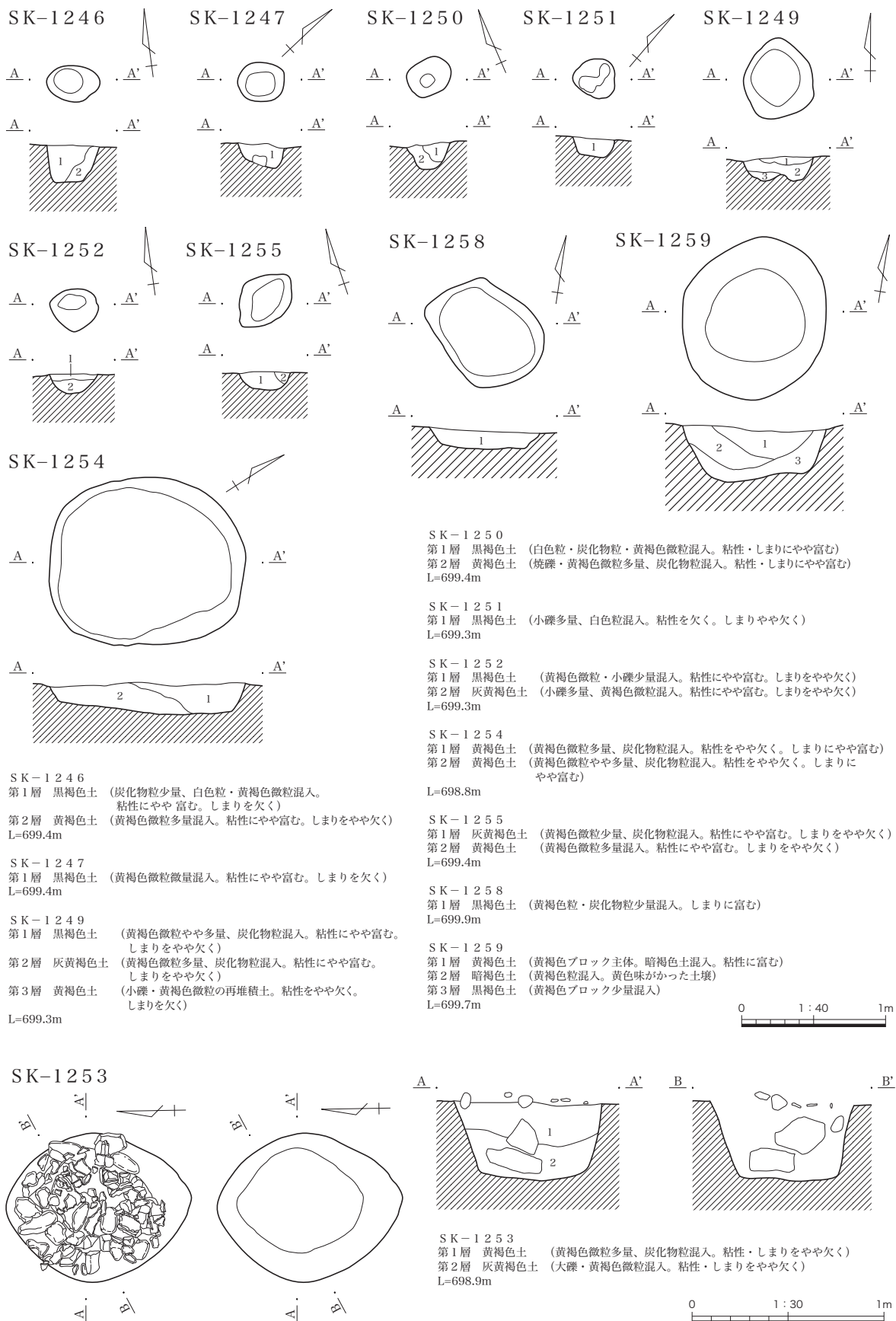
SK-1238

第6層 灰黄褐色土 (黄褐色微粒やや多量混入。粘性をやや欠く。しまりを欠く)

L=699.3m

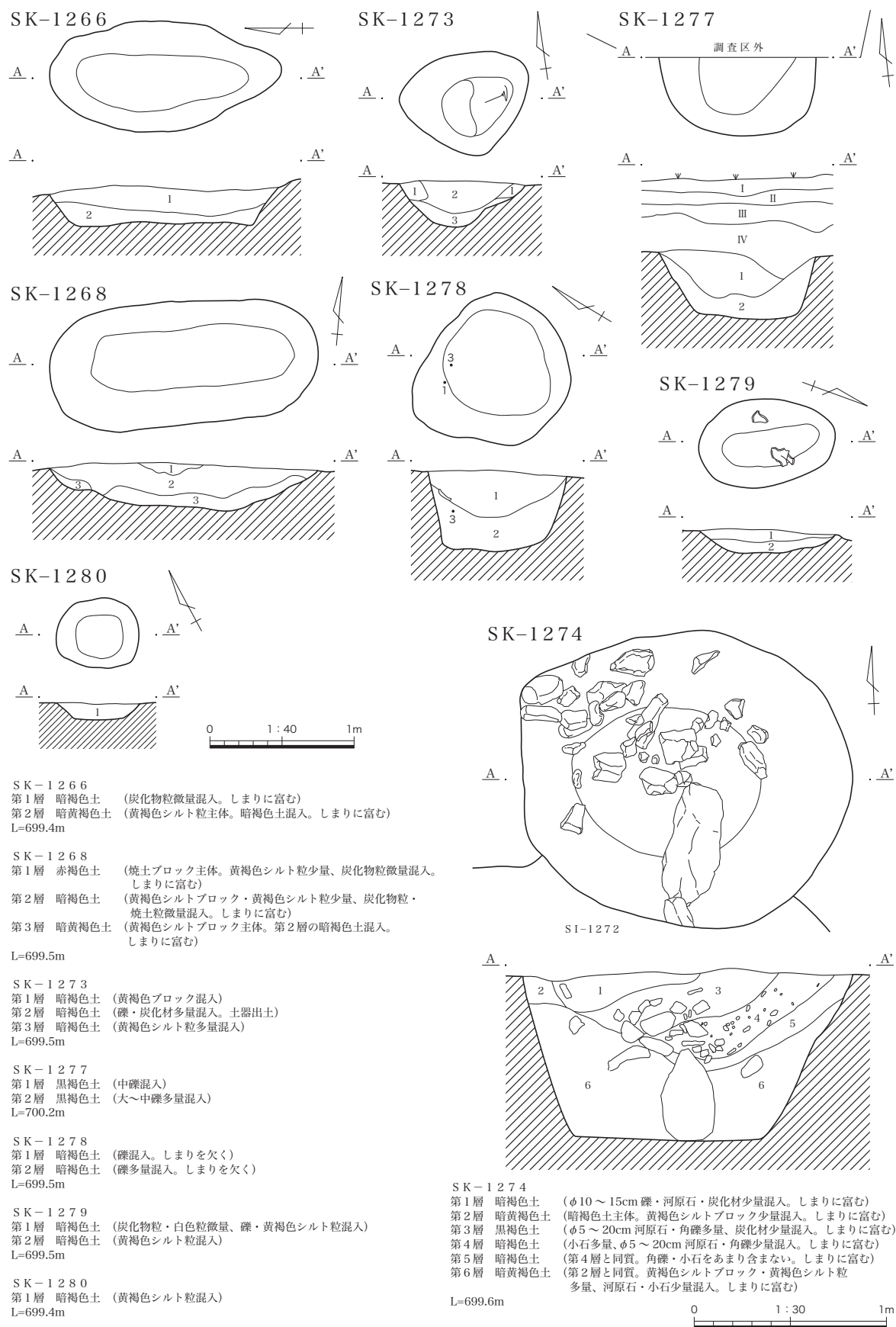


第30図 SK-1234・1236～1238・1240・1245・1248・1256 実測図



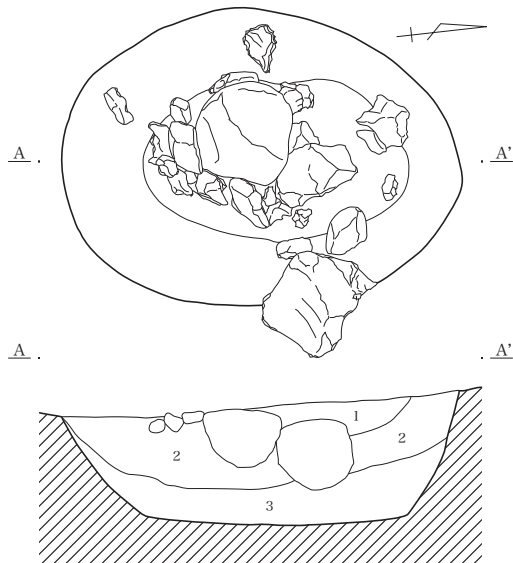
第31図 SK-1246・1247・1249～1255・1258・1259 実測図

第3章 確認した遺構と遺物



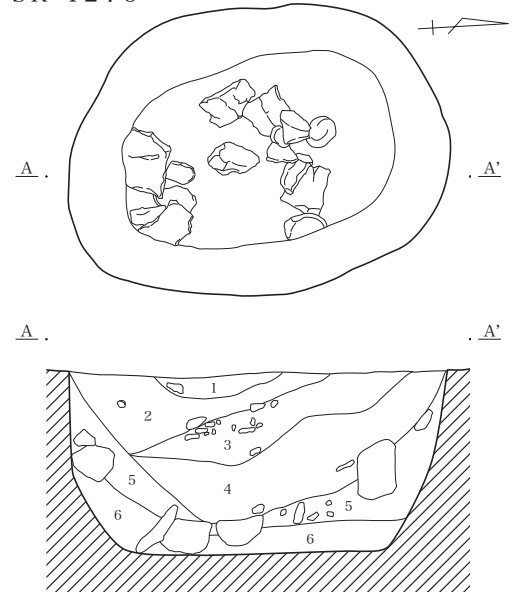
第32図 SK-1266・1268・1273・1274・1277～1280 実測図

SK-1275



SK-1275
第1層 黒褐色土 (大型河原石・ $\phi 5 \sim 20\text{cm}$ 河原石・角礫多量、炭化材少量混入。しまりに富む)
第2層 暗褐色土 ($\phi 5 \sim 20\text{cm}$ 河原石・炭化材少量、小石・角礫微量混入。しまりに富む)
第3層 暗褐色土 ($\phi 5\text{cm}$ 河原石・黄褐色シルト粒少量混入。しまりに富む)
L=699.8m

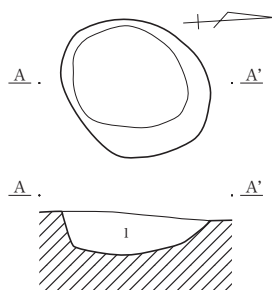
SK-1276



SK-1276
第1層 黒色土 (炭化物粒・小～中礫まばらに混入。しまりを欠く)
第2層 暗褐色土 (小～中礫まばらに混入。しまりを欠く)
第3層 黄褐色土 (小～中礫まばらに混入。一部密集する)
第4層 暗褐色土 (黄褐色粒・小～中礫まばらに混入。しまりを欠く)
第5層 黒褐色土 (中～大礫黄褐色シルト粒混入。しまりを欠く)
第6層 暗黄褐色土 (中礫多量混入。しまりを欠く)
L=699.7m

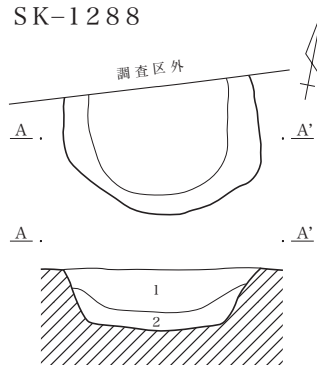
0 1:30 1m

SK-1281



SK-1281
第1層 暗褐色土 ($\phi 2 \sim 4\text{cm}$ 褐色粒・F.P粒多量混入。ザラザラしている。しまりにやや富む)
L=699.4m

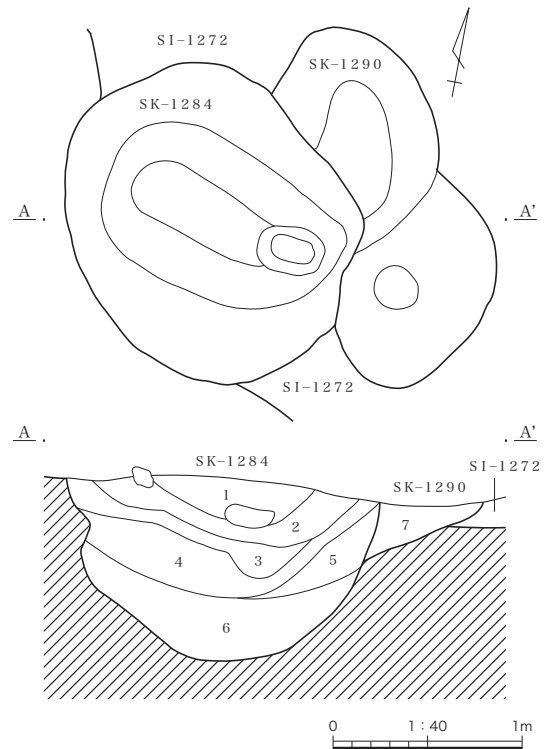
SK-1288



SK-1284
第1層 暗黒褐色土 (黒褐色土主体。小砂利多量、黄褐色粒少量混入。しまりに富む)
第2層 茶褐色土 (茶褐色土主体。小砂利少量、黄褐色粒微量混入。しまりに富む)
第3層 黄褐色土 (黄褐色粒多量、小砂利微量混入。しまりに富む)
第4層 黒褐色土 (黄褐色粒微量混入。第1層と同質か。しまりに富む)
第5層 褐色土 (黄褐色粒微量混入。しまりに富む)
第6層 暗黄褐色土 (黄褐色粒多量混入。しまりに富む)
SK-1290
第7層 黒褐色土 (黄褐色粒微量混入。しまりに富む)
L=699.5m

SK-1288
第1層 黒褐色土 (第IV層と同質。黄褐色粒微量混入。しまりに富む)
第2層 黄褐色土 (第V層と同質。黄褐色粒少量混入。しまりに富む)
L=700.0m

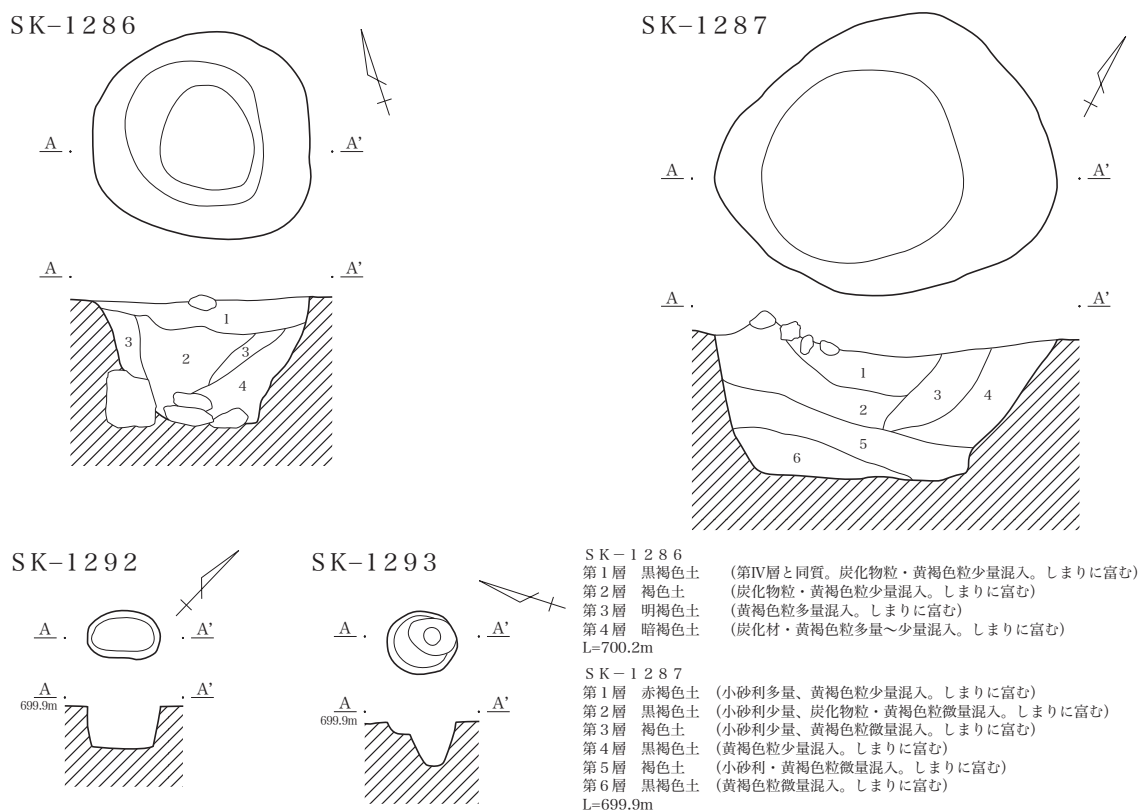
SK-1284・1290



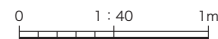
0 1:40 1m

第33図 SK-1275・1276・1281・1284・1288・1290 実測図

第3章 確認した遺構と遺物



第34図 SK-1286・1287・1292・1293 実測図



第4表 縄文時代土坑一覧

{ } : 推定、() : 残存 単位: cm

遺構番号	位置	平面形	長径×短径	深さ	重複遺構	時期	備考
SK-1181	A3-18・19	{隅丸長方形}	(164×104)	8	SK-1231 と重複		
SK-1182	A3-18	楕円形	83×71	42	なし	中期後葉	覆土内礫多量
SK-1183	A3-18	{円形}	(80)×92	12	SK-1232 より古		
SK-1184	A3-17・18	楕円形	220×106	35	SK-1185・1186 より新		
SK-1185	A3-17・18	不整楕円形	168×128	89	SK-1184 より古、SK-1186 より新		
SK-1186	A3-17・22	楕円形	{91}×56	46	SK-1184・1185 より古		
SK-1187A	A3-17	不整形	176×135	50	SK-1187B より古	後期前葉	深鉢・磨石
SK-1187B	A3-17	円形	44×40	48	SK-1187A より新	後期	石器埋納遺構
SK-1188	A3-22・23	不整楕円形	110×81	37	なし	中期	覆土内礫多量
SK-1191	A3-23	楕円形	55×50	19	なし	中期後葉	
SK-1192	B3-3	不整楕円形	70×64	25	なし	中期後葉	
SK-1193	B3-3	円形	38×38	22	なし		ビット状
SK-1194	B3-2	隅丸長方形	(74)×52	16	SK-1195 より古		
SK-1195	B3-2	隅丸長方形	146×64	25	SK-1194 より新		
SK-1196	B3-7	不整楕円形	124×107	52	なし	中期	覆土内礫多量
SK-1197	B3-2・3・7・8	不整円形	109×104	36	SK-1198 より新	中期後葉	覆土内礫多量
SK-1198	B3-3	不整楕円形	(197)×100	46	SK-1197 より古、SK-1226・P-10 と重複	中期後葉	覆土内礫多量
SK-1199	B3-8	円形	(84)×98	42	なし		袋状土坑
SK-1200	B3-8	楕円形	70×48	22	なし		
SK-1201	B3-8	不整楕円形	85×66	41	なし	中期	覆土内礫多量
SK-1202	B3-2	不整楕円形	62×52	44	なし		
SK-1203	B3-7	楕円形	60×50	21	なし		覆土内礫多量
SK-1204	B3-7	楕円形	140×89	24	SK-1205 より古		覆土内礫多量
SK-1205	B3-7	楕円形	120×83	48	SK-1204・1207 より新		袋状土坑
SK-1206	B3-2・7	円形	97×85	36	なし		凹石
SK-1207	B3-7	楕円形	145×81	28	SK-1205 より古		覆土内礫多量
SK-1208	B3-7・12	不整円形	121×111	31	なし	中期	覆土内礫多量
SK-1209	B3-12・13	不整楕円形	176×108	60	なし	中期	
SK-1210	B3-12	不整円形	112×98	44	なし	中期	

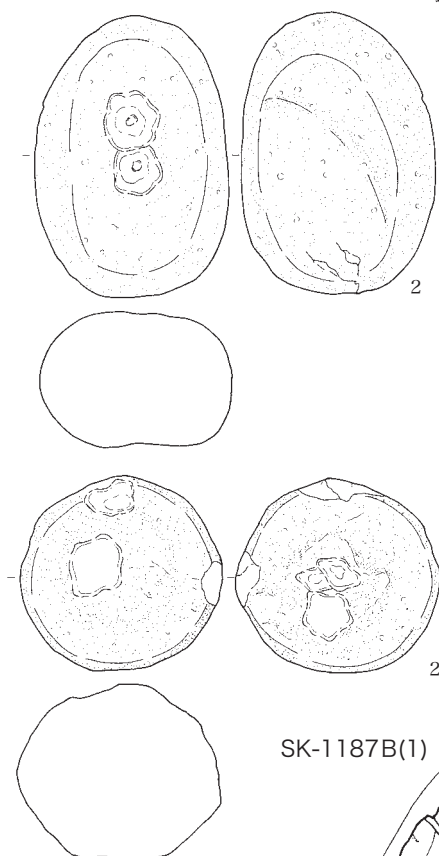
第2節 縄文時代の遺構と遺物

遺構番号	位 置	平面形	長径 × 短径	深さ	重複遺構	時期	備考
SK-1211	B3-8	円形	64×64	14	なし	中期後葉	
SK-1212	B3-12	不整円形	37×33	24	なし		覆土上位に礫
SK-1213	B3-17	円形	30×30	18	なし		ビット状
SK-1214	B3-12・17	不整楕円形	34×29	20	なし		ビット状
SK-1215	B3-17	不整楕円形	41×29	28	なし		ビット状
SK-1216	B3-17・18	楕円形	62×51	30	なし	中期中葉	上位に遺物
SK-1217	B3-17	長方形	(69)×53	27	SK-1218 より古		
SK-1218	B3-17	{楕円形}	{97}×97	29	SK-1219・1220 より古、1217・1221 より新	中期中葉	深鉢下半部
SK-1219	B3-17	{楕円形}	(94)×68	20	SK-1218 より新		
SK-1220	B3-17	{楕円形}	67×47	14	SK-1218 より新		
SK-1221	B3-17	{楕円形}	(60)×63	22	SK-1218 より古		
SK-1222	B3-13	不整円形	37×34	18	なし		ビット状
SK-1223	B3-17・18・22・23	楕円形	270×108	55	なし		
SK-1224	B3-7	不整円形	30×26	14	なし		ビット状
SK-1225	B3-3・8	不整楕円形	48×28	12	なし		ビット状
SK-1226	B3-3	不整円形	37×34	16	SK-1198 と重複		ビット状
SK-1227	B3-3	楕円形	40×31	17	なし		ビット状
SK-1228	B3-3	不整円形	38×36	14	なし		ビット状
SK-1229	B3-3	円形	32×32	23	なし		ビット状
SK-1230	B3-12	楕円形	154×90	51	SX-1190 より古		覆土内礫多量
SK-1231	A3-18	{円形}	89×(62)	16	SK-1181 と重複		
SK-1232	A3-18	{不整楕円形}	(258×111)	72	SK-1183 より新	中期後葉	上位に焼土
SK-1233	B3-22	不整円形	84×66	21	なし	中期中葉	自然堆積
SK-1234	B3-22	楕円形	146×(86)	36	SK-1236 と重複	中期	
SK-1235	B3-17	不整円形	34×34	23	なし		小穴状
SK-1236	B3-17・22	{楕円形}	126×111	33	SK-1234 と重複		
SK-1237	A3-22・23	楕円形	139×115	80	SK-1240 より古		覆土内礫多量
SK-1238	A3-23	{楕円形}	63×(34)	10	SI-1239・SK-1240 より古	中期後葉	
SK-1240	A3-23	楕円形	119×107	43	SK-1237・1238 より新、SI-1239 より古		覆土内礫多量
SK-1242	A3-23	円形	52×52	8	なし		
SK-1243	B3-3	楕円形	39×30	16	なし		ビット状
SK-1244	B3-3	楕円形	38×32	17	なし		ビット状
SK-1245	B3-3	不整楕円形	46×36	12	SK-1256 と重複		ビット状
SK-1246	B3-3	楕円形	37×25	26	なし		ビット状
SK-1247	B3-3	楕円形	33×27	18	なし		ビット状
SK-1248	B3-3・8	不整円形	56×39	26	なし		ビット状
SK-1249	A3-23	不整円形	57×50	17	なし		
SK-1250	A3-24	楕円形	31×24	17	なし		ビット状
SK-1251	B3-3	円形	30×29	13	なし		ビット状
SK-1252	B3-3	不整円形	34×30	14	なし		ビット状
SK-1253	B3-6	楕円形	97×78	40	なし	後期初頭	覆土内礫多量
SK-1254	A3-21	楕円形	136×116	23	なし		自然堆積
SK-1255	B3-8	楕円形	47×34	10	なし		ビット状
SK-1256	B3-3	楕円形	44×30	24	SK-1245 と重複		ビット状
SK-1258	D-3-8	不整楕円形	86×64	12	なし		
SK-1259	D-3-3	円形	114×99	38	なし		自然堆積
SK-1266	A4-14	不整楕円形	160×77	27	なし		自然堆積
SK-1268	A4-19・24	楕円形	186×85	30	なし		自然堆積
SK-1273	C-3-3・4	不整楕円形	90×72	32	なし		自然堆積
SK-1274	C-3-13・18	不整円形	171×154	69	SI-1272 より新		覆土内礫多量
SK-1275	C-3-12	楕円形	159×119	48	なし		覆土内礫多量
SK-1276	C-3-7・8・12・13	楕円形	154×114	63	なし		覆土内礫多量
SK-1277	C-3-3	{円形}	110×(54)	44	なし		自然堆積
SK-1278	B3-23、C-3-3	不整円形	114×96	60	なし	中期	自然堆積
SK-1279	C-3-9・10・14・15	楕円形	95×68	14	なし		
SK-1280	C-3-4	楕円形	57×49	11	なし		
SK-1281	C-3-22	楕円形	84×71	22	なし		
SK-1284	C-3-19	不整円形	173×164	88	SI-1272・SK-1290 より新		
SK-1286	D-3-9	円形	121×110	58	なし		陥し穴か
SK-1287	D-3-3・8	不整円形	181×156	76	なし		自然堆積
SK-1288	D-3-16・17	{円形}	104×(69)	33	なし		自然堆積
SK-1290	C-3-14・19	不整形	194×(80)	56	SI-1272 より新、SK-1284 より古		
SK-1292	D-3-3	楕円形	38×24	21	なし		ビット状
SK-1293	D-3-4	円形	38×33	22	なし		ビット状

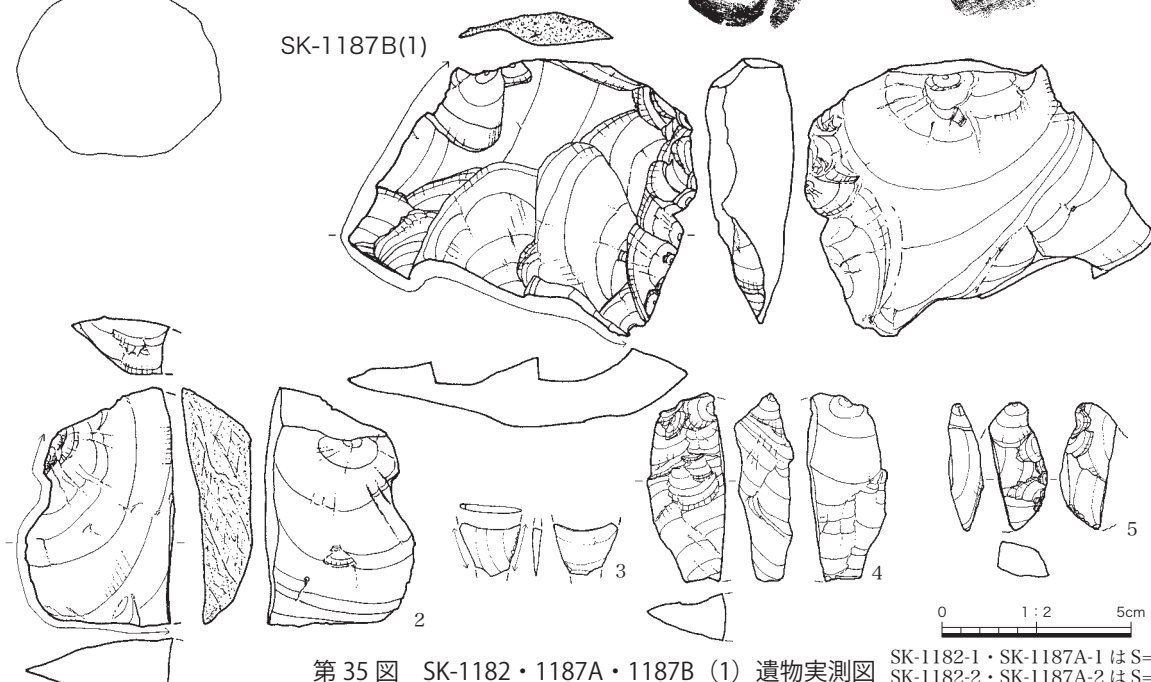
SK-1182



SK-1187A



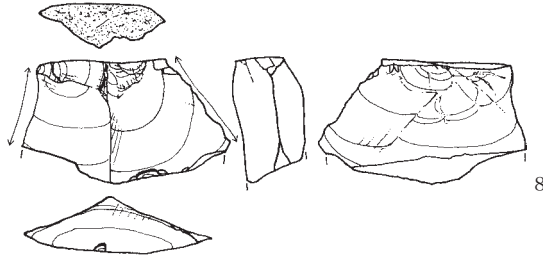
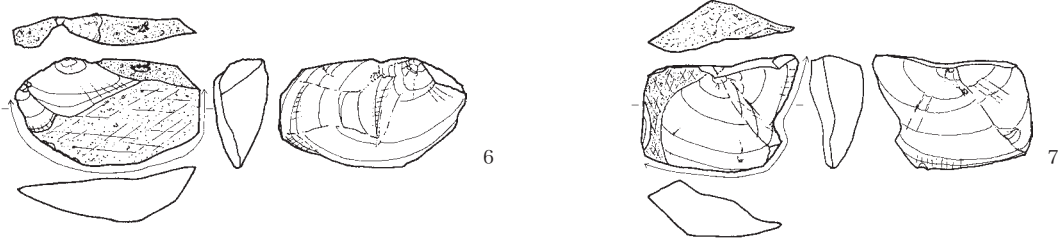
SK-1187B(1)



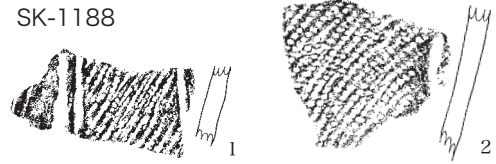
第35図 SK-1182・1187A・1187B (1) 遺物実測図

SK-1182-1・SK-1187A-1 は S=1/5
SK-1182-2・SK-1187A-2 は S=1/3

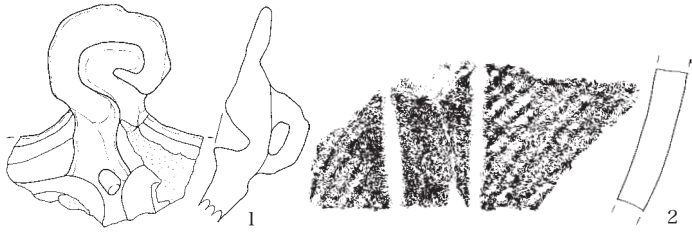
SK-1187B (2)



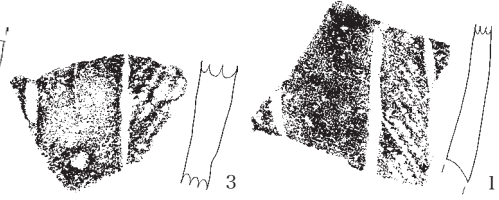
SK-1188



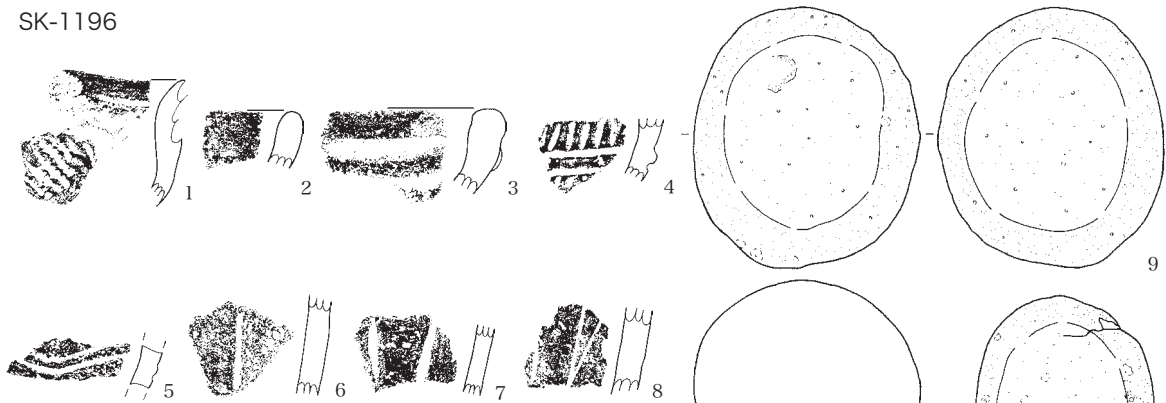
SK-1191



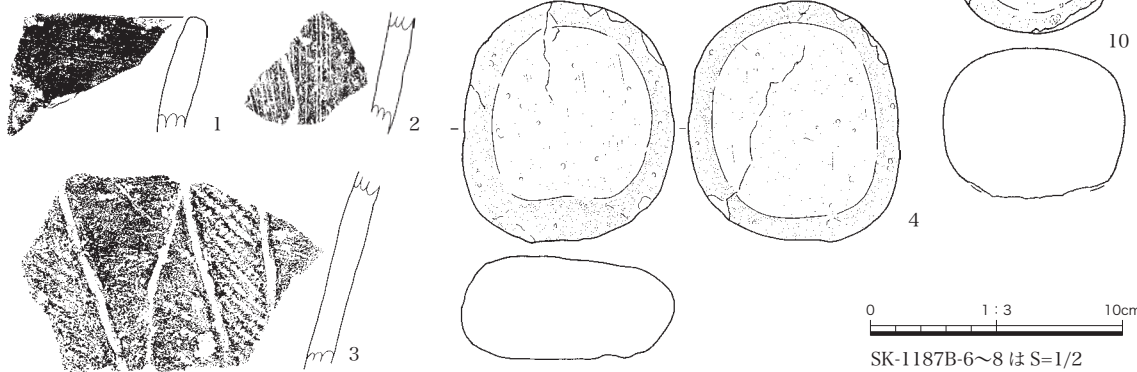
SK-1192



SK-1196



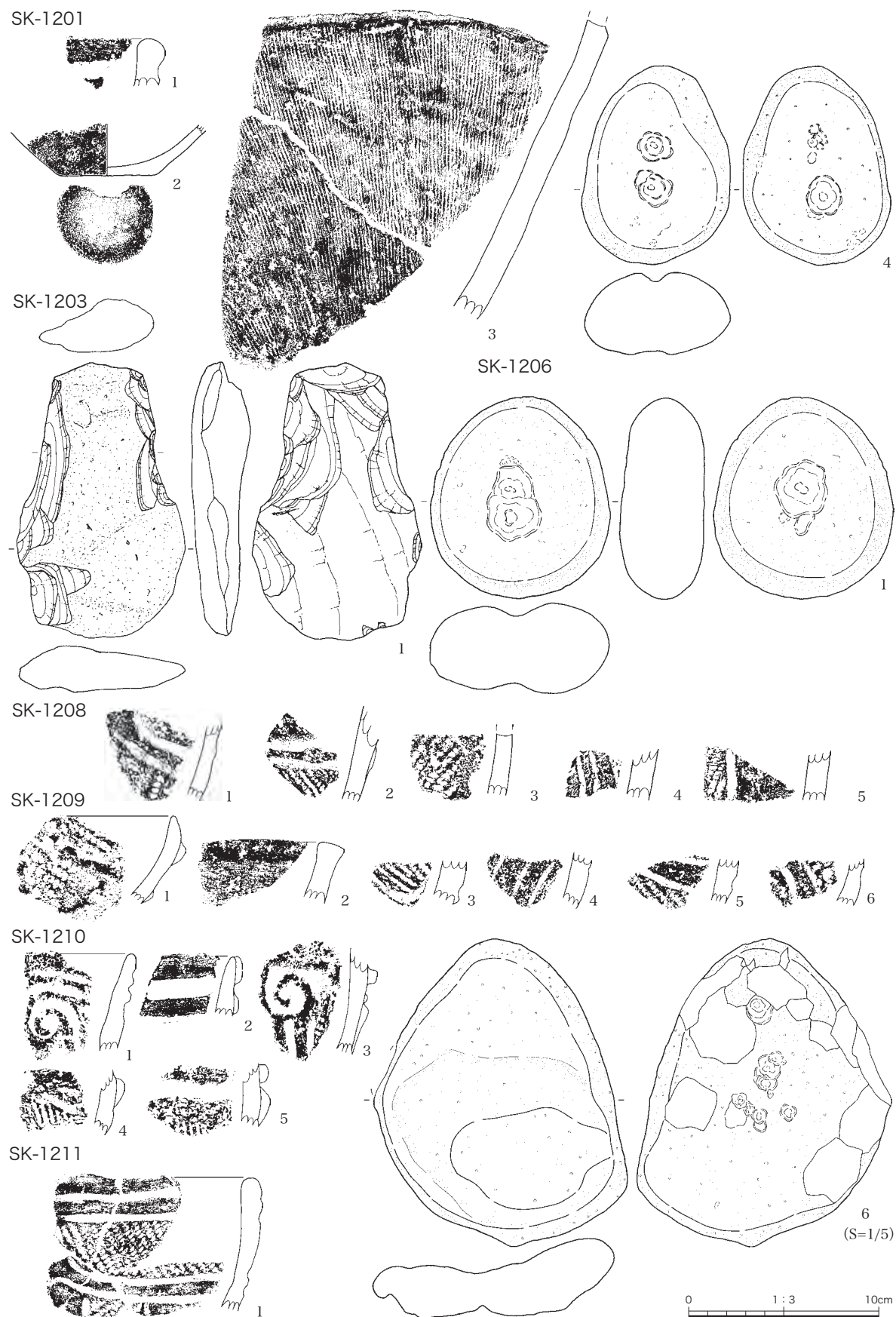
SK-1197



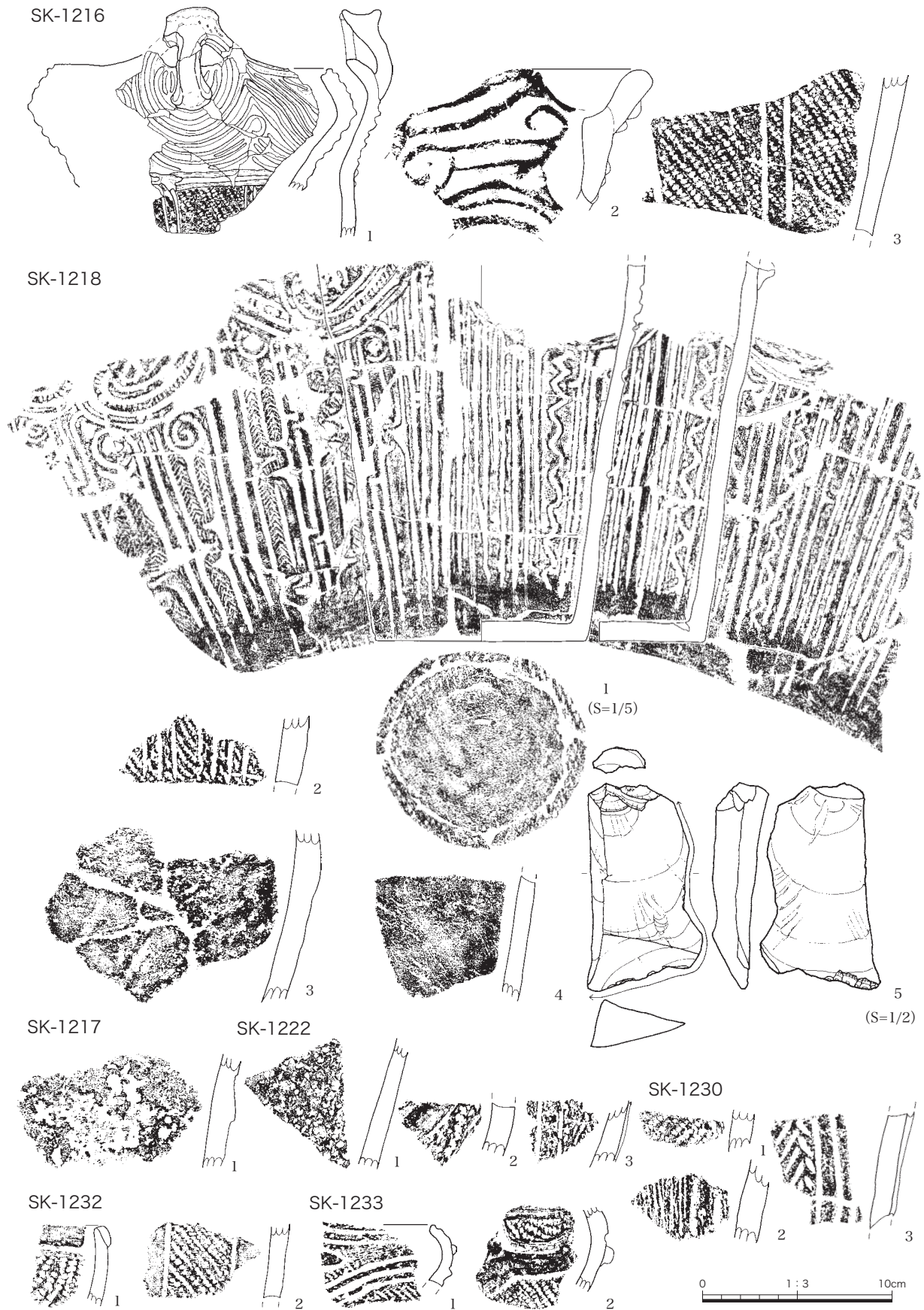
0 1:3 10cm

SK-1187B-6~8 は S=1/2

第36図 SK-1187B (2)・1188・1191・1192・1196・1197 遺物実測図

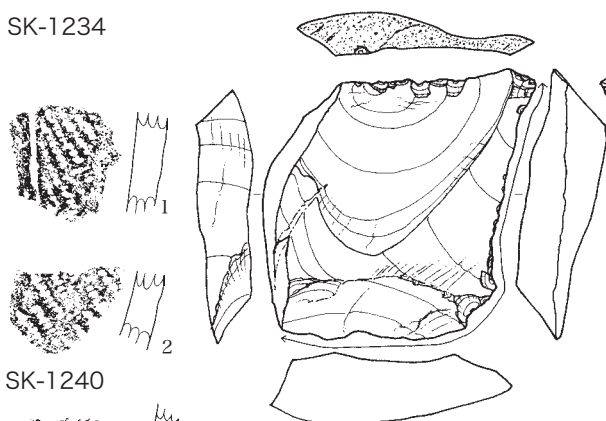


第37図 SK-1201・1203・1206・1208～1211 遺物実測図

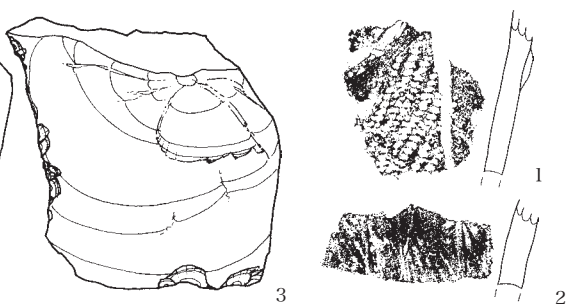


第38図 SK-1216～1218・1222・1230・1232・1233 遺物実測図

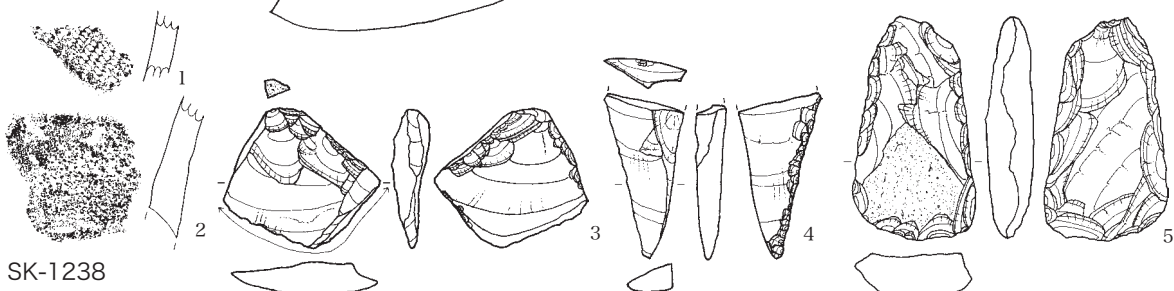
SK-1234



SK-1235



SK-1240



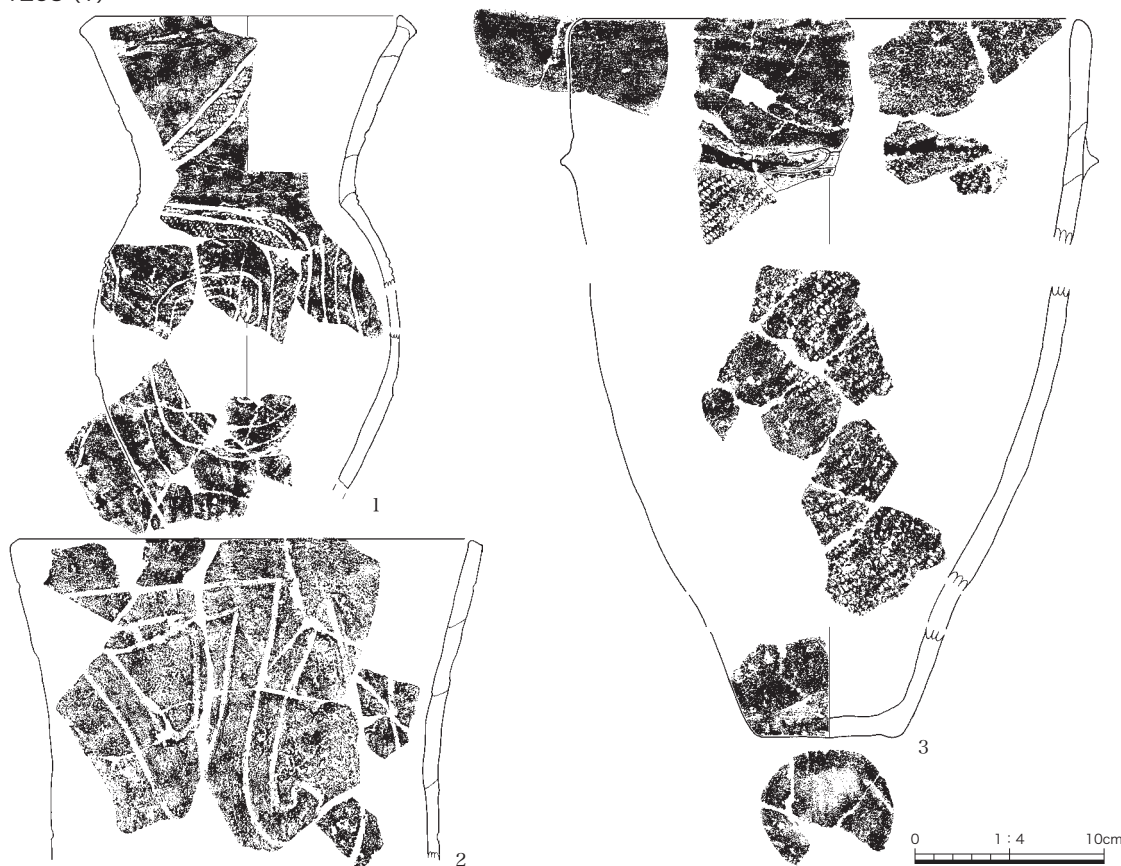
SK-1238



0 1:3 10cm

SK-1234-3・SK-1240-3~5はS=1/2

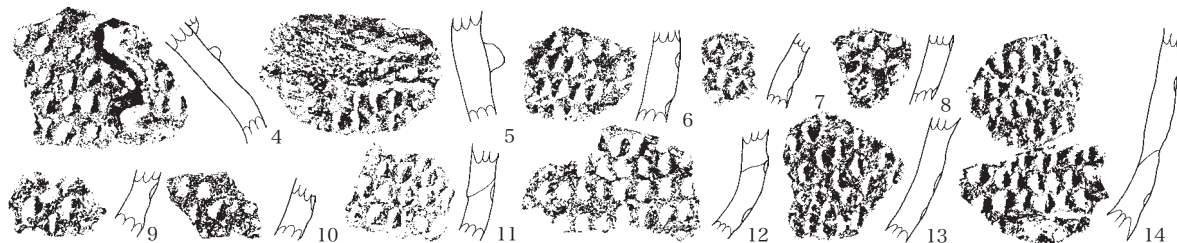
SK-1253 (1)



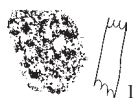
0 1:4 10cm

第39図 SK-1234・1235・1238・1240・1253 (1) 遺物実測図

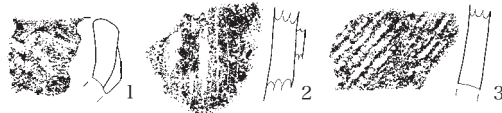
SK-1253 (2)



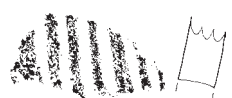
SK-1276



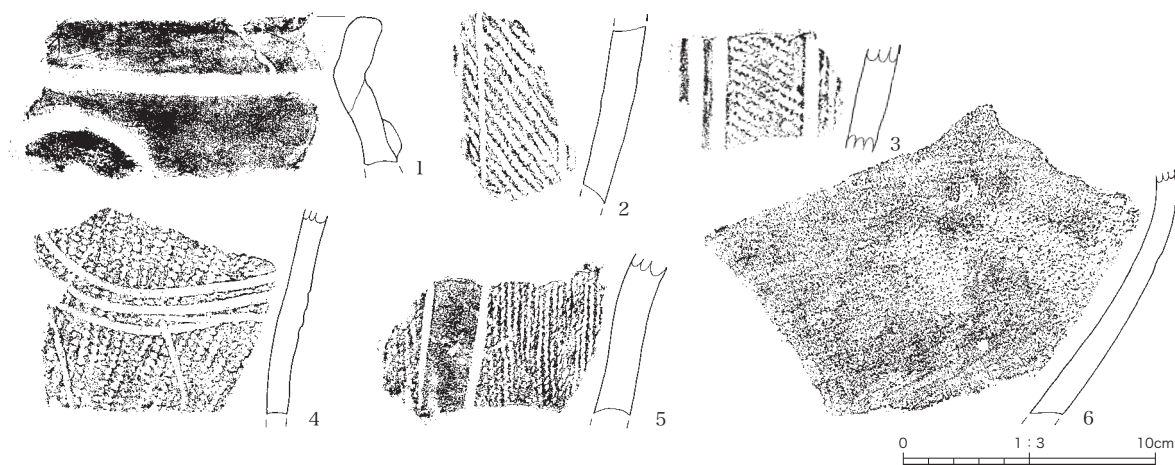
SK-1286



SK-1293



SK-1278



第40図 SK-1253 (2)・1276・1278・1286・1293 遺物実測図

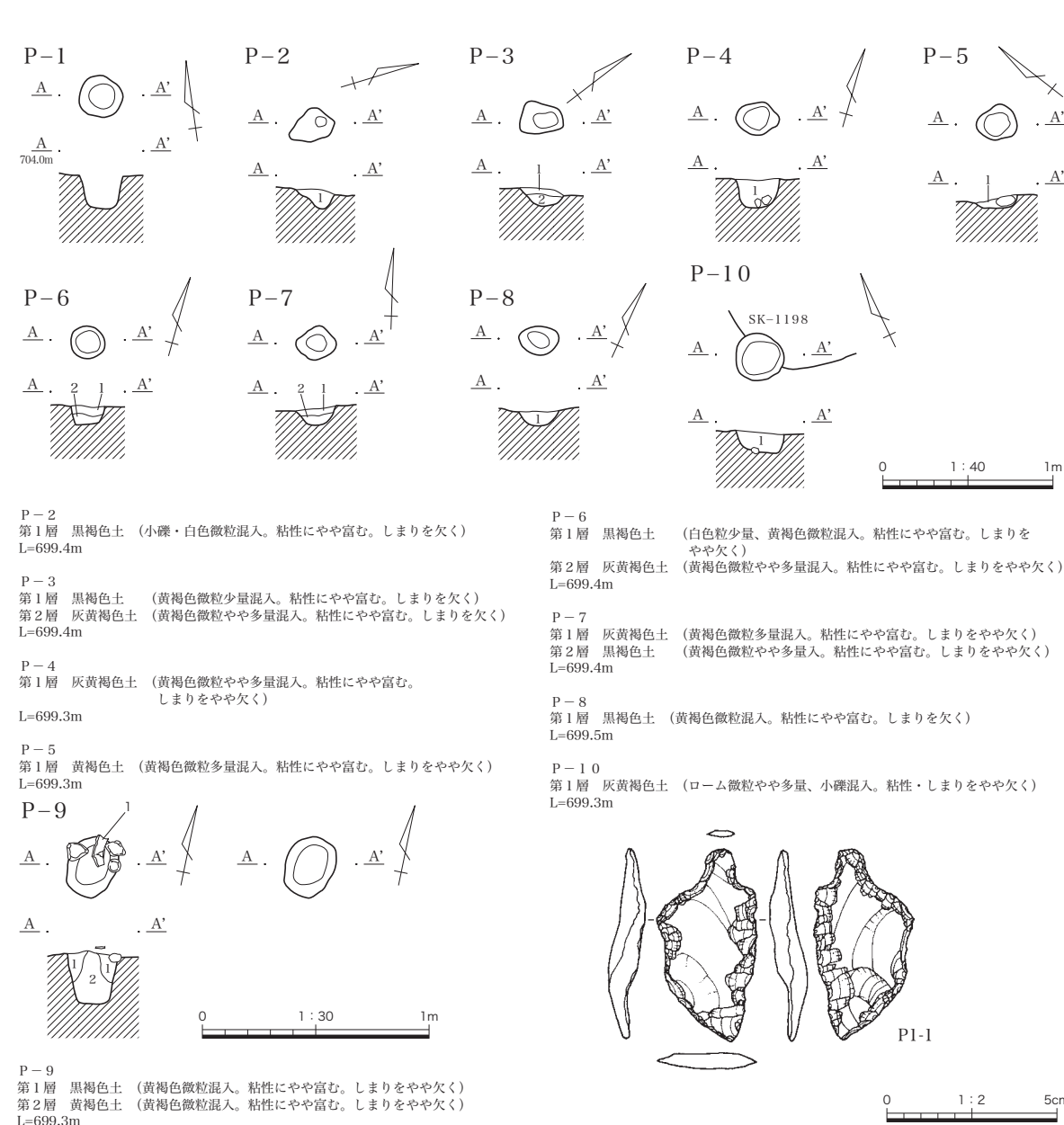
3. 小穴 (第41図、図版六・一八)

土坑以外の小型で直径が概ね30cm以下のピットを取りあげる。今回の調査では10口確認した。これらは、円形ないしは楕円形の柱穴状をなすもので、いずれも第Ⅴ層上面まで下げた段階で確認できたものであるため、深さが10～20cm前後と比較的浅いものが多い。位置的には、A区南側中央部分のB3-3及びB3-8グリッド内でやや纏まって確認されているが、規則的な配置をとるものはみられなかった。

このうち、遺物が出土したものはP-1とP-9の2口である。P-1は覆土中位から第41図に示した珪質頁岩製の縦型石匙が出土している。P-9は穴内の上位から中期後葉の土器片が出土しており、SI-1239の範囲内と想定される部分の床面付近から出土した深鉢形土器(第16図-2)と接合した。

他の遺構と重複関係にあるものは、SK-1198を切って構築しているP-10のみである。また、P-9については、調査段階では住居と別の遺構と捉えていたが、穴内出土土器とSI-1239の床面付近の土器が接合関係にあることから、住居に伴うピットと考えられる。これら小穴の時期については不明な点も多いが、出土遺物や切り合い関係から概ね中期後葉以降のものが多いと思われる。

ここでは、平面図と断面図を掲載し、計測値などについては一覧に示した。なお、竪穴住居跡や土坑などの遺構内に位置する小穴については、それぞれの遺構で掲載したのでここでは除外した。



第41図 小穴 (P-1 ~ P-10) 実測図

第5表 縄文時代小穴一覽

單位：cm

遺構番号	位 置	平面形	口径(長径×短径)	底径(長径×短径)	深さ	備考
P-1	B3-3	円形	26×24	16×15	19	単層。覆土中位から縦型石匙出土。
P-2	B3-13	不整楕円形	28×18	6×6	11	単層。
P-3	B3-13	不整隅丸長方形	26×18	14×9	10	分層可能であるが土質差少ない。
P-4	B3-8	楕円形	24×19	16×14	16	単層。壁は堅固な砂礫層(第Ⅴ層)。
P-5	B3-3・8	不整楕円形	24×19	15×13	6	単層。底面は地山礫で止まる。
P-6	B3-3・8	円形	20×20	14×14	12	自然堆積と思われる。
P-7	B3-8	楕円形	23×20	12×10	10	水平に分層可能、覆土と壁の違いが明瞭。
P-8	B3-18	楕円形	24×18	13×9	8	単層で覆土と壁の違いが明瞭。
P-9	A3-23	楕円形	27×22	19×13	23	SI-1239に伴うものか。中期後葉土器片出土。
P-10	B3-3	円形	29×29	24×19	16	壁・底面とも砂礫層(第Ⅴ層)。SK-1198より新。

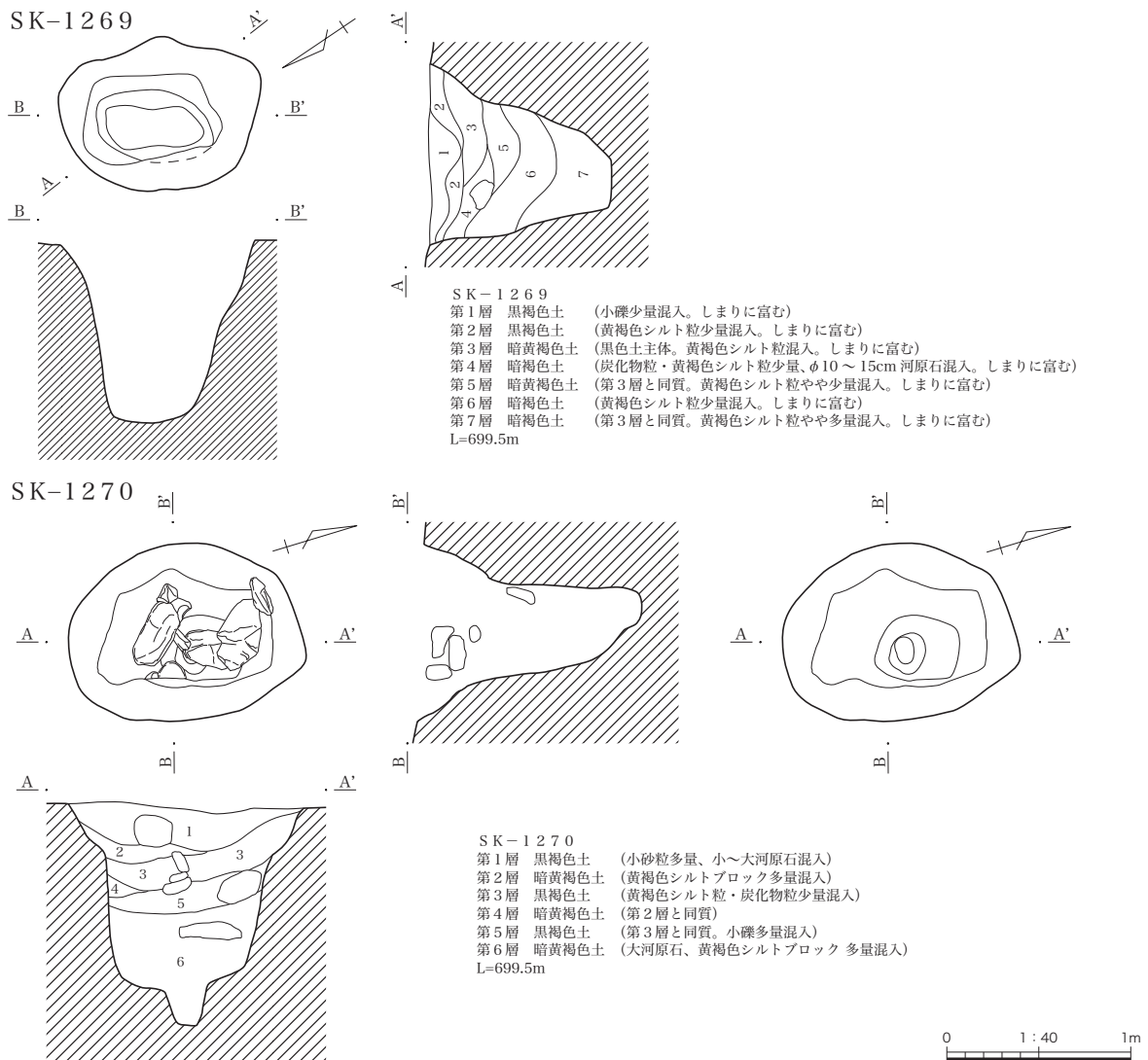
4. 陥し穴（第42・43図、図版六・七）

形状及び覆土の状況などから陥し穴とした遺構は、以下の第42・43図及び第6表に示した4基である。いずれも確認面は第Ⅴ層上面であり、本来の掘り込み面での開口部形状や深さは不明であるが、他の土坑と比較して深さ的におよそ1～1.2mと際だっている。

形状はいずれも開口部が円形に近い楕円形で、断面形は長短両軸とも開口部で大きく開き、中位より下は垂直に掘られた薬研状である。底面は平坦で、開口部の半分ほどの規模の長方形ないしは楕円形状に掘られている。このうち、SK-1269とSK-1285は、底部の縁辺が若干外側に膨らむ特徴があり、また、SK-1270は底部に径20cm、底面からの深さ20cmのピットを1口有する。

覆土は、いずれも自然堆積を示しており、上部が締まりのよい黒褐色土、下部が黄褐色土主体であるのが特徴的である。特にB区の東側に位置するSK-1269とSK-1270は、ほぼ同様な覆土の堆積状況が認められることから同一の面から掘り込まれた可能性が高く、ある程度の同時性を示すものと考えられる。

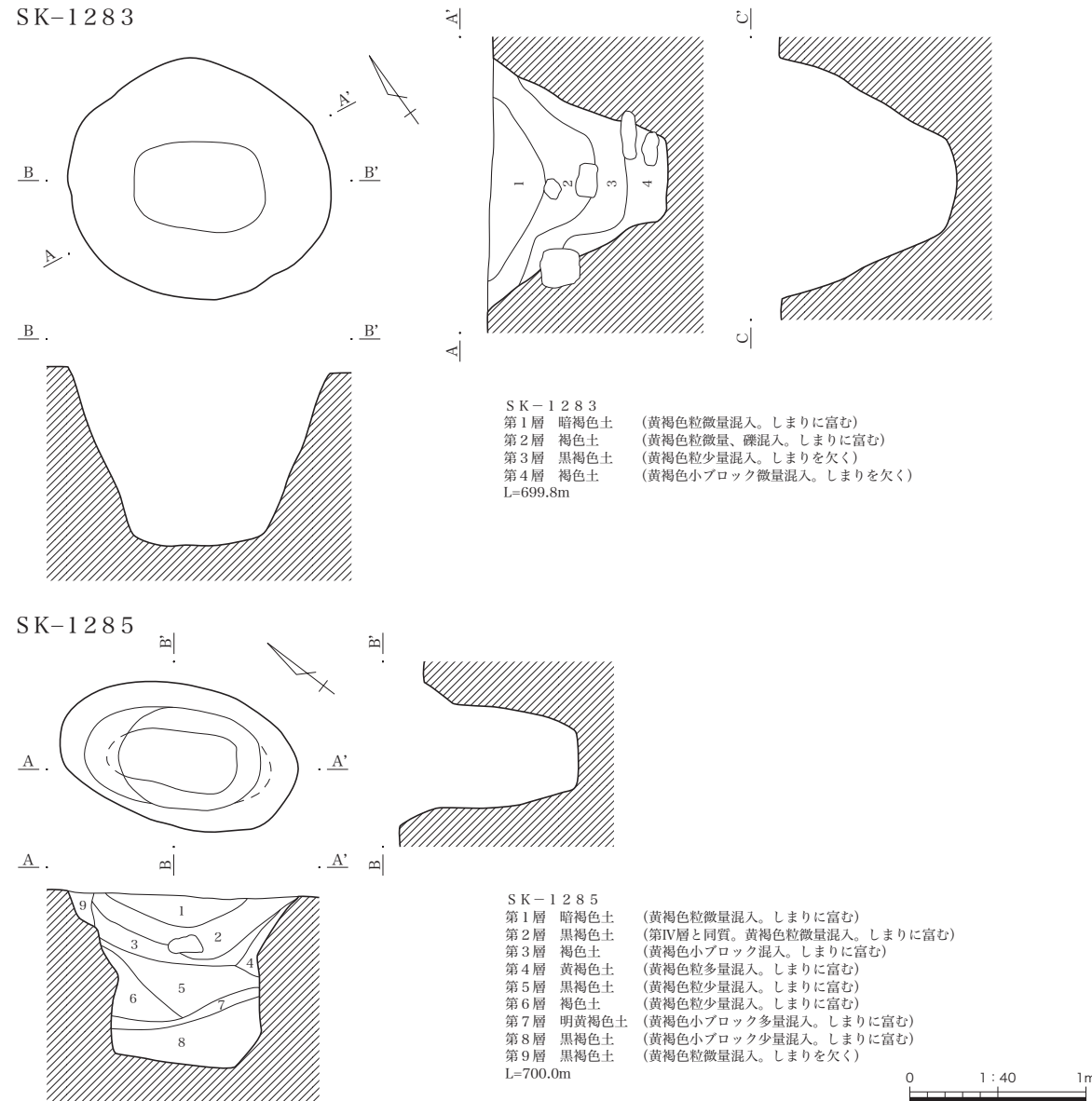
主軸はSK-1269とSK-1270が北西方向、SK-1283とSK-1285は北東方向に振れており、それぞれの間隔



第42図 SK-1269・1270 実測図

第3章 確認した遺構と遺物

は4.5 mで、2基で対をなすように配置されていたものと考えられる。穴内からの出土遺物は皆無で所属時期については不明であるが、覆土中位から上位にかけて大型礫の混入が認められた。これらの礫は、自然堆積によってある程度土坑が埋没した段階で投棄されたものと思われる。



第43図 SK-1283・1285 実測図

第6表 縄文時代陥し穴一覧

単位：cm

遺構番号	位 置	平面形	口径 (長径×短径)	底径 (長径×短径)	深さ	備考
SK-1269	A4-19・24	不整楕円形	111×84	52×24	98	断面葉研状。底部縁辺はやや外に膨らむ。
SK-1270	B4-4	不整楕円形	130×96	90×50	117	断面葉研状。底面にピット1口。
SK-1283	C3-18・23	楕円形	151×138	74×52	110	断面葉研状。
SK-1285	D3-4	楕円形	136×78	74×34	96	断面葉研状。底部縁辺はやや外に膨らむ。

5. 土器埋設遺構

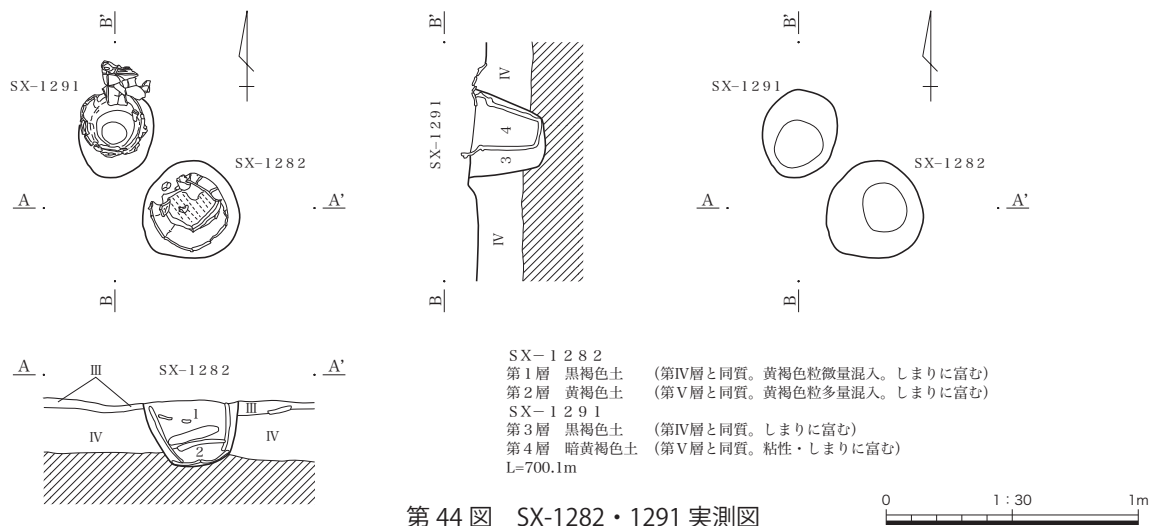
ここでは、屋外の土器埋設遺構について取り上げる。今回の調査では、口縁部を上にして正位の状態では埋設したもの2基を確認した。これらの土器埋設遺構は、C3-18 グリッド内で互いに近接した位置にある。包含層掘り下げ時に土器の出土によって確認したものであるため、掘方上面の形状は不明である。

SX-1282 (第44・45図、図版七・一一)

位置 C3-18 グリッド内で確認した。周辺にはSX-1291が南西約10cmと近接した位置にある。表土及び第Ⅱ層除去後に第Ⅲ層上面で確認した。**規模・形状** 土器より一回り大きい直径40cmほどの円形の堀方に、やや西に傾いているが1の深鉢形土器を正位に埋置している。底面は第Ⅴ層上面に達しており、深さは確認面から27cmほどであるが、土器の大きさからみて本来の掘り込み面は更に上方にあったものと考えられる。確認段階では、土器の口縁部の殆どが失われており、底部は土圧により潰れていた。土器内は第Ⅳ層と同質の黒褐色土が締まった状態で詰まっていた。また、底部付近には2の土器片と3の扁平な河原石が落ち込んだ状態で出土した。**出土遺物** 1は胴上部に最大径を有する甕形の土器である。口縁上部には渦巻文で加飾された突起が2単位遺存する。胴部は地文に2段RLの縄文を縦方向に施文した後、2条と3条の縦位平行沈線を交互に垂下させている。2条の沈線間には連続刺突が施される。2は体部下半から底部の破片で、地文に2段RLの縄文を縦方向に施文する。胎土には砂粒と雲母片を多く含み、器面は内外面とも磨かれ光沢がある。

SX-1291 (第44・45図、図版七・一一)

位置 C3-18 グリッド内に位置し、第Ⅲ層除去後に第Ⅳ層上面で確認した。**規模・形状** 土器よりやや大きい35×30cmの楕円形の堀方に、1の深鉢形土器を北側の壁に接するよう正位に埋置している。底面は第Ⅴ層上面で、深さは確認面から30cmほどである。確認段階では、土器の口縁部は削平によってすでに失われていた。土器内は第Ⅳ層と同質の黒褐色土が締まった状態で詰まっており、掘方と土器の隙間には、第Ⅴ層と同質の暗黄褐色土を充填している。**出土遺物** 1は平縁の深鉢形土器である。口頸部には横方向のS字状及び縦位の隆帯を貼付し、空白部には沈線で隆帯と同方向の渦巻や弧状のモチーフなどを充填する。胴部の地文は1段Lの縄文による縦方向の間隔施文で、所々に結節縄文がみられる。



第7表 縄文時代屋外土器埋設遺構一覧

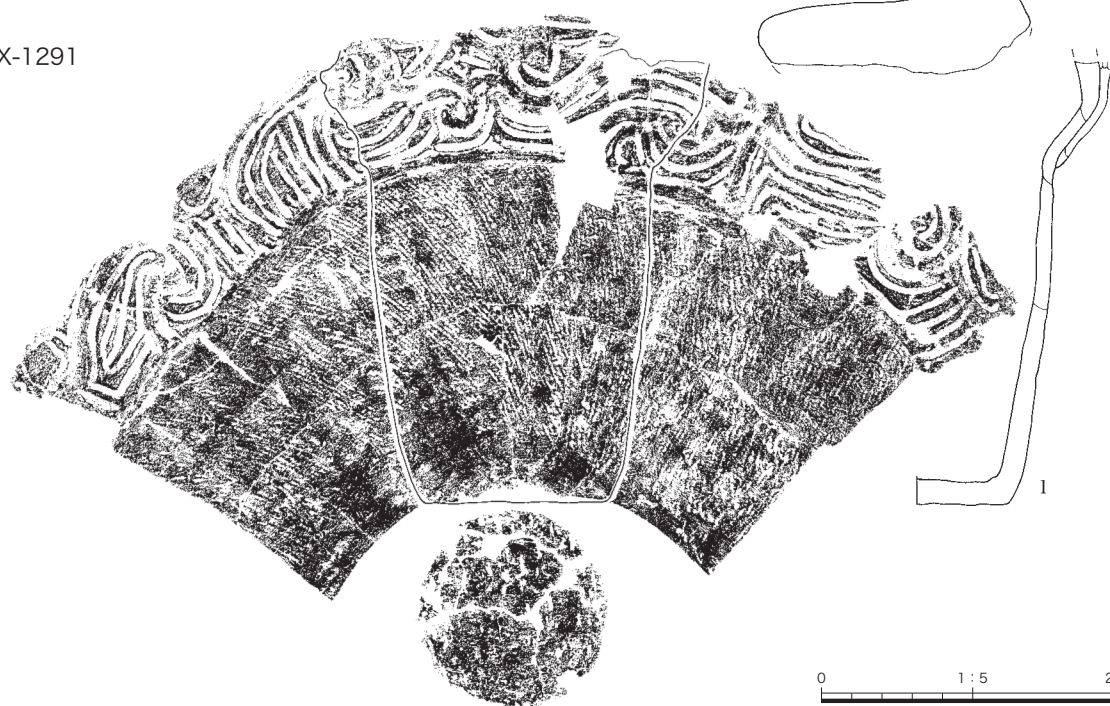
単位: cm

遺構番号	位置	平面形	口径 (長軸 × 短軸)	底径 (長軸 × 短軸)	深さ	備考
SX-1282	C3-18	円形	40×40	20×20	27	深鉢形土器内に浅鉢片・平石が落ち込む。
SX-1291	C3-18	楕円形	35×30	20×18	30	深鉢形土器を正位の埋設する。

SX-1282



SX-1291



第45図 SX-1282・1291 遺物実測図

0 1 : 5 20cm

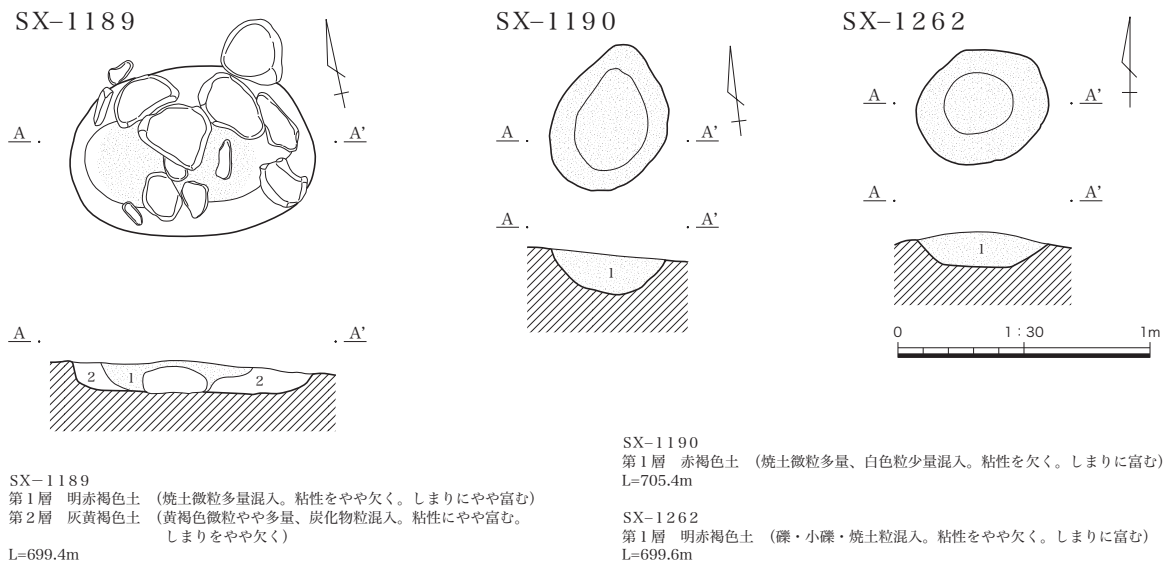
6. 焼土遺構（第46・47図）

炉跡は住居に伴うものと屋外のものがある。本遺跡では、住居の掘り込み面が包含層内に存在するため、炉を確認した段階で住居の存在が明らかになったものが殆どである。このため、包含層の掘り下げにより床面から上方に係わる壁などは既に失われた状態であるが、確実に住居に伴い、また、住居の形状や規模がある程度推定できる複式炉や石囲炉については、竪穴住居跡のところに掲載した。

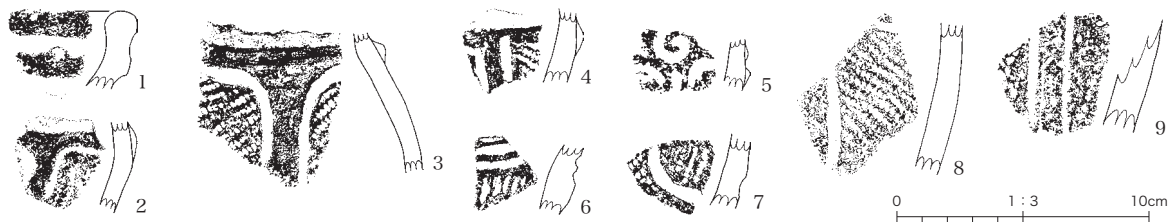
ここでは、単独で確認した屋外の焼土遺構を取りあげる。これらは第IV層内で確認したもので住居に伴う可能性もあるが、本遺跡の住居は柱穴や壁溝など床面における内部施設も不明瞭であり、周囲の状況から住居の存在を確認することはできなかった。

特徴としてSX-1189は、100×68 cmの掘方内に80×35 cmの範囲で厚さ10 cmほどの焼土がみられる。周囲は黄褐色土混じりで、底面は特に硬化した状況はみられず、礫より上位に焼土が散布する。

SX-1190とSX-1262は、径50～60 cmの円形ないしは楕円形の焼土で、14 cmほどの厚さがある。断ち割りの結果、焼土の密な堆積範囲がレンズ状に認められたのみで、特に硬化した部分はみられなかった。遺物はSX-1262から中期後葉を主体とする数点の土器片が出土している。



第46図 SX-1189・1190・1262 実測図



第47図 SX-1262 遺物実測図

第8表 縄文時代焼土遺構一覧

単位: cm

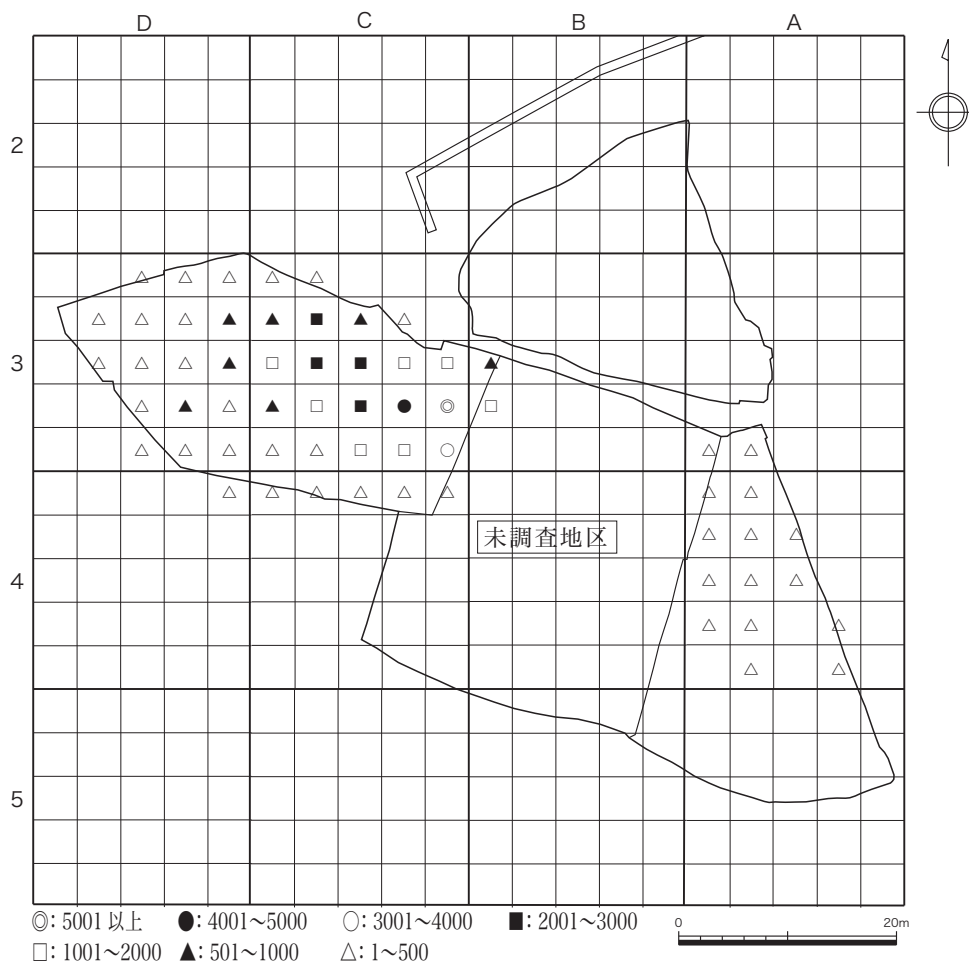
遺構番号	位置	平面形	口径（長軸×短軸）	底径（長軸×短軸）	深さ	備考
SX-1189	A3-24	円形か	100×68	85×36	10	掘方内で礫の上位に焼土散布。
SX-1190	B3-12	不整楕円形	60×45	40×29	15	SK-1230より新しい。
SX-1262	B3-3	楕円形	52×46	27×25	9	焼土内から土器片数点出土。

7. 包含層出土遺物

既に記したように本遺跡では、基本土層の第Ⅲ層・第Ⅳ層の2層が縄文時代の遺物包含層に相当する。この遺物包含層は、第Ⅱ層（Hr-Fp）に覆われ後世の攪乱も殆どなく、基本的には縄文時代より新しい時期の遺物は包含されていない。遺物包含層の調査については、第Ⅱ層上面の遺構精査後、4 m四方の小グリッドを基本に土層観察のためのベルトを残して掘り下げ、層位ごとに遺物を取り上げた。本遺跡の遺構確認面は、大半が第Ⅴ層上であるが、縄文時代の生活面は第Ⅴ層より上方の包含層内に存在する。このため、ここで扱う遺物のなかには、調査の段階で遺構に伴うものとして把握できなかったものも含まれていた可能性がある。

第48図はグリッドごとの土器片総数の分布を示したものである。包含層は、調査以前の要壁工事によってA区の大部分に削平を受けているが、B区北半の中央部及び東側付近は遺跡の載る段丘基底面の凹部に相当し、比較的層が厚く土器の出土量も多い地点である。特にB区中央部付近のC3-4グリッド周辺は、南の山際から入る窪地状の地形をなしており、土器はこの窪地の北側に集中地点が認められた。この地点は遺構の密度が極めて低い部分であり、土器の出土状態などからみて北側に占地する遺構群との関連性も考えられる。

包含層から出土した縄文時代の遺物には、縄文土器と石器がある。縄文土器の時期に関しては、断続的に早期中葉から後期後葉に及ぶ。各層の状況を見ると、第Ⅲ層では中期中葉～後期前葉、第Ⅳ層では早期中葉～後期後葉の土器が包含されているが、時期ごとに出土層位や高低を違えるといった状況は認められなかった。石器は石鏃・石槍・石匙・石錐・搔削器類・石錘・打製石斧・磨製石斧・磨石類・石皿などがあり、磨石類が組成の大半を占める。出土位置については、土器と同様にC3-4グリッド周辺に集中地点が認められた。



第48図 包含層出土土器分布図

(1) 縄文土器

今回の調査において包含層からは、約 44,000 点、重量にして約 770 kg の縄文土器片が出土した。このうち、土器の特徴から時期別の分類が可能なものは約 5,400 点である。残りの土器片については、縄文のみの破片や摩耗しているものなどであるため、出土点数の確認や計量のみ扱いとした。層位別の出土数をみると、第Ⅲ層が約 10,600 点（うち分類対象 1,600 点）、第Ⅳ層が約 32,800 点（うち分類対象 3,800 点）、そのほか表採品などが約 600 点ある。今回の報告では、分類対象としたものから 1,119 点を掲載遺物として選定した。

縄文土器のなかでは、圧倒的に中期の土器群が主体を占め、中期前半が約 26%、中期後半が約 73% で、そのほかの時期のものは 1% 未満と少量認められるのみである。以下には、出土した土器を層位別・時期別に分類してあるが、中期の土器群を第Ⅲ層では第 1 群から第 15 群の 15 分類に、第Ⅳ層では第 3 群から第 19 群の 17 分類に大別した。ここでは、この分類に従い層位ごとに土器それぞれの特徴を説明してゆく。なお、本遺跡出土土器の内外面には、調理の際に付着したとみられる、お焦げないしは煤などの炭化物が多数確認できた。特に中型および小型の深鉢形土器に多く見られる点が特徴の一つとして挙げられる。

仲内遺跡 2 包含層出土土器分類

・ 第Ⅲ層

- 第 1 群 阿玉台式土器
- 第 2 群 大木 7 b 式土器
- 第 3 群 大木 7 b 式末～大木 8 a 式期の土器
- 第 4 群 大木 8 a ～ 8 b 式期の土器
- 第 5 群 火炎系土器
- 第 6 群 東関東系の中期中葉の土器
- 第 7 群 中期中葉のその他の土器
- 第 8 群 大木 8 b 式土器
- 第 9 群 加曽利 E I 式土器
- 第 10 群 大木 9 ～ 10 式土器
- 第 11 群 加曽利 E II ～ III 式土器
- 第 12 群 中期後半の壺形を呈する土器
- 第 13 群 連弧文土器
- 第 14 群 曾利式系土器
- 第 15 群 縦位の条線を施す土器
- 第 16 群 称名寺式土器
- 第 17 群 堀之内 I 式土器
- 第 18 群 後期初頭～前葉の条線を施す土器

・ 第Ⅳ層

- 第 1 群 早期中葉の土器
- 第 2 群 黒浜式土器
- 第 3 群 阿玉台式土器
- 第 4 群 七郎内 II 群土器の系譜を引く土器
- 第 5 群 大木 7 b 式～大木 8 a 式期の土器
- 第 6 群 大木 8 a ～ 8 b 式期の土器
- 第 7 群 大木 8 b 式土器
- 第 8 群 火炎系土器もしくは浄法寺類型の土器
- 第 9 群 火焰型、王冠型以外の火炎系土器
- 第 10 群 中期中葉の浅鉢形土器
- 第 11 群 加曽利 E I 式土器
- 第 12 群 加曽利 E II ～ III 式土器
- 第 13 群 加曽利 E 式に伴う非装飾的な土器
- 第 14 群 連弧文土器
- 第 15 群 曾利式系土器
- 第 16 群 梶山類型の土器
- 第 17 群 微隆起線でモチーフを描く土器
- 第 18 群 壺形等特殊な器形の土器
- 第 19 群 大木 9 ・ 10 式土器
- 第 20 群 三十稲葉式土器
- 第 21 群 称名寺式土器
- 第 22 群 綱取式土器
- 第 23 群 堀之内式土器
- 第 24 群 後期後半の土器

第Ⅲ層出土の土器（第49～63図、図版一二）

第Ⅲ層は調査区の全域に堆積する暗褐色土壌で、層厚は調査区の北側と南側が最も厚く20 cm前後であるが、窪地状の地形をなすB区北側の中央部付近が10 cm前後と最も薄い。遺物は、層内の中位から下位に包含されており、多くが破片状態で復元可能なものは非常に少ない。

第1群 阿玉台式土器（第49図1～5）

1は口縁部に隆帯で楕円形区画を配す平口縁の土器である。断面蒲鉾状の太い隆帯で楕円形区画文を施し、隆帯上にはキザミを加え、区画の接点は高く尖出する。区画の内側は隆帯の脇に沈線を沿わせる。2は波状口縁の土器で、口縁を巡る隆帯によって区画文を配す。隆帯上には2段RLの横位施文、以下の区画内は斜位の平行する有節沈線で埋められる。3・4は爪形文が施されるものである。3は口端が角頭状をなす平口縁の土器である。口縁部直下を無文とし、以下には連続爪形文が配される。5はヒダ状圧痕がみられる体部破片である。これらの土器は、胎土に白色粒・微砂粒・雲母片などを含む。

第2群 大木7b式土器（第49図6～8）

6～8は阿玉台式併行期の土器で、表面の風化が著しく文様などは不明なものが多い。6は隆線で区画文を描くもので、口縁部には小さな橋状把手を配している。7・8は表面が剥離しているが、口縁の頂部に孔を穿つ円筒状の突起が付されている。

第3群 大木7b式末～大木8a式期の土器

第1類 内彎気味の口頸部下端を横位の沈線で画し、口頸部、体部に隆帯や沈線で曲線文や屈曲するモチーフを配す土器

第1種 口縁に付く突起・把手（第49図9～13）

9～12は中空の把手、13は中実の突起が付くものである。9・10は口縁部に2条の隆帯を巡らせ、これを橋状把手で繋いでいる。10は内彎する口縁部破片で、橋状把手と大型の把手が配される。口縁部を区画する太い隆帯上には蛇行隆帯を巡らせており、橋状把手上には端部に渦巻文を伴う大きな蛇行隆帯を垂下させる。区画内には沈線で曲線的なモチーフを描いている。11・12は背を沈線で割ったS字や渦巻文を基調とした隆帯により、貫通孔や橋状把手を取り込んだモチーフの把手が付される。

第2種 隆帯で主なモチーフを描く土器（第49図14～28）

14～28は沈線を沿わせない貼付隆帯でモチーフを描く土器である。14～22は細い貼付隆帯でモチーフを描いている。14と18は同一個体で、口縁に沿って横位および蛇行隆帯を巡らせる。15は隆帯上にキザミが加えられており、16・20には円形の刺突が施される。23・24は太い貼付隆帯を用いたもので、23は口縁に横位隆帯とその直下に蛇行隆帯を貼付する。24は背に凹線を伴う太い隆帯を口縁に巡らせ、以下には細い貼付隆帯でモチーフを描く。25～28は断面三角形形状をなす2条の細い隆帯を垂下させた体部破片である。

第3種 平行沈線で主なモチーフを描く土器（第49図29～37、第50図38～59）

29～32は平行する2～3条の単沈線で、33～37は半截竹管による平行沈線でモチーフを描くものである。34・35は同一個体と思われる体部破片で、半截竹管による2条の平行沈線で蛇行線やクランク状などのモチーフを描いている。38～46は半截竹管の重複施文による3～5条の平行沈線で、弧線・蛇行線・渦巻文などのモチーフを描くものである。38は口縁部に隆帯と沈線で加飾された突起が遺存する深鉢形土器である。口縁部は上段に2条、下段に3条の沈線で区画され、内部に横位の蛇行沈線を施す。頸部には4条の横位沈線を巡らしている。地文には1段Rの撚糸文が施される。47～52の体部破片には、半截竹管の内側を使用し

た重複施文による3～4条の平行沈線を垂下させている。53～59は隆帯と沈線でモチーフを表す口頸部破片で、54・56・58は口縁直下に隆帯と沈線で区画を形成する。

第4種 単沈線でモチーフを描く土器（第50図60～71、第51図72～83）

60～71は大きな渦巻文を描く土器である。63・64は同一個体と思われる頸部から胴部の破片で、無文の頸部括れ部に3条の沈線を巡らし、胴部には大柄な渦巻文と縦位や弧状、蛇行沈線などで文様を表す。72～76は小さな渦巻文や刺棘文を配す土器である。74・75・76は同一個体の胴部破片で、沈線を縦横に交差させ、交点の中央に渦巻文を配している。77～83は曲線的なモチーフを配す土器である。77・78は同一個体で口縁部に横位の沈線を施す。79～83は太めの沈線でモチーフを描いている。

第5種 口頸部と体部を画す、頸部括れ部の破片（第51図84～97）

84～97は横位の平行沈線により、口頸部と胴部を区画するものである。84～90は単沈線、91～95は半截竹管による平行沈線を施す。96・97は横位の沈線と波状（蛇行）沈線を巡らしている。

第2類 細い隆帯で渦巻文を配す土器（第51図98～103）

98は口縁直下に細い隆帯を巡らし、そこから同様な隆帯で縦位に繋がる渦巻文を展開させる。99～103は細い隆帯とそれに沿う沈線で文様を描出する。

第3類 その他の文様がみられる土器（第51図104・105）

104は口縁部に横位の細い隆帯を巡らし、以下には同様の隆帯を籠目状に貼付する。105は向かい合う縦位の沈線によるラジエータ状のモチーフがみられる。

第4類 非装飾的な土器（第52図106～125）

地文に縄文のみが施文されるものなどを中心に、非装飾的な土器としてまとめた。106～110は口縁部に沿って隆帯を貼付し、この隆帯と口端部の間に沈線を施す。111～114は口縁直下に沈線を巡らす土器で、114は口縁部直下を無文とし、以下には沈線の沿う隆帯を巡らす。115・116は複合口縁の土器で、115は外面に、116は端部を包むように粘土帯を貼り付けて口縁部を作り出している。117～123は口縁から縄文を施文する土器である。117・118は無文の口縁が短く外反する器形である。123は口縁が小波状をなすもので、地文に2段RLの縄を口縁部には横方向に、体部には縦方向に施文する。外面には煤が付着する。124・125は口縁から撚糸文を施文する土器で、地文には太い1段Rと細い1段Lの2種類を縦方向に施文する。

第4群 大木8a～8b式期の土器（第52図126～132）

126は口縁直下に2段の刺突列、127は原体の圧痕を巡らせる。128～130は綾杉状沈線を配す体部破片、131・132は縦位の結節回転文が施される。

第5群 火炎系土器（第53図133～168、第54図169・170）

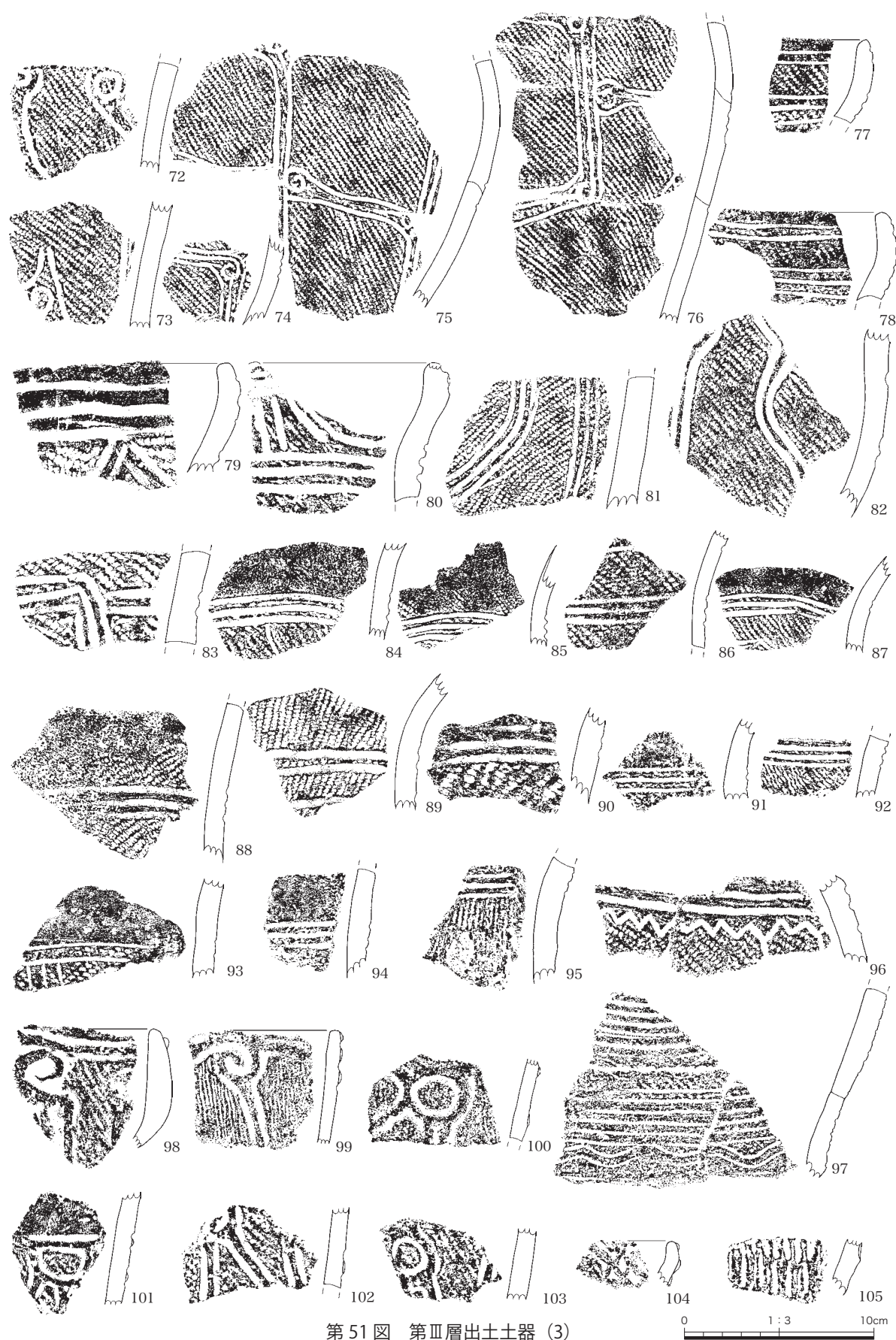
133は中空把手の一部で、上部及び表裏左右に孔を有していたものと思われる。134～143は曲隆線文が配された口頸部破片である。基隆帯でS字状文や渦巻文、弧状文などの単位文を配し、空白部に沈線を充填するものや、半截竹管工具による平行沈線で文様を表現するものである。134は蕨手状の隆帯で加飾された突起が付く口縁部破片で、空白部には端部に蕨手状のモチーフが付く縦位及び横位の沈線を充填する。135は弧状の隆帯を貼付し、隆帯上と内側に同モチーフの沈線を施す。136・139の口縁直下は半截竹管による平行沈線、137は隆帯でモチーフを描く。141はキザミを加えた隆帯で単位文を施す。142・143には端部に小突起が付くS字ないしは渦巻状の隆帯がみられる。144・145は同一個体と思われる頸部破片で、半截竹管工具による単方向の密な曲隆線文が配される。146～155は縦位の密な平行沈線群が垂下する体部破片で、沈線間に半截竹管による縦位の連続刺突を施すものや沈線が蕨手状をなすもの、沈線間の空白部に複合鋸歯文



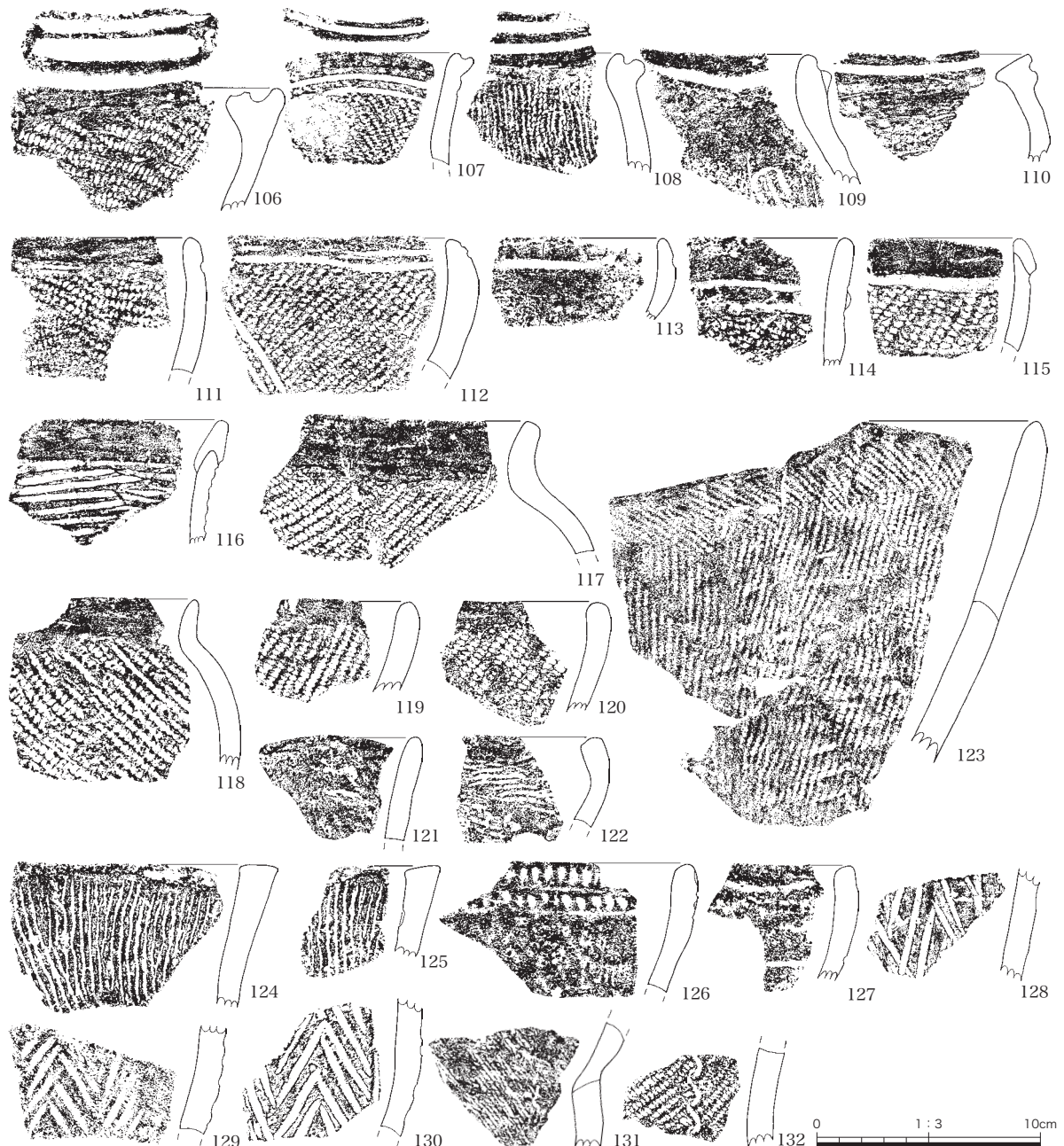
第49図 第Ⅲ層出土土器(1)



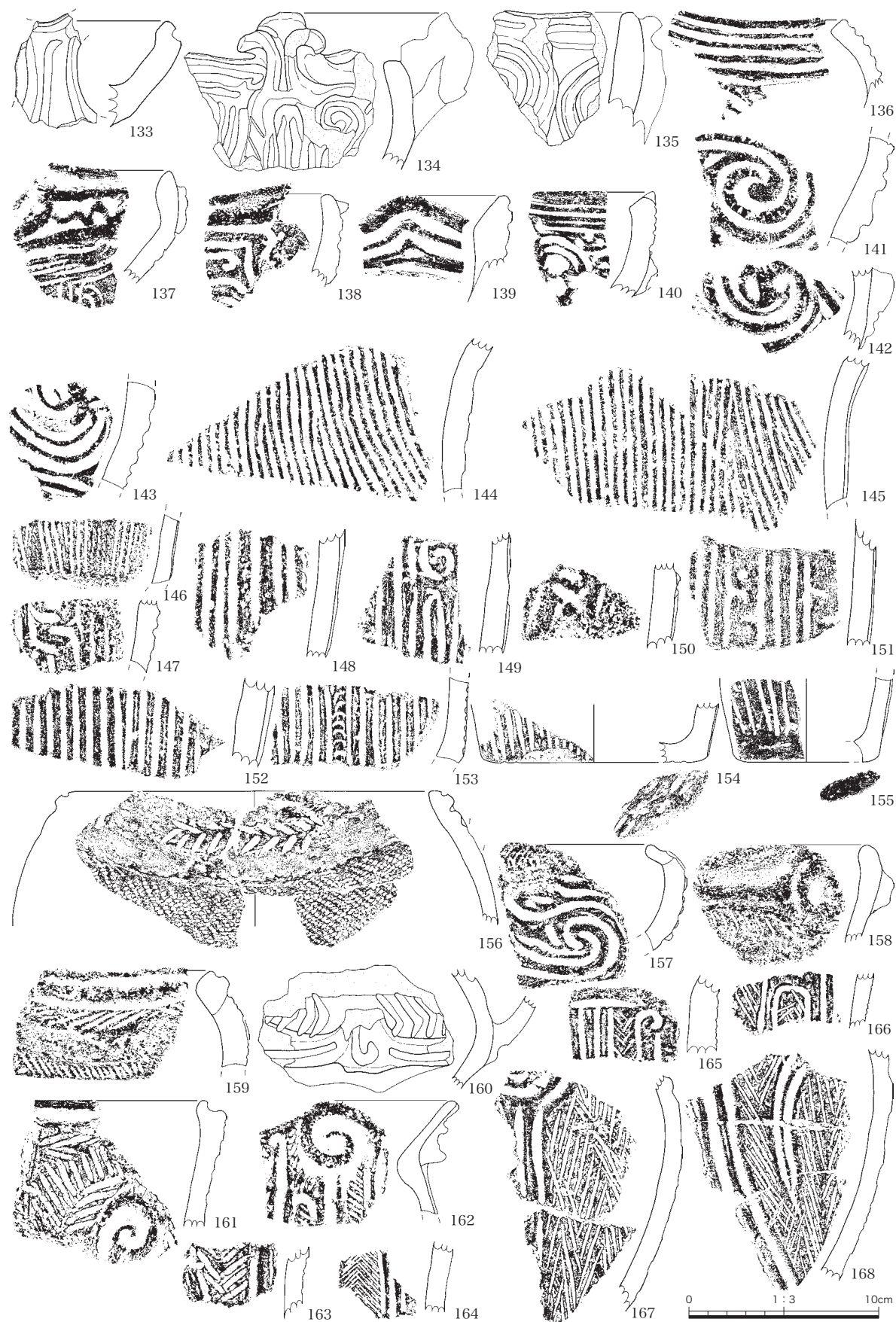
第50図 第Ⅲ層出土土器 (2)



を描出するものがある。156～160は横位の矢羽根状沈線がみられる破片で、口頸部文様帯の地文として施すものが多い。156は胴部上位に最大径を有する甕形の土器で、口縁部には剥離しているが隆帯によって区画がなされていたものと思われる。区画内には、横位の矢羽根状文は太い沈線で描かれている。157～159は細い沈線で描くもので、157は口縁直下の狭い施文域に施している。160は口縁部に背を沈線で割った隆帯を巡らせ区画を作り、隆帯間を橋状把手で繋いだものと思われる。区画内には太めの矢羽根状沈線を施す。161～168は文様間の空白部に縦位の綾杉状沈線がみられるもので、沈線は細く先端の細い工具で密に施すものが多い。169・170は接合しないが同一個体の頸部括れ部から胴部までの破片を図上復元した。また、前記の10・34・35も同一個体と思われる。頸部括れ部には2条の横位隆帯を配し、長楕円形状の区画を形成する。区画の交点は高く突出する。胴部は縦位の隆帯で区画され、内部上半部に隆帯で渦巻文を配している。この隆帯に沿って沈線を沿わせ、空白部には縦位線や蛇行線、曲線的なモチーフを施している。



第52図 第三層出土土器 (4)



第53図 第Ⅲ層出土土器 (5)

第6群 東関東系の中期中葉の土器

第1類 中峠式土器 (第54図 171～176)

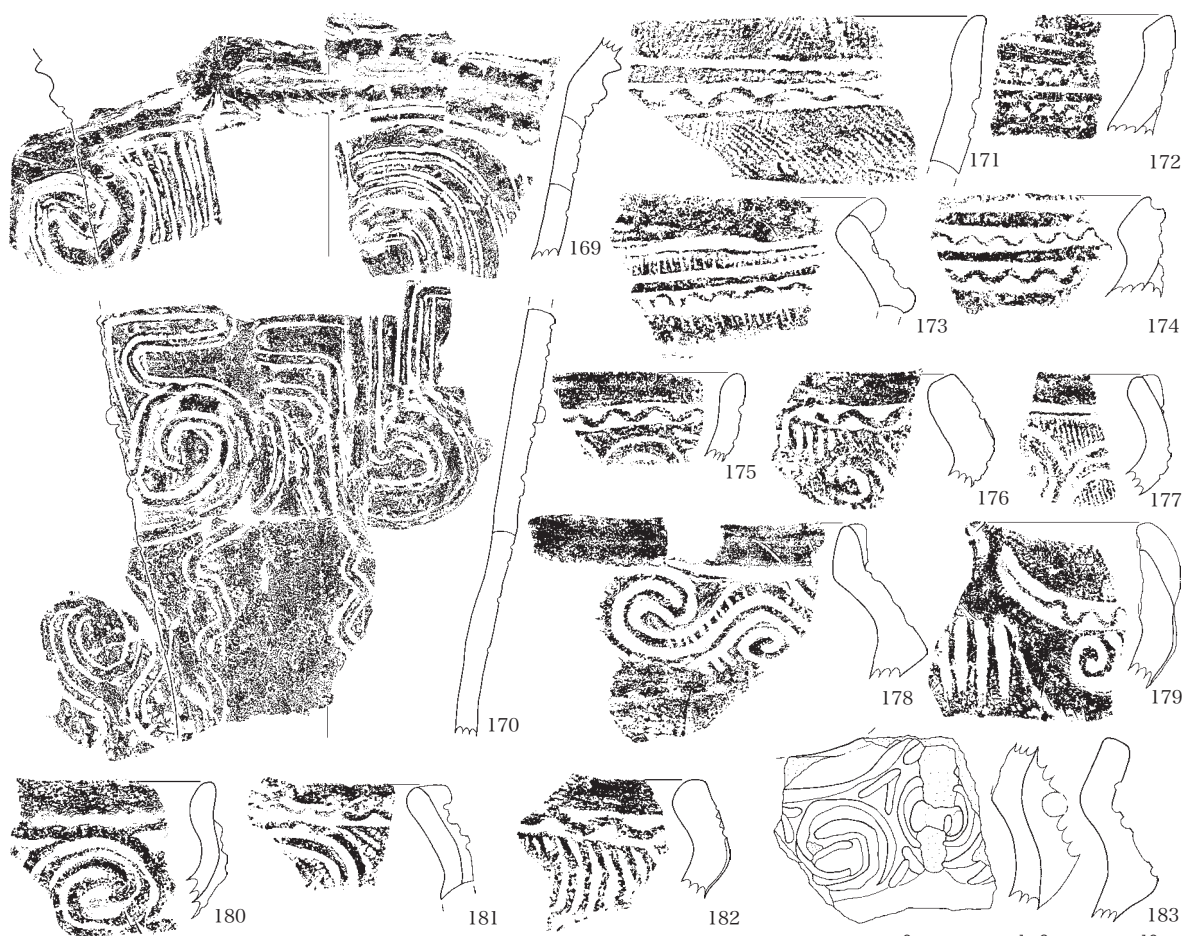
171～176は口縁部の区画内に交互刺突文が巡るものである。171は口縁に沿って交互刺突と1条の沈線が巡るもので、内面には多量の炭化物が付着する。173は口縁部が短く外に折れる器形で、口端に面を有する。口縁直下は無文で、屈曲部にキザミを伴う隆帯を巡らせ、その内部に縦位の連続したキザミと交互刺突文を巡らす。172・174は交互刺突文を多段に施すものである。

第2類 東関東的な加曽利EⅠ式土器 (第54図 176～183)

口縁部の文様施文域を中心に半肉彫り状の沈線により、縦位線や渦巻文などの文様が描かれるものである。177・178は口縁に沿って1条の沈線を巡らせ、以下、177は3条の沈線で半円または弧状のモチーフを、178はキザミを伴う横S字状のモチーフを描く。179は把手もしくは突起から延びる隆帯に沈線を沿わせ、内部に交互刺突文を施す。180は隆帯の沿う沈線でモチーフを描出する。181は口縁部に交互刺突文を巡らせ、以下には縄文地文に沈線の沿う2条の隆帯でモチーフを描く。176と182は同一個体で、口縁部を巡る交互刺突文以下に沈線で渦巻モチーフを施し、空白部を縦位および弧状の沈線で充填する。183は緩やかな波状をなす口縁部破片で、波頂部下の区画帯の交点部分を欠損する。この接点部分は、突出して貫通孔を有する突起になると思われる。区画内部には沈線で渦巻文ないしは横S字状のモチーフを施している。

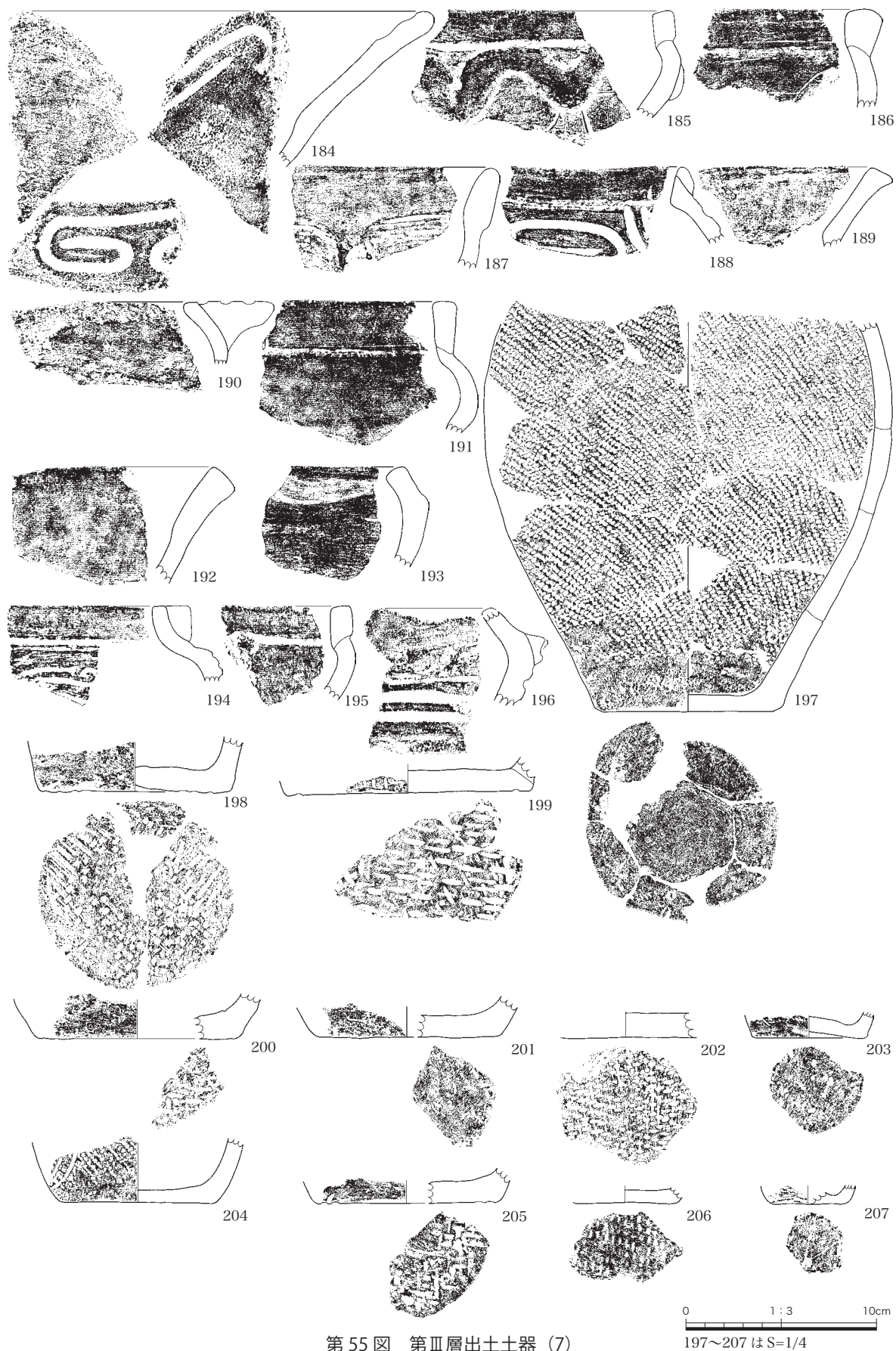
第7群 中期中葉のその他の土器 (第55図 184～207)

184～196は浅鉢形土器で、器面は入念に磨かれている。概ね第Ⅳ層の第10群土器に対応する。184・



第54図 第三層出土土器 (6)

169・170はS=1/4



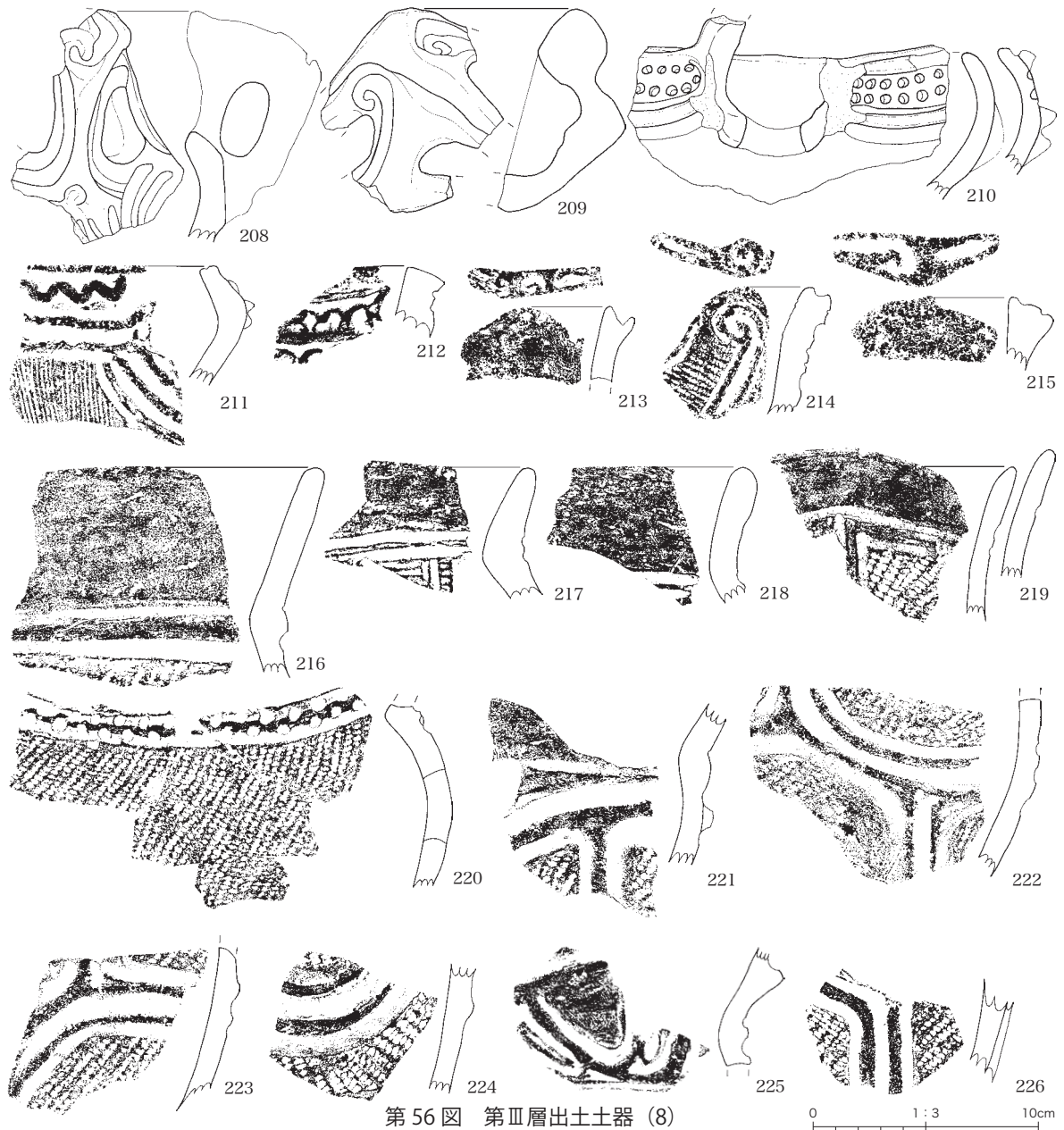
第55図 第Ⅲ層出土土器 (7)

190 は肥厚した口端に沈線で文様を描く。185・186・187 は口縁部に隆帯でモチーフを施す。185 は横位の蛇行隆帯を貼付し、187 は楕円形区画を配している。188・194・196 は口縁部に沈線で渦巻文や区画文を配すものである。189・192・193 は単口縁の無文の浅鉢、186・191 口縁部に浅い凹線を巡らす。197 は縄文のみが施された土器で、胴部から底部までほぼ全周する。地文には2段LRの縄を縦方向に施文し、内面には炭化物が付着する。198～207 は底部資料を一括し、主に深鉢形土器の底部外面に痕跡があるものを掲載した。198～203・205・206 は網代痕、207 は木葉痕が認められるものである。底面に痕跡がないものは平坦なものが殆どで、ナデやケズリによって整形される。

第8群 大木8b式土器

第1類 把手を配す土器（第56図208～212）

208・209 は箱状ないしはそれに類似する形状の中空把手と思われる。各面に円孔を有し、端部に渦巻文を配した沈線などで加飾される。210 は残存部から口縁に中空の把手を有していたものと思われる。把手か



第56図 第三層出土土器（8）



第57図 第Ⅲ層出土土器 (9)

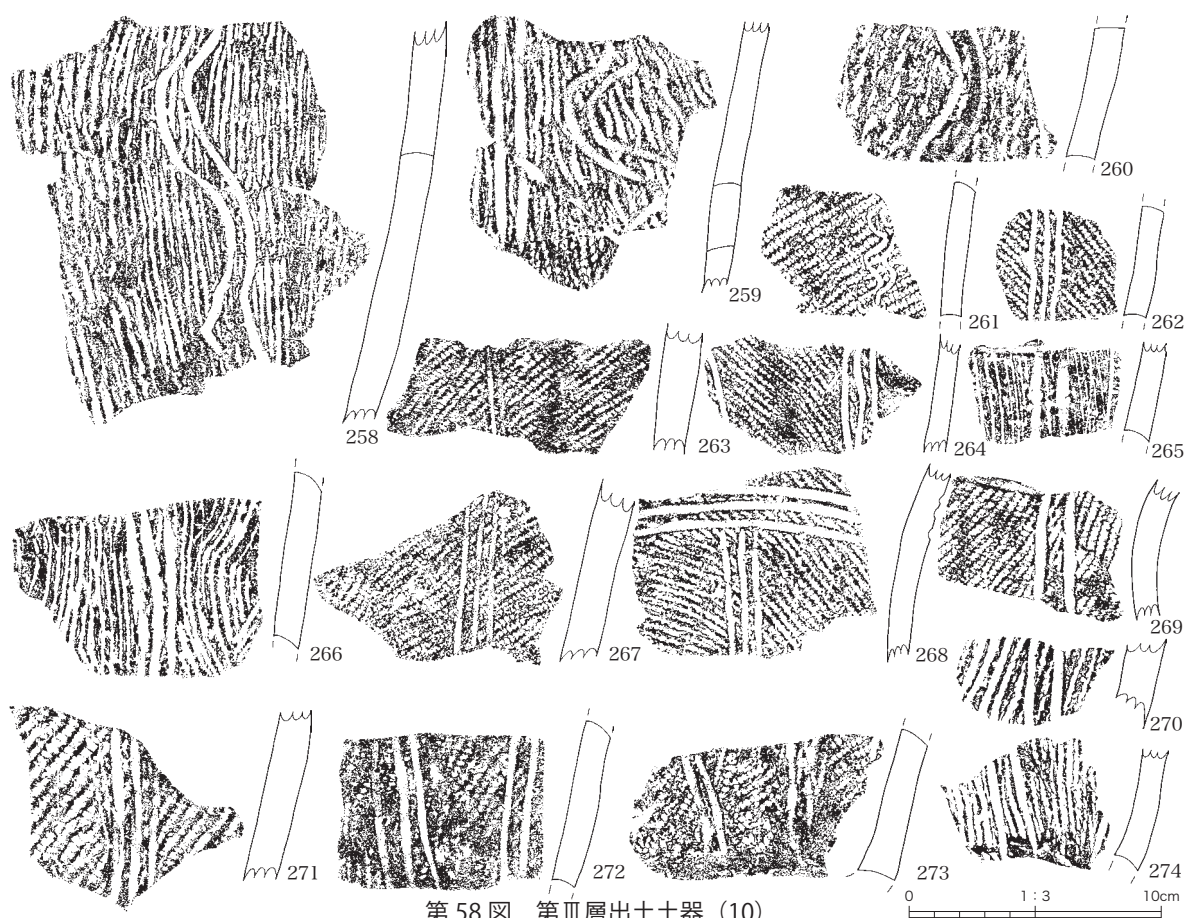
ら背を沈線で割った罫状の隆帯を巡らせ、口縁部を区画している。区画内には2列の円形刺突を施している。211・212は把手と連繋する横位の隆帯を巡らせ、口頸部文様帯を二分するものである。

第2類 口頸部文様帯を省略し、体部に渦巻文等を配す土器（第56図213～226）

213～215は口端に沈線を巡らせ、波頂部で小渦文を形成する。216～218は頸部がく字に折れる無文の口縁部で、頸部には横位の沈線を巡らしている。220は頸部に横位の沈線を巡らせ、その内部に円形の刺突を2段交互に巡らせる。以下の胴部には、2段RLの縄を縦方向に施文する。内面には炭化物の付着がみられる。221～226は主に隆沈線で文様を施す体部破片である。221～224は大きな渦巻文が描かれ、225・226は渦巻文以外の曲線文を配している。

第9群 加曽利EⅠ式土器（第57図227～257、第58図258～274）

227～245はキャリパー形で、口縁部に隆帯および沈線で渦巻文などのモチーフを表す土器である。227・228は貼付隆帯で、229～233は隆沈線でモチーフを描いている。234～245は隆沈線で渦巻文と区画文を配すものである。区画内には縄文を施すものが多いが、綾杉状の短沈線や刺突を充填するものなどもみられる。また、235のように渦巻モチーフの施された前方に突出する突起を有するものも少なくない。246～274は縦位の隆帯や沈線などによる懸垂文が展開する胴部破片である。246～249は両脇に沈線を沿わせた隆帯を垂下させるもので、2条の隆帯を下ろすものが多い。250・251は1条の沈線、262～274は2～3条1組の沈線を垂下させる。265・268・269には頸部と胴部文様帯の境をなす数条の横位沈線がみられる。252～257は1条の蛇行沈線を垂下させるもので、253・254・257は2条1組の懸垂沈線と交互に展開させている。258～261は2条の蛇行沈線を垂下させるものである。これらの胴部破片は、地文に縦方向の単節縄文が施



第58図 第三層出土土器 (10)



第59図 第Ⅲ層出土土器 (11)



第60図 第Ⅲ層出土土器 (12)

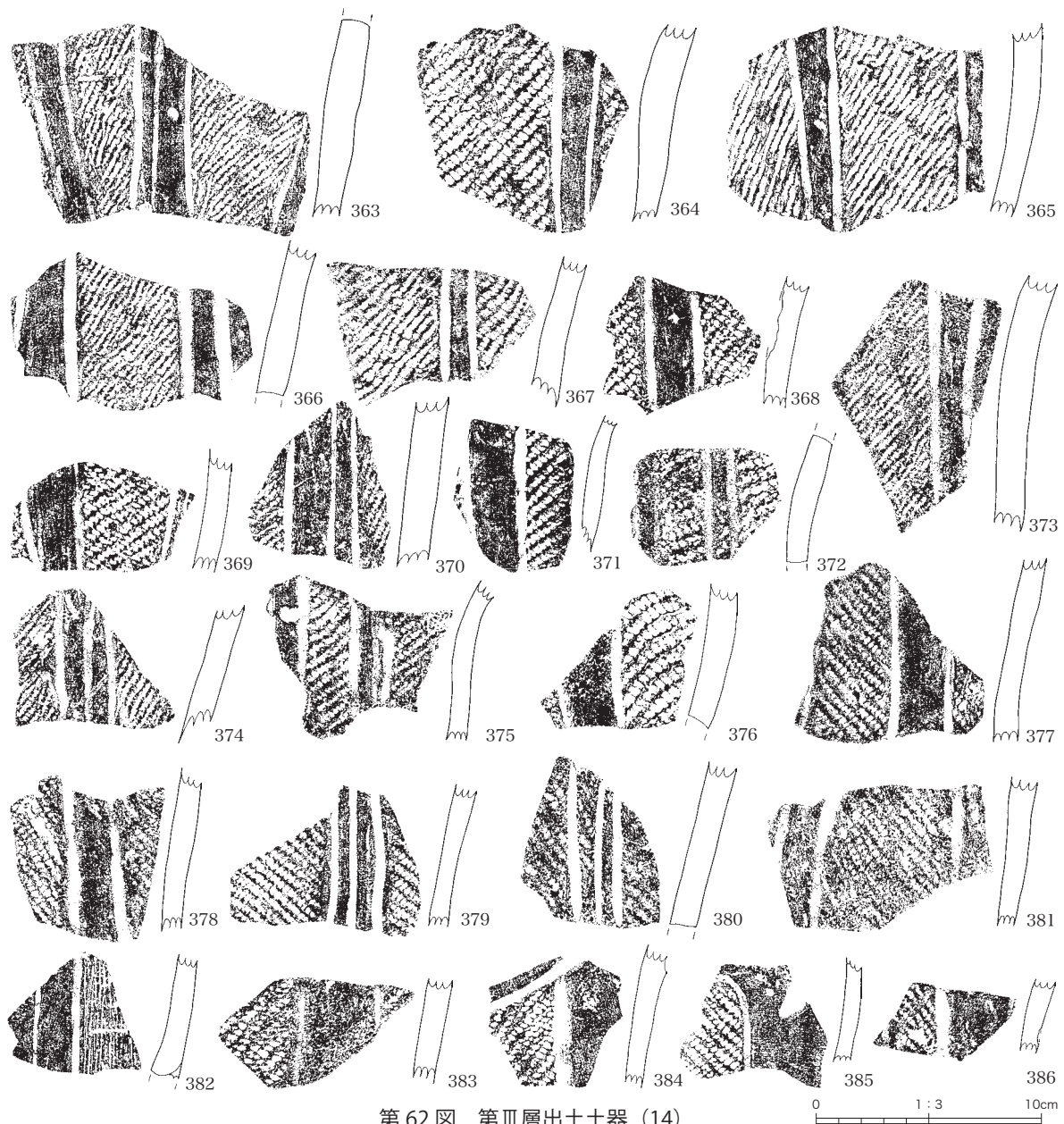


第61図 第三層出土土器 (13)

されるものが多く、このほか撚糸文や条線を地文とするものもある。

第10群 大木9～10式土器（第59図275～304）

275～289は背の高い隆帯とそれに沿う沈線で渦巻文などを配す土器である。275はキャリパー状をなす波状口縁の深鉢形土器で、断面三角形の隆帯とそれに沿う沈線で渦巻文と楕円形区画文、逆U字状のモチーフなどを描く。280は頸部括れ部から胴上半部の1/3が遺存する。隆帯とその脇に沿う凹線で頸部の区画や胴部の渦巻文を施す。地文は3段RLRの縦位施文である。290～294は磨消縄文で渦巻文などを配す土器である。290・291は同一個体の頸部および胴部の破片。1段Lの撚糸文を地文とし、頸部に沿って2条の沈線を巡らせ、その間に円形の連続刺突を施す。295～297は狭い無文帯を巡らす頸部破片で、295・296は口縁部無文帯の下に横位沈線と連続刺突がみられる。297は口縁部の無文帯と胴部の境に3条の横位沈線を巡らす。298～303は逆U字状の縄文帯・無文帯を配す土器である。298は沈線で区画された縄文帯を縦位に配したもので、頸部がやや内彎し口縁部が直立気味に開く器形をなす。304はアルファベット文を配す土器。



第62図 第Ⅲ層出土土器（14）

口縁部に沈線で区画した縄文帯を巡らせ、以下には逆U字状の沈線内部に縄文を施している。

第11群 加曽利EⅡ～Ⅲ式土器(第60図305～334、第61図335～362、第62図363～386)

305～344は沈線の沿う隆帯や沈線(凹線)で渦巻文や円形区画文、楕円形区画文などを配す口縁部及び口頸部の破片である。305～317は隆帯とそれに沿う太い沈線で、318～334は低い隆帯とそれに沿う凹線で、335～344は凹線でそれぞれ口縁部文様を表現している。口縁部には波状口縁と平口縁があり、波状口縁のものは、波頂部下に渦巻文と円形区画文が配される土器のほか、この中間的な形状の蕨手状をなすもの(332・333)がみられる。口縁部文様帯の地文には2段の縄文が多様されるが、縦位の沈線や条線、307のように円形刺突を施すものなどがある。343の内外面には赤色塗彩が残る。345～386は磨消懸垂文の施された体部破片をまとめた。懸垂文は基本的に2ないしは3条の沈線間を磨り消したもので、地文は2段の縄文による縦方向施文を多様する。345～362は近接する懸垂文間の狭い部分を磨り消したものである。345は口縁部から胴部の1/3周が遺存する平口縁の深鉢形土器である。地文には口縁部から前々段反撚り、3段RLLの縄を縦方向に施文した後、口縁部下に沈線で狭い楕円区画状のモチーフを巡らせ、そこから3条の沈線間を磨り消した懸垂文を垂下させている。383～386は363～382に比べ幅の広い磨消懸垂文がみられる。

第12群 中期後半の壺形を呈する土器(第63図387～393)

387～389は内外面に漆と思われる赤と黒の彩色がみられる。390は口縁部と胴部の境に平行する2条の隆帯を巡らせ、これを橋状把手で繋いでいる。389・393は口縁部下を巡る隆帯に上下方向の貫通孔を有す。

第13群 連弧文土器(第63図394)

394は連弧文はみられないが、文様や地文などの特徴から本群とした土器である。条の縦走する1段Lの撚糸文を地文とし、5条の横位単沈線が施される。

第14群 曽利式系土器(第63図395～405)

395～405は集合沈線を地文とし、頸部の括れ部には横位、以下の胴部には縦位の隆帯を貼付する土器である。口縁部の沈線は縦位(395・396・398)、弧状(399)、斜位(397・400)に施すものがある。397・400は口端に沈線を巡らせる。隆帯上の押捺は直上方向から加えられているものが多いが、405は左右方向から交互に施されている。402は小さめの工具で刺突状の押捺を施している。

第15群 縦位の条線を施す土器(第63図406～417)

406～417は縦位の条線を施す土器である。条線は櫛歯状工具により密に施されるものが多いが、413のように施文が浅く間隔が広いものもある。胎土には砂粒を多く含む。

第16群 称名寺式土器(第63図418)

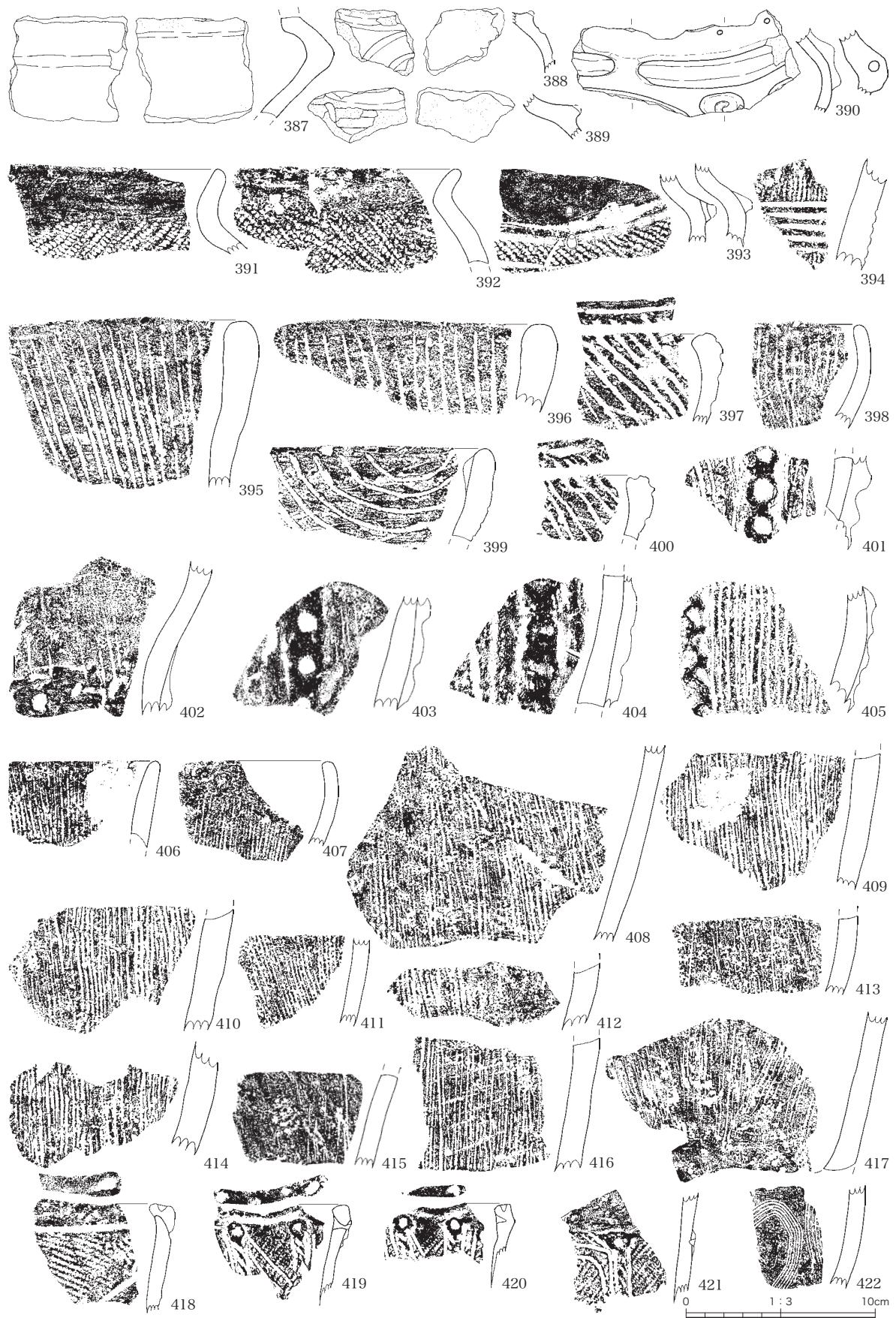
418は沈線で縁取られた磨消縄文により文様を表す土器で、内側に屈曲する口端に円形の盲孔が配される。

第17群 堀之内1式土器(第63図419～421)

419・420は同一個体と思われる。波頂部の口端とその脇に刺突を配し、外面は波頂部下に円形刺突の施された貼付文とそこから斜位のキザミが施された隆帯を垂下させる。円形刺突は内外面からなされており、貫通するものもある。貼付文を起点に内外面とも口縁に沿って沈線を巡らしている。体部は縄文地文で斜位の平行沈線を施す。421は口縁部に無文帯を有し、頸部には円形刺突を起点に隆帯を巡らせ、また、胴部にはそこから同様な隆帯を縦位に垂下させる。これら土器の器面には、炭化物の付着がみられる。

第18群 後期初頭～前葉の条線を施す土器(第63図422)

422は櫛歯状工具による条線が施された東北系の粗製土器である。条線は無文地に6本単位の細かな工具を用い、弧線ないしは曲線文を描いたものと思われる。



第63図 第Ⅲ層出土土器 (15)

第Ⅳ層出土の土器（第64図 100図、図版一二～一六）

第Ⅳ層は、本遺跡の縄文時代遺物包含層の主要をなす黒褐色土壌で、調査区内では北側の中央部付近で約40cmの厚さがあり、山際の南側に向かうにつれて薄く堆積する。土器は層内に万遍なく包含されており、多量の土器が出土した。土器の出土状態やその内容については、破片が主体で同一個体のものが纏まって出土した例もあるが、部分的に遺存するのみで器形全体を窺えるものは殆どない。また、前述の第Ⅲ層と比較して、早・前期の土器と後期後半の土器が加わる以外は、ほぼ同様な内容を示している。

ここでは、量的に多い中期土器群もほぼ第Ⅲ層に認められるものであるため、記述については第Ⅲ層にない時期のものや特徴的なもの、器形の窺えるものなどを中心に若干の説明を加える。

第1群 早期中葉の土器（第64図 423～426）

本群は早期中葉の沈線文系土器である。423～425は所謂出流原式の範疇に含まれるもので出土数は極めて少ないが、前回の調査では文様構成が理解できる口縁部および胴部破片が出土している。423は棒状工具による連続刺突、424は斜位の沈線文、425は貝殻腹縁文が施される。426は横位の区画線内に異方向の斜線を組み合わせた鋸歯文を充填するもので、沈線文期初頭の竹之内式に位置づけられる。

第2群 黒浜式土器（第64図 427～429）

本群は前期中葉の黒浜式に比定される土器である。427は横位隆帯以下に2段LRの横方向施文、428は付加条縄文を羽状に施文するもので、1段Rと1段Lの縄をそれぞれ2本1組みで巻いた縄を用いている。429は横位沈線と小波状文がみられる。いずれも胎土中に多量の繊維を含んでいる。

第3群 阿玉台式土器

第Ⅲ層第1群に対応する土器群である。今回の調査で遺構は確認していないが、前回の調査では土坑内から阿玉台Ⅰa式の純粋な一括資料が出土している。

第1類 阿玉台Ⅰb式土器（第64図 430・431）

430・431は口縁直下に単列の角押文を施す。431は角頭状の口縁をなし、口端に同様の角押文を施している。

第2類 阿玉台Ⅰb～Ⅱ式土器（第64図 432）

432は破片上部に隆帯による狭い楕円形区画文、その下にヒダ状圧痕がみられる。

第3類 阿玉台Ⅳ式土器（第64図 433～436）

433～436は隆帯脇に沈線を沿わせる口縁部破片である。いずれも隆帯で接点部が突出する区画文を形成する。433は隆帯上にキザミが施される。434・436の区画内には縦位の沈線を充填する。

第4類 把手付き無文鉢形土器（第64図 437）

437は口縁部がやや外反する平口縁の鉢形土器で、口縁直下に橋状把手を貼付する。

第4群 七郎内Ⅱ群土器の系譜を引く土器（第64図 438）

438は2段LRの縄による縦方向施文を地文とし、弧状をなす2条の有節沈線が連結したモチーフを描く。

第5群 大木7b式～大木8a式期の土器

第Ⅲ層第3群に対応する土器群である。

第1類 頸部括れ部で横位に区画し、口頸部と体部に隆帯や沈線でモチーフを描く土器

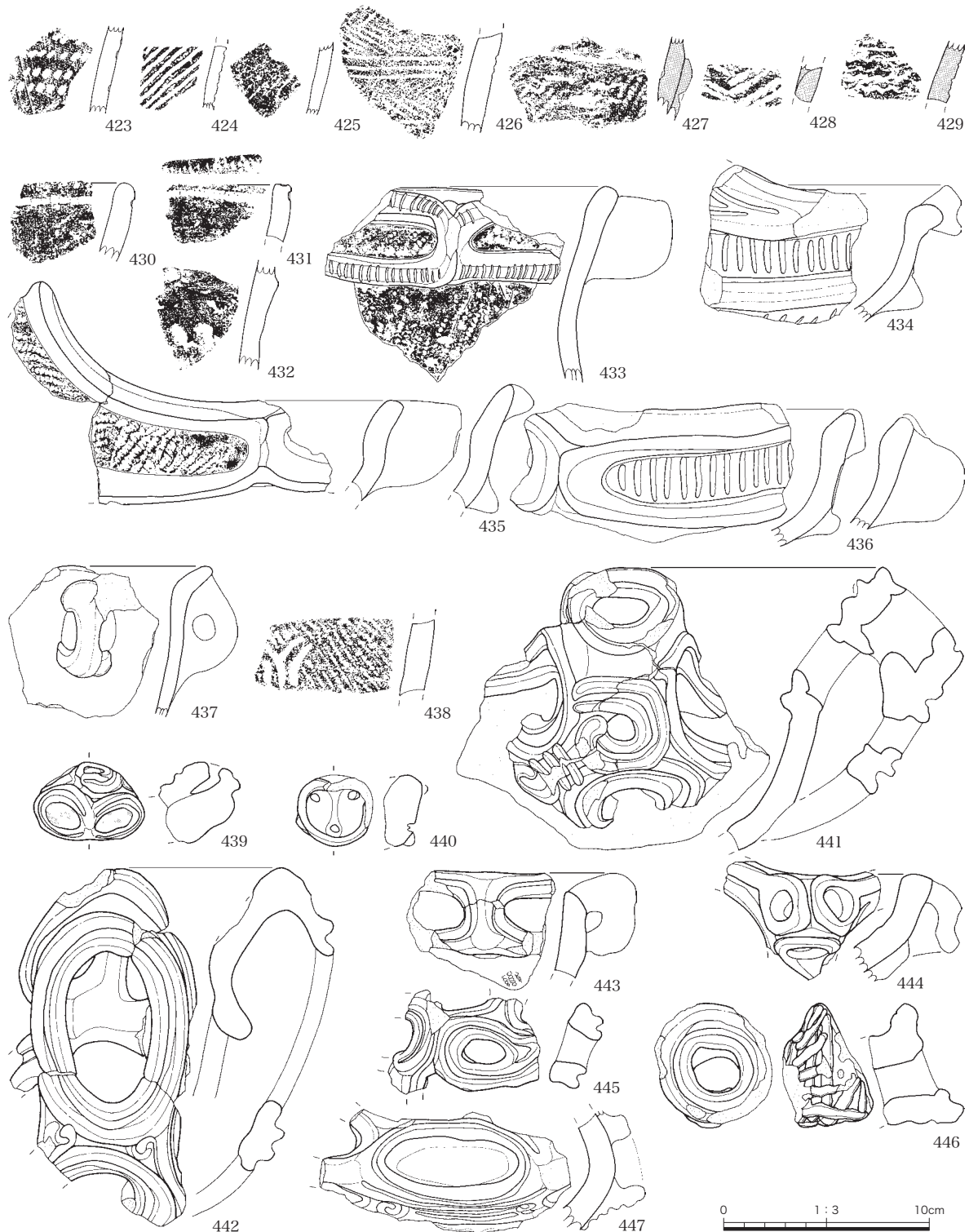
第1種 口縁に付く突起、把手類（第64図 439～447）

439・440は人面把手である。439は隆帯と沈線で、440は円形刺突と隆帯で人面を表現している。441～447は主に深鉢形土器の口縁部に配される中空把手である。S字や楕円形モチーフを基調とし、貫通孔を取

り巻くように隆帯を配したもので、後述する第7群土器（大木8b式）とは比較的明瞭に区別が可能である。

第2種 主に隆帯でモチーフを描く土器（第65図448～459）

448は波状口縁の土器で、頂部に環状の突起が付けられる。口縁に沿って隆帯を貼付し、以下の体部には縄文地文に渦巻状の隆帯でモチーフを描く。451は口縁直下に細い波状の隆帯を巡らせ、以下には端部が突



第64図 第IV層出土土器（1）

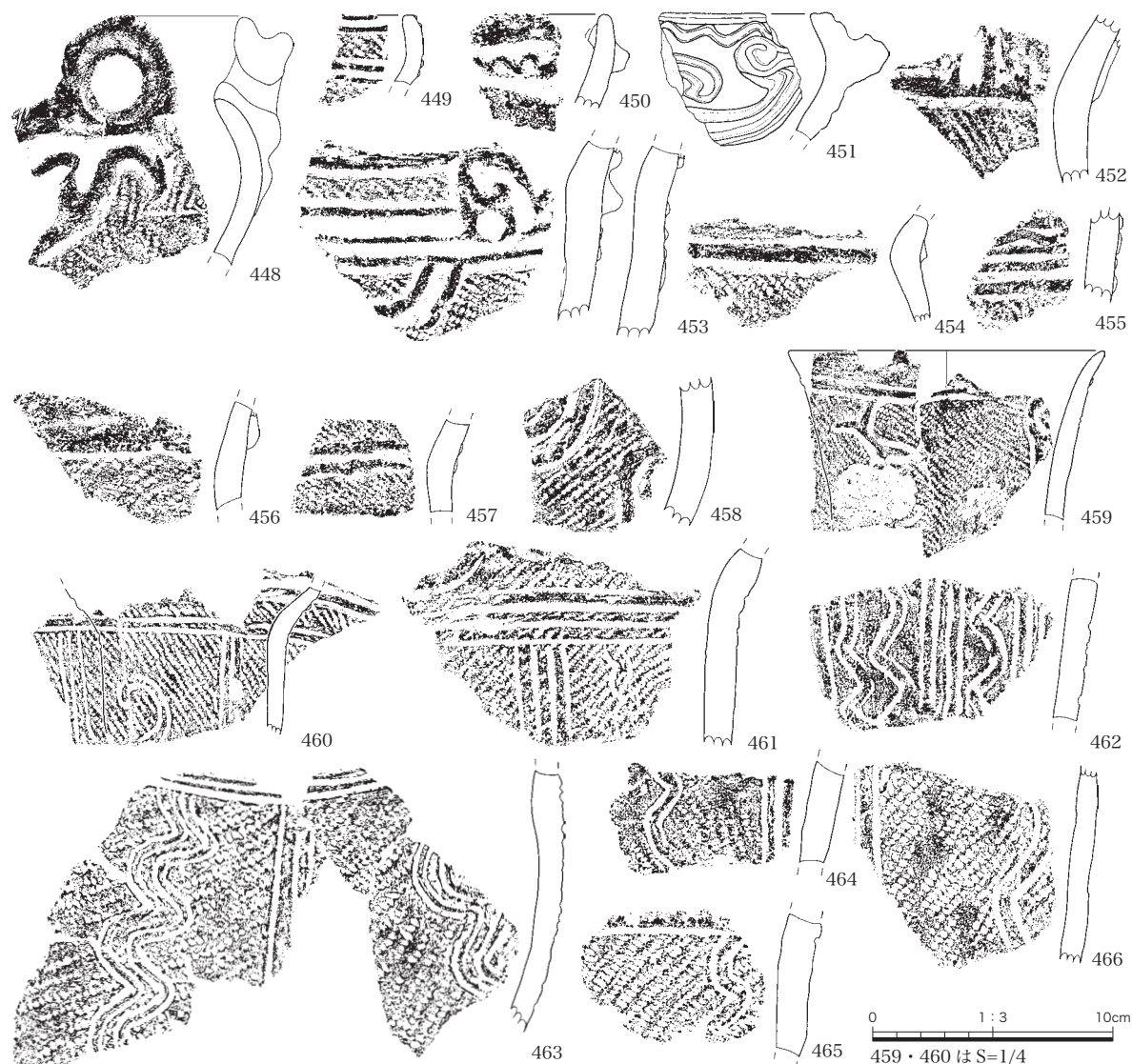
起状に突出する渦巻状のモチーフを施す。453～459は頸部を横位の隆帯で区画するものである。459は口縁部の狭い無文帯を横位の細い隆帯で区画する筒形の土器で、剥離しているが同様な隆帯により体部の文様を施している。器内外面ともに炭化物の付着がみられる。

第3種 平行沈線で主なモチーフを描く土器（第65図460～466、第66図467～480）

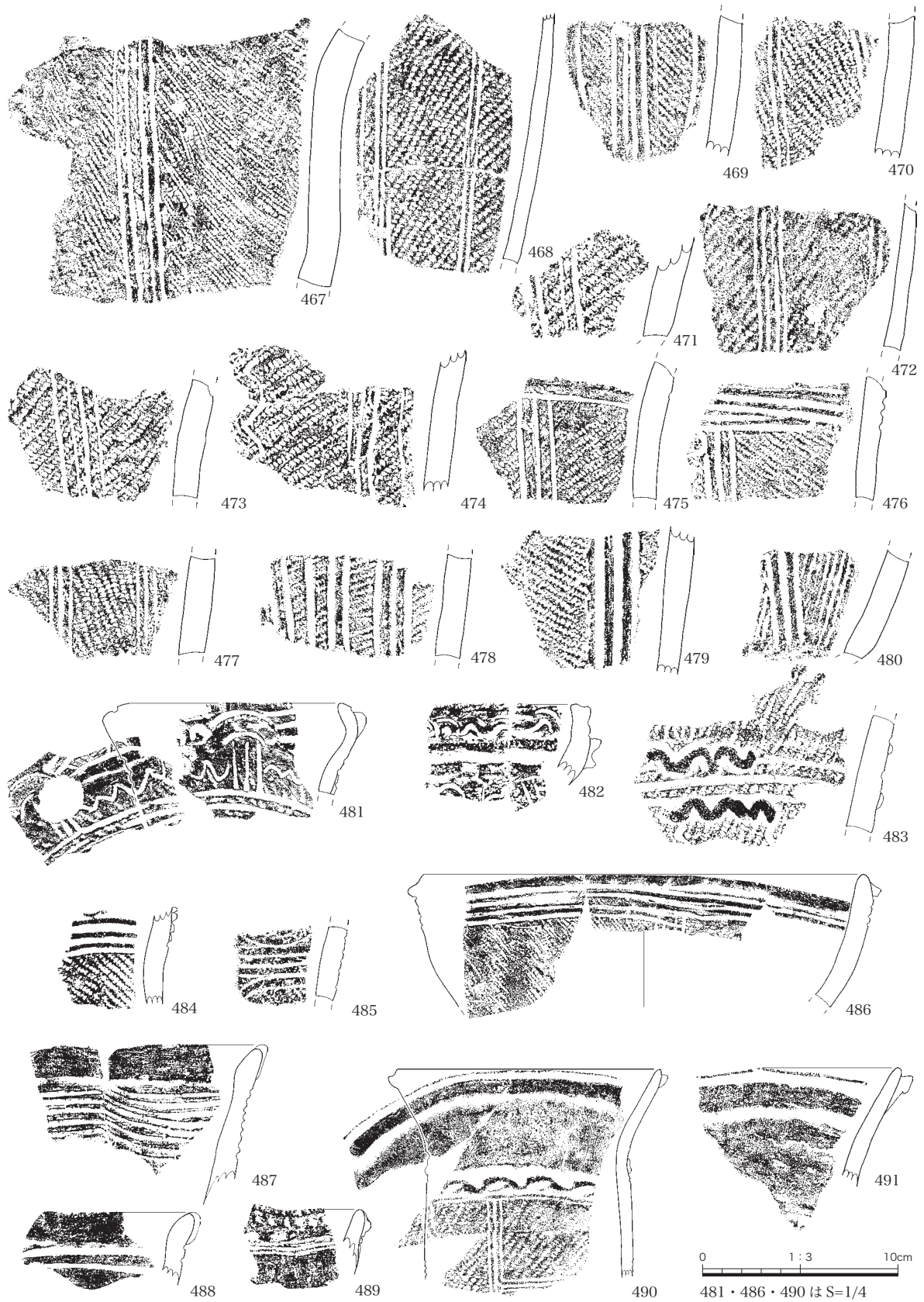
460～480は半截竹管による平行沈線でモチーフを描く土器である。460の胴部には曲線的なモチーフと縦位の懸垂沈線が描かれる。461～466は縦位の懸垂沈線と蛇行沈線を垂下させるもので、460・461・463・465は頸部括れ部に横位の平行沈線を巡らせる。467～480は縦位の平行沈線のみがみられるもので、このうち475～480は半截竹管の重複施文による平行沈線を垂下させている。

第4種 隆帯と沈線でモチーフを描く土器（第66図481～483）

481はキャリパー形をなす小型の深鉢形土器である。口頸部文様帯には、沈線の沿う半円状の隆帯を4単位配し、これを横位の隆帯で繋いでいる。半円状隆帯間には2条、横位隆帯の上側には1条の沈線を沿わせている。以下、半円状の隆帯から3条の縦位沈線を配し、内部に1条の波状沈線を巡らす。頸部括れ部には横位の平行沈線を施す。482は背割れの隆帯で口頸部文様帯を分かつもので、口縁部直下の狭い施文域には



第65図 第IV層出土土器（2）



第66図 第IV層出土土器(3)

半截竹管工具でコンパス文風のモチーフを施す。内面には多量の炭化物が付着する。483は縄文地文に3条の横位沈線を巡らせ、その上下段の沈線上に蛇行隆帯を貼付する。

第5種 口頸部と体部を半截竹管による平行沈線で画す頸部括れ部の破片（第66図484・485）

484は頸部括れ部に半截竹管による3条の平行沈線を巡らせ、胴部との境を画すものである。胴部は地文に2段LRの縄による縦位施文が施される。485は横位平行沈線の上下に弧状の沈線がみられる。

第2類 口端を肥厚させ、以下沈線等でモチーフを描く土器（第66図486～491）

486は口縁部の約1/3周が遺存する鉢形の土器である。口縁に沿って断面三角形の隆帯を貼付し、その下に半截竹管による横位の平行沈線を施す。490は筒形をなす小型の深鉢形土器で、口縁直下に粘土帯を巡ら



第67図 第IV層出土土器（4）

せ口端を肥厚させている。頸部括れ部には隆帯を巡らせ、上側には弧状の沈線、下側には横方向から押捺を加え交互刺突文風に仕上げている。この隆帯から上の口頸部を無文としている。胴部は2段RLの縄による縦方向施文を地文とし、横位・縦位の平行沈線による方形モチーフと蛇行沈線が施される。489は口縁部を巡る隆帯上に棒状工具による連続刺突が施される。487の口頸部には地文に3本1組の浅い条線を施している。

第6群 大木8a～8b式期の土器

本群とした土器は第Ⅲ層第4群に対応し、第Ⅳ層内で最も出土数が多く全体の約30%を占める。

第1類 頸部括れ部で横位に区画し、口頸部と体部に隆帯や沈線でモチーフを描く土器

第1種 口頸部に貼付隆帯でモチーフを描く土器（第67図492～513）

492～496は渦巻状モチーフを描く土器である。493は口縁部突起の頂部及び内外面に渦巻状のモチーフを配す。495の隆帯上にはキザミが施される。496～500は波状文がみられる土器である。496は頸部の突起を起点に横位の平行及び蛇行隆帯を巡らす。497は口縁部を包むように粘土帯を貼付し、平らな口端を作出する。口縁直下には上下から交互に押捺を加えた隆帯を巡らせ、その下には波状の隆帯を貼付する。501～505は屈折するモチーフがみられる。506は口縁に断面三角形の隆帯を巡らせ、その下に細い貼付隆帯で区画文を配す。507～510は口縁に沿って隆帯を巡らせ、直下に小さな渦巻文を配したものである。511～513は横位隆帯がみられる破片である。511は角頭状の口縁部で、1段Lの捺糸文を地文とする。

第2種 隆帯と沈線でモチーフを描く土器（第68図514～522）

514・515は同一個体と思われる口縁部破片で、口縁直下に沈線の沿う隆帯で突起及び平行モチーフを施し、以下に横位の蛇行沈線が描かれる。516は沈線間に、519は隆帯上に横位の連続刺突を施す。518と520は同一個体で、口頸部の中程より上に背を沈線で割った高い隆帯を巡らせ、文様帯を二分するものである。

第3種 隆沈線でモチーフを描く土器（第69図523・524、第70図525～545）

523はキャリパー状をなす平口縁の深鉢形土器である。口縁部に2条の太い隆帯を巡らせ、その間を凹線でナデている。これらは、一部で突出して突起状の渦巻文を形成する。地文は2段RLの縄による縦位施文で、頸部括れ部に2条の横位隆沈線を巡らせ、口頸部と胴部文様帯の境としている。口頸部文様帯には隆沈線で横S字状及びクランク状モチーフが展開する。胴部には3条1組の隆沈線を懸垂文として垂下させる。ここから剣先文の付く渦巻モチーフなどを派生させている。524は口縁部から胴部上位の1/4が遺存する甕形土器の破片である。口縁部は渦巻文と沈線が巡る4単位の波状口縁で、口頸部には波頂部と波底部下に小渦巻文を配している。そこを起点に2条の隆沈線で胴部に大柄な渦巻モチーフを施したものである。

第4種 沈線でモチーフを描く土器（第70図546～554、第71図555～572、第72図573～594）

沈線でモチーフを描くものをまとめた。直線的・曲線的な沈線がみられるもの（546～554）や沈線を直線的あるいは弧状に配したり、屈曲させたりするもの（555～572）、渦巻文を描くもの（573～594）などがある。547はキャリパー形をなす平口縁の深鉢形土器である。2段LRの縄による縦位施文を地文とし、2条1組の横位平行沈線と曲線でモチーフを描く。口縁部の内外面に炭化物の付着がみられる。

第5種 刺突文を配す口頸部破片（第73図595）

595は口端に凹線を巡らせ、口縁直下に横位の連続刺突が施される小型の土器である。地文は2段RLの縦位施文で、内面には炭化物の付着がみられる。

第6種 横位沈線で区画する頸部破片（第73図596～609）

596～609は3ないしは4条の横位平行沈線を頸部に巡らせ、胴部との文様帯を区画するものである。小型の土器と思われる603・605の内面には多量の炭化物が付着している。

第7種 懸垂文が展開する胴部破片（第73図610～626、第74図627～638）

おもに縄文地に縦位の隆帯や沈線などにより、懸垂文が展開する胴部破片をまとめた。隆帯を垂下させるもの（610～613）、沈線を垂下させるもの（614～626）、沈線と蛇行沈線を垂下させるもの（627～636）、剣先文がみられるもの（637・638）などがある。

第2類 体部に渦巻文を配す甕形土器（第75図639～646）

639は胴部中位に最大径を有する甕形の土器である。口縁部には隆帯を貼付し、沈線と口縁部からやや突出する渦巻文を巡らせる。胴部は2段LRの縄による縦位施文を地文とし、途中で渦巻文を形成する3条の沈線と2条1組の蛇行沈線を交互に垂下させる。640は胴部のみが遺存するもので、縄文地文に3条1組の沈線で懸垂文や渦巻文が描かれる。639・640とも内外面に煤もしくは炭化物の付着がみられる。

第3類 交互刺突文を配す土器（第76図647～652）

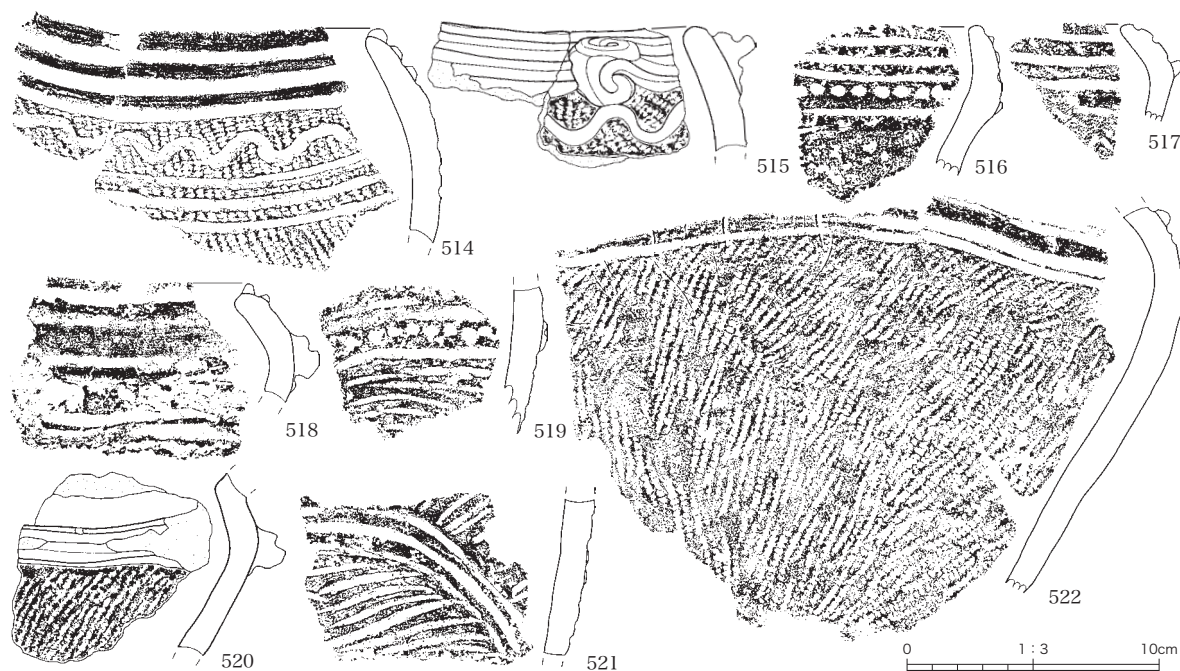
647はキャリパー形をなす小型の深鉢形土器で、口縁部のおよそ1/2周が遺存する。口縁直下に交互刺突文を巡らせ、以下の地文には2段RLの縄による縦方向施文が施される。648は口縁部に交互刺突文と1条の横位沈線を巡らせる。接合しないがSI-1289の1と同一個体と思われる。内面には多量の炭化物が付着する。649と651は同一個体と思われる頸部括れ部の破片である。頸部括れ部に太めの沈線を引き、その内部に横位の隆帯を貼付け、上下方向から刺突を加えている。以下の胴部には、縄文地文に2条の隆帯を垂下させる。

第4類 その他の文様がみられる土器（第76図653～655）

653は口縁部文様帯の上下を1条の細い隆帯で区画し、内部に縦位の格子状隆帯を貼付する。654は口縁に隆帯を巡らせ、以下の無文地に2条の沈線で縦位・横位の平行沈線を引く。この沈線間に斜位の沈線を充填している。655は頸部括れ部の破片で、頸部に低い隆帯と2条の沈線を巡らせる。頸部には蛇行沈線、胴部には平行沈線を密に垂下させる。

第5類 非装飾的な土器（第76図656）

656は緩やかな波状をなす筒形の土器である。口縁部直下を無文とし、以下の体部には櫛歯状工具による条線を施している。内面全体と外面の口縁部付近に炭化物の付着がみられる。



第68図 第IV層出土土器（5）

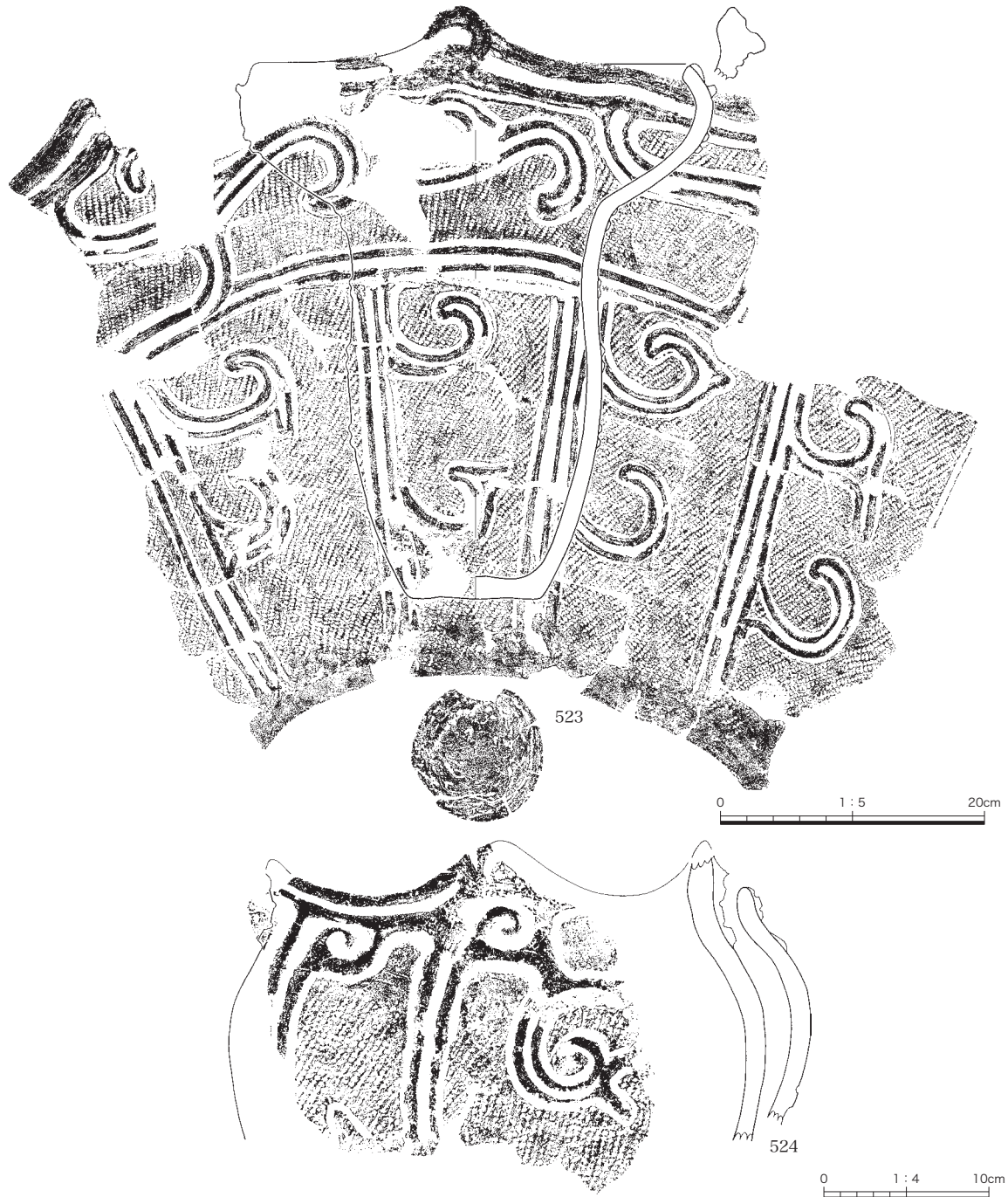
第7群 大木8b式土器

第1類 中空の把手（第76図 657～660）

657～660は箱状ないしはそれに類似する形状の中空把手で、各面の円孔に沿って隆沈線で加飾される。658には煤もしくは炭化物の付着がみられる。

第2類 キャリパー形をなし、口頸部に一帯の文様帯を配す土器（第76図 661～667）

本類はキャリパー形の器形をなし、口頸部文様帯に渦巻文を基調とする文様を配すものである。この渦巻文には剣先文が付き、隆沈線で文様を描くもの（661～665）と粘土紐を貼付して文様を描くもの（666・

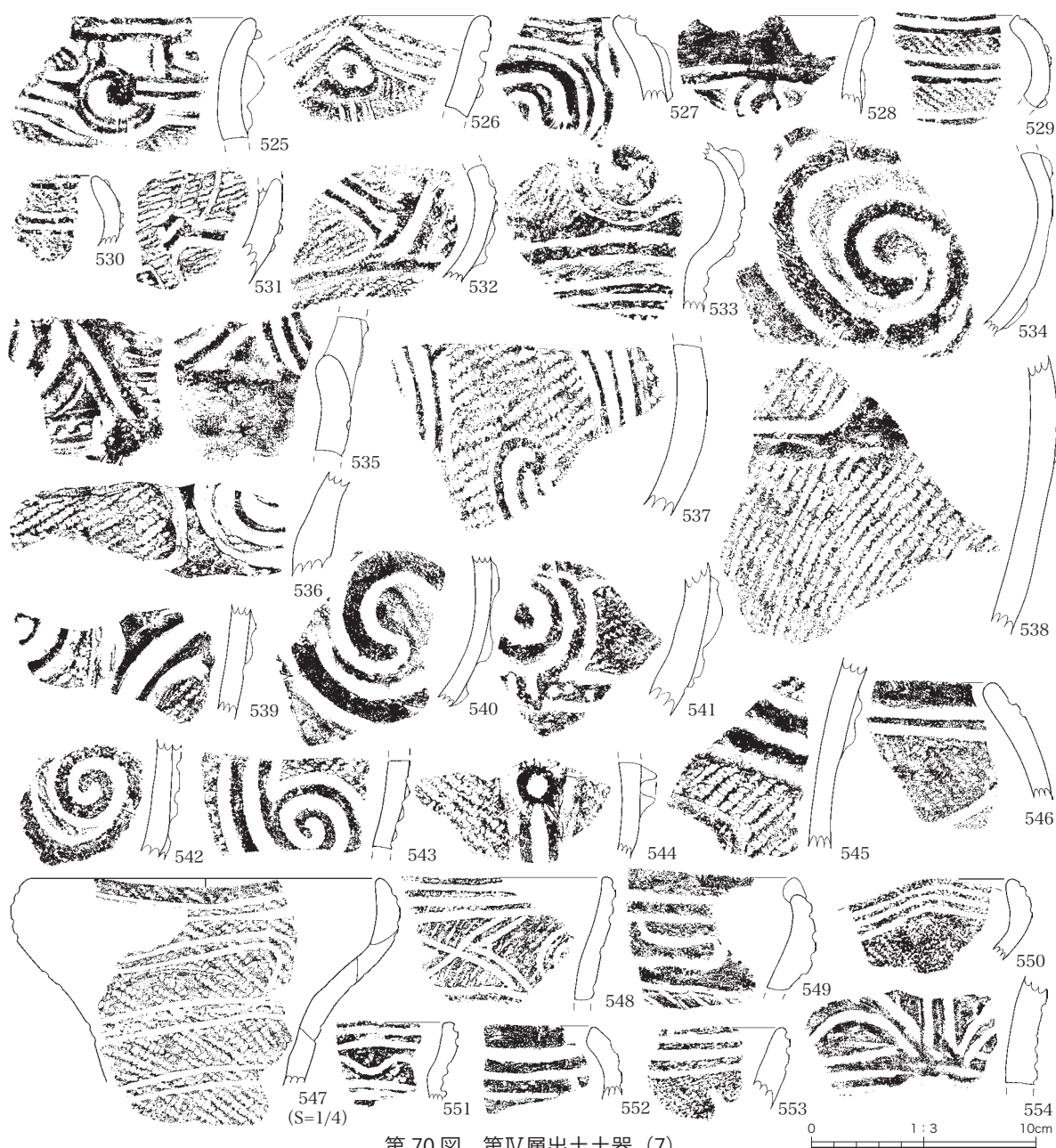


第69図 第Ⅳ層出土土器（6）

667) がある。661・663 は文様帯下端の渦巻文が突起状となり、664 は渦巻文の脇に円形刺突を施している。666 は波状口縁で、口縁直下と文様帯中段に背を沈線で割った隆帯を巡らせ、口縁部文様帯を分帯している。口縁部文様帯上半は無文地で、下段は縄文地に細い隆帯でモチーフを描いている。

第3類 口端に渦巻文を配す土器 (第77図668・669、第78図670～691)

主に隆沈線で口端に渦巻文を描くものである。これらは深鉢形土器のほかに、大型の甕形土器や円筒形の小型土器などがある。668 は大型の甕形土器である。波状口縁で肥厚する口端には凹線が巡り、波頂部には渦巻文が描出される。波頂部下には直径3 cmほどの円孔が穿たれる。口頸部は無文で、胴部は1段Rの撚糸文を地文とし、3条の沈線で大柄な渦巻文などのモチーフを描く。内外面とも炭化物が付着しており、特に胴部中位に多くみられる。669 は円筒形をなす小型の土器である。緩い波状をなす口縁部には隆沈線が巡り、波頂部にはやや突出する突起状の渦巻文が設けられる。頸部は無文で下端に3条の沈線を巡らせる。胴部は



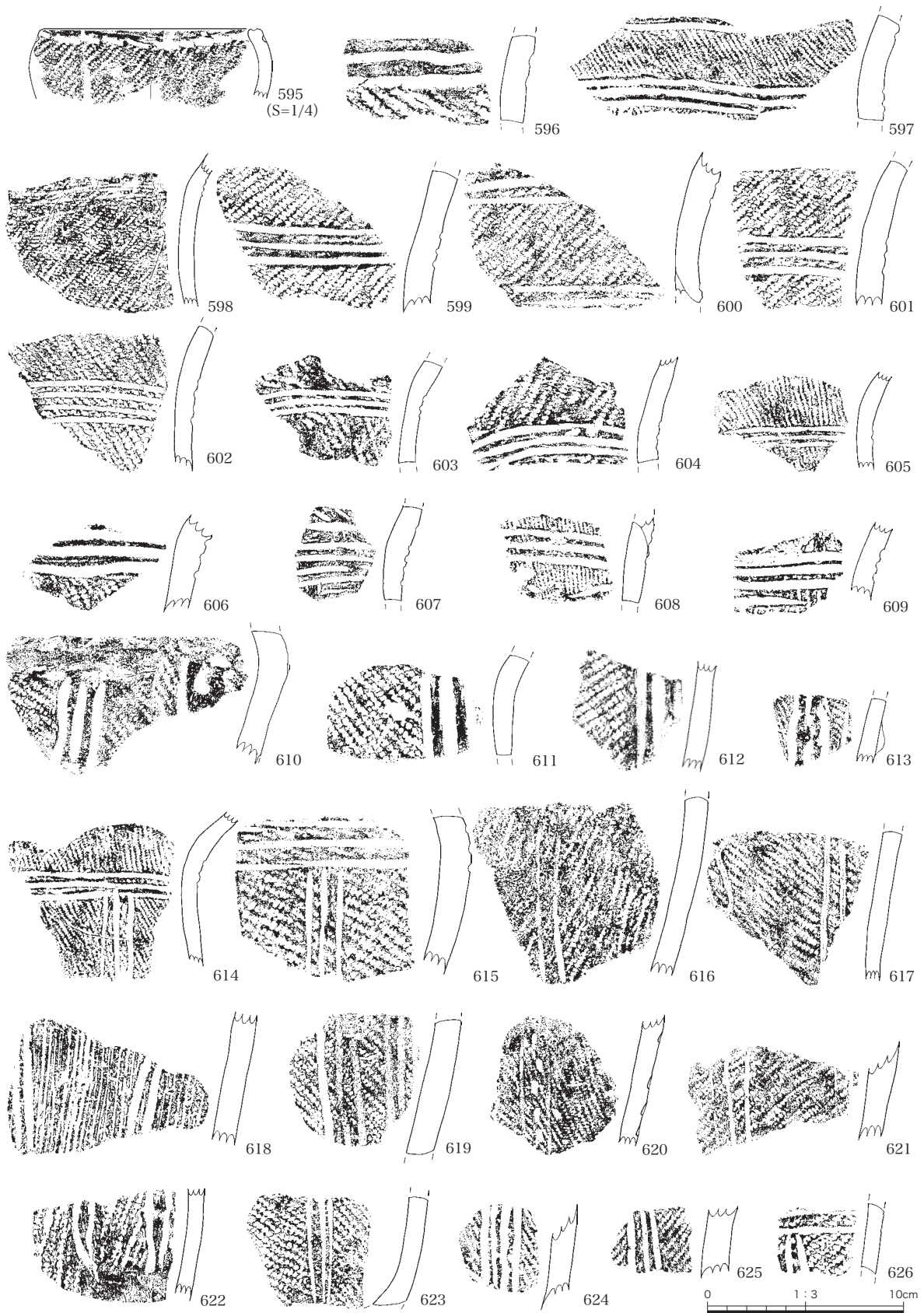
第70図 第IV層出土土器 (7)



第71図 第IV層出土土器(8)



第72図 第IV層出土土器 (9)



第73図 第Ⅳ層出土土器 (10)

2段LRの縄を地文とし、上端に渦巻文が付く3条1組の懸垂文と2条1組の沈線で描いたモチーフが展開する。外面には煤もしくは炭化物の付着がみられる。

第4類 体部に渦巻文を配す土器（第79図692～713）

渦巻文をモチーフとする胴部破片をまとめた。692～707は隆沈線で表現するもので、表面を丁寧に磨いているものが多い。692～695・698、700・704・706はそれぞれ同一個体と思われる。これらは断面蒲鉾状の隆帯に広く浅い沈線が沿い、渦巻文とそこから派生する剣先文や弧状のモチーフなどが描かれる。701の隆帯上には連続刺突が施される。708～713は沈線で表現するものである。これらは2条ないしは3条の単沈線でモチーフを描くもので、708・709・712は渦巻文の先端に剣先文が付く。711は大きな渦巻文の一部に小さな渦巻文を付けたものと思われる。

第5類 その他の文様がみられるもの（第80図714～720）

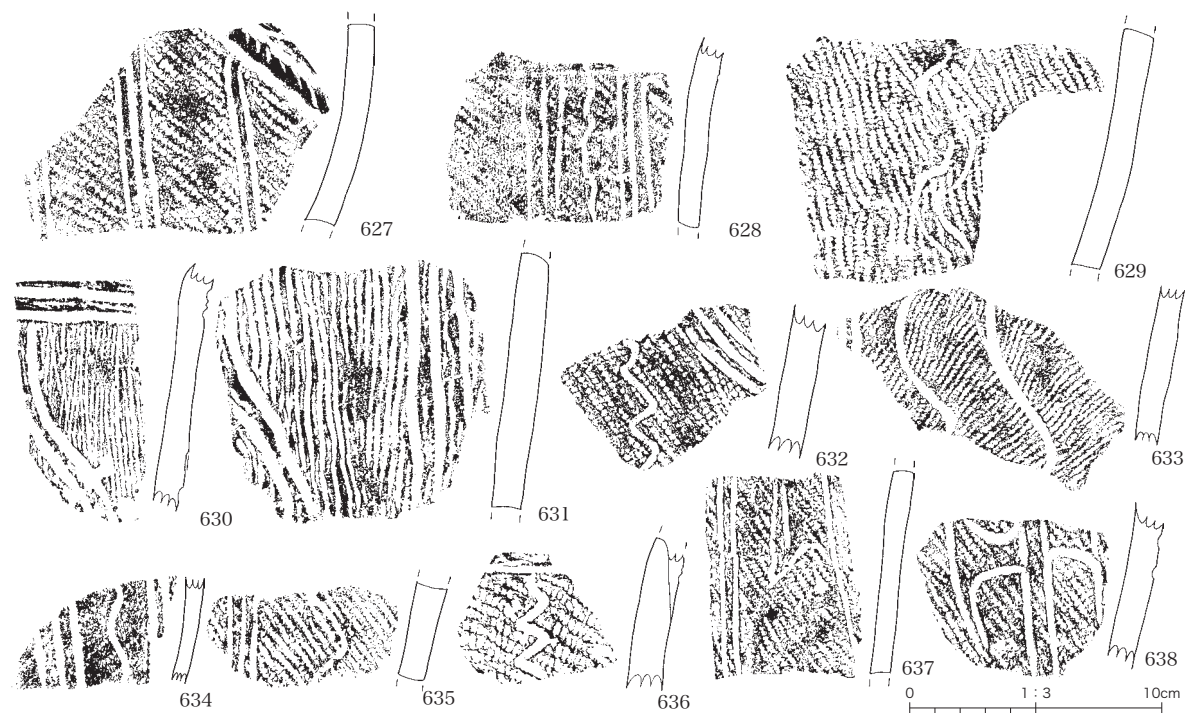
714は口縁部が外反する平口縁の土器である。口頸部は無文で、頸部に沈線の沿う細い2条の粘土紐を貼付し、胴部との文様帯を区画する。胴部は縄文地文に頸部と同様の粘土紐を垂下させる。内面頸部以下に多量の炭化物が付着する。715・716は同一個体で、肥厚する口端に凹線を巡らせ、口縁直下に2条の横位沈線を施す。719は2条1組の沈線間に円形の連続刺突を施している。720は細い隆沈線で剣先文を描出する。

第6類 2条の列点もしくは交互刺突文を巡らす土器（第80図721～725）

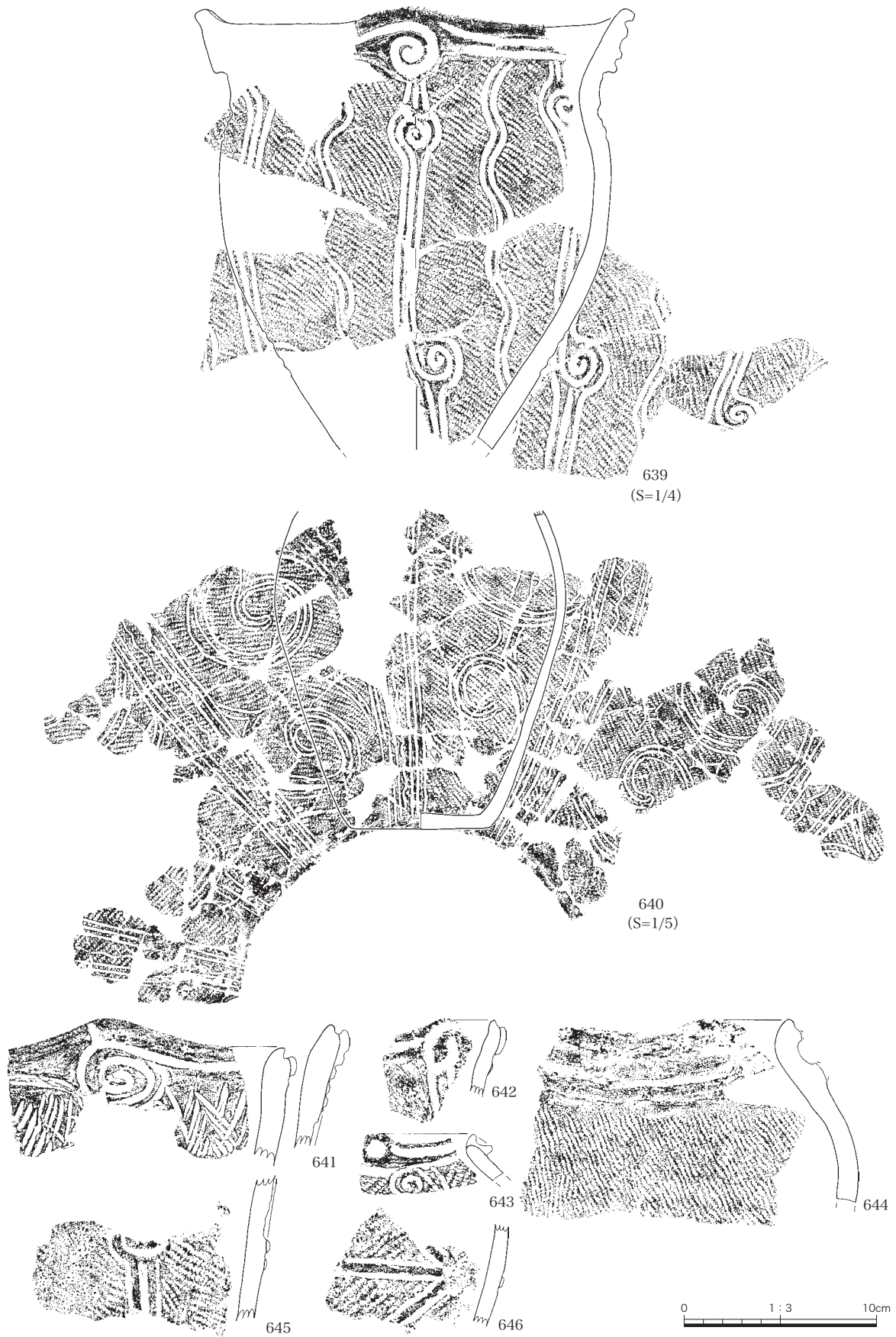
721～723は頸部に屈曲し外反して口縁に至る器形をなす。口頸部は無文で、721・723は頸部屈曲部の沈線間に、722は頸部を巡る隆帯の上下に円形刺突を施す。725は横方向から交互刺突を加えている。

第7類 地文のみもしくは無文の土器（第80図726～732）

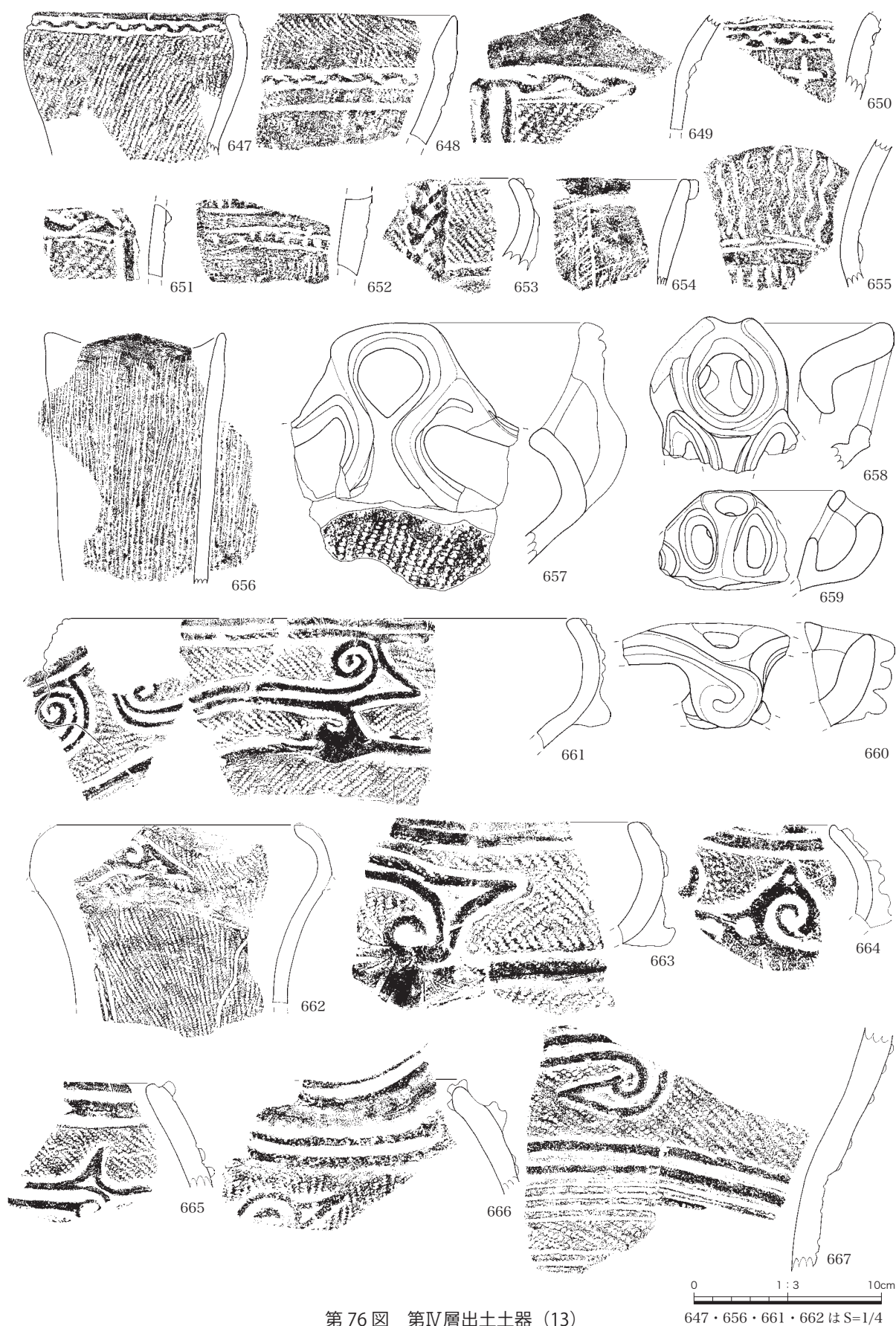
口縁部を無文とし、胴部に縄文のみが施されるもの（726・729・732）や、口縁部から縄文のみがみられるもの（727・728）である。器形は口縁部が外反もしくは直立気味に立ち上がり、頸部は括れ、胴部が丸みを帯びる平口縁の甕形が多い。731・732は緩やかな波状口縁で、731は口縁直下に隆帯を巡らせている。



第74図 第Ⅳ層出土土器（11）



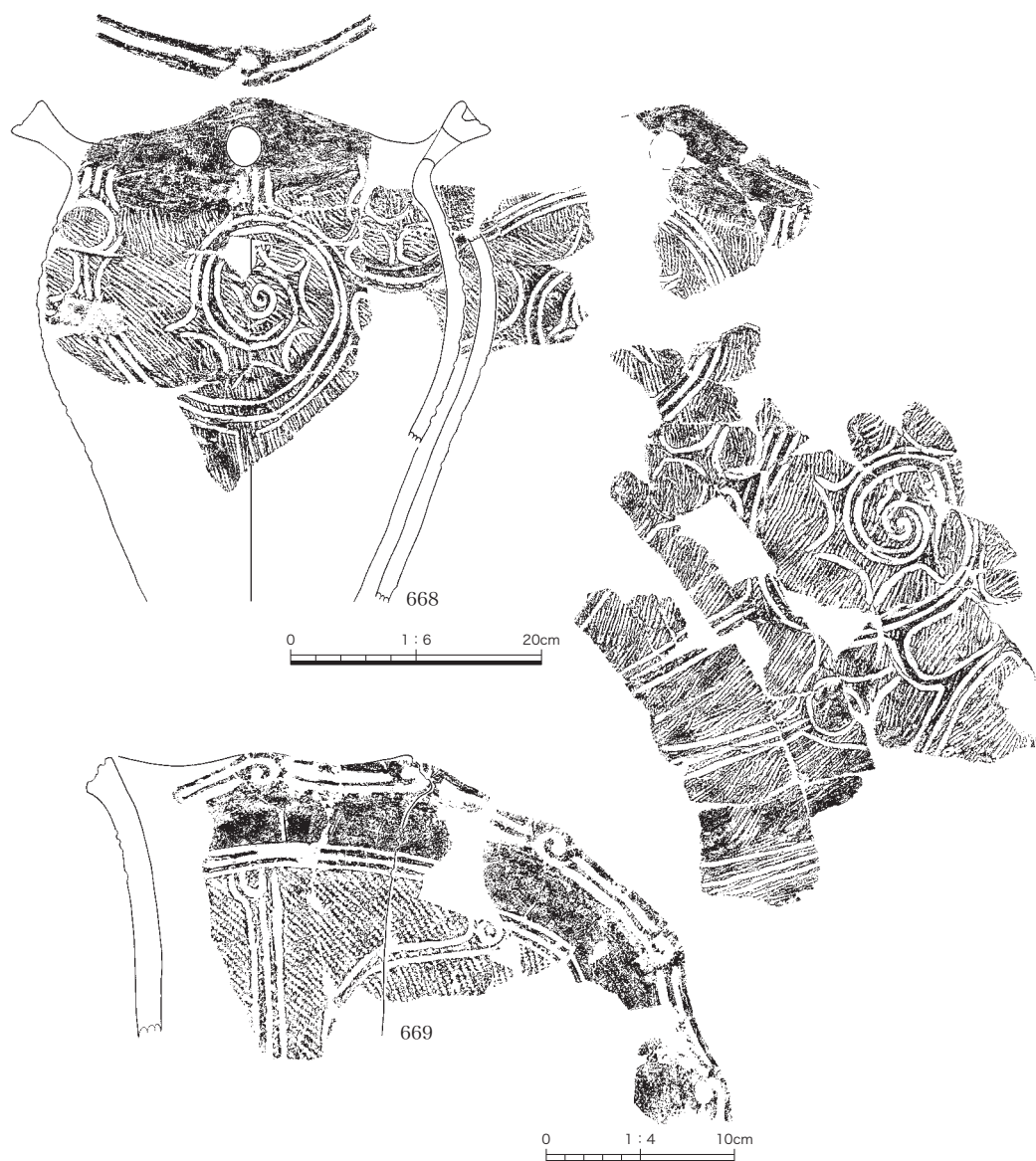
第75図 第Ⅳ層出土土器 (12)



第76図 第Ⅳ層出土土器 (13)

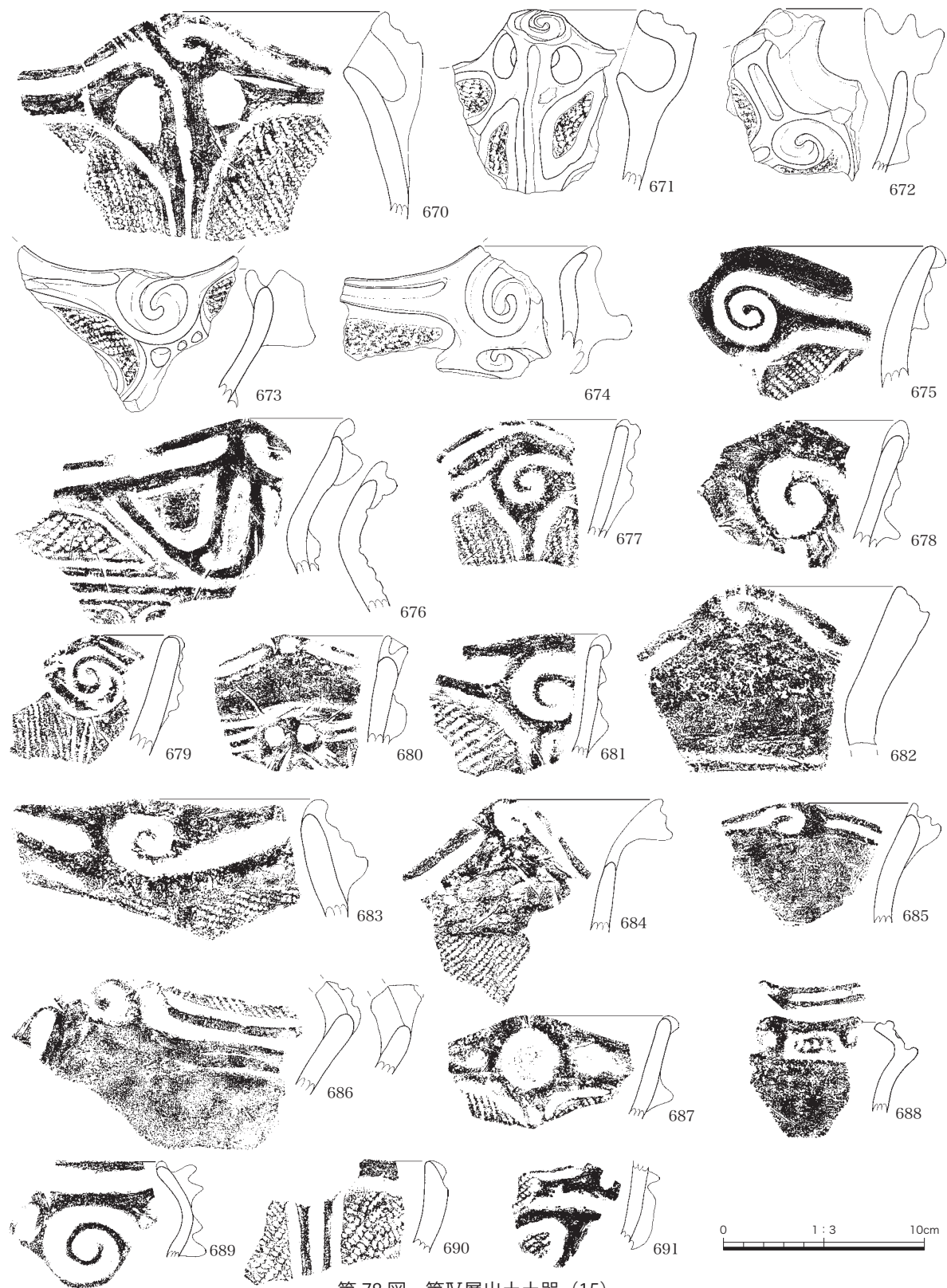
第8群 火炎系土器もしくは浄法寺類型の土器（第81図733～748、第82図749～764）

第Ⅲ層第5群に対応する土器群で、隆帯・半隆起線および沈線によってモチーフを施すものである。733は小型土器の口縁部に付く突起と思われる。表面及び側面に隆沈線で渦巻文を描く。734は体部に配された眼鏡状突起で、体部のモチーフは沈線で表現されている。735・737は胴部の地文に縄文を施し縦位の短沈線を施したもので、いわゆる浄法寺類型に比定される土器である。735は口縁部に鶏頭冠状の把手を4単位配した深鉢形土器で、把手および口縁部の一部と胴下半部から底部を欠損する。鶏頭冠状把手間の口端に鋸歯状の小突起を1つ配し、その直下に小把手が設けられる。口縁部の文様は基本的に突起部から延びる隆帯で渦巻文を描き、これに沿って沈線文を密に充填している。胴部との境には平行沈線が巡り、以下の胴部は縄文地文に4条1組の懸垂沈線を垂下させる。内面胴部中位以下には炭化物の付着がみられる。736～751は内彎する口頸部の破片である。基隆帯でS字状文や渦巻文を配し、それと同方向の半隆起線もしくは沈線で器面を充填する。738・749は基隆帯上にキザミを加えている。743・748は口縁直下に隆帯で鋸歯状の突



第77図 第Ⅳ層出土土器（14）

起を表現しており、以下の区画内には横位の蛇行隆帯などを貼付する。752～763はおもに沈線で文様を描く胴部破片である。半截竹管工具による縦位の平行沈線を充填するもので、一部に蛇行沈線や蕨手状のモチーフなどがみられる。752は渦巻文の起点部に三叉状の突起が付く。755は頸部と胴部の境に橋状把手が設け



第78図 第Ⅳ層出土土器 (15)

られている。764の体部は丁寧なミガキが施されており、内面には漆と思われる黒色および赤色塗彩が残る。

第9群 火焰型・王冠型以外の火炎系土器

第1類 筒形の器形で渦巻文を配し、空白部に縦方向の沈線を充填する土器（第82図765）

筒形をなす小型の土器で、掲載した破片から図上復元した。このほかに同一個体と思われる破片が4点ある。口縁部に無文部を有し、体部には半截竹管工具による平行沈線で両端に渦巻文が付くC字状のモチーフが配され、その隙間を縦位線で埋めている。器面は内外面とも磨かれ光沢がある。内面に炭化物の付着がみられる。

第2類 縦位の区画内に矢羽根状沈線を充填する土器

沈線もしくは隆沈線による渦巻文などを縦方向の沈線で連繫し、器面を分割する体部破片をまとめた。こ



第79図 第Ⅳ層出土土器（16）

れによってできた縦長の区画内に矢羽根状の沈線を充填する。沈線の太さで以下の2種に分けられる。

第1種 矢羽根状沈線が繊細なもの(第82図766～770)

器面を分割する沈線と比べ区画文内の沈線は細く、先端の細い工具を用いている。766は口縁部を無文とし、以下には渦巻文から垂下する縦位沈線と頸部を巡る横位沈線により体部を分割している。区画内には沈線で渦巻文などのモチーフを描き、空白部に矢羽根状の細沈線を充填する。内面には多量の炭化物が付着している。

第2種 矢羽根状沈線がやや太いもの(第82図771～779、第83図780～788)

第1種と比較して太い沈線でモチーフを描くものである。区画文は隆沈線で表現するものが多く、渦巻文が突出して突起状になるものもある。

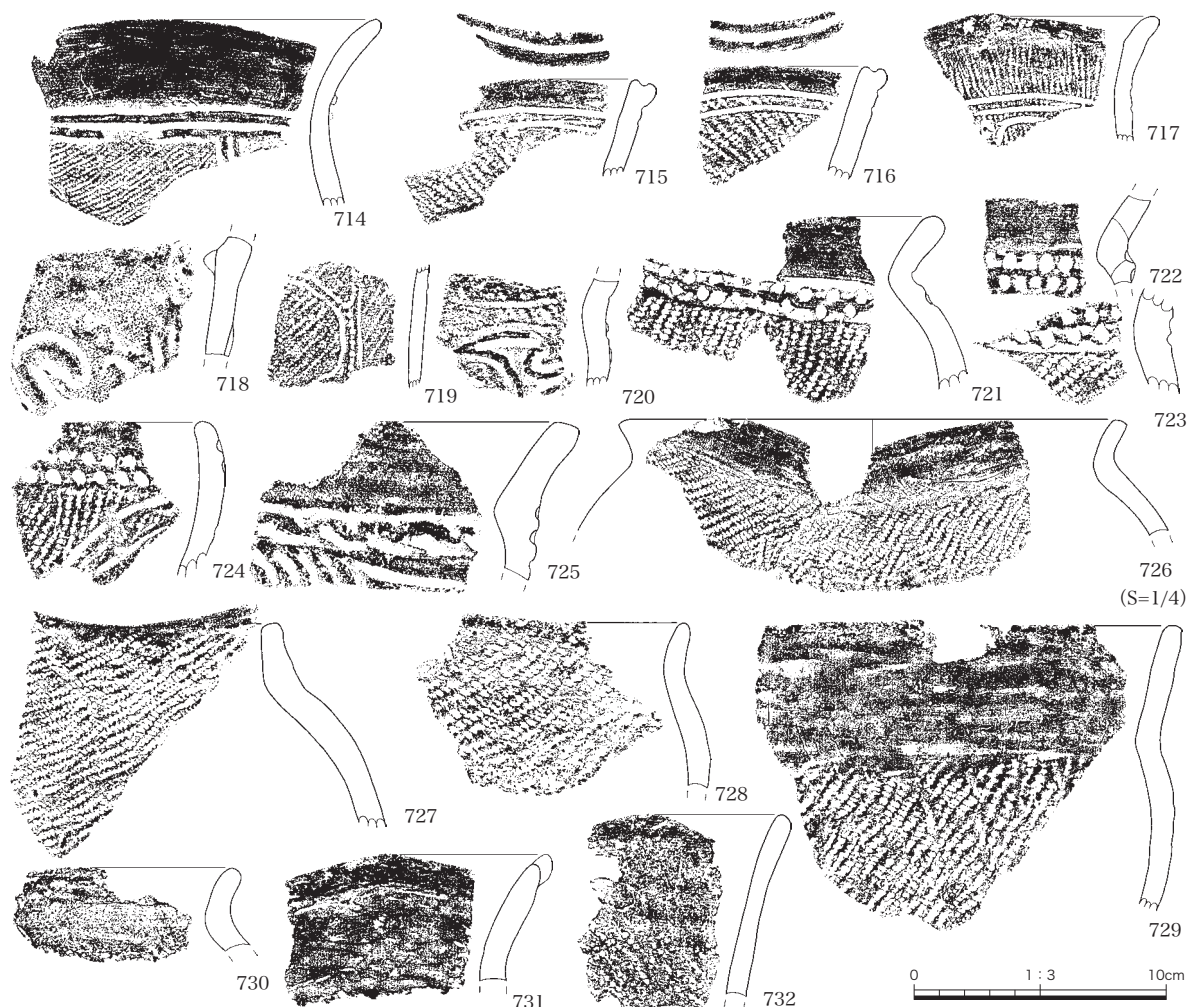
第3類 横位の区画内に矢羽根状沈線を充填する土器

第1種 矢羽根状沈線が繊細なもの(第83図789～791)

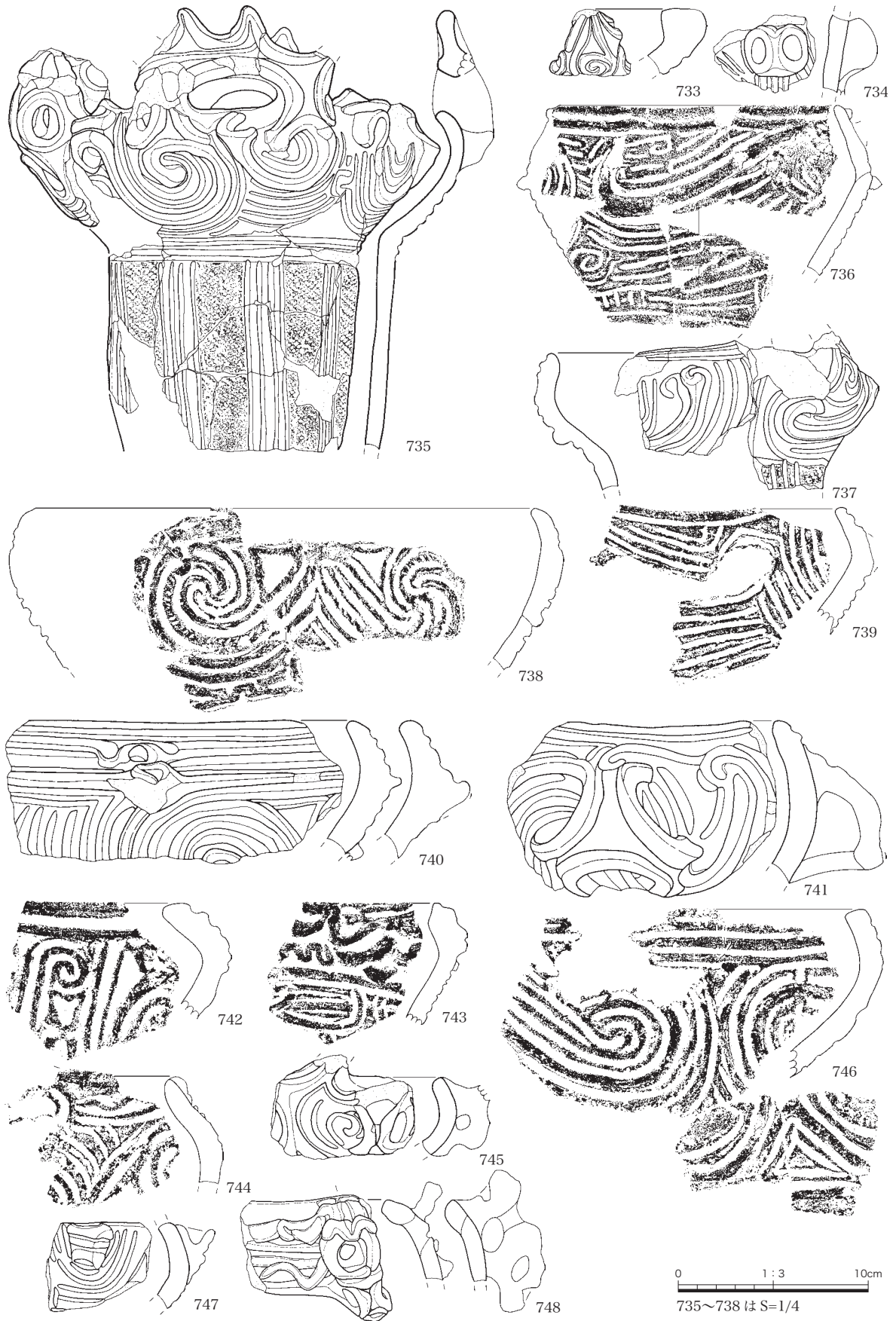
789～791はキャリパー形をなす小型の深鉢で、口頸部文様帯の地文に細い沈線を斜位もしくは矢羽根状に配している。789は区画内に沈線で剣先状のモチーフを描くもの、790・791は沈線の沿う隆帯で弧状のモチーフを配している。789・791は内面に多量の炭化物が付着している。

第2種 矢羽根状沈線がやや太いもの(第83図792～803)

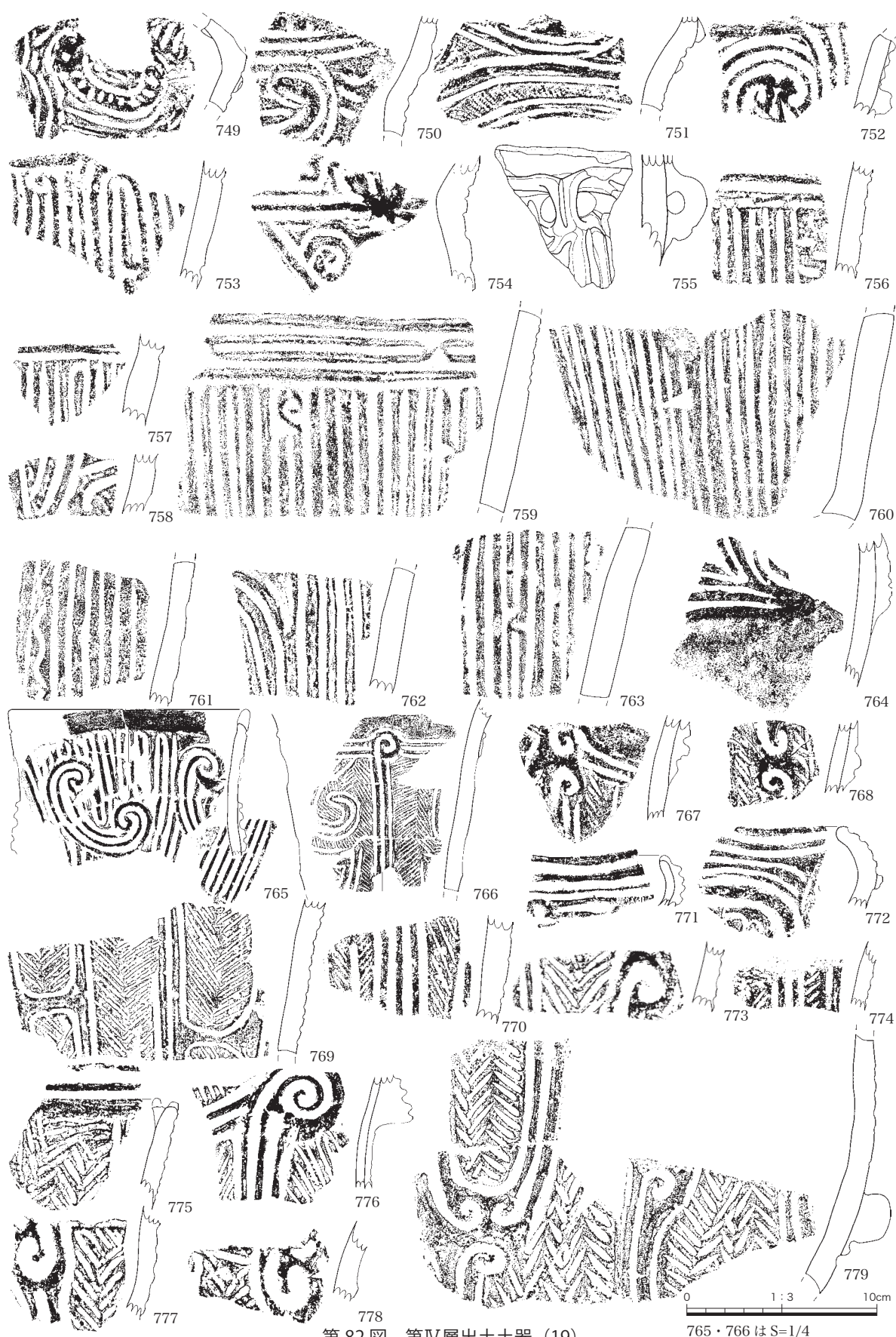
792～803は口頸部文様帯に第1種と比較して太い矢羽根状沈線を配す土器である。792～795は口縁部



第80図 第Ⅳ層出土土器 (17)



第81図 第Ⅳ層出土土器 (18)



第82図 第IV層出土土器 (19)

が内傾する甕形の土器で、794 と 795 は同一個体と思われる。口縁部に隆帯で渦巻文と区画文が形成され、この区画内に太い矢羽根状沈線を巡らしている。胴部は縄文地文に縦位の平行沈線などのモチーフがみられる。796 ～ 802 はキャリパー形の深鉢で、口縁直下を巡る幅狭の施文域に矢羽根状沈線を施している。

第4類 隆沈線による渦巻文を配し、地文に縄文を施す土器（第83図804）

804 は波状口縁の深鉢形土器で、口縁部から胴部上半部のおよそ 1/3 周が遺存する。口縁直下に半截竹管工具で3条の平行沈線を巡らせ、上の2条に同工具で斜め方向からの刺突を加えている。胴部の地文にはおもに2段LRの縄を縦方向に施文するが、部分的に斜め方向に施文している。波頂部下に隆沈線で蕨手状の



第83図 第IV層出土土器 (20)

第3章 確認した遺構と遺物

モチーフを施し、そこから派生した同様なモチーフを波底部に配している。波底部の渦巻文と口縁部文様帯の間には沈線でU字状のモチーフを施している。口縁部の外面と内面全体に炭化物の付着がみられる。

第5類 縦位の矢羽根状沈線のみがみられる破片（第83図805～809）

805～809は区画文を伴わない矢羽根状沈線のみがみられる破片。805～808は太く浅い施文がなされている。809は太さの異なる2種類の工具を用いてモチーフを描いている。

第10群 中期中葉の浅鉢形土器

第Ⅲ層第7群土器に対応する無文の浅鉢形土器及びそれに類する非煮沸用の土器である。器内外面は丁寧に磨かれ、赤色や黒色塗彩されたものが多くみられる。土器の特徴から以下のように大別した。

第1類 単口縁の無文の浅鉢（第84図810～813）

浅鉢形土器に付く無文の口縁部破片である。このうち、口端が角頭状をなす812は、外面が赤色、内面が黒色塗彩されている。

第2類 口縁を肥厚させる無文の浅鉢（第84図814～823）

口縁部の外面もしくは内面に隆帯を巡らせ口端を肥厚させる無文の浅鉢である。814と815は同一個体と思われる破片で、口端が僅かに肥厚・屈曲する。816と820は口縁部が括れ外面が肥厚する同一個体の破片で、口縁内面が屈曲し稜を有する。817は外方に大きく開く波状口縁で、波頂部が尖り口端は外側に屈曲する。821～823は口縁部が内傾するものである。823は口縁部の1/3周が遺存する浅鉢で図上復元した。口縁部の内面に隆帯を巡らせ、端部に平坦面を作り出している。外面は直立気味であるが、やや凹線状に窪んでいる。

第3類 口縁部下に沈線を巡らす浅鉢（第84図824・825）

内彎する口縁で、口縁部下に浅い沈線を巡らす無文の浅鉢である。825の内面には赤彩が施されている。

第4類 口縁部下に隆帯でモチーフを施す浅鉢（第84図826～828）

826～828は口縁部下の屈曲部に隆帯でモチーフを施すもので、このうち残存部からモチーフの全体が理解できるものは826のみである。太めの隆帯で横位S字状文を描いており、隆帯上に赤色および黒色塗彩が残る。

第5類 口縁部下に沈線で渦巻文や区画文を配す浅鉢（第85図829～832）

くの字状に内側に屈曲し、口縁が僅かに外反する器形をなす。この屈曲部を文様帯とし、楕円形区画文や渦巻文を描いている。829・830・832は赤色塗彩がなされている。

第6類 肥厚した口端に沈線で文様を施す浅鉢（第85図833～838）

口端を肥厚させ、この部分を文様帯としたものである。834は波頂部に渦巻文を配し、その脇に末端で渦を巻く横位の沈線が施される。835は渦巻文と中央に横位の沈線を施した楕円形区画文を配している。833・836は狭い楕円形区画文が描かれ、837は横位、838は縦位の沈線がみられる。

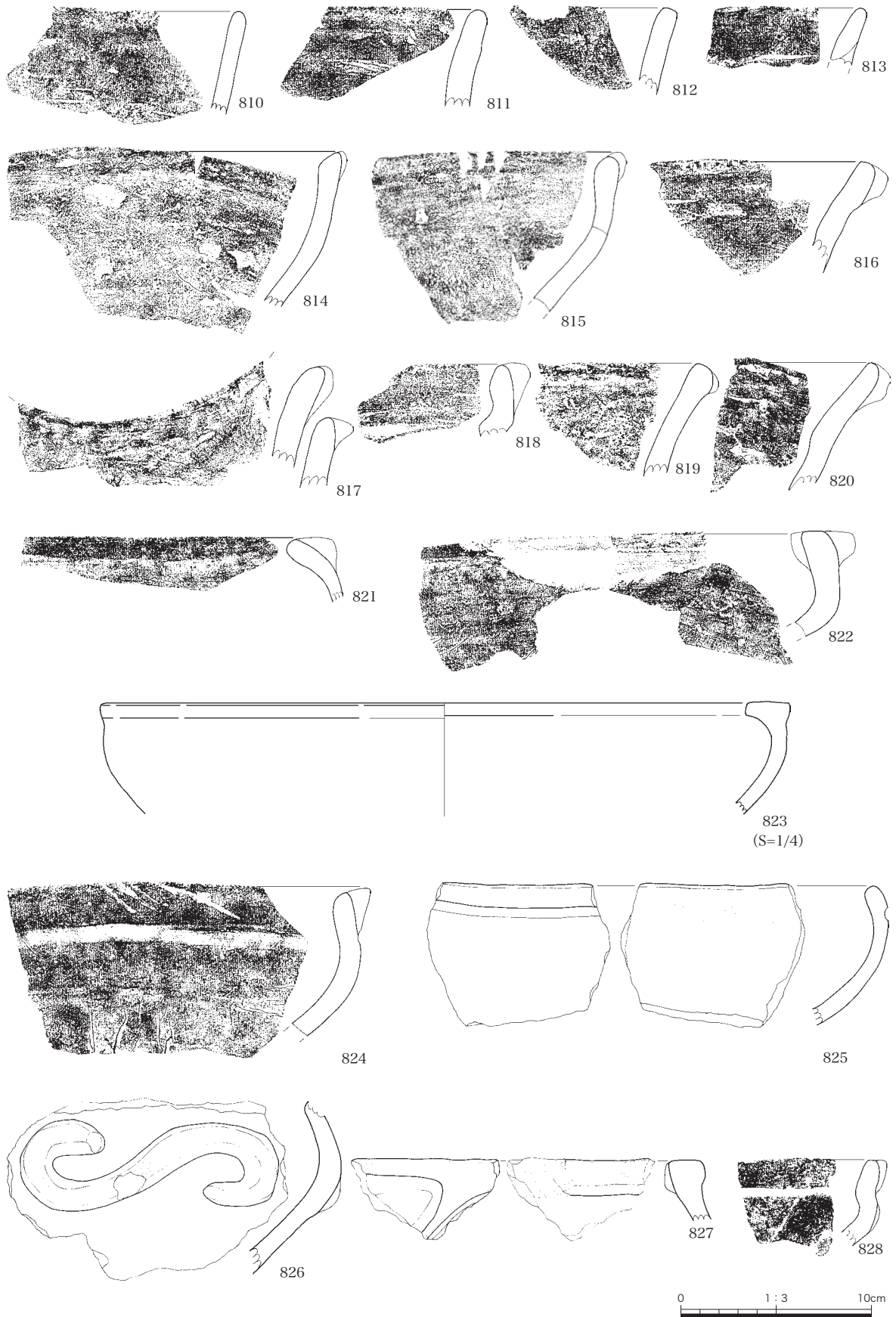
第7類 体部・底部の破片（第85図839・840）

器面が磨かれた浅鉢の体部と底部の破片である。840の内面には漆と思われる赤色および黒色塗彩が残る。

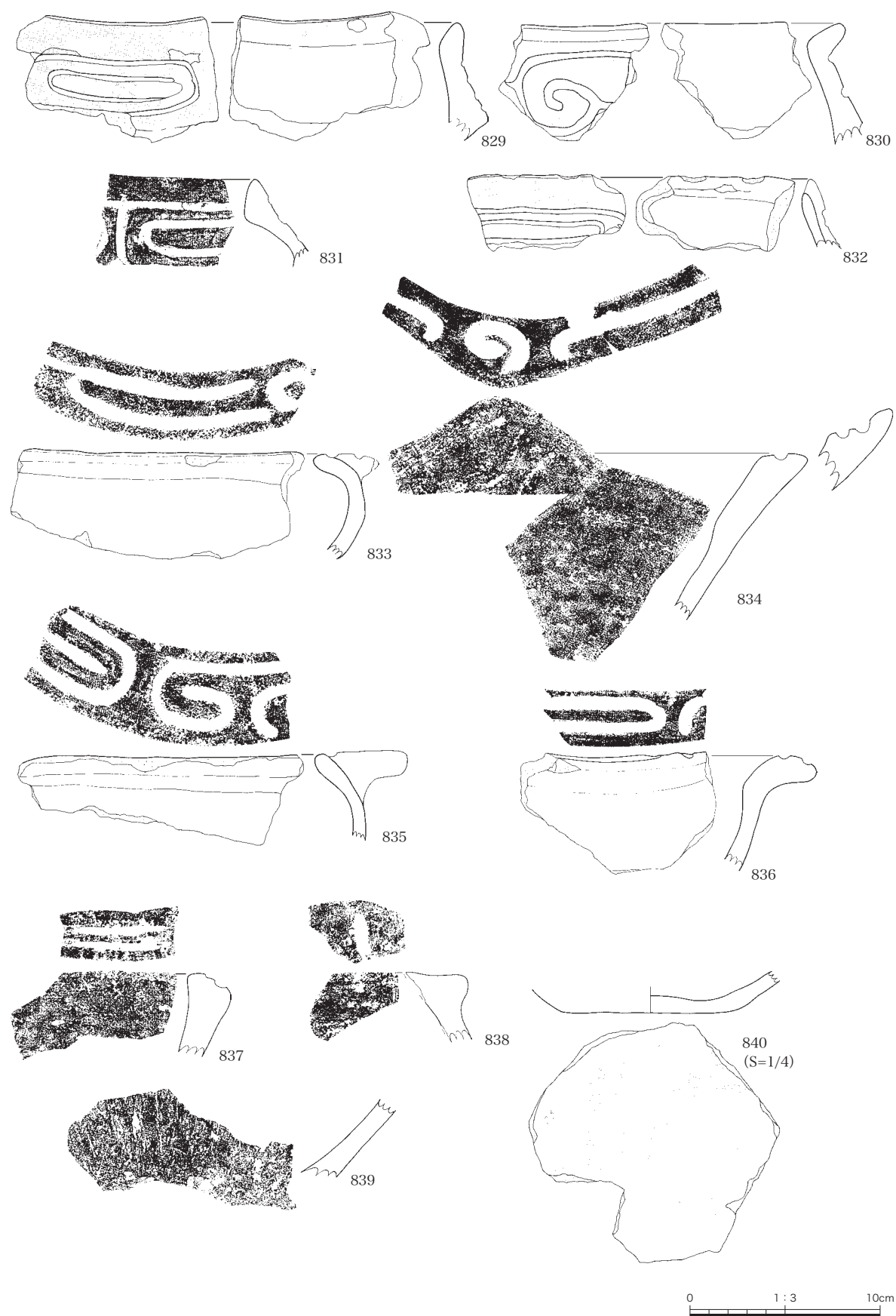
第11群 加曽利EⅠ式土器

第1類 大木式的な中空把手が付く口頸部（第86図841～843）

いわゆる大木式的な箱状またはこれに類似した中空の把手をもつ口頸部破片である。841はキャリパー形をなす深鉢形土器で、口縁部のおよそ1/2周が遺存する。口縁部には中空把手が1つ遺存しており、残存部から本来は2単位が対置していたものと思われる。この中空把手は正面の左右と下側、裏面の上下に孔を配しており、これらの孔に沿うように端部で渦を巻く沈線を施している。また、把手間には渦巻文などで加飾された前方に突出する突起を一对配している。口縁部文様帯は上下に1条の隆沈線を巡らせ区画しており、



第84図 第Ⅳ層出土土器 (21)



第 85 図 第Ⅳ層出土土器 (22)

突起と把手間には、文様帯下端の接点部に渦巻モチーフを有する隆沈線を配し楕円形区画を形成する。これらの突起及び渦巻モチーフの一部には剣先文が付される。頸部は無文で、胴部との境に3条の沈線を巡らす。胴部は縄文地文に3条の懸垂沈線がみられる。842・843は残っていないが、口縁部に中空の把手を有していたものと思われる。842は口頸部の中位よりやや上方に背を沈線で割った錨状の隆帯を巡らせ、口頸部文様帯を二分する。口頸下部は縄文地文に2条の隆帯で横位線と弧状のモチーフを施している。

第2類 東関東的な加曽利EⅠ式土器

1種 突起・把手（第86図844～849）

844・845は中空の大型把手である。844は外面に3孔、内面に1孔を有する立体的な把手で、口縁部の区画内に縦位の沈線を充填する。845は外面の上下に円孔を配し、周縁に隆帯と沈線で8字状のモチーフを描出する。両脇の空白部には斜位の沈線を充填する。内面は円孔2孔を眼鏡状に並置し、周囲を沈線で縁取っている。846は隆帯と沈線で、847は沈線でモチーフを表す。848は山形状の把手で、頂部下には縦位の沈線を密に施し、中央の円孔に沿って沈線を巡らせる。また、把手下の口縁部には、残存部から交互刺突文を巡らしていたものと思われる。849は眼鏡状突起で、円孔及びその周囲に沈線でモチーフを描いている。

2種 口頸部文様帯に横位の交互刺突文を配す土器（第87図850～860）

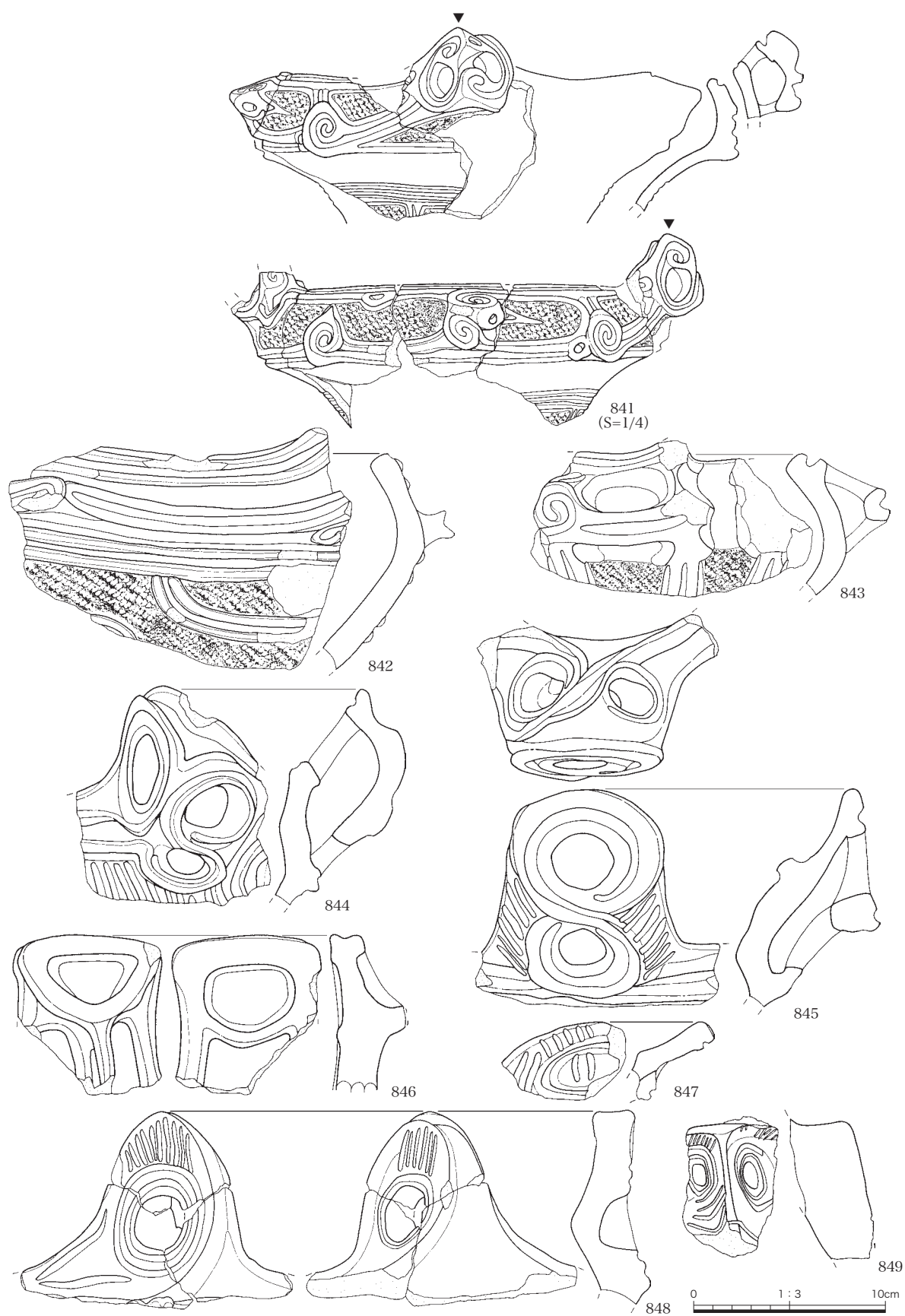
850は口縁部がくの字状に外反し、甕に近い形状になると思われる大型の破片。口縁は小波状をなし、波頂部下には渦巻モチーフの施された橋状把手が付く。口縁部文様帯は、上半部に橋状把手から蛇行隆帯を2条巡らせ、隆帯下側の一部に刺突ないしは押捺を加え、交互刺突文に類似したモチーフに仕上げている。下半部は屈曲部に2条の連続刺突文を巡らせ体部との境としている。中央の蛇行隆帯から3条の短い隆帯を垂下させて文様帯を分断しており、この隆帯は体部のモチーフと連繋する。851は前方に突出する山形の橋状把手を有し、把手から派生する隆帯によって作出された口縁部文様帯の上端に交互刺突文がみられる。852～857は口縁直下から半截竹管工具による平行沈線と交互刺突文を巡らす口縁部付近の破片である。852と854は同一個体で、852には残存部からみて中空の把手が配されていたものと思われる。把手部から延びる端部に渦巻文が付された隆帯と沈線により、口縁部文様帯を分断している。853と857は同一個体で、口縁部に円環を連ねた突起が配される。いずれも口縁部文様帯下端に隆帯を巡らせ、無文の頸部との境としている。858～860は眼鏡状突起部を中心に、そこから連なる区画文が展開する平口縁の土器である。860は突起部から隆帯を巡らし胴部との区画を作出する。区画内には交互刺突文とキザミを横走させる。

3種 口頸部文様帯の地文を縦位の沈線とする土器（第87図861～864）

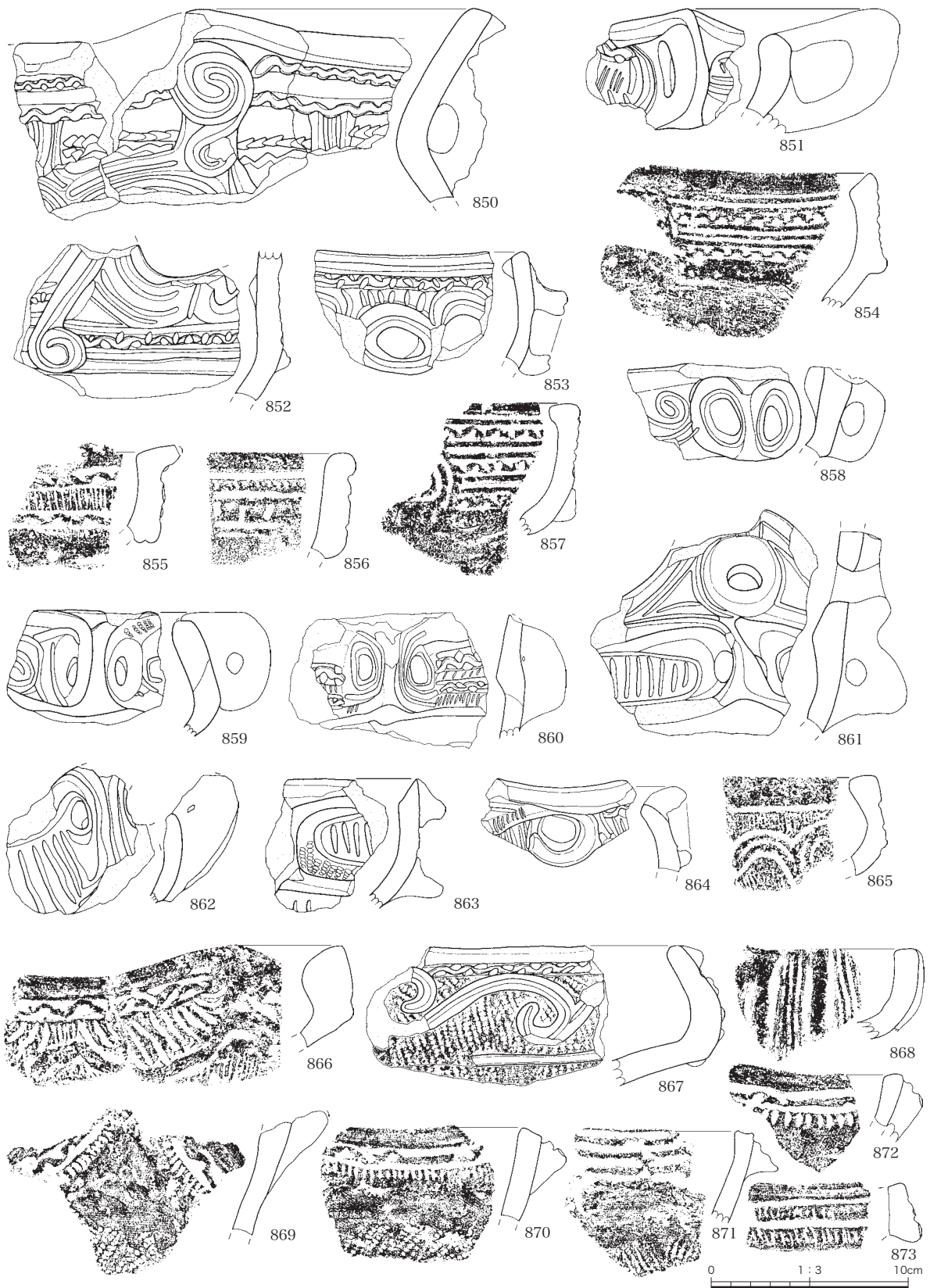
隆帯で区画された口縁部文様帯の地文に縦位の沈線を施すものである。861は円孔を有する把手が付く口縁部破片である。把手部は周囲に背割れの隆帯を巡らせ、円形文を中心に上部には縦位沈線を施し、左右には三角形の区画文を表出する。口縁部文様帯は把手部から連繋した隆帯により、小把手とその脇に楕円形区画が作出される。区画内は隆帯に沈線に沿わせ、空白部に縦位沈線を充填する。862は把手上にも沈線を施しており、863は隆帯による楕円形区画内に縦位沈線を施す。864は口縁直下に隆帯で横位S字状ないしは渦巻文がみられるもので、口縁に沿って交互刺突を巡らせ、以下の空白部には縦位沈線を充填する。

4種 内彎気味の口頸部に、隆帯でS字状、W字状のモチーフを配す土器（第87図865～867）

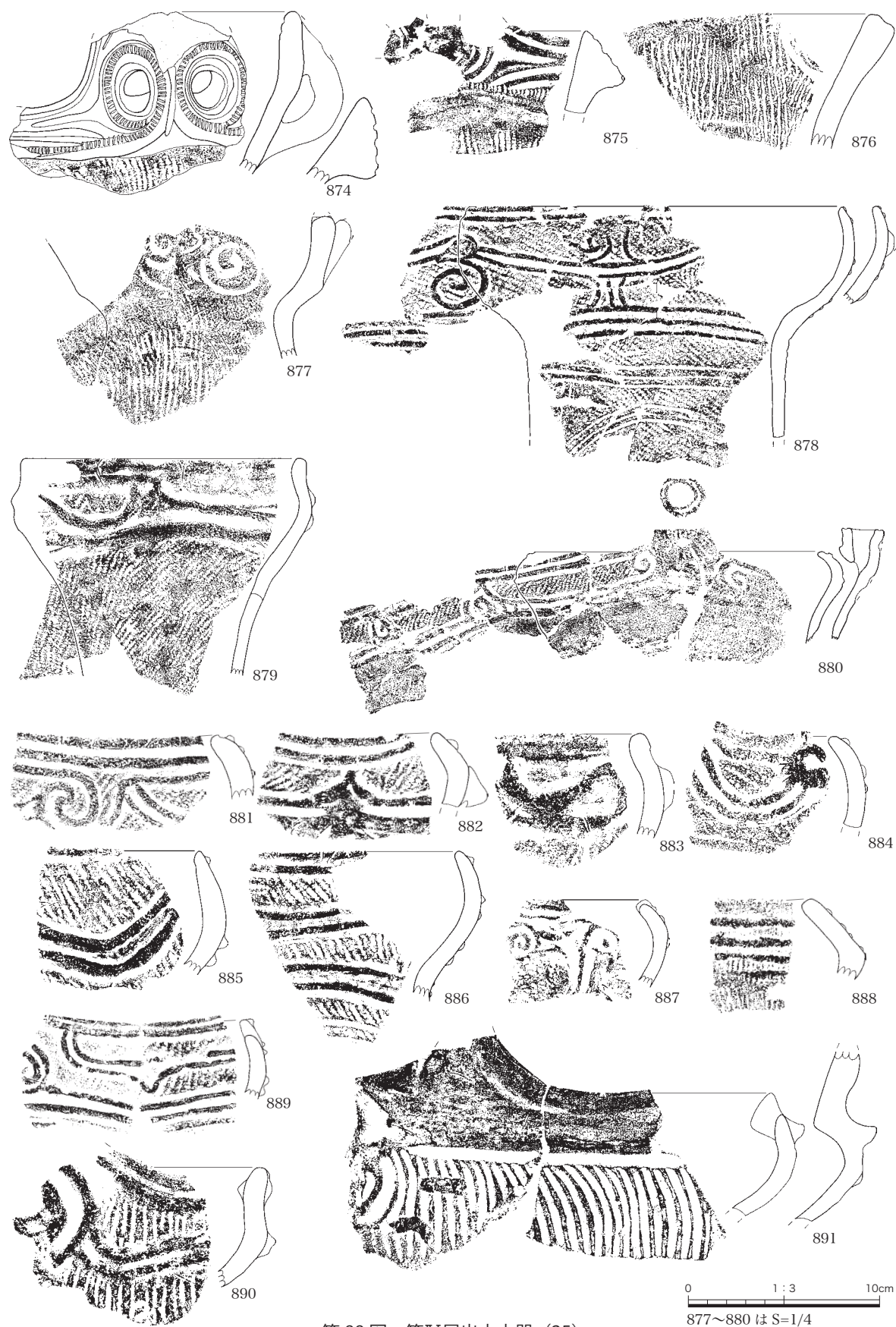
865は口縁に沿って1条の沈線を巡らせ、以下には3条の沈線で半円または弧状のモチーフを展開させる。空白部には縦位の条線を充填する。866はなだらかな波状をなす口縁部で、口縁に沿って交互刺突文を巡らせ、口縁部文様帯下端は緩やかに蛇行する1条の隆帯で区画する。口縁部文様帯内部は太めの縦位沈線を充填するが、口縁部文様帯の幅が狭い部分や頸部には細い条線を施している。867は口縁部文様帯の上下を1条の



第86図 第Ⅳ層出土土器 (23)



第 87 図 第Ⅳ層出土土器 (24)



第88図 第Ⅳ層出土土器 (25)

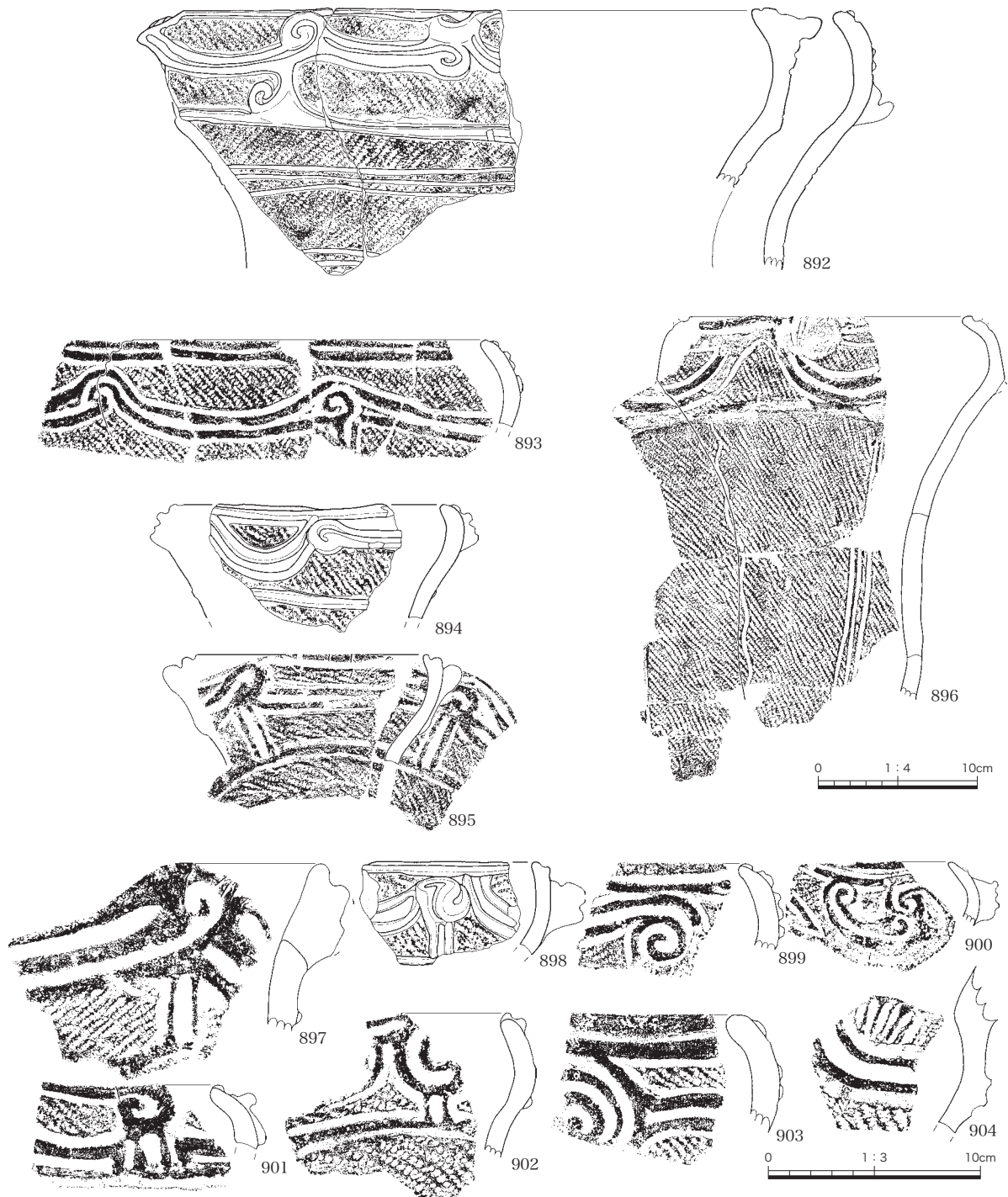
隆帯で画し、内部に背を沈線で割った隆帯で横S字状のモチーフを配している。文様带上端に沿って交互刺突文を巡らしている。地文の縄文は、2段LRの縄による縦位施文である。

5種 口頸部文様帯の狭い施文域に勝坂式起源の文様を配す土器（第87図868）

口縁部が肥厚・内彎するもので、縦走する撚糸文を地文とし、沈線の沿う縦位の隆帯を貼付する。

6種 朝顔形に開く器形の口端に、文様を配す土器（第87図869～873）

869～873は外面に隆帯を貼付し、鐙状に肥厚した口端の平坦部に文様を施す土器である。外側にキザミ



第89図 第Ⅳ層出土土器 (26)

が沿い、沈線及び交互刺突文などでモチーフを描出する。

7種 口頸部に貼付隆帯を配す土器（第88図874～877）

874・875は眼鏡状をなす中空の把手部で、キザミが施された隆帯と環状部に巡る沈線で加飾される。876・877は同一個体で、波状口縁の波頂部に隆帯を貼付し、その両脇に沈線で渦巻チーフを施す。胴部には1段Rの撚糸文を縦位に施文する。いずれも内面に多量の炭化物が付着している。

第3類 口頸部文様帯に貼付隆帯でモチーフを配す土器（第88図878～891）

粘土紐を貼付して渦巻文、弧線文、波状文などのモチーフを描くものを本類とした。器形はいずれもキャリパー形をなす深鉢形土器の口頸部付近の破片である。878～889は縄文を地文とする土器である。878は口縁部文様帯上端に2条、下端に3条の隆帯を巡らしている。口縁部文様帯には2条の隆帯で突起状となる渦巻文や、それを起点として横位に展開するモチーフを配している。突起下は1条の隆帯で渦巻文を配し、突起と文様帯下端の隆帯を繋いでいる。また、突起間は上段を渦巻文で、下段を3条の縦位の隆帯で繋いでいる。頸部括れ部には3条の沈線を巡らせ、胴部との境としている。胴部には3条1組の沈線でモチーフを描いている。879は口縁部文様帯の上下に太い1条の隆帯を巡らす。口縁部文様帯には弧状の隆帯を配し、区画文を作り出している。880は口縁部に筒型の把手を配す土器で、口頸部の約1/2周が遺存する。把手は上方に貫通孔を有する注口状をなす。口縁部文様帯は上下段に1条の隆帯を巡らせ文様帯を画す。口縁部文様帯は1条の隆帯で渦巻文と区画文を配し、またこれらを文様帯下段の隆帯と短い縦位の隆帯で繋いでいる。頸部は無文で、括れ部に胴部との境をなす横位沈線の一部がみられる。口縁部内外面には多量の炭化物が付着する。890・891は縦位の短沈線を地文とする土器で、残存部からそれぞれ把手を有していたものと思われる。891は口縁部の内面に断面三角形の隆帯を貼付し口縁を肥厚させる。外面には口頸部の中位よりやや上方に、下側に沈線が沿う隆帯を巡らせ口頸部文様帯を二分する。この隆帯と口縁を繋ぐように中空の把手が配されていたものと思われる。口頸部文様帯上半を無文とし、下半は弧状および縦位の沈線を充填した上に剥離して部分的に残るのみであるが、貼付隆帯でモチーフを施している。内面には多量の炭化物が付着する。

第4類 口頸部文様帯に隆沈線でモチーフを配す土器（第89図892～904）

隆帯に沈線が沿う、いわゆる隆沈線でモチーフを描くものを本類とした。器形はいずれもキャリパー形をなす深鉢形土器の口頸部付近の破片である。892～895・897～903はS字状文・渦巻状文を基調とした文様を配す土器である。892は口縁部のおよそ1/4周が遺存する。口縁部は隆沈線で画され、口縁部文様帯上段には前方に突出した渦巻モチーフを有する突起を4単位配している。また、文様帯下段には上段の突起間の位置に同モチーフの突起を対置させていたものと思われる。突起間は接点部に渦巻モチーフを有する2条の隆沈線で楕円形区画を形成する。括れ部には3条の沈線を2段巡らせ、胴部文様帯との境としている。896は口縁部の上下を隆沈線で画され、文様帯の内部に2条の隆沈線で横位の波状文を巡らしている。胴部は3条1組の平行沈線と1条の蛇行沈線を垂下させる。内面の胴部下位に炭化物の付着がみられる。904は隆沈線で画した文様帯内部の地文に縦位の短沈線を密に施している。

第5類 懸垂文を配す体部破片

1種 縦位の沈線を垂下させるもの（第90図905～914、第91図915～927）

905～927は縄文を地文とし、2条ないしは3条1組の平行沈線や蛇行沈線などで懸垂文を施すものである。このうち、908～910、911・912・917は同一個体と思われる。905は口縁部文様帯下端を巡る隆帯から胴部下位までが遺存する。胴部の地文は2段RLの縄による縦位施文で、3条の単沈線と1条の蛇行沈線を交互に垂下させる。906は頸部括れ部に横位の蛇行沈線とその上下を画した2条の平行沈線を配している。以下



第90図 第Ⅳ層出土土器 (27)

第3章 確認した遺構と遺物

の胴部には2条の単沈線と1条の蛇行沈線を交互に垂下させる。

2種 縦位の隆帯を垂下させるもの(第91図928～931)

縦位の隆帯を懸垂文として垂下させる胴部破片で、いずれも縄文地に2条の隆帯を垂下させている。隆帯脇に沈線に沿わせるもの(928・930・931)と沿わせないもの(929)がある。

第6類 加曽利EⅠ式新段階～Ⅱ式の口縁部破片

1種 口頸部文様帯に隆沈線で渦巻文と区画文を交互に配す土器

(第92図932～937、第93図941～949)

口頸部文様帯に隆沈線で渦巻文と連繋する区画文を交互に配したもので、多くはキャリパー形をなす深鉢形土器の破片である。隆沈線でモチーフを描出する点では第4類と同じであるが、本類の隆沈線は隆帯が扁平化し、沈線へなだらかに移行している。区画内の地文には縄文を多様するが、949は2段の刺突列で区画内を埋めている。932は凹線による楕円形区画の間に、上下に配した凹線が延びて渦巻状となるモチーフを展開するものであるが、下段の凹線は端部の渦巻モチーフと分断している。胴部には3条の沈線間を磨消した懸垂文と蛇行沈線を垂下させる。933は口縁の約1/4周が遺存する。区画文は2条の隆沈線で斜位に分断されるが、渦巻文の脇は1条の隆沈線で分断される。胴部には縄文地文に2条の沈線間を磨消した懸垂文を垂下させる。934は口縁の約1/4周が遺存する。このほかに、同一個体と思われる破片が1点ある。前方に突出する突起の痕跡が残っており、これによって口縁部文様帯を4分割していたものと思われる。区画内は縄文地文に隆沈線による渦巻文とそこから延びる2条の隆沈線で斜位に分断される。口縁部文様带上端以外の隆帯上には円形の刺突が施されている。また、図上には示していないが、同一個体と思われる破片から、胴部との境に3条の沈線を巡らしていたものと考えられる。936は口縁部文様帯の上下端に1条の隆沈線を巡らし、文様帯を表出する。文様帯の上端には前方に突出した突起が付され、内側の沈線から延びる渦巻文で加飾される。頸部は縄文地文で、胴部との境には間に円形の連続刺突を施した2条の沈線を巡らしている。内面には多量の炭化物が付着している。937は胴部上位が内彎し、一端括れて口縁部が大きく外反する鉢形土器である。口縁部は無文で、括れ部に連続刺突を巡らす。胴部上位には渦巻文と連繋する長方形区画文を配している。区画内は縄文地文に斜位の沈線を充填する。

2種 楕円形区画文を並置する土器(第93図950・951)

楕円形区画文を並置する平口縁の深鉢形土器で、951には突起が付されていた痕がみられる。

3種 口頸部文様帯に隆沈線で弧状区画文を配す土器(第92図938、第93図952～954)

938は胴部以下を欠くキャリパー形の深鉢形土器である。口縁部文様帯には弧状の隆沈線を連続して配し、区画文を作出する。弧状の隆沈線は口縁部文様帯の上端に接するが、下端には接しておらず、渦巻文と縦位の短い隆帯で繋いでいる。口縁部文様帯直下を無文とし、胴部との境に3条の沈線を巡らす。欠損しているが、この沈線と口縁部文様帯下端を繋ぐように、渦巻文で加飾された把手が2単位対置していたものと思われる。口縁部の内面には多量の炭化物が付着している。952は片側のみに沈線が沿う隆沈線で口縁部文様帯を表出する。口縁部文様帯に配された弧状の隆帯は、文様帯の上下端に接しており、上端は口縁から突出して山形の突起状をなしている。953・954は口縁に沿って1条の隆沈線を巡らせ、口縁部文様帯には2条の隆沈線で弧状のモチーフを描いている。

4種 口頸部の区画文内に縦位の短沈線を充填する土器(第92図939・940、第93図955～964)

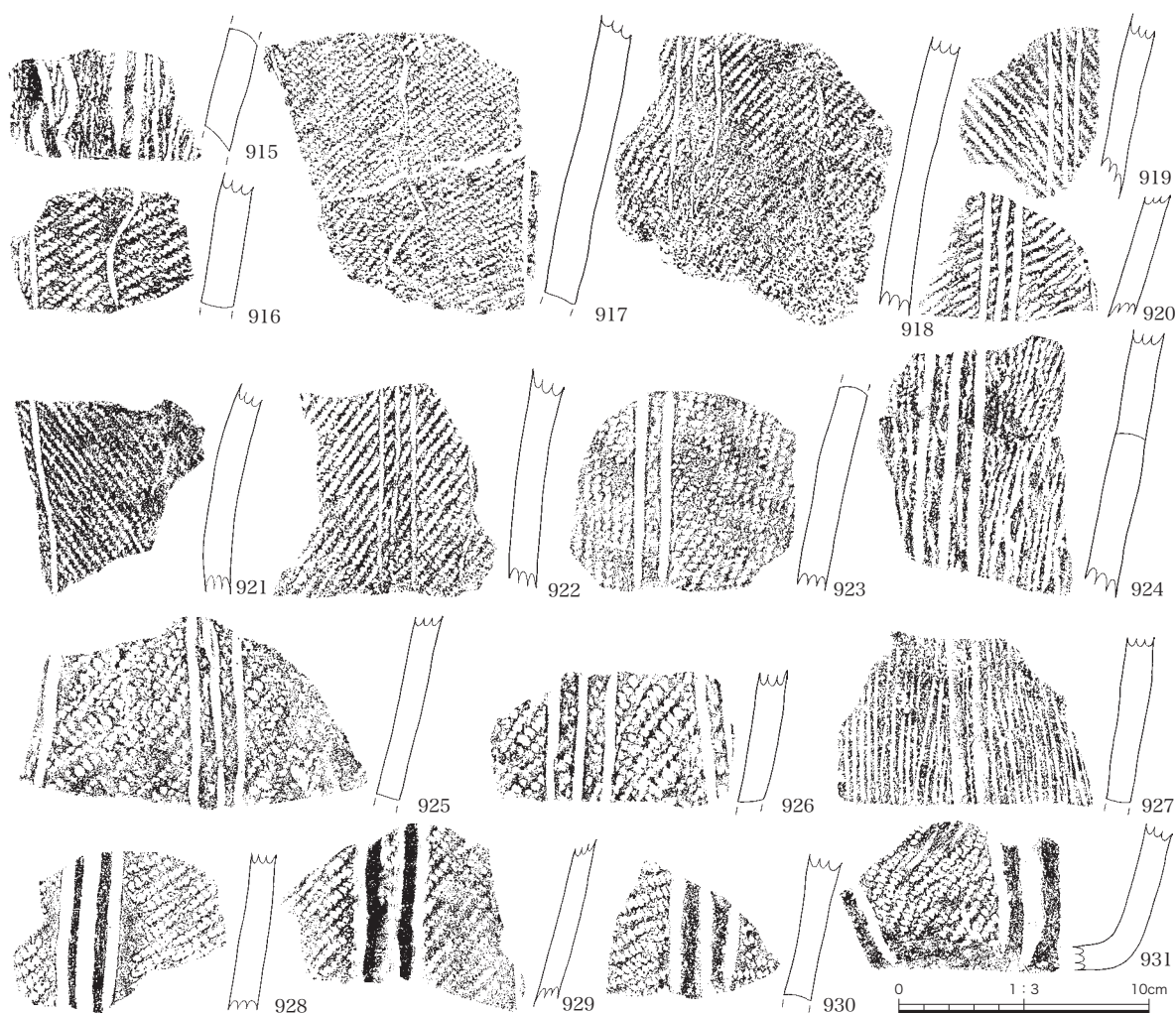
939は内側に沈線が沿う隆帯で口縁部文様帯を画し、剥離しているが渦巻文で文様帯を区画している。胴部は縄文地文に2条の懸垂沈線がみられる。940は口縁に円孔を有する突起が付された深鉢形土器である。

口縁部文様帯は1条の隆沈線で画され、文様帯内部は2条の隆沈線で描いたクランク文が展開する。955・964は楕円形区画文の間に円形の刺突を施す。956は区画内の沈線が延びて渦巻文を形成する。957は文様帯の内部に1条の隆沈線で横位の波状文を巡らしている。胴部は密な条線を地文としている。

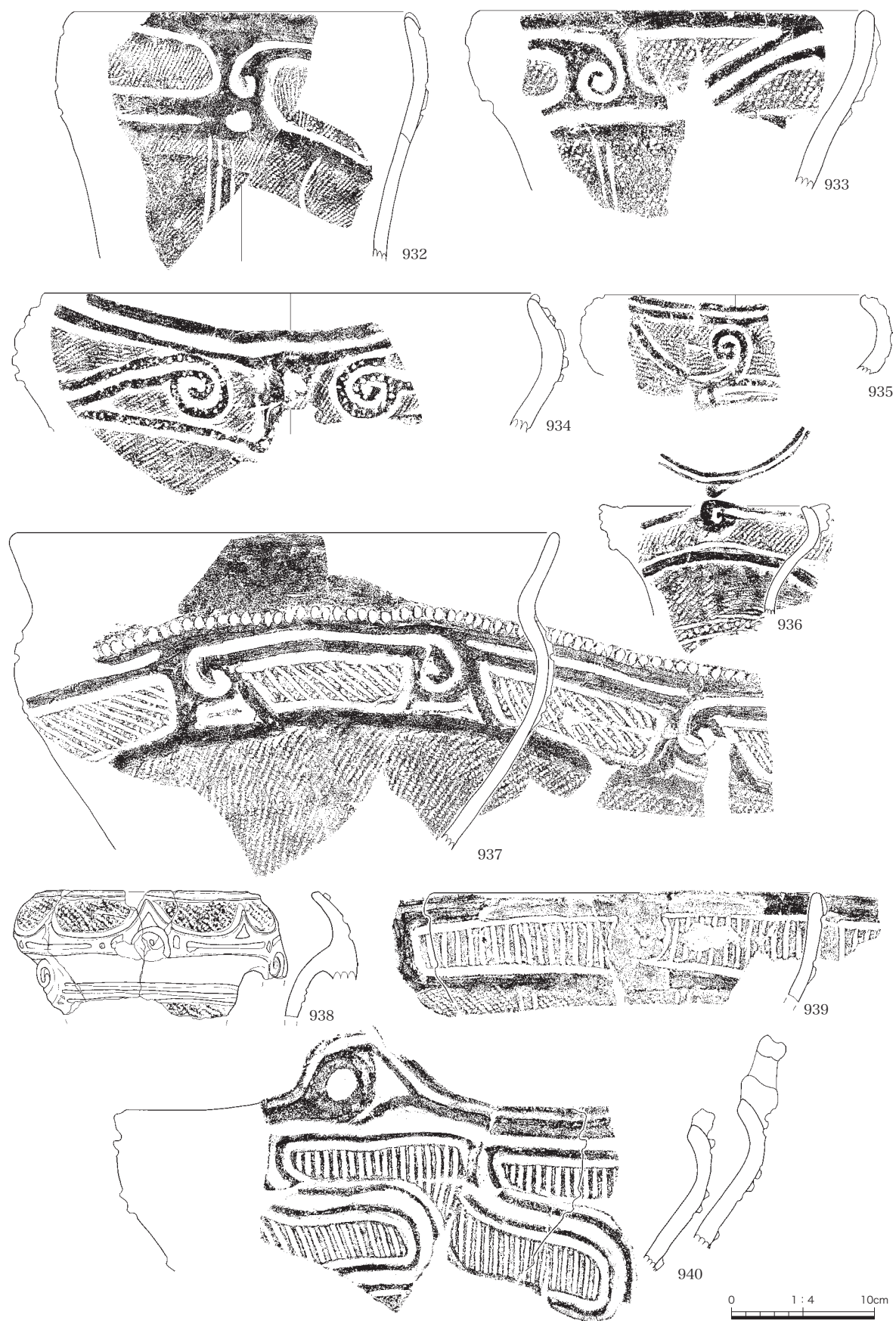
第12群 加曽利EⅡ～Ⅲ式土器

第1類 口頸部文様帯に区画文と渦巻文・円文を配す土器（第94図965～967、第95図968～991）

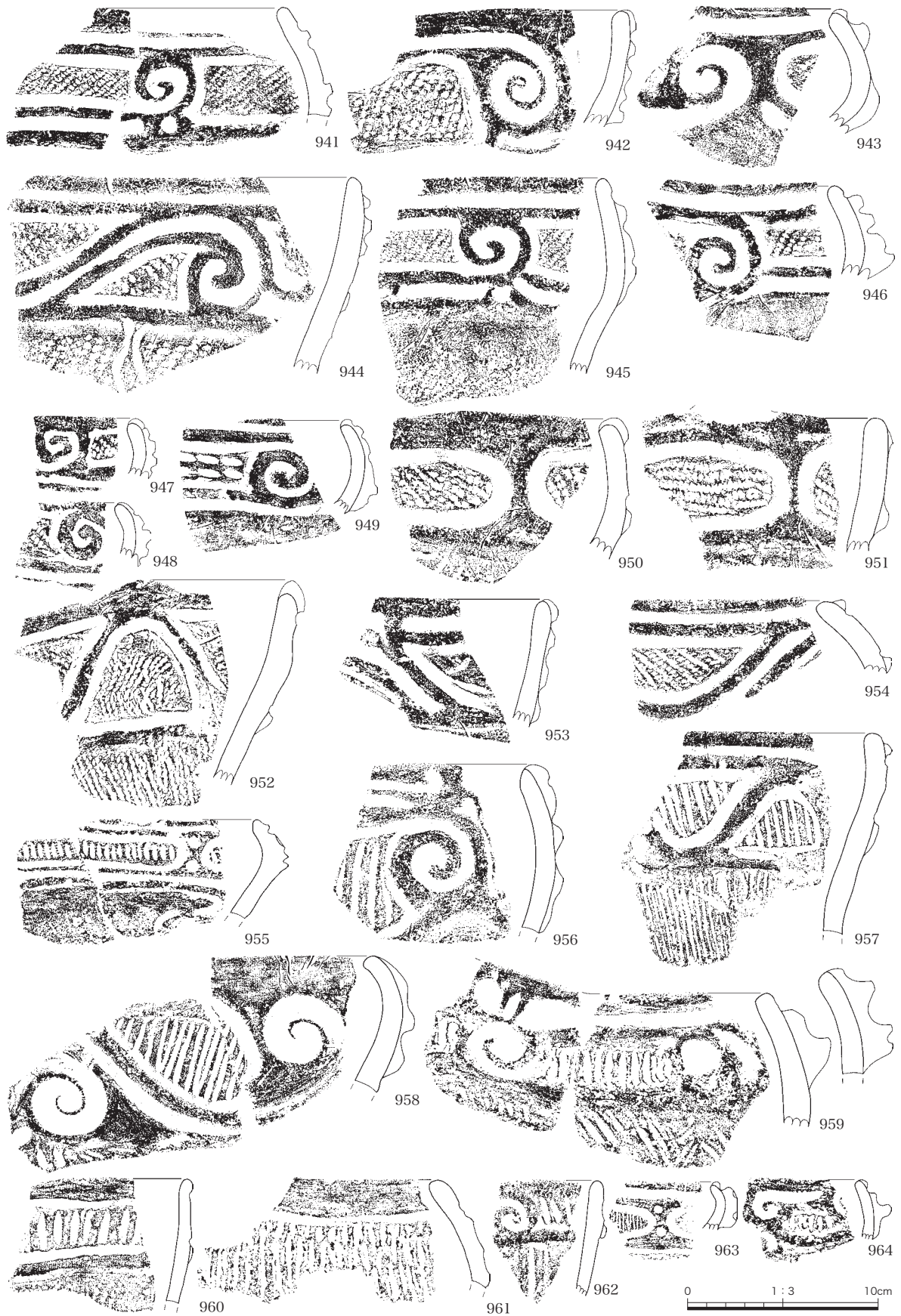
本群は、概ね第Ⅲ層第11群に対応する土器群である。口頸部文様帯に渦巻文や楕円形区画文、円形区画文を配すもので、器形は屈曲が弱くなだらかなカーブを描くキャリパー形の土器が主体である。文様表現により、低く幅広の隆帯と凹線で文様を施すもの（966～978）、凹線ないしは沈線で文様を施すもの（965、979～991）に分類される。口縁部は平口縁と波状口縁があり、波状口縁には波頂部に突起や把手を配すものもある。968の波頂部には、沈線によって渦巻文の施された貫通孔を有する突起と橋状把手が付される。967・969は欠損しているが、波頂部下に貫通孔と把手の剥離した痕がみられる。965はSI-1239の床面付近から出土した深鉢形土器で、口縁部から胴部上半までのおよそ1/3が遺存する。口縁部は4単位の波状をなし、口縁部と区画文の間に1条の凹線を巡らす。波頂部下に沈線で円形区画文、その両脇に楕円形区画文を配す。胴部は縄文地文で波頂部下に磨消懸垂文を垂下させる。その脇には、上下で相対するU字状と逆U字状のモチーフを垂下させる。内外面には炭化物の付着がみられる。



第91図 第Ⅳ層出土土器（28）



第92図 第Ⅳ層出土土器 (29)



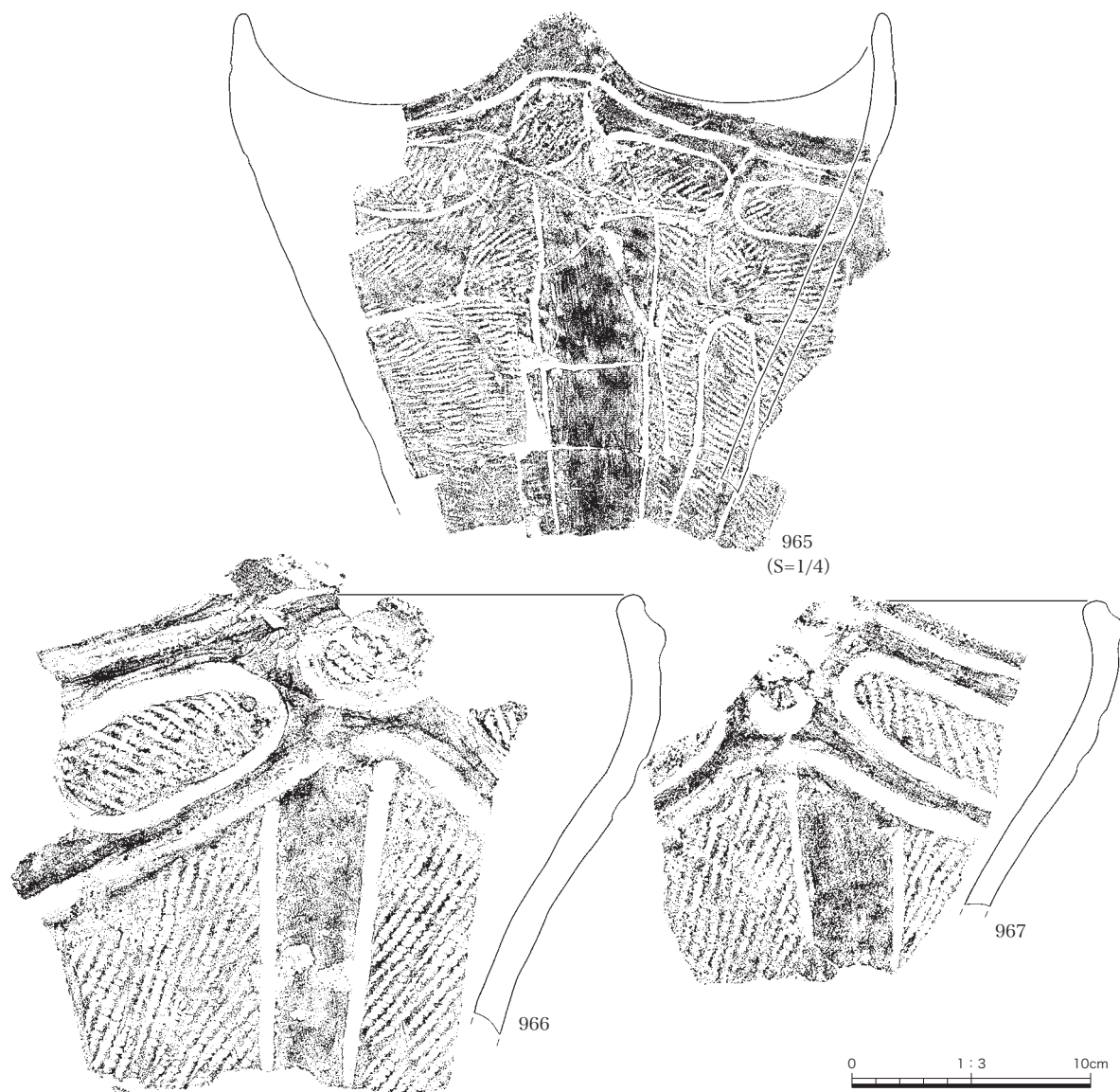
第 93 図 第Ⅳ層出土土器 (30)

第2類 吉井城山タイプの土器（第95図992・993）

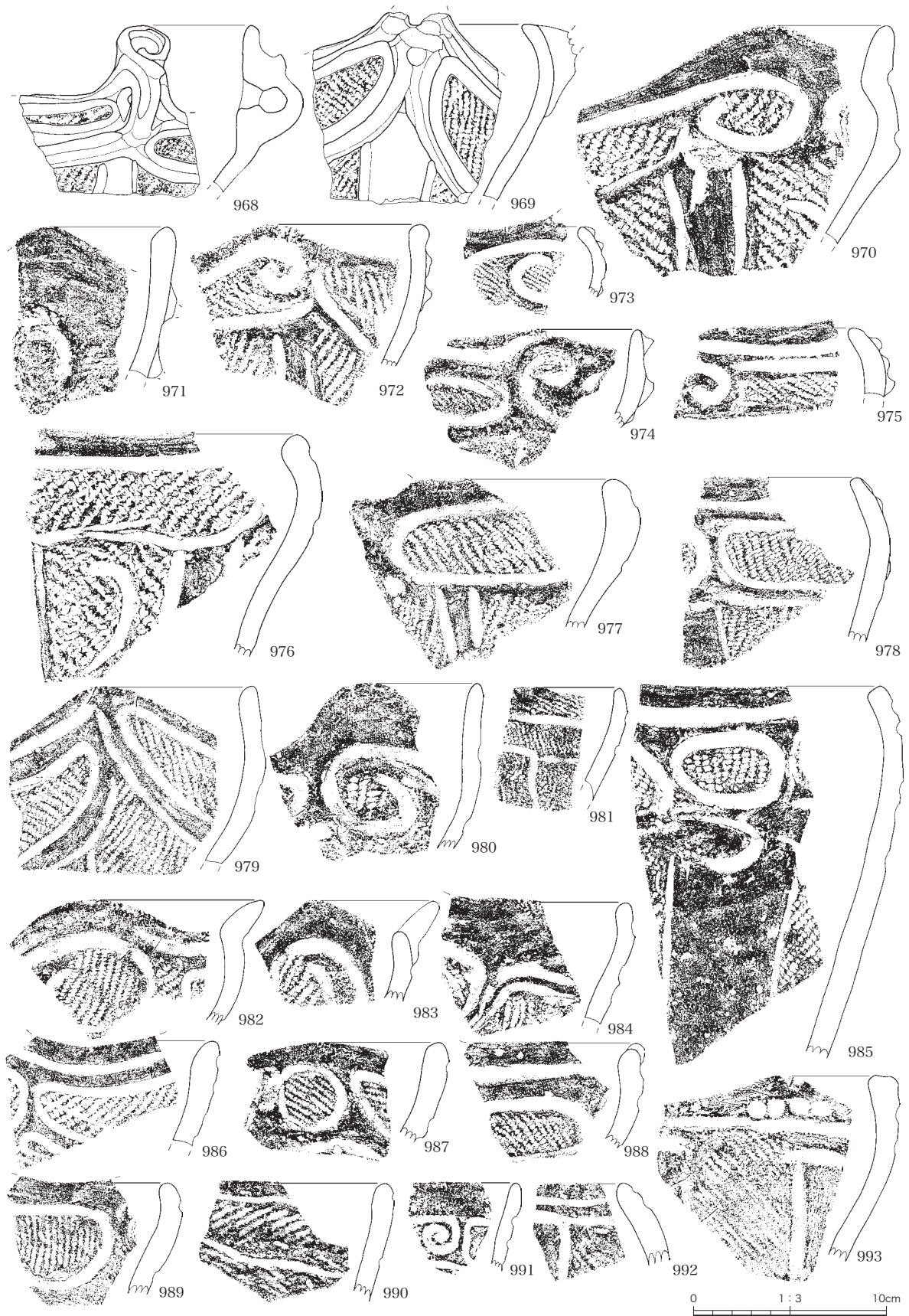
992は口縁部に2条の沈線を巡らせ、下段の横位沈線と冂字状モチーフの上端が接している。冂字状モチーフの内部は磨消されている。993は口縁部に低い突起が配される平口縁の土器で、突起下には円形刺突を施している。口縁部には1条の沈線を巡らせ、以下の胴部には沈線で冂字状のモチーフを配し、その内部を磨消して無文帯としている。いずれも縄文は2段LRの縄による縦位施文である。この冂字状モチーフは全体として弧状モチーフの一部とも考えられるが、懸垂文として胴部下位まで垂下する可能性もある。

第3類 体部に磨消懸垂文を配す土器（第96図994～1013、第97図1014～1035）

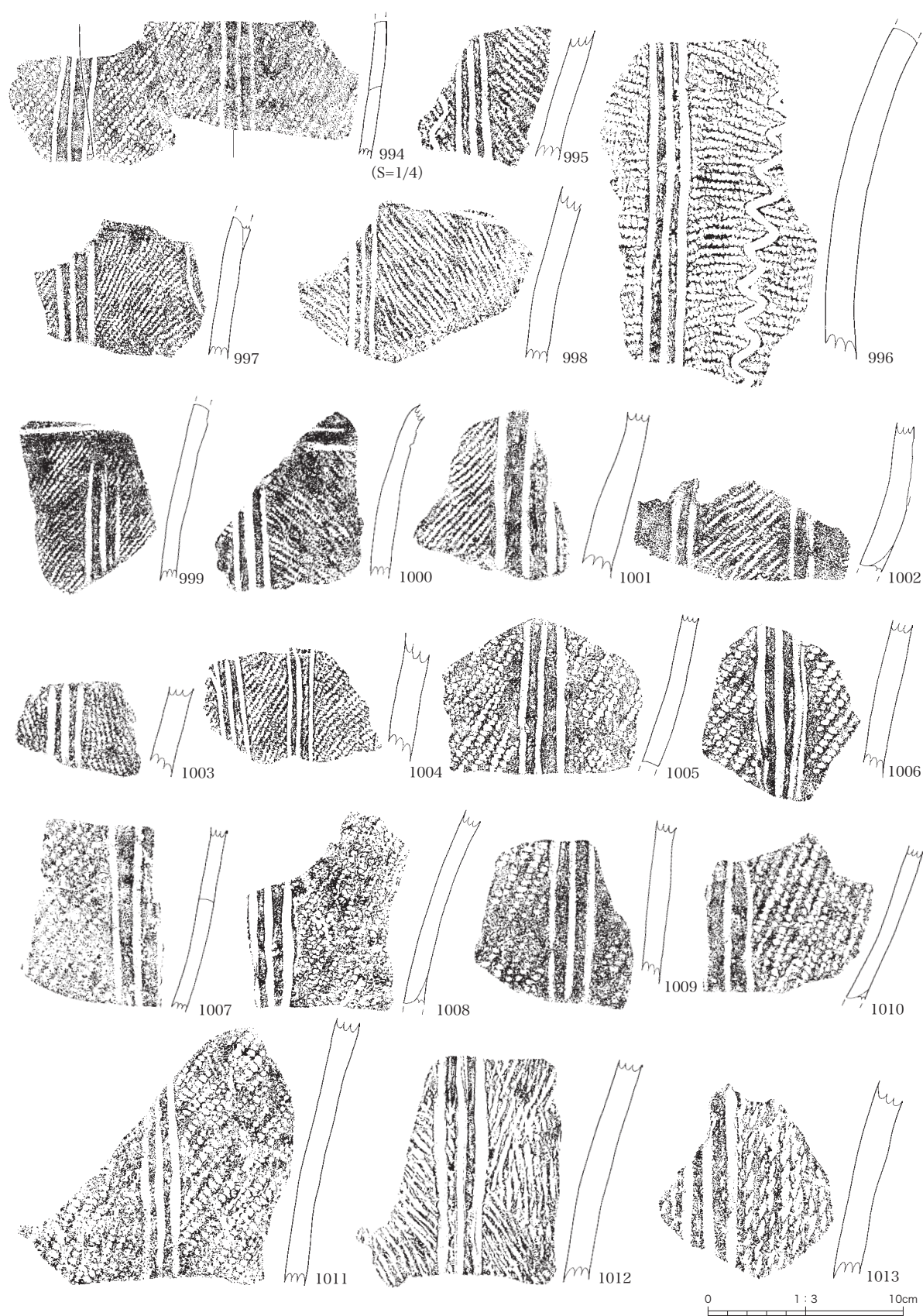
磨消懸垂文を有する胴部破片をまとめた。これらの土器は、3条の沈線間の狭い部分が無文化しているもの（994～1013）、狭い無文帯を垂下させるもの（1014～1024）、通常幅の無文帯を垂下させるもの（1025～1032）、幅広い無文帯を垂下させるもの（1033～1035）に分類される。多くは2段の縄による縦位施文を地文とするが、2段の縄を斜めに施文するもの（996）や0段の縄を用いた撚糸文を施すもの（1013・



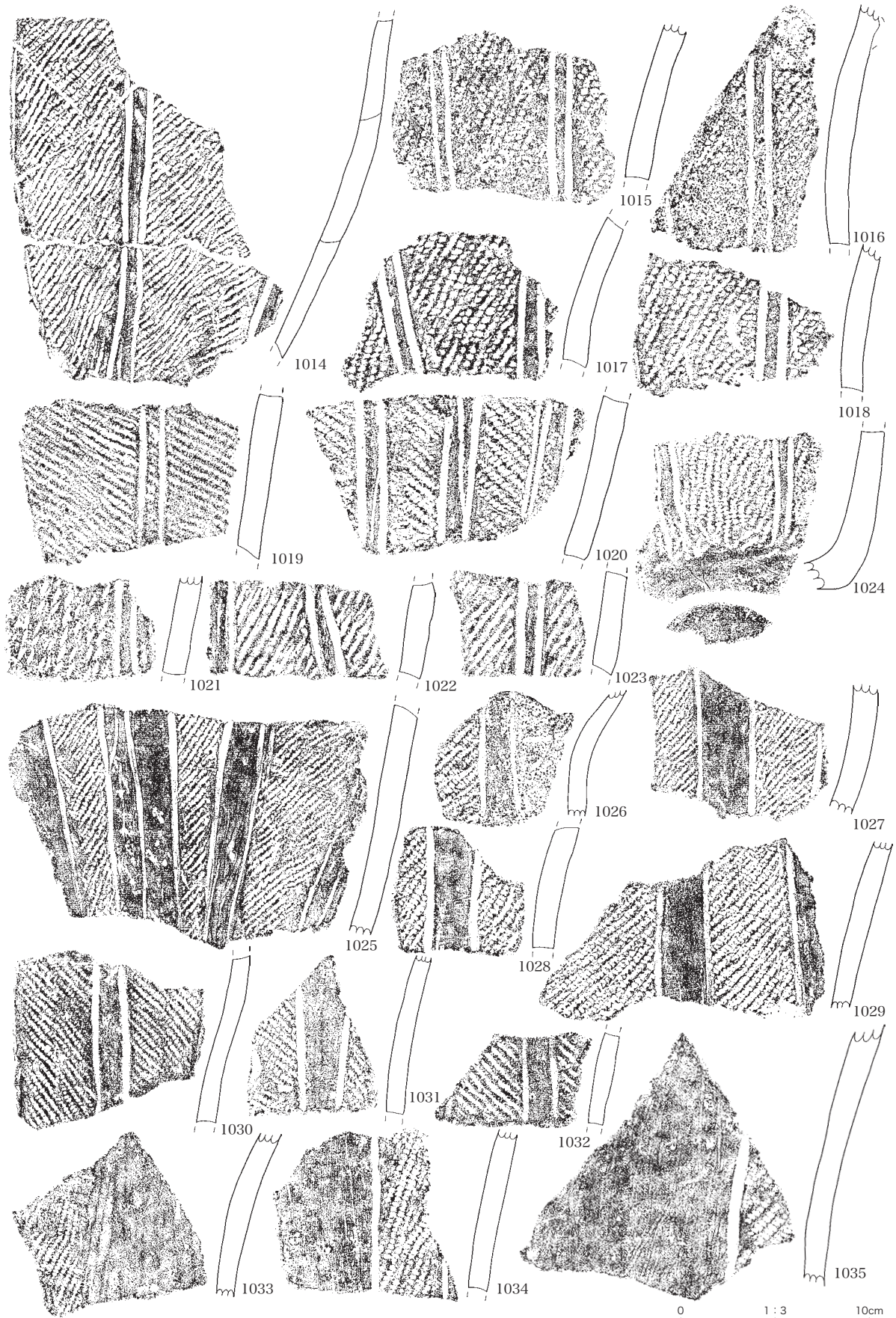
第94図 第IV層出土土器（31）



第95図 第Ⅳ層出土土器 (32)



第96図 第Ⅳ層出土土器 (33)



第97図 第Ⅳ層出土土器 (34)

0 1 : 3 10cm

第3章 確認した遺構と遺物

1021)がある。このほか、反撚り2段LLの縄を縦または斜め方向に施文するもの(1012)、前々段反撚り3段RLLの縄を用いたもの(1014)などがみられる。995～997は縄文部に蛇行沈線を垂下させるもの、998～1000は括れ部に横位の沈線がみられるものである。999は括れ部に低い隆帯を巡らせ、上側にのみ沈線を沿わせている。

第13群 加曽利E式に伴う非装飾的な土器

第1類 口縁から縄文を施す土器(第98図1037～1042)

1037は頸部括れ部から外反気味に立ち上がる口縁部破片で、地文には2段RLの縄を用い、口縁直下は横方向に、以下の体部は縦方向に施文する。1038～1042は内傾もしくは内彎する口縁部破片である。1038は1段Lの無節縄文を縦方向に、1039は2段RLの縄を横及び縦方向に施文する。1040～1042は2段LRの縄による縦位施文を地文とするものであるが、1040・1042は部分的に斜め方向に施文している。

第2類 口縁部に横位の沈線を巡らもの(第98図1036・1043)

1036はキャリバー形をなす深鉢形土器で、所々欠損するが口縁部から胴部中位までのおよそ1/2周が遺存する。口縁に沿って幅の広い凹線を巡らせ、その上下をナデて僅かな無文部とし、以下には地文の縄文のみが全面に施される。1043は内彎する無文の土器で、内面に赤色塗彩がみられる。

第3類 口縁部から懸垂文を垂下させる土器(第98図1044)

1044は小型の深鉢で口縁に無文部を有し、以下には3条1組の懸垂沈線を垂下させる。胴部の地文には、2段RLの縄を用い斜め及び縦方向に施文している。

第4類 縦位の条線がみられる土器(第98図1045～1049)

櫛歯状工具により縦位の条線を施す土器で、第Ⅲ層第15群土器に対応する。条線は密に施されるものが多いが、1047のように施文が浅く間隔が広いものもある。

第14群 連弧文土器(第99図1050～1055)

第Ⅲ層第13群に対応する土器群である。口頸部の連弧文は沈線間を磨消した無文帯で描くもの(1050・1051・1054)と沈線のみで描くもの(1052・1053)がある。地文には条の縦走する撚糸文や2段の縄による横位施文が施される。1050は接合しないが同一個体と思われる破片で図上復元した。口縁に沿って3条の沈線を配し、以下には縄文地文に3条の沈線で弧状文を描く。1051は口縁に沿って2条の沈線を巡らせ、その間に2列の刺突列を配している。1052は口縁に沿って2条の沈線を巡らせ、以下縄文地文に3条の沈線で頂部が丸みを帯びた弧状文を描いている。1055は括れ部の破片で撚糸文を地文とし、口縁部と胴部の境には横位の沈線を巡らせる。以下には、2条の沈線で画された刺突列を伴う横位の磨消帯が2段施される。

第15群 曽利式系土器(第99図1056～1067)

第Ⅲ層第14群に対応する土器群で、集合沈線を地文とし、頸部の括れ部には横位、以下の胴部には縦位の押捺の施された隆帯を貼付する。口縁部の沈線は縦位(1057・1059・1061)、弧状(1060・1063)、斜位(1056・1058・1062・1064)に施すものがある。胴部の沈線は縦位に施されるものが多い。1058は内面の口端に隆帯を巡らせ、上面を口縁に沿って凹線状に窪ませている。1060は縦位線を起点に弧状沈線を配している。隆帯上の押捺は直上方向から加えられているもの(1061・1066・1067)、左右もしくは上下方向から交互に施されるもの(1062～1065)がある。

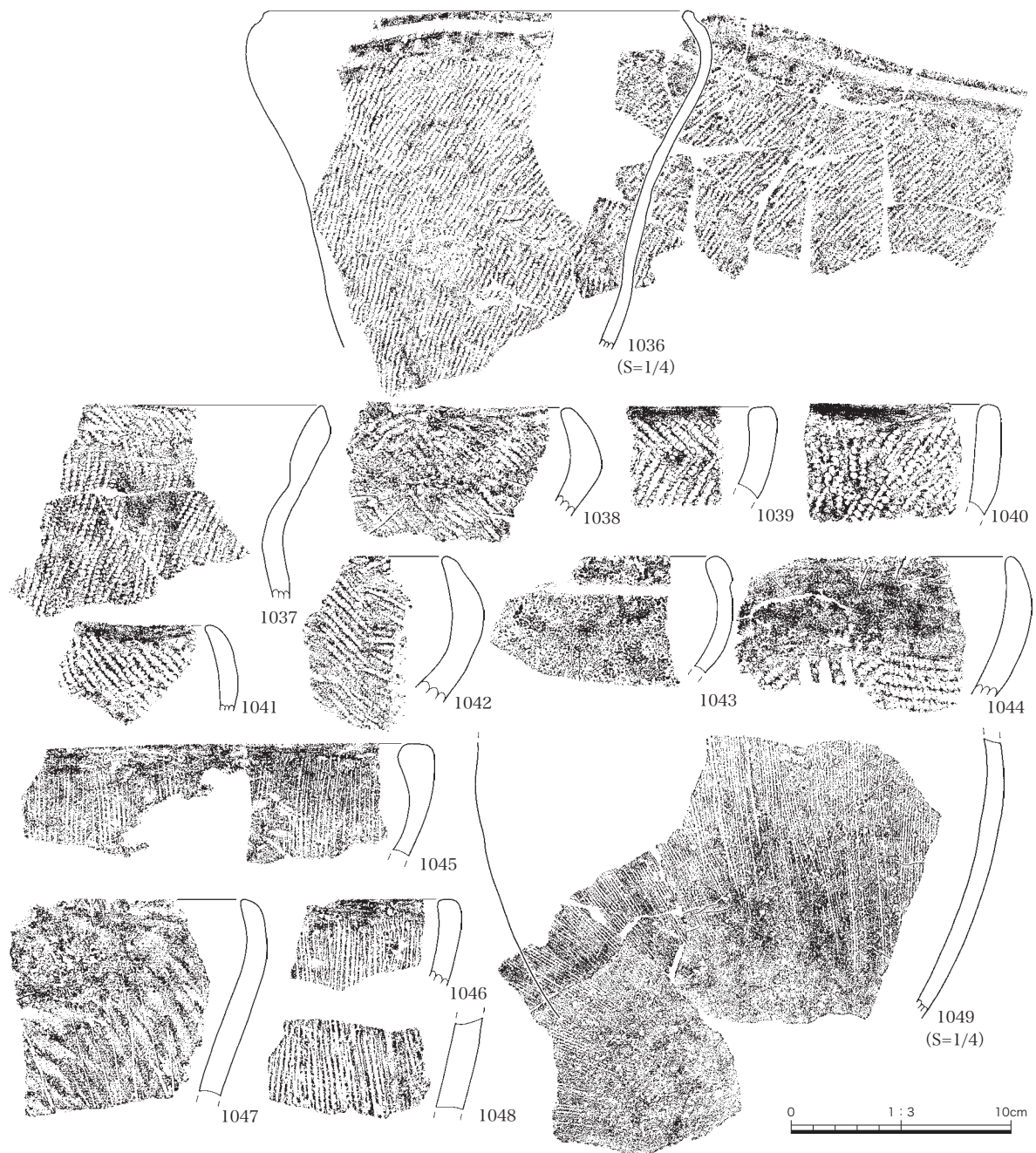
第16群 梶山類型の土器(第99図1068～1074)

1068・1069・1070・1074は磨消縄文によって渦巻文などのモチーフを描くもので、凹線で画した無文帯でモチーフを表している。1068の口縁には無文地に平行する2条の凹線を巡らせ、その間に円形刺突を充填

する。1069 は口縁に 1 条の凹線を巡らす。1070 は 3 条の凹線でモチーフを描くもので、胴部との括れ部に凹線の沿う隆帯を巡らしている。外面の一部には赤色塗彩が残る。1071・1073・1074 は断面三角形の隆帯 2 条で渦巻文を描く土器で、2 条の隆帯間を磨消し、隆帯脇に凹線を沿わせている。1071 は平口縁で胴部中位が括れるキャリパー形の深鉢形土器である。口縁部から胴部括れ部に 2 条の隆帯で画された無文帯によってモチーフを描き、以下の胴部を磨消している。外面に煤ないしは炭化物が付着している。

第 17 群 微隆起線でモチーフを描く土器 (第 99 図 1075 ～ 1078)

1075 ～ 1078 は 2 条の平行する微隆起線で画された無文帯によってモチーフを描く胴部破片である。これらは、縄文地に大柄な渦巻文を描いたもので、1077 は渦巻文同士を弧状の微隆起線で繋いでいる。



第 98 図 第Ⅳ層出土土器 (35)

第18群 壺形等の特殊な器形の土器（第100図1079～1082）

第Ⅲ層第12群に対応する土器群である。1079は焼成後の穿孔がみられる無文の口縁部破片で、口縁内面に剥離痕がみられる。1080は外面の口縁直下から断面三角形の縦位隆帯を貼付する。口縁部と体部の境には円孔が穿たれる。1081は彎曲内傾する体部から口縁がやや外反気味に立ち上がる無文の土器である。体部と口縁部の境に隆帯を配し、この隆帯下に浅い沈線を巡らせている。器面は磨かれ光沢がある。図示しなかったが、同一個体と思われる破片が1点あり、この破片には把手が付いていた痕がある。1082は口縁部と胴部の境を巡る2条の隆帯を橋状把手で繋いでいる。体部には沈線の沿う低い隆帯でモチーフを施している。

第19群 大木9式～10式土器（第100図1083～1101）

第Ⅲ層第10群に対応する土器群である。1083～1090は口頸部に突出した隆帯と幅広の沈線により、渦巻文や区画文などを描く土器である。1086・1087のように口縁部の渦巻や円形文が口縁上部から突出して突起状をなすものがある。1091～1100は沈線によって区画された縄文帯を縦位に配し、区画外部を磨り消すものである。1101は口縁部が外反気味に直立する器形の土器で、口縁部の無文帯下に凹線を1条巡らせ、以下に地文の縄文を施している。これらの土器は概ね中期後葉～末葉の大木9式・10式期の土器で、1083～1090が9a式、1091～1100が9b式、1101が大木10式に比定される。

第20群 三十稲葉式土器（第100図1102・1103）

1102・1103は横方向からの連続刺突が多段に施された胴部破片で、後期前半の三十稲葉式に比定される。今回の調査において本群の土器は、SK-1253から破片が出土したのみであり出土数は少ないが、前回調査したSK-917からは称名寺式の深鉢形土器に伴って深鉢形土器や蓋形土器が出土している。

第21群 称名寺式土器（第100図1104～1106）

1104は口縁部に平行する横位の平行沈線を巡らせ、間に円形刺突を施す。胴部は縄文を地文としている。1105・1106は底部付近の破片である。1105は縄文地に沈線で文様を表すもので、沈線で画した内部を磨消している。1106は横位の沈線間に横方向からの刺突を加えている。

第22群 綱取式土器（第100図1107～1113）

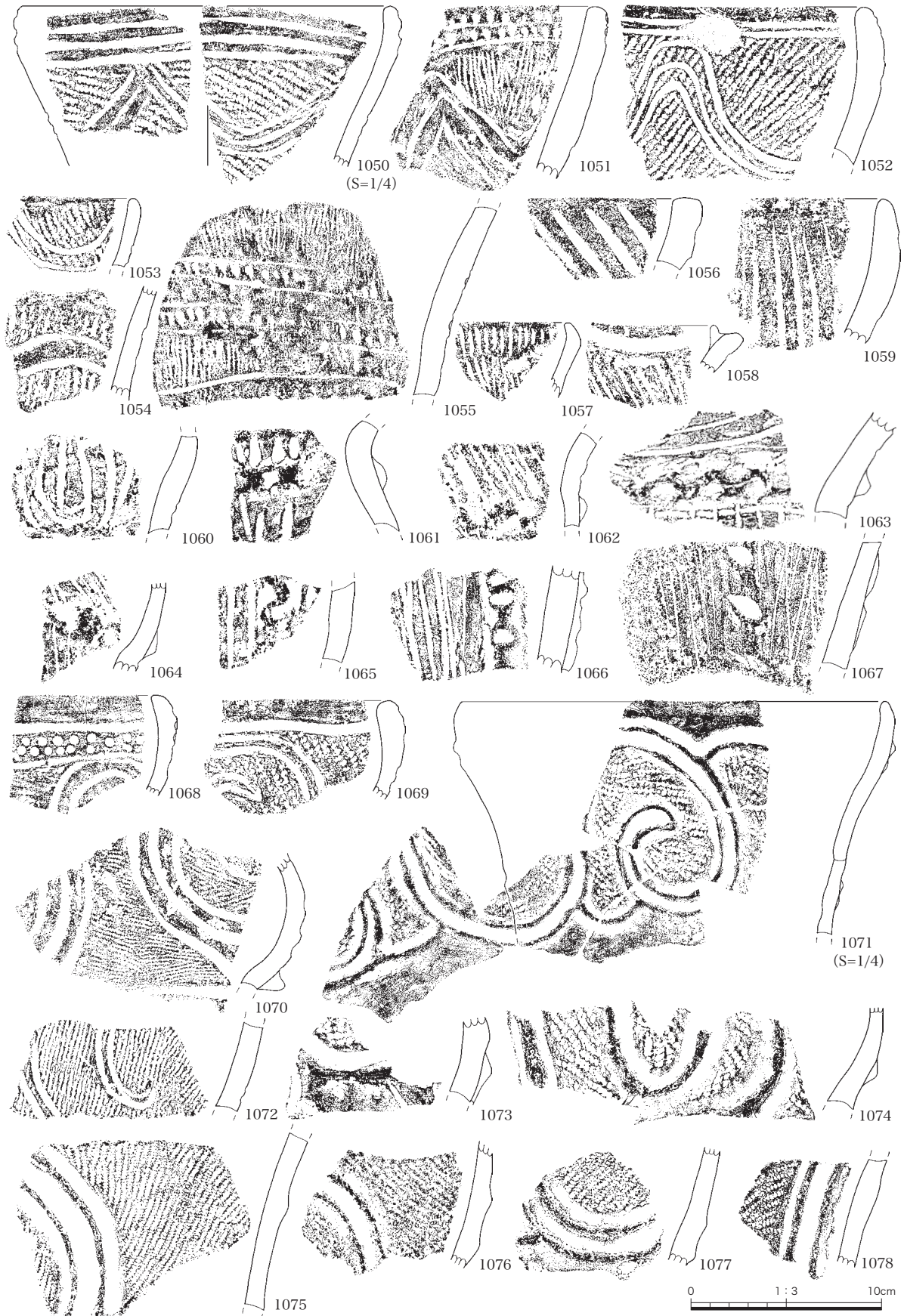
1107は突起部の破片で、内面に隆帯を貼付し、接合部の上部を凹線状にナデている。突起下には沈線で対弧状および蛇行モチーフと円形の押捺が施される。1108は口縁部と胴部の文様帯を画す横位の隆帯上に押捺が加えられる。1109～1111は単沈線で斜格子文、1112・1113は集合沈線でモチーフを描く。

第23群 堀之内式土器（第100図1114～1116）

第Ⅲ層第17群に対応する土器群である。1114は口端に沈線を巡らせ、口縁直下に円形刺突の施された貼付文を配している。体部は縄文地に貼付文から横位と斜位の平行沈線を引く。1115は口縁部の盲孔から逆U字状の隆帯を垂下させ、そこから数条単位の弧状沈線を横方向に派生させている。1116は括れ部に沈線の沿う細い隆帯を巡らせ、以下に縦位の沈線を密に施している。1114の内面および外面、1116の内面には炭化物の付着がみられる。

第24群 後期後半の土器（第100図1117～1119）

1117は沈線と縄文による横帯文で文様を表現するものである。1118は縄文地に数条単位の沈線で方形モチーフが描かれる。1119は壺形土器の体部下半から底部の破片で、およそ1/4が遺存する。沈線区画の磨消縄文により弧状のモチーフが施され、内外面とも漆と思われる黒色および赤色の塗彩がなされている。



第99図 第Ⅳ層出土土器 (36)



第100図 第IV層出土土器 (37)

(2) 石器

今回の調査で出土した石器は第9表のとおり、遺構内外のものを合わせた157点である。器種別にみると、石鏃、搔削器類、磨石類の出土が比較的多く認められ、前回の調査とほぼ同じ傾向を示している。ここでは、遺構に伴わない表土および包含層出土の石器を各器種毎に記載するが、黒曜石製の搔削器類・剥片・碎片については後記の付章に掲載しており、産地同定結果と共に実測図と計測値などの一覧表を示した。

石鏃（第101図1～14、図版一九）

形態はいずれも無茎鏃で、基部の形状は窪むものを凹基（1～11）、直線的なものを平基（12～14）として大別した。第101図の掲載にあたっては、基本的に正面図形状が正三角形のものから二等片三角形のもの、また凹基鏃に関しては、湾曲の深いものから浅いものの順に掲載した。

石槍（第101図15・16、図版一九）

包含層から2点出土した。いずれも両面加工で比較的大形の茎部をもつもので、表裏面とも調整剥離に覆われる。16は比較的肥厚な剥片を用いており、茎部の括れが弱く非対称で器形はややが歪んだ形状をなす。

石匙（第101図17、図版一九）

17は横長剥片を素材とした横型石匙で、表面の一部に節理面が残る。摘みは低く作り出され、周縁部の表裏に粗い調整が加えられる。

石錐（第101図18・19、図版一九）

18は小型剥片を三角形に仕上げ、先端部に錐部を作り出している。19は器体下端部を欠損するため形態は不明であるが、石鏃の先端部分を錐部として使用した転用石錐である。

搔器（第101図20～32、図版一九）

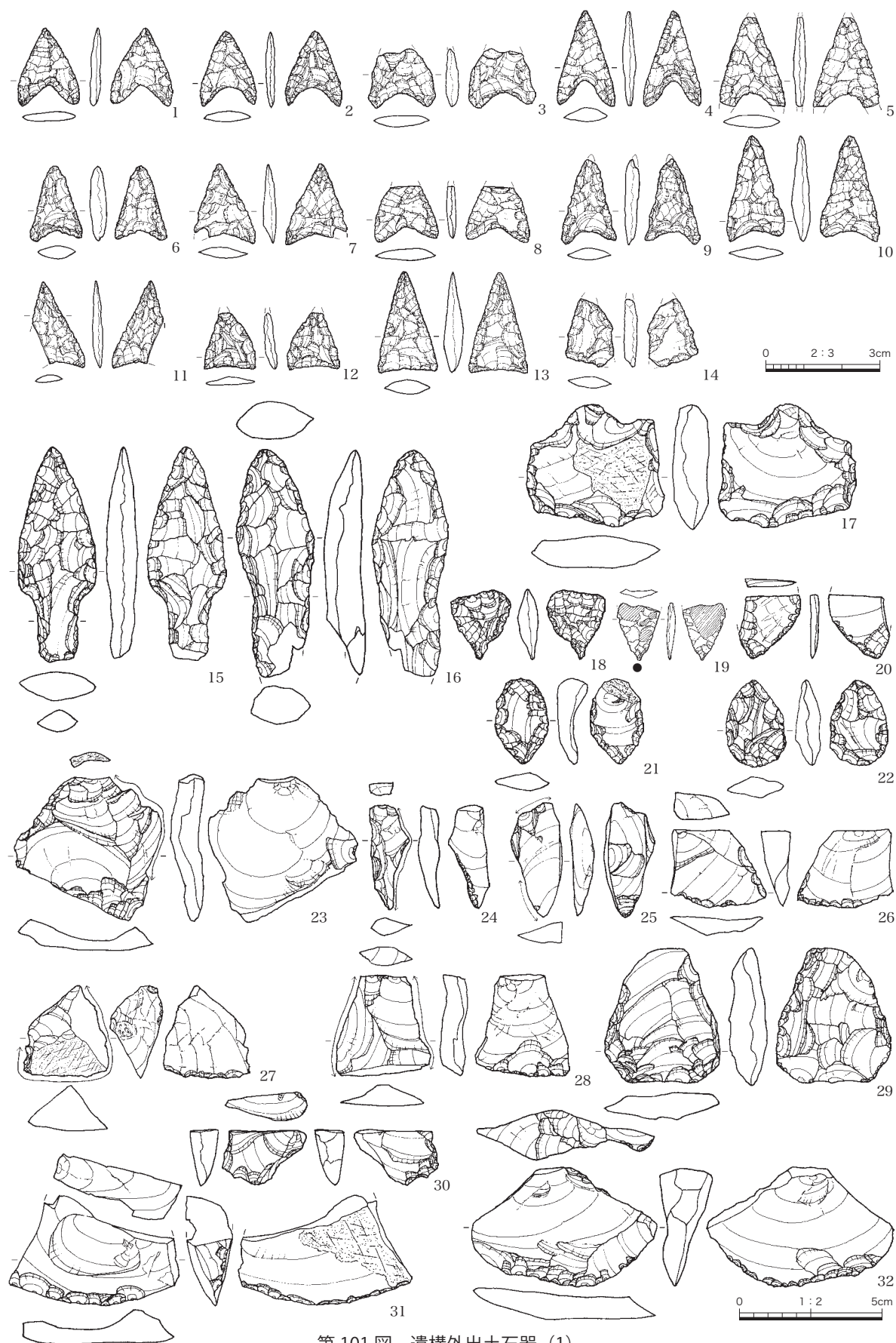
定形化した剥片石器以外のもので、基本的には不定形な剥片に対して調整加工を施し、刃部を作出するものである。不定形な剥片の縁辺に刃部を設けたものも少なくないが、縦長状剥片の側縁部や端部に刃部を作出するもの（20・21・24・28）や、横長状剥片の側縁部や下半部に刃部を作出するもの（22・23・25・31・32）がある。使用される石材は、赤玉と頁岩の使用頻度が高い。

使用痕のある剥片（第102図33～38、図版二〇）

器体を整えるための調整加工は殆ど行われておらず、剥片素材の有する鋭利な部分に刃部を作出するものである。33・35は不整形な剥片を素材とし、器体の側縁部に使用痕が認められる。34・37・38は縦長剥片を素材としたもの、36は打面側が厚く、端部が薄い横長剥片を素材としており、打面を除く周縁全体に使用痕が認められる。使用される石材は、いずれも頁岩である。

第9表 縄文時代石器集計表

遺構	種別	包含層	1182	1187A	1187B	1196	1197	1201	1203	1206	1210	1218	1234	1240	1272	P-1	石器別	
																	総数	出土比率
	石鏃	14															14	8.9%
	石槍	2															2	1.3%
	石匙	1														1	2	1.3%
	搔削器類・使用痕のある剥片等	21			8							1	1	2	1		34	21.7%
	石錐	2															2	1.3%
	石核	1															1	0.6%
	打製石斧	10							1					1			12	7.6%
	磨製石斧	1															1	0.6%
	石錘	1															1	0.6%
	磨石・石凹	74	1	1		2	1	1		1							81	51.6%
	石皿・多孔石	6									1						7	4.5%
	出土総数	133	1	1	8	2	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	157	100%



第 101 図 遺構外出土石器 (1)

石錘（図版 102 図 39、図版二〇）

長軸方向に溝が全周する有溝石錘である。素材となる礫の長軸端部に打ち欠きによる紐掛け作出後、磨り切りによる溝状の切目が施される。切目作出以前に器体を研磨によって整形する手法が用いられている。

石核（図版 102 図 40、図版二〇）

頁岩製の石核で、打面調整を行わず稜上を打面として、横長の不整形な剥片を剥取している。

打製石斧（図版 103 図 41～50、図版二〇・二一）

打製石斧は、形態上から大きく分銅型をなすもの（41・47）、刃部が撥形状に開くもの（42～46・48・49）に大別できる。撥形状の打製石斧については、43・45・48のように刃部の開きが大きく、基部と刃部とが明瞭に区分することができるものがある。使用石材にはいずれも頁岩が用いられ、片面に自然面を残すものが多いことから、礫を2分割した後に双方を素材として使用したものと考えられる。

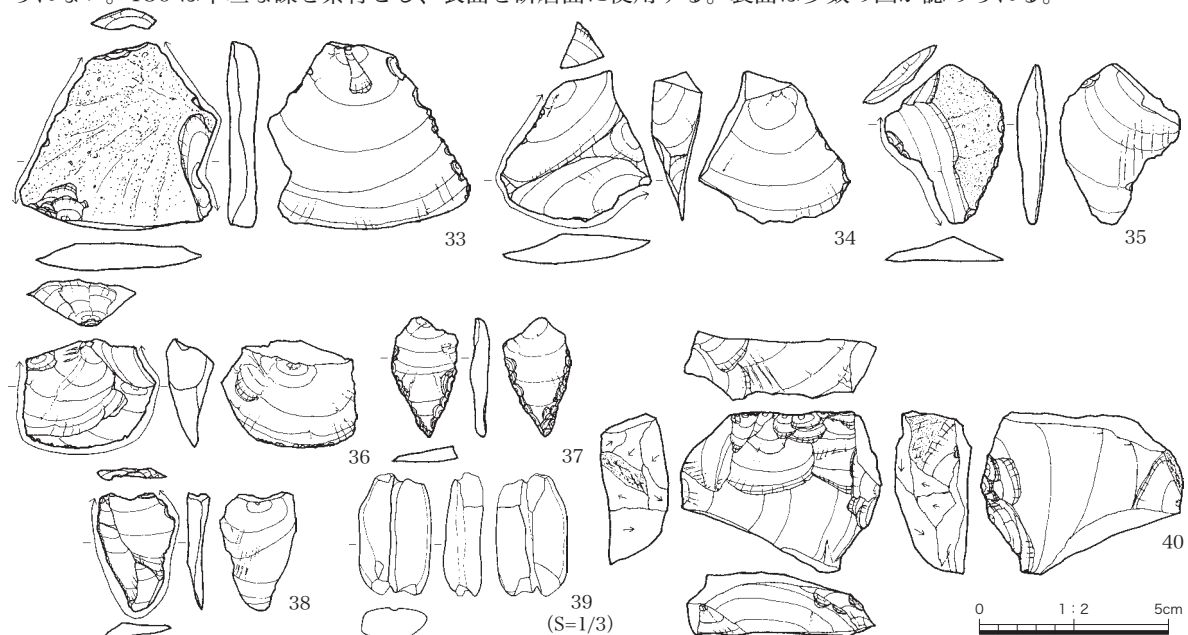
磨製石斧（図版 103 図 51、図版二一）

包含層から1点のみ出土した定角式の磨製石斧である。刃部全体を欠損する。頭部の形状は直頭で、側面には明瞭な稜を有するが、整形時の敲打痕が僅かにみられる。器面は丁寧な研磨によって光沢がある。

磨石類・石皿・多孔石（第 104 図 52～第 112 図 131、図版二一～二五）

52～125は両面ないしは片面に凹や研磨痕、敲打痕のいずれかが認められ、基本的には磨石として使用されたものである。この中の一部には、被熱による器面の剥離や色変化が認めらるもの、また石材の違いにより研磨面が滑らかなものとざらついているものがある。平面形状は概ね楕円形と円形があり、また、表裏面が平坦なものと平坦でないものに分類される。

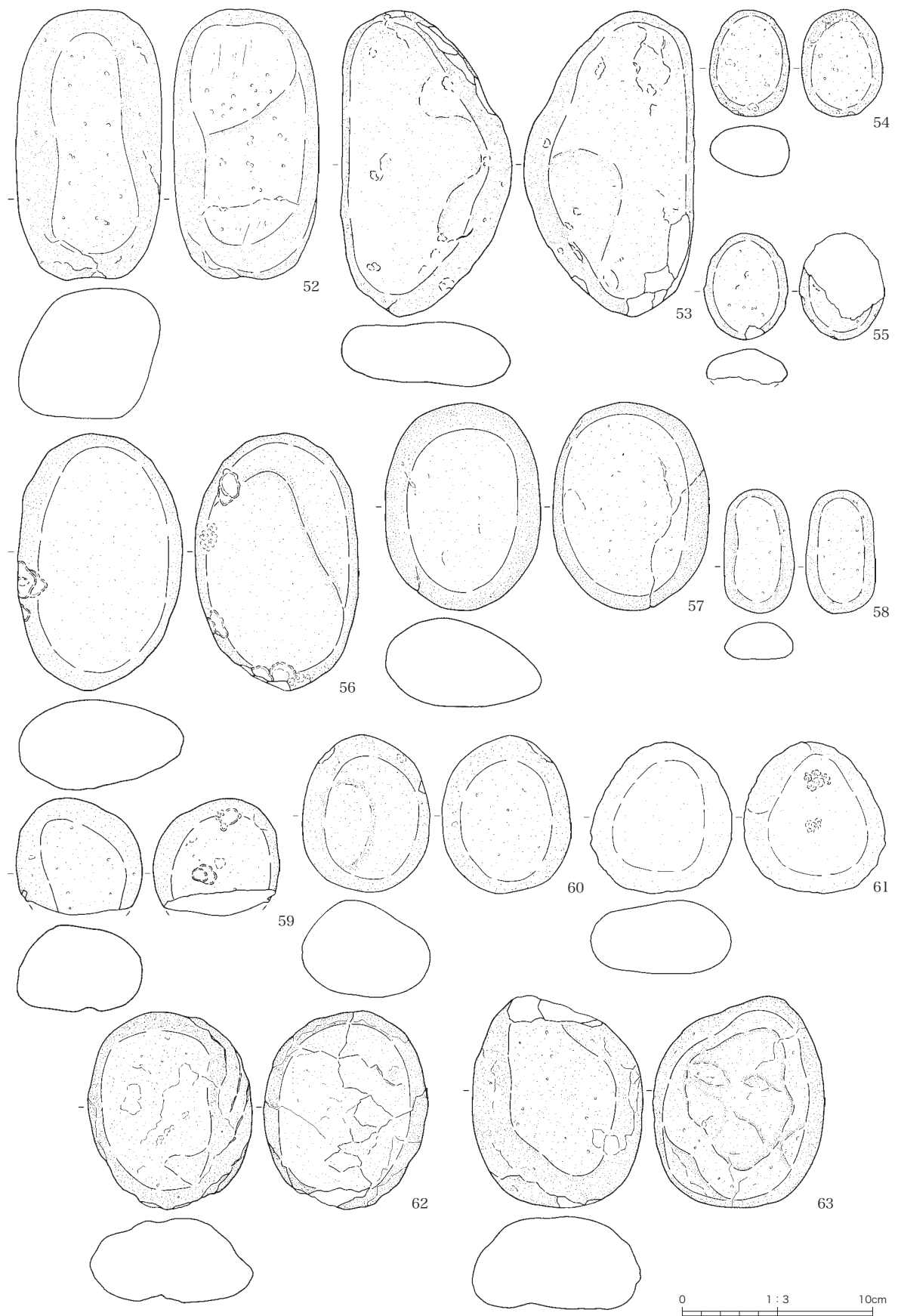
石皿・多孔石は完存するものではなく、部分的な破片を含めて合計8点出土した。このうち、遺構に伴うものはSK-1188（風化が著しいため図化は不可）及びSK-1210の2点で、自然堆積後の土坑内において意図的な出土状態が看取される。126・127は石皿で、側面と裏面は敲打及び研磨整形される。内面は平坦で周縁には明瞭な縁が巡り、裏面は多孔石として使用される。126の内面は被熱により、赤色化及び剥離が著しい。128・129・131は楕円形で扁平な礫を素材とする多孔石で、表裏面に多数の凹を有するが器面の研磨痕はみられない。130は平坦な礫を素材とし、表面を研磨面に使用する。裏面は多数の凹が認められる。



第 102 図 遺構外出土石器 (2)



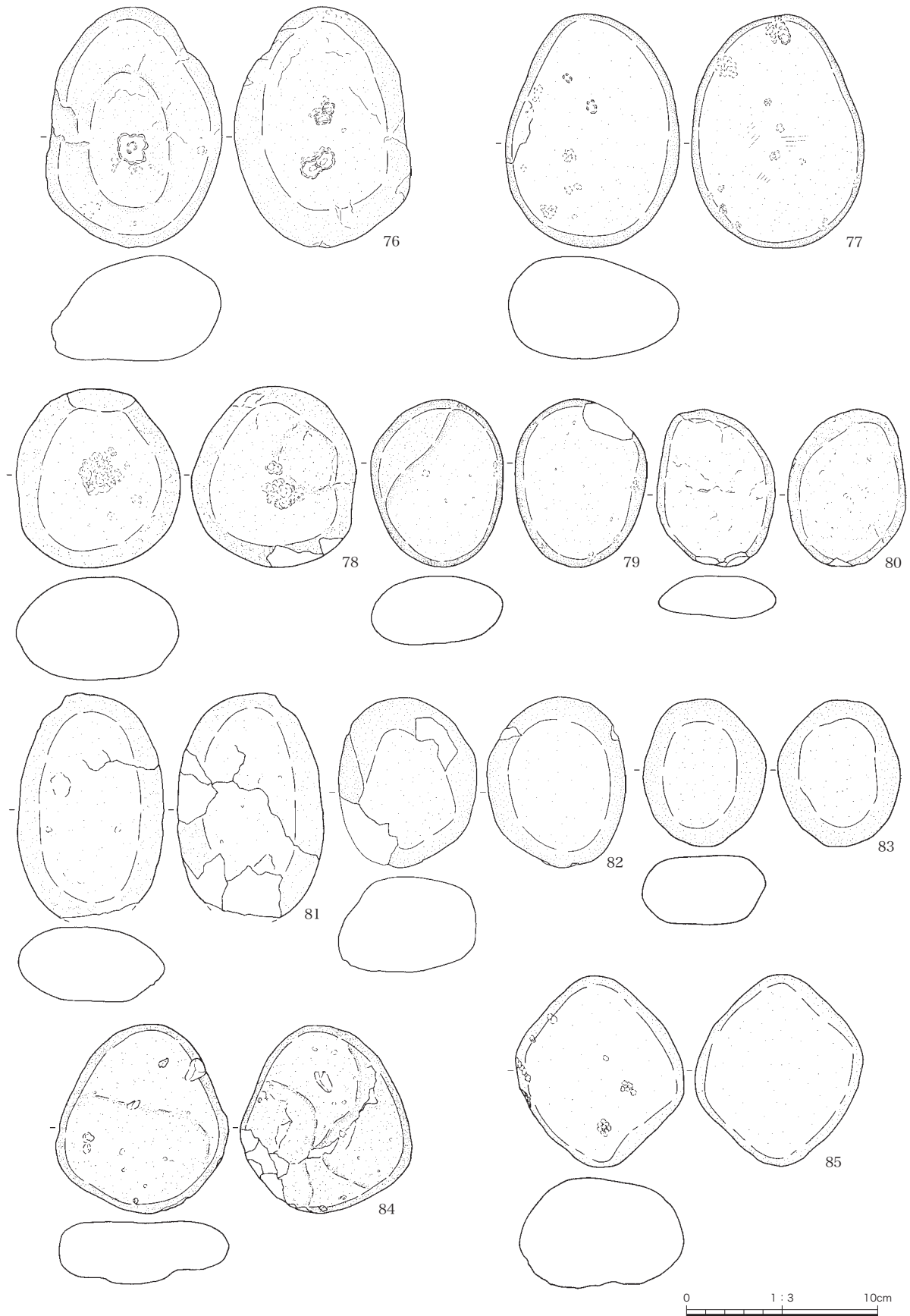
第103図 遺構外出土石器(3)



第104図 遺構外出土石器 (4)



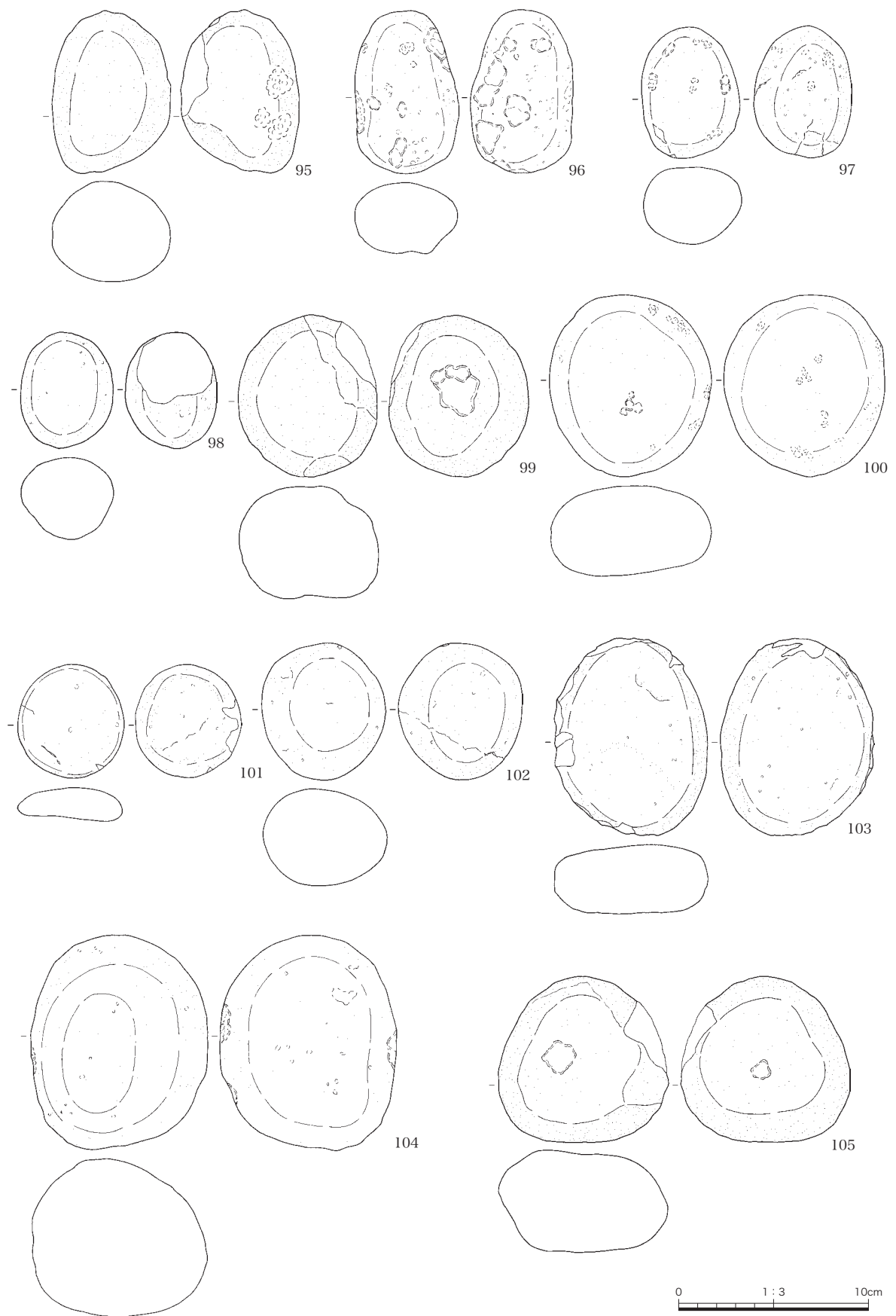
第105図 遺構外出土石器(5)



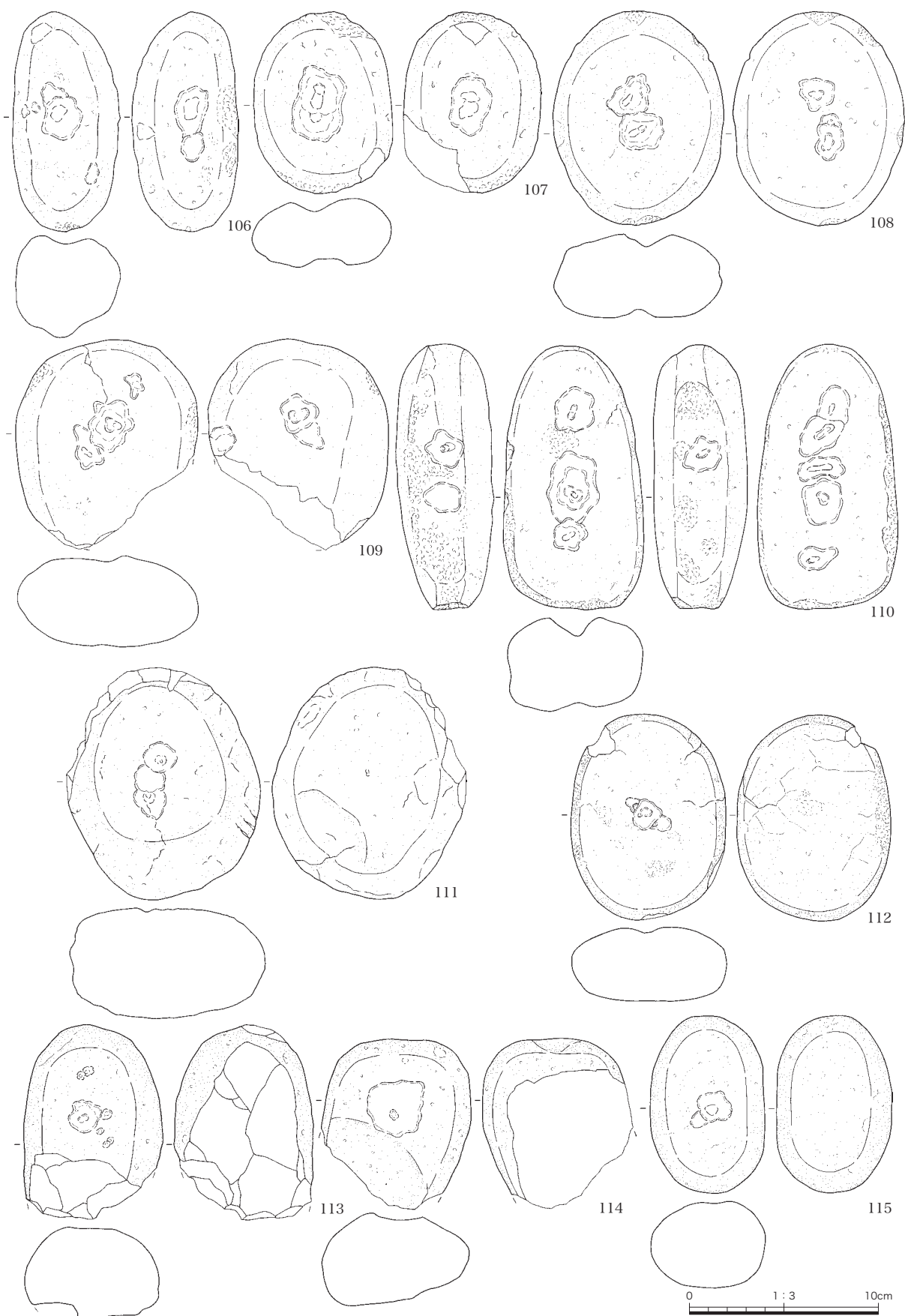
第106図 遺構外出土石器 (6)



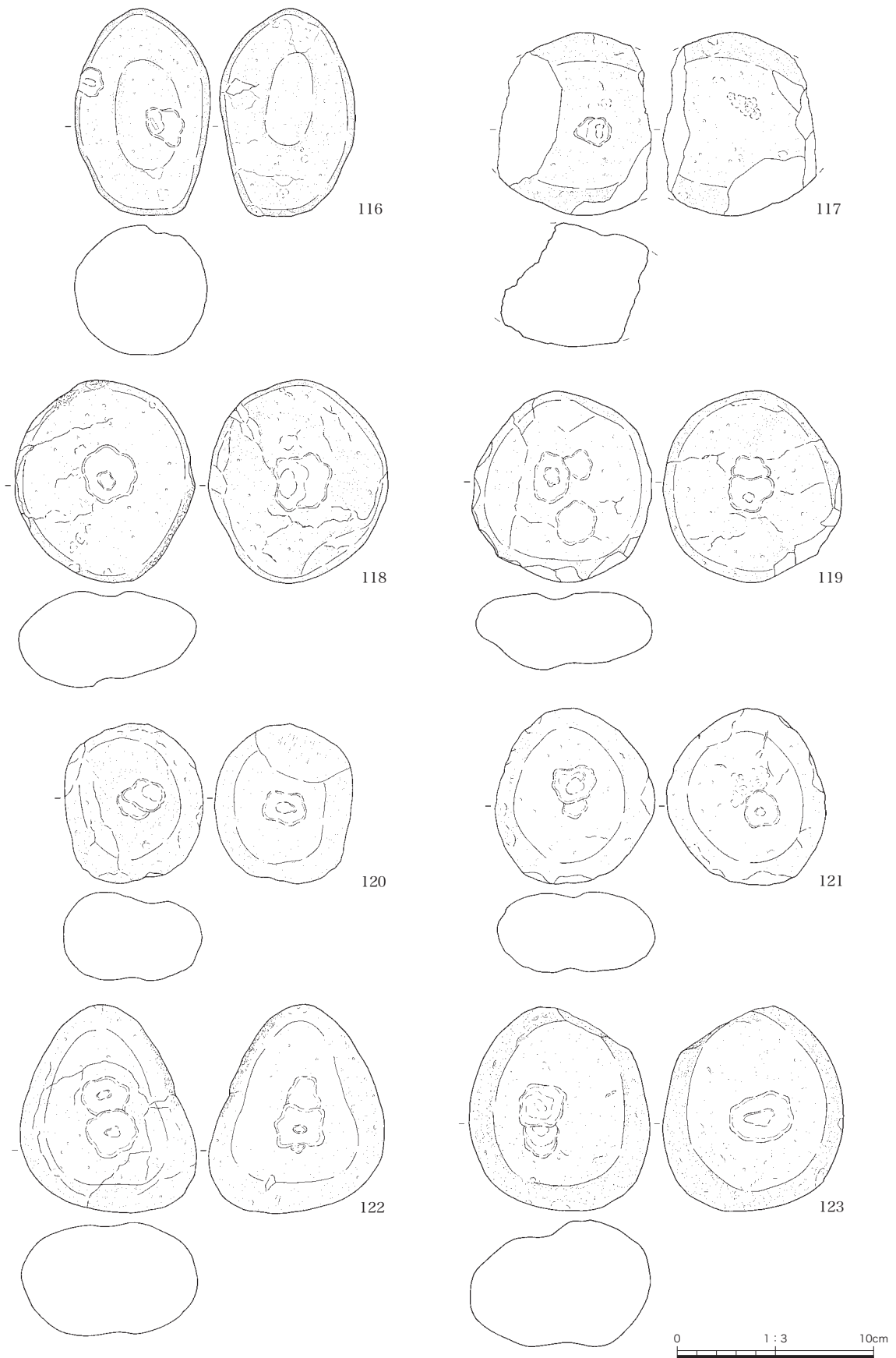
第107図 遺構外出土石器 (7)



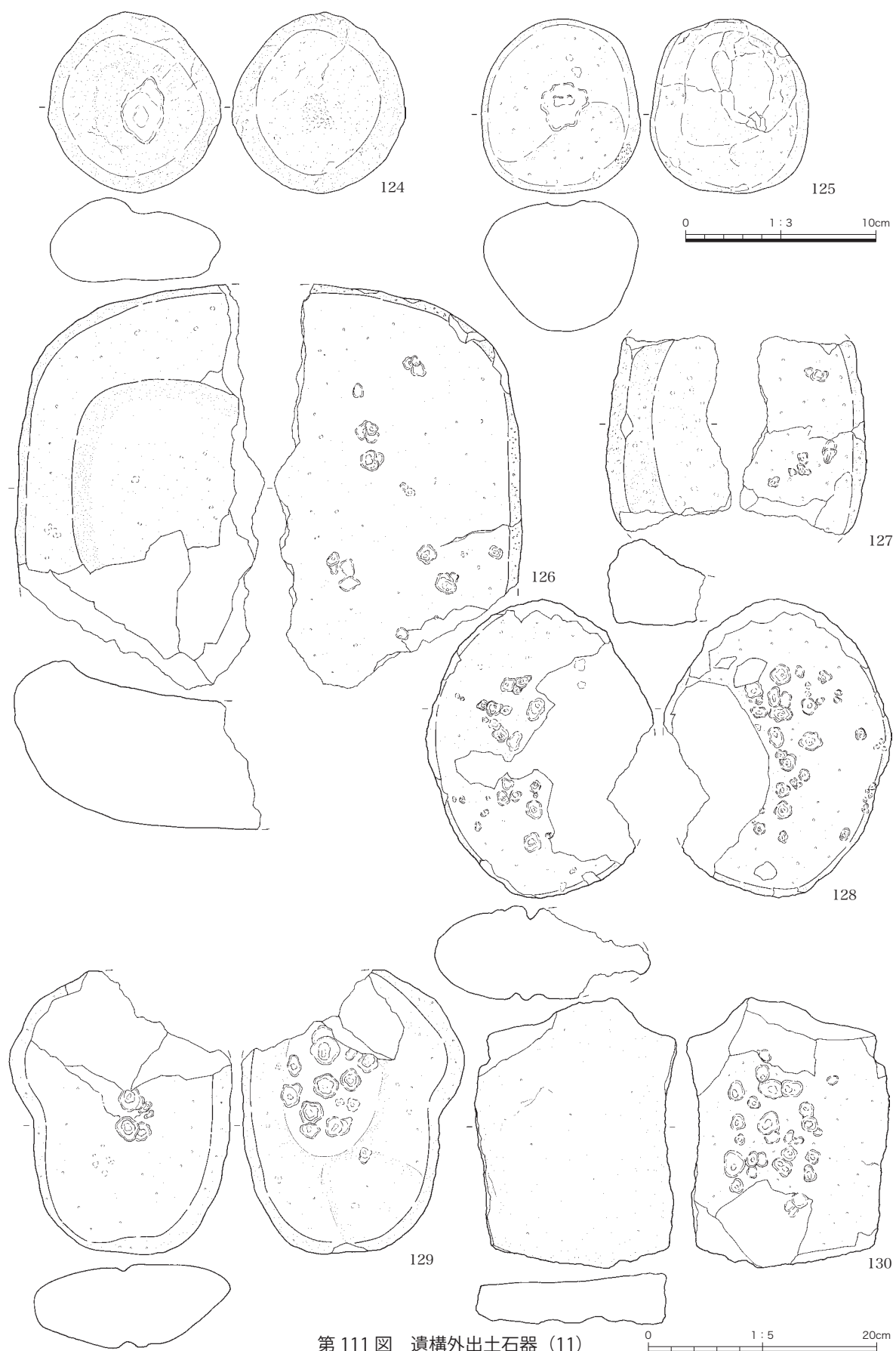
第108図 遺構外出土石器 (8)



第109図 遺構外出土石器(9)



第110図 遺構外出土石器 (10)



第111図 遺構外出土石器(11)



第 112 図 遺構外出土石器 (12)

第 10 表 縄文時代遺構出土石器計測表

単位：cm・g

遺構	遺物番号	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
SI-1272	6	使用痕のある剥片	珪化頁岩	5.4	2.7	0.8	9.9	完形。打面を小さく残す縦長剥片を素材とする。周縁部に微細な使用痕が認められる。
SK-1182	2	凹石	閃緑斑岩	11.1	7.7	5.3	343.0	形状は楕円形で、表面に2個の凹を持つ。全面を研磨面として使用。
SK-1187A	2	凹石	流紋岩質 凝灰岩 (Ter)	7.7	8.1	6.9	475.8	球状をなし、風化のため表面の剥離が著しく、研磨痕は不明瞭。
SK-1187B	1	使用痕のある剥片	頁岩 (Ter)	8.7	7.6	2.3	100.0	完形。打面は礫面。横長の不整形剥片を素材としており、左側縁と端部に使用痕が認められる。
SK-1187B	2	使用痕のある剥片	頁岩 (Ter)	6.3 以上	3.9	1.4	38.8 以上	器体中央の節理面で縦方向に破損している。不整な縦長剥片を素材とし、左側縁と端部の縁辺に微細な使用痕が認められる。
SK-1187B	3	使用痕のある剥片	頁岩 (古期)	1.5 以上	1.7	0.2	0.3 以上	打面、端部共に欠損。薄い小型の縦長剥片を素材とする。両側縁に微細な使用痕が認められる。
SK-1187B	4	剥片	頁岩 (Ter)	4.9	2.1	1.4	11.8	不整な縦長剥片を素材とする。中央で縦方向に破損している。
SK-1187B	5	搔器	珪岩	3.4	1.3 以上	0.8	4.5 以上	横長剥片を素材とする。左側縁が欠損する。右側縁の表裏、裏面の端部に調整を加える。
SK-1187B	6	使用痕のある剥片	頁岩 (Ter)	2.9	4.9	1.3	16.1	完形。打面は礫面。不整な横長剥片を素材とする。表面に節理面が認められる。周縁に微細な使用痕が認められる。
SK-1187B	7	使用痕のある剥片	頁岩 (Ter)	3.3	4.0	1.4	12.9	完形。打面は礫面。不整な横長剥片を素材とする。表面に節理面が残される。右側縁と端部に使用痕が認められる。

第3章 確認した遺構と遺物

遺構	遺物番号	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
SK-1187B	8	使用痕のある剥片	頁岩 (Ter)	3.3 以上	5.4	1.8	24.7 以上	端部を欠損する。礫面を打面とする不整な剥片を素材とする。両側縁に使用痕が認められる。
SK-1196	9	磨石	多孔質流紋岩 (溶結)	10.2	9.0	7.9	851.0	円形・球状をなすが側面上端部が使用により平坦面となる。全面を研磨面に使用する。
SK-1196	10	磨石	角閃石黒雲母 花崗閃緑岩	9.5	7.0	5.8	653.7	裏面は大きく剥離。下端部は剥離ないしは敲打と思われるが不明瞭。遺存部は全面を研磨面として使用。
SK-1197	4	磨石	角閃石黒雲母 花崗岩	9.5	8.4	4.1	502.5	円形で表裏面は平坦である。表裏面を研磨面として使用しており、削痕が残る。
SK-1201	4	磨石	砂岩	10.3	7.7	4.5	467.1	楕円形をなし、裏面がほぼ平坦。表裏面に2個の凹を有する。裏面の1個は浅い。表裏面を研磨面として使用する。
SK-1203	1	打製石斧	頁岩 (古期)	14.5	8.7	3.1	359.3	完形。撥形で表面に自然面を残す。基部に両側縁から剥離を加える。
SK-1206	1	凹石	砂岩	10.6	9.5	4.8	647.8	表裏面が平坦な卵形をなす。表裏面を研磨面に使用。表面は2個の深い凹が重複、裏面は深い凹と浅い凹がみられる。
SK-1210	6	石皿	流紋岩質 溶結凝灰岩	26.4	21.0	5.7	4100.0	楕円形の大型礫を素材とする。表面下半部に研磨面が残るが、縁の作出はない。裏面は被熱により表面が赤化し、大きく剥離する。
SK-1218	5	使用痕のある剥片	頁岩 (Ter)	7.3	3.8	1.5	35.3	完形。打面部を小さく残す縦長剥片を素材とする。右側縁と端部に微細な使用痕が認められる。
SK-1234	3	使用痕のある剥片	頁岩 (Ter)	6.8	7.2	1.7	92.4	完形。打面は礫面で、やや不整な縦長剥片を素材としている。打面以外の周囲に微細な使用痕が認められる。
SK-1240	3	搔器	頁岩 (古期)	3.8	4.1	0.9	9.8	完形。礫面の打面を小さく残す不整形剥片を素材とする。器体上半部の表裏側縁に調整を加える。剥片末端部には、微細な使用痕が認められる。
SK-1240	4	搔器	頁岩 (Ter)	4.5 以上	2.1	0.6	3.6 以上	器体の上半部を欠損する。縦長剥片を素材とし、裏面の右側縁に調整を加える。
SK-1240	5	打製石斧	頁岩 (古期)	8.8	4.9	1.8	85.9	完形。刃部が僅かに開く小型の撥形で、表面に自然面を残す。周縁に細かな剥離を加える。
P-1	1	石匙	珪質頁岩 (Ter)	8.7	2.9	0.5	10.2	完形。横長剥片を素材とする縦長の石匙。両側縁に細かく調整を加える。
SX-1282	3	磨石	黒雲母 花崗閃緑岩	21.1	18.5	5.3	2900.0	表裏面が平坦な楕円形の大型礫を素材とする。下端部及び裏面が剥離。表面は研磨面として使用し滑らか。本来は磨石として使用されたと考えられるが、屋外埋設土器の蓋石に転用されたものである。

第11表 縄文時代包含層出土石器計測表

単位：cm・g

遺物番号	出土位置	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
1	C3-25 第IV層	石鏃	赤玉	2.0	1.6	0.2	0.7	完形。凹基無茎鏃。断面は薄いレンズ状。基部の挟りは深い。
2	C3-8 第IV層	石鏃	頁岩 (Ter) (マキヤマ有り)	2.2	1.5	0.3	0.5	完形。凹基無茎。基部の挟りは深く、周縁は丁寧な押圧剥離。
3	C3-22 第IV層	石鏃	黒曜石 (神津島産出)	1.6 以上	1.8	0.3	0.9 以上	先端を欠損する。凹基無茎鏃で、基部が浅く彎曲する。
4	C4-1 第IV層	石鏃	変質流紋岩 (黄玉質)	2.5	1.5	0.3	0.8	完形で比較的優美な造り。凹基無茎鏃。基部の挟りは深い。
5	C3-18 第III層	石鏃	流紋岩質 溶結凝灰岩	2.4 以上	1.7	0.3	0.7 以上	先端部と脚部先端を欠損する。凹基無茎鏃。基部の挟りは深い。
6	D3-2 第IV層	石鏃	赤玉	1.9	1.4	0.5	1.0	完形。凹基無茎鏃。基部の挟りは浅い。器体中央の断面はやや肥厚なレンズ状をなす。
7	D3-13 第IV層	石鏃	珪岩	2.2	1.5	0.4	0.8 以上	片側の脚部先端を欠損する。凹基無茎鏃。基部の挟りは浅い。
8	B3-3 第IV層	石鏃	変質流紋岩 (赤玉質)	1.5 以上	1.7	0.3	0.6 以上	先端を欠損する。凹基無茎。基部の挟りは浅い。薄手で周縁は鋭利。
9	C3-17 第IV層	石鏃	頁岩(古期、 黒色頁岩)	2.3 以上	1.5	0.4	1.0 以上	先端を欠損する。凹基無茎鏃。基部の挟りは浅い。周縁は鋸歯状。
10	C3-15 第IV層	石鏃	流紋岩	2.7	1.6	0.5	1.1	完形。凹基無茎鏃。形状は二等辺三角形状で、基部の挟りは浅い。
11	D3-9 第IV層	石鏃	珪岩	2.3 以上	1.0 以上	0.3	0.6 以上	片側の脚部を欠損する。凹基無茎鏃。基部の挟りは浅い。造りは薄手。
12	A4-17 第IV層	石鏃	珪岩	1.6 以上	1.4	0.3	0.6 以上	完形。平基無茎鏃。先端部を欠損する。断面裏面が平坦。
13	D3-3 第IV層	石鏃	珪化岩	2.7	1.6	0.5	1.5	完形。平基無茎鏃。器体中央の断面はやや肥厚なレンズ状をなす。
14	C3-22 第IV層	石鏃	流紋岩質 溶結凝灰岩	1.8 以上	1.3	0.3	0.8 以上	一部を欠損する。平基無茎鏃。素材剥離面を残し、形状はやや歪む。
15	C3-14 第III層	石槍	頁岩 (Ter)	7.5	2.8	1.1	18.0	完形。両面加工で、比較的大形の茎部を有する。
16	C3-17 第III層	石槍	無斑晶質安山岩 (象の肌状)	8.0 以上	2.7	1.2	28.0 以上	茎部を欠損する。両面加工で茎部へ移行する。括れは弱い。
17	A区 第IV層	石匙	頁岩 (Ter)	4.4	4.7	1.2	27.2	完形。横長剥片を素材とする横長の石匙。つまみは低く作り出され、周縁部の表裏に調整が加えられる。表面の一部に節理面が残される。
18	D3-9 第IV層	石錐	砂質頁岩 (古期)	2.4	2.0	0.7	2.3	完形。小さなつまみが付く。錐部先端は使用により摩滅する。
19	A区 第IV層	石錐	頁岩 (古期)	2.1 以上	1.5	0.3 以上	0.6 以上	石鏃転用石錐。器体下端部を欠損するため形態は不明。先端部の周囲が使用により摩滅している。器体下半部の表裏面が大きく剥落している。

第3章 確認した遺構と遺物

遺物番号	出土位置	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
20	C3-23 第Ⅲ層	搔器	赤玉	2.2	1.9	0.3	1.7	器体の上半部を欠損する。小型の縦長剥片を素材とする。表裏の両側縁に調整を加える。
21	A3-25 第Ⅳ層	搔器	赤玉	3.0	1.8	1.0	4.1	完形。小型の縦長剥片を素材とする。打面に自然面を残す。表裏面の周囲に調整を加える。
22	C3-17 第Ⅳ層	搔器	赤玉	3.0	2.0	0.8	5.3	完形。横長の剥片を素材とする。表裏面の周縁に調整を加える。
23	A 区 第Ⅳ層	搔器	砂質頁岩 (Ter)	5.4	5.3	0.7	19.2	自然面の打面を小さく残す。横長の不整形剥片を素材とする。表面の周縁に粗雑な調整を加える。側縁の一部に使用痕が認められる。
24	C3-18 第Ⅳ層	搔器	流紋岩	3.4	1.3	0.6	1.5	完形。打面を小さく残す小型の縦長剥片を素材とする。左側縁の表裏に調整を加えている。
25	A 区 第Ⅳ層	搔器	頁岩 (Ter)	4.0	1.7	0.8	4.6 以上	器体は縦方向に破損する。横長剥片を素材とし、打面部側が欠損する。上端部に調整痕、縁辺の一部に使用痕が認められる。
26	B 区 2T 東側 表土	搔器	珪化岩 (黄玉)	2.7	3.3	1.0	8.6	小型の剥片を素材とする。端部の表裏と表面右側縁に調整加工。
27	C3-9 第Ⅲ層	搔器	珪岩	3.2	3.0	1.7	12.1 以上	器体中央部で縦方向に欠損する。不整形な剥片を素材とするようだが、打面部が大きく欠損しているため不明確。裏面端部を中心に調整が加えられる。右側縁には破損後の使用痕が認められる。
28	A 区 第Ⅳ層	搔器	頁岩 (古期)	3.5	3.3	0.8	8.2	完形。打面を小さく残す縦長剥片を素材とする。裏面の端部に調整を加える。両側縁に微細な使用痕が認められる。
29	D3-13 第Ⅳ層	搔器	頁岩 (Ter)	4.7	4.0	1.3	17.1	完形。表裏面とも周縁からの剥離に覆われる。両側縁と端部に調整が加えられる。
30	C3-16 第Ⅳ層	搔器	赤玉	1.9	2.7	0.9	5.1 以上	打面側を破損する。小型の剥片を素材とする。周縁に粗い調整を加えている。
31	C3-12 第Ⅳ層	搔器	頁岩 (Ter)	3.9	6.0	1.6	25.8 以上	打面部を大きく欠損する。横長剥片を素材とする。端部の表裏面に調整が加えられる。
32	D3-6 第Ⅲ層	搔器	珪岩	4.4	6.5	1.7	30.9	完形。横長剥片を素材とする。端部の表裏面に調整が加えられる。
33	C3-3 第Ⅳ層	使用痕のある 剥片	頁岩 (Ter)	5.0	5.0	0.8	18.9	表面に礫面を残す不整形な剥片を素材とする。両側縁に使用痕が認められる。
34	D3-12 第Ⅳ層	使用痕のある 剥片	頁岩 (Ter)	3.6	3.9	1.3	11.1	完形。不整形な縦長剥片を素材とする。左側縁から端部にかけて使用痕が認められる。
35	C3-24 第Ⅳ層	使用痕のある 剥片	頁岩 (Ter)	4.2	3.1	0.7	6.4 以上	打面部を薄く欠損する。不整形剥片を素材とする。表面に自然面を残す。左側縁に使用痕が認められる。
36	A4-16 第Ⅳ層	使用痕のある 剥片	頁岩 (古期)	3.4	3.0	1.0	8.6	打面側が厚く、端部が薄い横長剥片を素材とする。打面を除く周縁全体に使用痕が認められる。

遺物番号	出土位置	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
37	D3-1 第Ⅲ層	使用痕のある 剥片	砂質頁岩 (Ter)	3.2	1.7	0.4	2.1	完形。小型の縦長剥片を素材とする。 両側縁に調整が加えられる。
38	A 区 攪乱	使用痕のある 剥片	頁岩 (Ter)	3.2	2.0	0.4	2.1	打面を小さく残す、小型の縦長剥片 を素材とする。両側縁に使用痕が認 められる。
39	D3-18 第Ⅳ層	石錘	頁岩 (古期)	4.9	2.9	1.4	26.6	長軸方向に溝が全周する有溝石錘。 紐掛部径 4.2 cm、紐掛部全周 9.8 cm、 溝の幅 0.2 cm、溝の深さ 0.1 cm。
40	C3-15 第Ⅲ層	石核	頁岩 (Ter)	4.5	5.3	1.8	46.7	打面調整を行わず、稜上を打面とし て、横長不整形な剥片を剥取する。
41	B 区中央 未借地部 第Ⅲ層	打製石斧	頁岩 (古期)	13.0	9.8	2.6	349.3	完形。分銅型。基部は細かな調整剥 離によって作出される。
42	C3-9 第Ⅳ層	打製石斧	頁岩 (古期)	13.0	6.9	1.7	173.0	完形。撥形で横長剥片を素材とし、 表面に自然面を残す。
43	C3-5 第Ⅳ層	打製石斧	頁岩 (古期)	11.0	6.4	0.9	73.1	完形。小型の撥形。基部は方形状を なし、器体は薄手の造り。
44	C3-10 第Ⅳ層	打製石斧	頁岩 (古期)	11.3	5.9	1.5	106.1	完形。撥形で横長剥片を素材とする。 表面に自然面を残す。
45	B3-23 第Ⅳ層	打製石斧	頁岩 (古期)	10.3	6.0	1.7	102.2	完形。小型の撥形。刃部は横長剥片 の第一次剥離面を素材とする。
46	A3-21 第Ⅳ層	打製石斧	頁岩 (古期)	8.6	5.2	1.0	46.0	完形。小型の撥形。横長剥片を素材 とし、刃部は丸みを帯びる。
47	B 区 第Ⅲ層	打製石斧	頁岩 (古期)	8.8 以上	6.3	1.7	107.5 以上	上半部を欠損する。分銅型で表面に 自然面を残す。
48	C3-10 第Ⅳ層	打製石斧	頁岩 (古期)	9.8	5.4	1.1	58.5	完形。小型の撥形。表面に自然面を 残す。基部は薄手の造り。
49	C3-15 第Ⅲ層	打製石斧	頁岩 (古期)	8.5	4.5	1.7	79.7	完形。小型の撥形で、表面に大きく 自然面を残す。
50	C3-10 第Ⅳ層	打製石斧	頁岩 (古期)	7.5 以上	5.7	1.5	69.1 以上	上半部を欠損する。撥形か。
51	B3-23 第Ⅲ～Ⅳ層	磨製石斧	輝石安山岩 (Ter) (弱変質)	10.2 以上	4.1	2.3	148.9 以上	定角式の磨製石斧。刃部全体を欠損 する。頭部の形状は直頭で、側面 には明瞭な稜を有する。
52	A3-23 第Ⅳ層	磨石	砂岩	14.1	7.4	6.8	1236.1	厚みのある楕円形の河原石を素材と しているが、表裏面はほぼ平坦。全 面を研磨面に使用する。
53	A3-23 第Ⅳ層	磨石	流紋岩質 凝灰岩	16.1	8.9	3.3	632.5	不整楕円形をなす礫を素材とする。 表裏面を研磨面として使用。被熱に より僅かに赤色化する。
54	C3-14 第Ⅳ層	磨石	流紋岩	5.6	4.2	2.6	72.2	小型の礫を素材とする。表裏面は平 坦。主に表裏面を研磨面に使用する。
55	A3-23 第Ⅳ層	磨石	デイサイト質 凝灰岩	5.6	4.5	1.9 以上	49.7 以上	裏面は大きく剥離。小型の礫を素材 とし、表裏面はほぼ平坦。表面に研 磨面がみられる。
56	C4-11 第Ⅳ層	磨石	砂質凝灰岩	13.6	8.7	4.7	521.5	楕円形で、表裏面はほぼ平坦。表面 の風化が著しく、研磨面は不明瞭。
57	A 区 攪乱	磨石	砂岩	11.0	8.2	4.7	573.2	楕円形で、表裏面はほぼ平坦。表裏 面を研磨面として使用する。

第3章 確認した遺構と遺物

遺物番号	出土位置	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
58	A区 第IV層	磨石	砂岩	6.5	3.6	1.9	69.4	表裏面が平坦な楕円形をなす。おもに裏面を研磨面としている。
59	C4-6 第IV層	磨石	多孔質流紋岩 (溶結)	6.2 以上	6.6	4.6	215.1 以上	下半部欠損。表裏面に研磨痕あり。
60	C3-15 第IV層	磨石	角閃石黒雲母 花崗岩	8.3	6.7	5.2	360.1	楕円形をなし、表裏面及び左側面を研磨面として使用する。
61	C3-25 第III層	磨石	角閃石黒雲母 花崗閃緑岩	8.0	7.5	3.9	326.5	側縁部は風化により、剥離が著しい。表裏面に研磨面を有する。
62	A区 攪乱	磨石	角閃石黒雲母 花崗岩	10.4	8.6	4.4	523.1	表裏面を研磨面に使用する。側面及び裏面の一部は節理面から剥離。
63	A区 攪乱	磨石	流紋岩質 凝灰岩	10.9	8.9	4.8	583.3	表裏及び左側面を研磨面に使用。裏面研磨痕顕著。上端は敲打痕。
64	A3-20 第IV層	磨石	砂岩	10.0	7.4	3.6	350.8	表裏面を研磨面に使用。表面中央部が僅かに窪む。
65	A4-17 第IV層	磨石	黒雲母花崗岩	10.1	7.2	5.5	553.6	全体的に風化による剥離が著しく荒れている。左側縁に研磨面が残る。
66	B3-23	磨石	デイサイト質 凝灰岩	9.8	6.4	2.7	187.2	楕円形で片側が大きく磨り減っている。表裏面を研磨面として使用。
67	C3-9 第IV層	磨石	砂岩	11.5	8.4	5.2	603.4	不整楕円形をなす。表裏面に僅かな研磨痕。表面に極めて浅い凹あり。
68	C3-15 第IV層	磨石	凝灰岩 (礫混じり)	9.9	7.5	2.9	211.7	表面が風化により研磨面は不明瞭。
69	C3-15 第IV層	磨石	流紋岩質 凝灰岩	8.8	5.3	3.3	210.8	全面を研磨面として使用する。器面はざらついている。
70	B3-23	磨石	玄武岩 (古期)	12.5	7.6	4.7	705.2	全面を研磨面として使用する。下端に敲打痕、表裏面に浅い凹あり。
71	C3-4	磨石	黒雲母花崗岩	10.4	7.6	6.0	653.1	風化により器面が荒れている。裏面と右側面の下半部に研磨面が残る。
72	C3-15 第IV層	磨石	流紋岩質 凝灰岩	7.7	5.7	3.0	155.7	表裏面を研磨面に使用する。裏面は平坦で滑らかである。
73	C3-10 第IV層	磨石	凝灰岩	10.4	6.5	3.6	348.4	表裏面を研磨面に使用する。使用面は平坦で滑らかである。
74	C3-9 第IV層	磨石	流紋岩	10.1	7.2	2.9	300.6	表裏面を研磨面に使用する。裏面に極めて浅い凹、側面に敲打痕あり。
75	C3-9 第IV層	磨石	砂岩	10.8	7.0	3.7	412.4	表裏面を研磨面に使用する。表面中央部が僅かに窪む。
76	A区 攪乱	凹石	砂岩	12.6	9.2	5.4	844.9	表面に1個、裏面に2個の浅い凹あり。表裏面を研磨面に使用する。
77	C3-9 第IV層	磨石	砂岩	12.3	9.0	5.3	784.3	表裏面を研磨面に使用する。使用面に削痕、右側面に敲打痕がみられる。
78	C3-14 第IV層	磨石	角閃石黒雲母 花崗閃緑岩	9.4	8.5	5.4	639.6	表裏面を研磨面に使用する。表裏面の中央に敲打痕がみられる。
79	A3-21 第IV層	磨石	砂岩	8.8	6.9	3.6	279.7	表裏面を研磨面に使用するが、器面はざらついている。
80	C3-10 第IV層	磨石	頁岩 (古期)	8.2	6.1	2.2	162.2	表裏面を研磨面に使用する。器面は滑らかで、僅かに研磨痕が残る。

遺物番号	出土位置	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
81	D3-3 第IV層	磨石	流紋岩質 凝灰岩	11.8 以上	7.8	3.9	383.0 以上	風化による剥離が顕著。表面に研磨面が遺存する。
82	C3-25 第III層	磨石	黒雲母花崗岩	10.0	7.3	5.0	443.1	表裏面及び右側面の下半部に滑らかな研磨面が残る。
83	D3-17 第IV層	磨石	角閃石黒雲母 花崗岩	7.6	6.3	3.6	250.7	表裏面を研磨面として使用する。
84	A3-23 第IV層	磨石	デイサイト質 凝灰岩	9.8	9.0	3.3	342.9	右側面下半部欠損。表裏及び側面を研磨面として使用し、器面滑らか。
85	A区攪乱	磨石	角閃石黒雲母花 崗岩	10.0	8.7	5.7	634.2	裏面以外の器面は滑らか。裏面は敲打によってざらついている。
86	A3-21 第IV層	磨石	角閃石黒雲母花 崗岩	10.3 以上	16.0	4.8 以上	1285.6 以上	器体の半分欠損。表面に研磨面が残 り滑らか。裏面は大きく剥離する。
87	C3-15 第IV層	磨石	火山礫凝灰岩	13.6 以上	11.7 以上	4.3	813.9 以上	器体の約 1/4 遺存。表裏面とも研磨 面として使用し滑らか。全体に被熱 し、赤色化している。
88	C3-9 第IV層	磨石	流紋岩	10.7	8.4	6.7	791.4	球形で全面を研磨面として使用す る。器面は部分的に滑らかで、表面 に削痕がみられる。
89	C3-20 第III層	磨石	黒雲母花崗岩	9.0	7.7	6.4	595.8	不整な球形で、器面はざらつしてい るが、所々滑らかな部分がある。
90	C3-10 第IV層	磨石	砂岩	11.1	6.0 以上	5.3	476.0 以上	左側面を欠損する。器面はざらつ いており、敲打による僅かな凹がある。
91	A4-24 第IV層	磨石	輝石デイサイト	8.4	7.8	6.1	462.1 以上	右側面の下半部欠損。器面はざらつ いており、裏面中央に敲打痕有り。
92	C4-6 第IV層	磨石	角閃石黒雲母 花崗岩	8.7	8.2	7.1	657.0	裏面が平坦な球形状で、器面はざら ついているが、所々滑らかな部分 がある。裏面に極僅かな凹がある。
93	C3-9 第IV層	磨石	玄武岩（古期）	9.2 以上	8.2	5.2	606.6 以上	器体の下半部欠損。全面を研磨面と して使用する。器面は全面滑らかで あるが、被熱により、表面が赤色化 し、部分的に剥離している。
94	A3-23 第IV層	磨石	砂岩	6.6	4.5	3.5	143.1	裏面が平坦な楕円形。全面を研磨面 として使用。器面はざらついている。
95	C3-9 第IV層	磨石	砂岩	8.5	6.1	5.2	306.5	右側縁上半分欠損。表裏面を研磨面 に使用するが不明瞭。器面はざらつ いている。
96	D3-9 第IV層	磨石	流紋岩質凝灰岩	8.6	5.3	3.7	203.1	研磨面は不明瞭。器面はざらついて おり、所々剥離する。
97	B3-24 第IV層	磨石	多孔質流紋岩 （溶結）	6.9	5.2	4.1	176.9	卵形をなし、全面を研磨面として使 用する。器面は全体的に滑らか。
98	A4-17 第IV層	磨石	玄武岩 （古期）	6.1	4.9	4.3	168.5 以上	裏面の上半分欠損。全面を研磨面と して使用している。
99	A3-21 第IV層	磨石	黒雲母花崗岩	8.5	7.3	5.9	497.5	器面は風化によりざらついている が、裏面と下端部は滑らかである。
100	A区 攪乱	磨石	輝石安山岩 （第四紀）	9.6	8.5	4.7	566.3	円形で表裏面が平坦。表裏面を研磨 面としており、器面は滑らかである。
101	B区 表採	磨石	玄武岩 （古期）	6.0	5.5	1.7	87.5	円形で表裏面が平坦。表裏面を研磨 面として使用。裏面全体が窪む。

第3章 確認した遺構と遺物

遺物番号	出土位置	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
102	C3-10 第Ⅳ層	磨石	砂質凝灰岩	7.2	6.6	5.1	274.5	円形で全面を研磨面に使用する。器面は全体的に滑らかである。
103	D3-2 第Ⅲ層	磨石	流紋岩質凝灰岩	10.4	8.1	4.6	353.6	表裏面を研磨面に使用する。研磨面は平坦で滑らか。左側面に敲打痕、側面上端に煤状の付着物あり。
104	C3-10 第Ⅳ層	磨石	流紋岩質凝灰岩	11.3	9.4	8.3	977.6	裏面が平坦な球状をなす。おもに裏面を研磨面に使用し滑らか。側面には敲打痕がみられる。
105	A4-17 第Ⅳ層	磨石	黒雲母花崗岩	8.7	8.8	5.3	593.9	表裏面とも平坦な円形。表裏面を研磨面に使用する。使用面は滑らかであるが、側面は器面が荒れている。
106	C3-9 第Ⅳ層	凹石	流紋岩質 溶結凝灰岩	11.6	5.6	5.1	401.1	平面形状は楕円形で、断面形は丸みを帯びる。表裏面及び左側面に2個の凹がある。また左側面には敲打痕がみられ、全体的に被熱による色変化が認められる。
107	A区 攪乱	凹石	流紋岩質凝灰岩	9.6	7.2	3.5	325.8 以上	裏面下半部の一部欠損。形状は表裏面が平坦な楕円形で、表裏面を研磨面に使用する。表面に重複する2個の凹、裏面に1個の凹みを有する。器面はざらつており、側面上端部に敲打痕がみられる。
108	C3-14 第Ⅳ層	凹石	流紋岩質凝灰岩	11.4	9.1	4.4	517.2	形状は表裏面が平坦な楕円形で、表裏面を研磨面に使用する。表裏面に2個の凹を有する。研磨面は滑らかで、側面に敲打痕がみられる。
109	D3-9 第Ⅳ層	凹石	変輝緑岩	10.7 以上	9.5	4.8	705.9 以上	器体下半部の約1/2欠損。形状は表裏面が平坦な楕円形。表裏面を研磨面に使用し、滑らかである。表裏面に浅い凹を有する。
110	C3-4 第Ⅳ層	凹石	砂岩	14.0	7.4	5.0	727.6	形状は表裏面が平坦な長楕円形をなす。表裏面を研磨面に使用し滑らかである。表面に3個、裏面に多数の凹を有する。また、両側面とも浅い凹と敲打痕が認められる。
111	C3-9 第Ⅳ層	凹石	斑状角閃石 黒雲母花崗岩	12.2	10.2	5.7	949.2	左側面の上半部欠損。形状は表裏面が平坦な楕円形。表裏面を研磨面に使用し滑らかである。表面に浅い凹。
112	B区	凹石	輝石安山岩 (第四紀)	10.9	8.1	3.9	544.8	形状は表裏面が平坦な楕円形。表裏面を研磨面に使用し滑らかである。表面に浅い凹を有し、表裏面の中央及び側面は敲打によって、器面が荒れている。被熱痕が認められる。
113	C3-10 第Ⅳ層	凹石	流紋岩質 溶結凝灰岩	10.3 以上	7.2	4.7	420.8 以上	下半部欠損、裏面は節理面で大きく剥離。平面形状は楕円形で、表面に浅い凹有り。研磨面は不明瞭。
114	A4-16 第Ⅳ層	凹石	流紋岩質 溶結凝灰岩	9.0 以上	7.9	5.0	288.1 以上	器体の下半部及び裏面欠損。全面を研磨面に使用し、器面は滑らか。表面に1個の凹あり。

遺物番号	出土位置	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重さ	特徴
115	B3-23 第Ⅲ層	凹石	砂岩	9.4	6.0	4.5	387.7	平面形状は楕円形で、断面は丸みを帯びる。全面を研磨面に使用し、器面は滑らか。表面に浅い凹有り。両端部に敲打痕。
116	C3-9 第Ⅳ層	凹石	流紋岩質凝灰岩	10.5	6.8	6.6	525.8	形状は卵形をなし、全面を研磨面に使用。表面及び左側面に凹あり。
117	C3-14 第Ⅳ層	凹石	流紋岩質凝灰岩	9.4	7.9 以上	6.3	491.4 以上	左右の両側面欠損。本来は表裏面が平坦な円形で、表裏面を研磨面に使用。表面に浅い凹1個あり。
118	C3-4 第Ⅳ層	凹石	流紋岩質凝灰岩	10.3	9.2	4.9	496.4	円形で表裏面が平坦。表裏面を研磨面に使用。凹みは表裏面に1個。
119	C3-14 第Ⅳ層	凹石	斑状黒雲母 花崗岩	9.8	9.1	4.9	470.0	円形で表裏面が平坦。表裏面を研磨面に使用。表裏面に浅い凹あり。
120	C3-9 第Ⅳ層	凹石	黒雲母花崗岩	8.0	6.9	4.5	361.1	表裏面を研磨面に使用。表裏面に浅い凹あり。器面はざらついているが、表裏面の上半部は滑らか。
121	C3-4 第Ⅳ層	凹石	黒雲母花崗岩	8.9	8.0	4.1	427.6	表裏面を研磨面に使用。表裏面に浅い凹あり。表裏面は滑らかであるが、側面はざらついている。
122	C3-22 第Ⅳ層	凹石	玄武岩 (古期)	10.5	8.8	5.7	677.1	不整な三角形形状。全面を研磨面に使用し、器面は滑らか。表裏面に重複する凹が2個づつあり。
123	C3-9 第Ⅳ層	凹石	砂岩	10.4	9.2	6.5	783.5	全面を研磨面に使用し、器面は滑らか。表面に2個、裏面に1個の凹あり。
124	C3-4 第Ⅳ層	凹石	変輝緑岩	9.5	9.0	4.4	503.3	表裏面を研磨面に使用し、器面は滑らか。表面に凹1個、裏面に敲打痕。
125	攪乱	凹石	流紋岩質凝灰岩	9.2	8.4	6.7	605.8	不整な球形をなす。表面と側面を研磨面に使用し、器面は滑らか。表面に凹1個あり。
126	B区	石皿	流紋岩質 溶結凝灰岩	35.3 以上	21.5 以上	14.5	12.9kg 以上	器体の約1/4遺存する大型の石皿。内面は研磨により平坦、周縁には肥厚する縁が巡る。裏面は多孔石として使用される。内面は被熱により、赤色化及び剥離が著しい。
127	C3-14 第Ⅳ層	石皿	多孔質角閃石 デイサイト (第四紀)	17.2 以上	11.1 以上	7.5	1500.0 以上	内面は平坦で、縁部は断面三角形形状に突出する。側面及び裏面は研磨整形される。裏面は多孔石として使用する。内面には煤の付着顕著。
128	C3-10 第Ⅲ層	多孔石	流紋岩質 溶結凝灰岩	27.0 以上	19.8	8.3	3950.0 以上	右側面と表裏面の一部が剥離・欠損する。表裏面を多孔石として使用する。表裏面共に研磨痕はみられない。
129	C3-4 第Ⅲ層	多孔石	流紋岩質 溶結凝灰岩	24.4 以上	17.1	7.3	3250.0 以上	器体の上半部欠損。楕円形で扁平な礫を素材とし、表裏面を多孔石として使用する。
130	A4-23 第Ⅳ層	多孔石	礫質砂岩	23.7	17.8	4.5	2900.0	板状の礫を素材とする。表面に平坦な研磨面を有し、器面は滑らか。裏面は多孔石として使用しており、器面がざらついている。
131	C3-18 第Ⅳ層	多孔石	流紋岩質凝灰岩	26.0	22.1	7.5	5500.0	楕円形で扁平な礫を素材とする。表裏面を多孔石として使用するもので、器面の研磨痕は認められない。

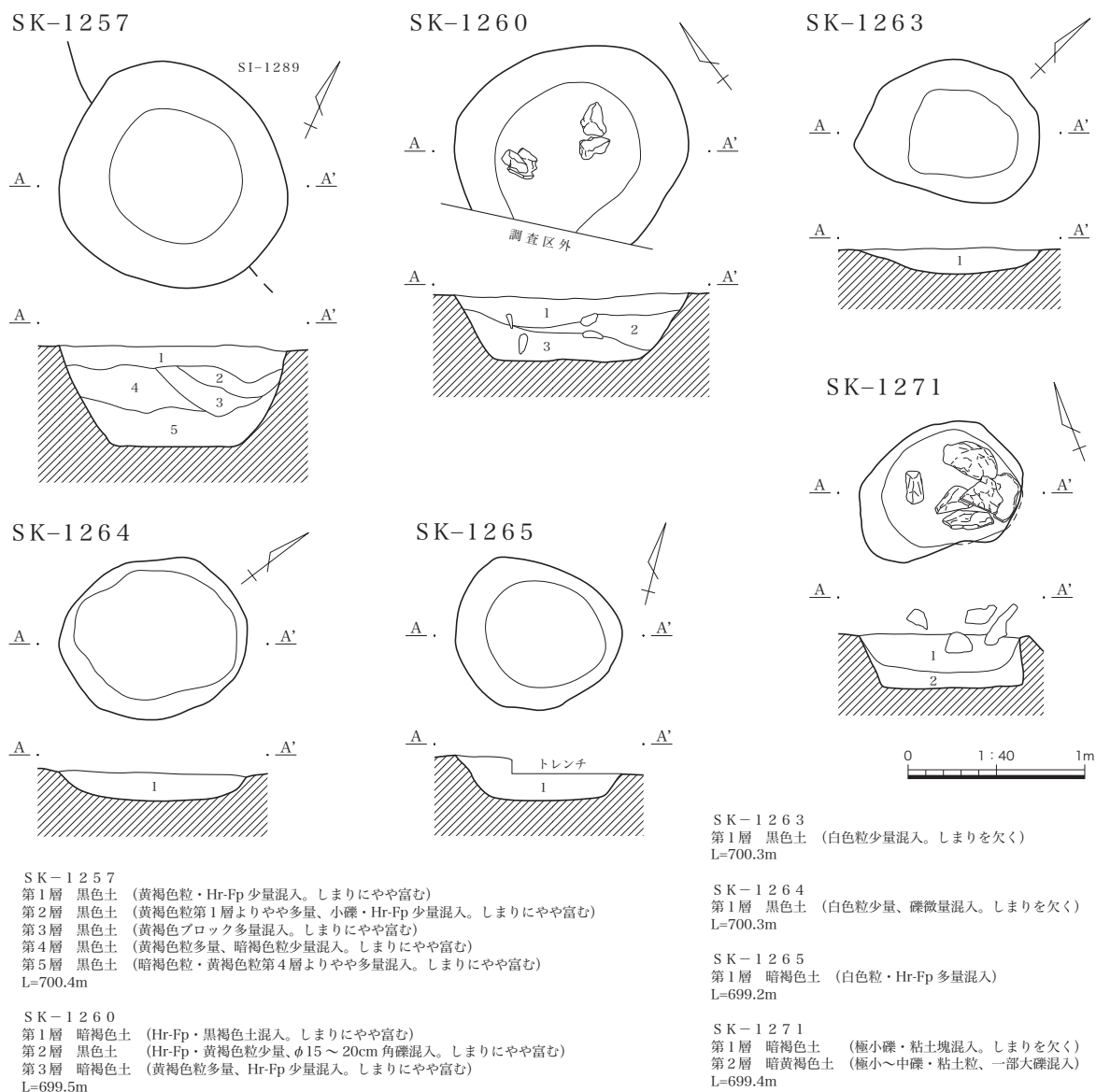
第3節 古代以降の遺構と遺物

1. 土坑・墓坑（第113・114図、図版九）

本節では、基本層第Ⅱ層上で確認した遺構について記載する。今回の調査において遺構の掘り込み面や覆土の状態などから、古代以降の所産と判断した土坑は8基で、平面形が円形の土坑が圧倒的に多い。

特徴的なものとしては、縄文時代と同様に多量の礫を意図的に埋めたと思われるものがある。SK-1261は長軸185cm、短軸176cmの不整な円形で、確認面である第Ⅱ層から67cmほどの深さがある。礫を廃棄した後に自然堆積によって埋没しており、最下層に比較的大型の礫を廃棄し、上位は自然堆積土に覆われている。

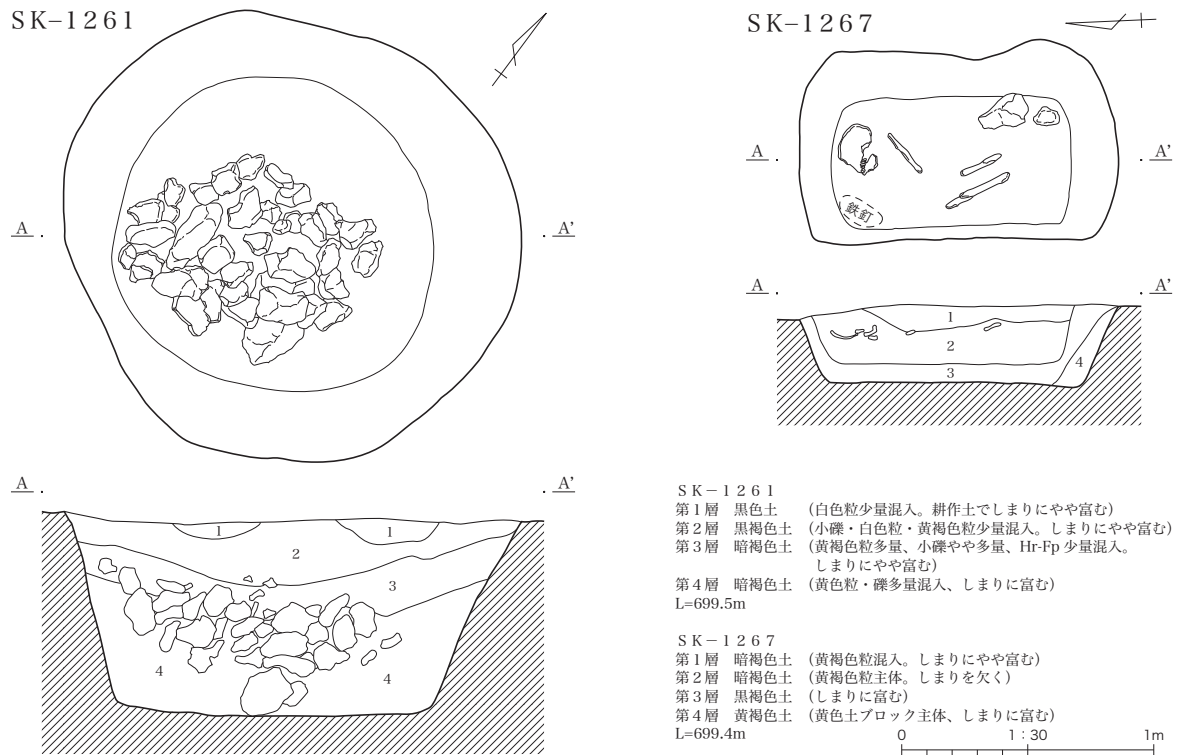
これらの土坑のうち遺物の伴出するものはSK-1267のみである。長軸126cm、短軸75cmの長方形をなす墓坑で、内部から遺存状態は非常に悪いが、頭蓋骨と上肢骨、下肢骨の一部を確認した。人骨は頭を北に向けて右側に首を傾けており、仰向けで足を曲げた仰臥屈葬の状態で埋葬されていた。副葬品は北西コーナー



第113図 SK-1257・1260・1263～1265・1271 実測図

付近から鉄釘、南東コーナーから10～20 cm大の礫が出土したが、調査直後に改葬したため図化していない。時期的には出土遺物から近世の墓坑と考えられる。

その他の土坑については、出土遺物を伴わない遺構が殆どであるため、細かな時期の決定は困難であるが、概ね近世以降の所産と思われる。ここでは、実測図と計測値などの一覧表を提示する。



第114図 SK-1261・1267 実測図

第12表 古代以降土坑一覧

() : 残存 単位: cm

遺構番号	位 置	平面形	長軸	短軸	深さ	備 考
SK-1257	D3-12・13	円形	129	123	67	SI-1289と重複、本土坑が新しい。
SK-1260	D3-14・15	推定不整円形	(135)	132	31	自然堆積。
SK-1261	D3-9	不整円形	185	176	67	4層上面から底面に礫多数出土。
SK-1263	D3-24・25	不整楕円形	104	67	14	黒色土の単層。
SK-1264	D3-15	楕円形	108	90	15	覆土はSK-1263と同質の黒色土。
SK-1265	A4-16	円形	94	84	23	覆土は、Hr-Fp粒を多く含む暗褐色土の単層。
SK-1267	A4-15	隅丸長方形	126	75	32	近世の墓坑と考えられる。人骨・鉄釘出土。
SK-1271	A4-10・15	不整楕円形	98	71	31	覆土上位から礫出土。

第4章 調査の成果

第1節 縄文時代の遺構と遺物について

今回の発掘調査は、第1次調査範囲の西側農地部分に係わる盛土工事に伴うもので、発掘調査対象面積は約3,500㎡であったが、このうち本調査の対象とした面積は約2,150㎡である。調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡4軒、土坑92基、屋外土器埋設遺構2基、陥し穴4基、近世以降の土坑8基などを確認した。

2次調査となる今回の調査区は、湯西川に沿って弧状に展開する環状集落の西半部分に相当し、遺構・遺物の広がりから集落の推定範囲も直径80m以上に及ぶことが明らかとなった。

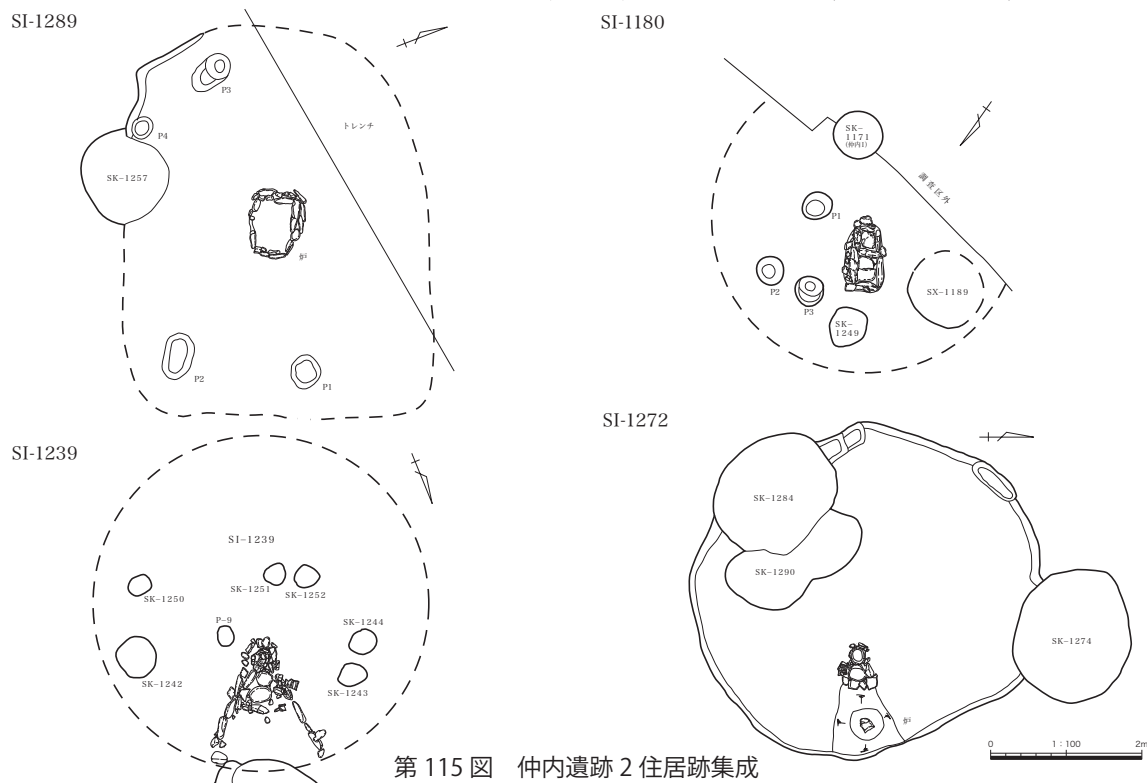
ここでは、遺構・遺物について特徴的なことを前回の調査も踏まえて概観し、調査のまとめとしたい。

1. 遺構

(1) 竪穴住居跡

中期中葉から後葉の竪穴住居跡4軒を調査した。これらの住居跡は、壁が包含層の掘り下げによって失われているものが殆どで、柱配置や壁溝など炉跡以外の住居内部施設に関しても不明確なものが多い(第115図)。それぞれの所属時期については、炉の形態及び出土遺物により、前回の報告で分類したI期(加曽利EⅠ式古段階)のものが1軒(SI-1289)、IV期(加曽利EⅢ式段階)のものが3軒(SI-1180、1239、1272)である。IV期の住居跡には複式炉が備わり、今回の調査では土器埋設複式炉で前庭部に縁石を持つもの(SI-1239)と持たないもの(SI-1272)、二室の石組部で構成されるもの(SI-1180)を確認した。

本遺跡で中期後葉(加曽利EⅡ～Ⅲ式期)に該当する住居跡は、前回報告したものと合わせると13軒で、調査区の北東部分を中心に弧状に分布しており、主軸方向はそれぞれ中央の無遺構部分(広場)への求心性を示す。この時期の住居跡にはいずれも複式炉が付設され、加曽利EⅡ式期(大木9式古段階)には大形の石組部と前庭部で構成される出現期の石組複式炉が、また、加曽利EⅢ式期(大木9式新段階)には土器埋



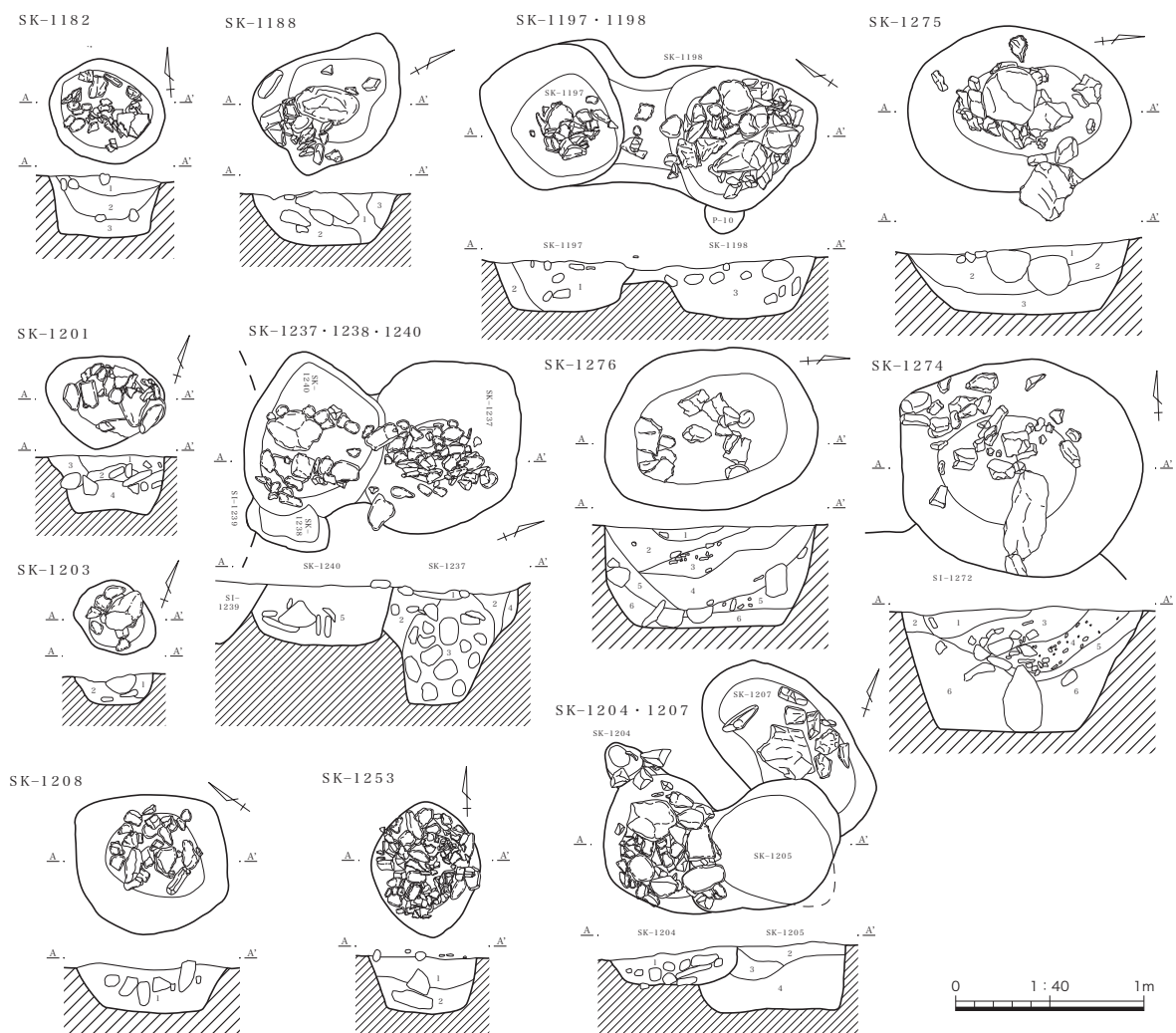
第115図 仲内遺跡2住居跡集成

設部と石組部を基本とする土器埋設複式炉が造られる。土器埋設複式炉については、炉体土器に加曾利E式のキャリパー状深鉢形土器を単体で使用し、土器埋設部と石組部の境が不明瞭で箱形の形状をなすもので、本県北部地域にみられる特徴的なものである（後藤 2010）。こうした複式炉の分布は、概ね本県の北半部を南限とするが、一遺跡内で客体的に数例存在する程度であり、主体的に造られるのは本遺跡のほかに那須塩原市槻沢遺跡（後藤 1996）や那須町ハッケトンヤ遺跡（後藤 2007）など、県内でも最北部の地域に限られる。また、本遺跡では前庭部に縁石を持つものが13軒のうち5例と一遺跡での割合が高く、複式炉分布の中心である東北地方南部のものにより近い印象を受ける。なお、前回の調査では、石組複式炉出現以前の大木8b式期に比定される土器敷きの土器埋設石囲炉（SI-879）が確認されている。この時期の石囲埋甕炉に土器を敷く在り方は、三条市長野遺跡A地点（家田他 1990）や長岡市枅倉遺跡（寺村 1961）など、新潟県中越地方に類例が認められることや、火炎系土器をはじめ越後方面の土器の大量出土などからも、本遺跡とこれらの地域との交流が密であったことが予想される。

(2) 土坑

今回の調査で土坑としたものは92基である。これ以外に分類上で小穴としたものや陥し穴としたものを含めた数は106基で、前回の調査と合わせた総数は481基に達する。

これらの土坑は平面形や断面形、出土遺物などから幾つかに分類可能であり、袋状土坑、墓坑、陥し穴、



第116図 仲内遺跡2土坑集成

石器埋納坑などのほか、廃絶後の土坑を再利用した廃棄坑や建物の柱穴の可能性のあるものが想定される。集落内での土坑の分布域は、竪穴住居や土坑同士と重複しながら集落の外縁を巡る住居群の内側に集中しているが、遺構の掘り込み面が包含層内にあるため新旧関係を捉えられるものは少ない。また、遺物も埋め戻しや流れ込みとみられる土器片や石器が多いため時期の特定は難しいが、概ね中期中葉から後葉のものが主体で、このほか数は少ないものの後期前半期のものが数基認められた。

今回の調査で確認した袋状土坑は、SK-1199・1205の2基である。この時期の関東地方北東部から東北地方にかけての地域では、袋状土坑が多数作られるが、本遺跡では前回の調査と合わせて29基と少ない。この要因としては、場所によって地山に大小の河床礫が多く含まれており、大きく外側へ掘ることが困難であったと考えられる。このため、規模も比較的小型で、また、オーバーハングも部分的で小さいものが少なくない。

陥し穴は今回の調査で4基確認した。SK-1269とSK-1270は北西方向、SK-1283とSK-1285は北東方向に主軸を持つ開口部が楕円形をなすもので、調査区南側でほぼ同一の等高線上に構築され、北西から南東方向に並んでいる。それぞれの間隔は4.5mで、2基で対をなすように配置されている。出土遺物は皆無で所属時期については不明であるが、覆土もほぼ同様な堆積状況が認められることから同一の面から掘り込まれた可能性が高く、ある程度の同時性を示すものと考えられる。

特徴的な土坑の一つとしては、多量の礫が廃棄された土坑がある（第116図）。本遺跡では地山に河床礫が多く含まれるため、廃絶した竪穴住居跡や径1m前後の土坑が埋没していく過程での窪みなどに、多量の小型礫や数個の大型礫、大小の礫を廃棄するものなど様々である。このなかには、単に礫を廃棄しただけではなく、大型の土器片や多孔石などと伴に意図的に埋めた状況が認められるもの（SK-1182・1188）もある。

墓坑については、典型的な例として楕円形をなす浅い土坑内に副葬品の硬玉製大珠に伴い、「甕被り葬」が想定される深鉢形土器（加曽利EⅡ式）の上半部を逆位に埋納した前回調査のSK-826が挙げられる。

遺体の遺存しない墓坑の認定について県内では、中期から後期の大規模集落遺跡の調査例からいくつかの認定基準が示されている（江原1999、塚本2001、中村2006など）。これらによると、土坑の形状や覆土の状況（人為的埋土）、出土遺物（副葬品などの有無）、上部の配石や土器による被覆行為などを基準としている。本遺跡では、土坑同士の重複が著しく、また遺物も稀少であり認定が困難であるが、例えば今回調査のSK-1198・1204・1207・1208・1240は長軸1.2m前後の楕円形で、覆土中位以上に径4・5cmから人頭大の礫が含まれる単一層で人為的に埋め戻されており、墓坑の可能性も考えられる。

（3）土器埋設遺構

土器埋設遺構とした屋外に単独で埋設された埋甕は、前回の調査と合わせて6基で、このほか住居内のものが土器埋設複式炉（SI-701）の前庭部から1基（加曽利EⅢ式期）確認されている。県内の土器埋設遺構は、中期後葉から後期前葉にかけて盛行するが、本遺跡では加曽利EⅠ式期が主体の比較的古い時期のものである。これらは、概ね住居群の周辺に分布しており、深鉢形土器の口縁部を上にした正位のものが5基、横位のものが1基で、このうち意図的に底部を欠くものが2基認められた。土器の器面には火熱痕や煤、炭化物の付着がみられるものが多く、使用された土器の利用が看取される。副葬品の伴うものは少ないが、前回調査のSX-787は複弧文系土器を横位に埋設したもので、傍らに凹石が伴う。また、SX-1282は樽状の甕形土器（大木8b式）を正位に埋設したもので、土坑上部が失われているが土器内に浅鉢形土器の体部下半から底部の破片と扁平な石が落ち込んだ状態で出土しており、これらを蓋とした縦位の「合わせ口埋甕」の可能性もある。「合わせ口埋甕」については、県内でもハッケトンヤ遺跡で屋外の1例（後期初頭、綱取Ⅰ式期）、住居内のもものでは茂木町塙平遺跡（後藤ほか1994）SI-02（加曽利EⅢ～Ⅳ式期）の1例と極めて少なく注目される。

2. 遺物

遺物はこれまでに、縄文時代早期中葉から後期後半までの縄文土器、土偶・円盤などの土製品、石鏃・石匙・石錐・搔削器類・石槍・石錘・打製石斧・磨製石斧・磨石類・石皿などの石器が中箱換算で約 320 箱分出土した。

(1) 土器

中期の土器は、各遺構に伴って阿玉台Ⅰa式から加曽利Ⅲ式までの土器が出土している。

中期前半では、阿玉台Ⅰa～Ⅰb式土器がやや多く出土しており、土器全体の約 1/4 を占めている。特に前回の調査では、出土例の少ない阿玉台Ⅰa式の完形土器が土坑内（SK-112）から伴出しており特筆される。集落の中心となる中期後半は、加曽利Ⅲ式期（大木 8a～8b 式）のものが主体で、特徴として東北地方南部や新潟地方との関連が深い土器の出土が顕著である。特に火炎系土器については、鶏頭冠把手が優勢であること、体部上位に安定的に渦巻文を配することなど、会津地方の土器に近い特徴を有しており、越後地方の規範に比較的忠実に表現されている（塚本 2011）。また、口頸部文様帯の地文に細沈線を充填する「塔ヶ崎類型群」や、縦位の綾杉状細沈線を特徴とする「枋倉類型群」（寺崎 1999）に該当する越後地方の土器の一部が一定量存在することも明らかとなった。このほか、中峠式土器をはじめ東関東的な特徴を有する土器（本書分類の第Ⅲ層第 6 群、第Ⅳ層第 11 群第 2 類）の出土が比較的多く認められた。

土器埋設複式炉の発達する加曽利Ⅲ式期では、東北地方の大木 9 式は客体的な存在で、加曽利Ⅲ式が主体を占める。さらに少量ではあるが、連弧文土器や中部地方起源の条線地文に隆帯や粘土紐を貼付する所謂曾利式系土器も組成に加わり、関東的な様相を示す。

後期では、後期初頭から後葉の土器がみられるが、出土数は極めて少ない。後期前半には、称名寺式、綱取式、堀之内式が土坑内から数個体出土しており、これらに三十稲葉式や南三十稲葉式など、新潟方面の土器が伴出する。後期後半以降は、加曽利Ⅲ式、安行Ⅰ式土器などが僅かに出土しているのみで遺構も確認されていない。このことは、本遺跡周辺における縄文時代集落の拠点が、湯西川左岸の段丘上に位置する川戸釜八幡遺跡（後期中葉～晩期中葉）に移行した結果と予想される。

このほか包含層からは、早期中葉の沈線文系土器（三戸式・田戸下層式・出流原式）、早期後葉の条痕文系土器や縄文-条痕土器、前期の花積下層式土器や黒浜式土器などが少量出土した。なかでも、早期沈線文系土器の所謂出流原式土器は、同一個体とみられる口縁部から体部上半部の破片が出土しており、県内でも文様構成の全容がほぼ理解可能な好資料である。

(2) 石器・石製品

石器・石製品は前回の調査と合わせて合計 434 点出土した。内訳は石鏃 112 点、石匙 15 点、石錐 23 点、搔削器類 88 点、石槍 4 点、石錘 1 点、打製石斧 13 点、磨製石斧 3 点、磨石類 156 点、石皿 13 点、石棒 1 点、

第 13 表 仲内遺跡縄文時代石器集計表

器種名	遺構内		遺構外	合計	(%)
	住居	土坑			
石鏃	4	11	97	112	25.8
石匙	1	1	13	15	3.5
石錐	4	1	18	23	5.3
搔削器類	7	22	59	88	20.3
石槍	0	1	3	4	0.9
石錘	0	0	1	1	0.2
打製石斧	0	3	10	13	3.0
磨製石斧	1	0	2	3	0.7
磨石類	14	15	127	156	35.9
石皿	2	1	10	13	3.0
石棒	0	0	1	1	0.2
石製品・その他	0	1	4	5	1.2
総計	33	56	345	434	100

第4章 調査の成果

石製品・その他5点である(第13表)。

全体の約39%の169点が磨石類・石皿といった堅果類・根茎類を加工するための石器であり、次いで石鏃が全体の約26%の112点、搔削器類が全体の約20%の88点と多い一方で、土掘り具としての打製石斧や漁労に係わる石錘は極めて少ない。このことから本遺跡における当該期の生活様相は、堅果類や根茎類などの植物採集に加えて狩猟の比重も大きかったものと思われる。このような石器組成は、磨石類・石皿が圧倒的に多い複式炉分布圏の東北地方南部や、その南縁に位置する那須地方の那須塩原市槻沢遺跡(後藤1996)、那珂川町三輪仲町遺跡(塚原1994)、那須町ハケットンヤ遺跡(後藤2007)などの様相とはやや異なる。県内では磨石類・石皿に次いで石鏃の出土数が多い八溝山地西側の丘陵地に位置する茂木町桧の木遺跡(中村2005・2006)に近い傾向があり、遺跡の立地する地形や環境により、石器組成については食料の獲得方法に差異がみられるようである。

石器石材に関しては、特に剥片石器についてみると、デイサイトや流紋岩、チャートといった本遺跡周辺の基盤層を構成する堆積岩類や火山岩類など、在地性岩石の使用頻度が高いことが窺える。また、本遺跡周辺に分布する以外の異地性岩石および鉱物としては、珪質頁岩(石鏃・石匙・石錐・搔削器類)、翡翠(大珠)、蛇紋岩(磨製石斧)、黒曜石(石鏃・搔削器類)などがある。黒曜石については蛍光X線分析の結果、本県の高原山産と長野県産(星ヶ塔)、神津島産出のものと判断された(建石他2011、本書の付章)。包含層出土のため明確な時期は検討を要するが、東北地方南部に接した山間部に位置する本遺跡において、黒曜石流通の動きが県内の同時期に展開する平野部の遺跡と比較してほぼ同じ傾向を示す点は興味深い結果である。

主要参考文献

- 家田順一郎他 1990『長野遺跡発掘調査報告書』下田村教育委員会
- 江原英ほか 1999『寺野東遺跡Ⅱ』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 片根義幸 2006『仲内遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 片根義幸・田代隆 2011『川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 後藤信佑・谷中隆 1994『塙平遺跡Ⅰ』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 後藤信佑 1996『槻沢遺跡Ⅲ』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 後藤信佑 2007『ハケットンヤ遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 後藤信佑 2010「加曽利Eの複式炉・大木の複式炉―掘方と埋設土器の相違からみた槻沢遺跡の複式炉の検討―」『研究紀要第18号』(財)とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター
- 建石徹ほか 2011「栃木県・群馬県内諸遺跡出土黒曜石の産地分析―旧石器時代縄文時代資料を中心として―」『一般社団法人日本考古学協会 2011年度栃木大会 研究発表資料集』日本考古学協会 2011年度栃木大会実行委員会
- 塚原孝一 1994『三輪仲町遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団
- 塚本師也 2001『八剣遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団
- 塚本師也 2011「湯西川仲内遺跡出土土器の検討―特に火炎系土器について―」『研究紀要第19号』(財)とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター
- 寺崎祐助 1999「中部地方 中期(馬高式)」『縄文時代』10『縄文時代文化研究の100年』縄文時代文化研究会
- 寺村光晴 1961『栃倉』栃尾市教育委員会
- 中村信博 2005『桧の木遺跡Ⅰ』本田技研工業株式会社・桧の木遺跡調査団
- 中村紀男・中村信博 2006『桧の木遺跡Ⅱ』本田技研工業株式会社・桧の木遺跡調査団

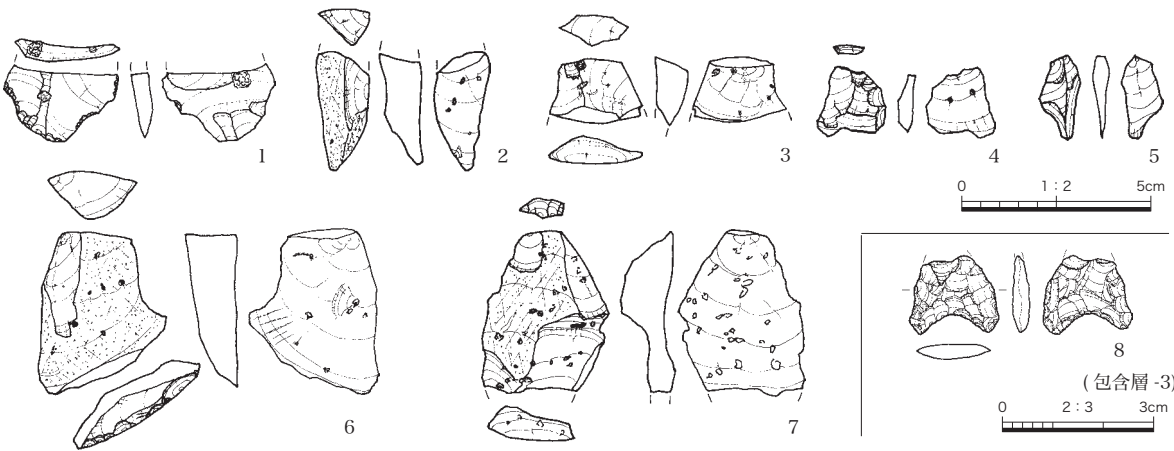
付章 自然科学分析

栃木県仲内遺跡出土黒曜石資料の産地分析

三浦麻衣子*・建石 徹**・二宮修治*(*東京学芸大学、**文化庁)

1. はじめに

栃木県日光市仲内遺跡より出土した縄文時代中期黒曜石資料について、蛍光X線分析による産地分析をおこなったので報告する。今回報告する資料の大半を含む仲内遺跡出土黒曜石資料の産地分析については、日本考古学協会 2011 年度栃木大会において結果を速報したが（建石・三浦・村上・井上・朴・津村・二宮 2011）、その後の整理作業の進捗に応じ追加した資料の分析結果を含む本報告をもって正式報告とする。



第 117 図 分析対象黒曜石製石器・剥片等実測図

第 14 表 分析対象黒曜石製石器・剥片等一覧

() : 残存値 単位 : cm・g

番号	出土位置	器種	石質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	A区 攪乱	搔器	黒曜石	(1.9)	3.0	0.5	2.8	縦長剥片を素材とする。打面側に細かな調整を加える。器体の中位で破損する。
2	A区 攪乱	剥片	黒曜石	(3.2)	1.4	1.1	3.1	表面に風化した節理面を残す。断面三角形の縦長剥片で、打面側を欠損する。ごく少量の球顆が認められる。
3	C3-4 第Ⅳ層	剥片	黒曜石	(1.8)	2.5	0.9	3.5	縦長の剥片で、下半を欠損する。少量の球顆が認められる。
4	C4-11 第Ⅳ層	剥片	黒曜石	1.8	1.8	0.4	1.1	打面を欠損する。不整形な剥片。
5	D4-7 第Ⅲ層	碎片	黒曜石	2.2	1.1	0.4	0.3	
6	C3-16 第Ⅲ層	搔器	黒曜石	4.4	3.4	1.4	15.5	不整形な縦長剥片を素材とする。表面に風化が進んだ剥離面残す。剥片の末端部に調整を加えて搔器としている。
7	C3-17 第Ⅳ層	剥片	黒曜石	(4.2)	3.4	1.3	15.1	縦長剥片を素材とする。末端部を欠損する。表面に風化の進んだ剥離面を残す。表裏面に球顆が認められる。
8 (包含層3)	C3-22 第Ⅳ層	石鏃	黒曜石	(1.6)	1.8	0.3	(0.9)	先端を欠損する。凹基無茎鏃で、基部が浅く彎曲する。

2. 資料（試料）

産地分析に供した資料は、仲内遺跡より出土した黒曜石資料計 8 点である（第 117 図、第 14 表）。遺跡の性格や出土状況等から、いずれの資料も縄文時代中期後半の所産と考えられる。分析No.1～7 は先の速報分（建石・三浦・村上・井上・朴・津村・二宮 2011）に含まれる。分析No.8 はその後の追加分である。

資料の選定、帰属時期や器種の検討等に当たっては、財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター片根義幸氏、芹澤清八氏の全面的なご協力を頂いた。

3. 産地分析の方法

黒曜石資料中の各元素の測定には、エネルギー分散型蛍光 X 線分析（非破壊法）を用いた。本研究に用いた装置は、SII ナノテクノロジー社製蛍光 X 線分析装置 SEA-5120S である。本法の測定条件を第 15 表に示した。

黒曜石の主成分元素であるケイ素（Si）、チタン（Ti）、アルミニウム（Al）、鉄（Fe）、マグネシウム（Mg）、カルシウム（Ca）、ナトリウム（Na）、カリウム（K）の 8 元素のうち、Fe、Ca、K の 3 元素は、黒曜石の産地間の識別・分類に特に有効であり、産地分析の指標元素となる。筆者らはこれら 3 元素と、これらと挙動に相関性のある微量元素成分元素であるマンガン（Mn）、ストロンチウム（Sr）、ルビジウム（Rb）を加えた 6 元素による検討が産地分析に有効であることを示してきた（建石・坂上・柳田・二宮 2008 他）。本研究においても、はじめにこの 6 元素の測定を行った。

産地分析のための基準資料として、北海道白滝、置戸、十勝三股、赤井川、青森県小泊、出来島、鶴ヶ坂、深浦、岩手県雫石、折居、花泉、秋田県金ヶ崎、脇本、宮城県湯の倉、色麻、秋保、山形県月山、新潟県板山、栃木県高原山、日光、長野県小深沢、男女倉、星ヶ塔、麦草峠、神奈川県畑宿、静岡県上多賀、柏峠、東京都神津島の各産地黒曜石を使用した。各産地黒曜石の分析値（岩石学の慣例にしたがい酸化物の形で表記し、

第 15 表 蛍光 X 線分析の測定条件

装置	SII ナノテクノロジー社製エネルギー分散型 蛍光 X 線分析装置（SEA-5120S）		
		測定 1	測定 2
線源	ターゲット	モリブデン (Mo) 管球	
	電圧	45kV	15kV、45kV
測定	照射径	1.8mm φ	
	雰囲気	大気	真空
	測定時間	100 秒	180 秒
定量分析	計算法	ファンダメンタルパラメータ法	
	標準試料	なし	なし

第 16 表 東日本の主な産地黒曜石の 6 元素組成

（6 元素の酸化物の総和を 100 とした時の百分率）

都道府県	産地	MnO	FeO	SrO	CaO	Rb ₂ O	K ₂ O
北海道	白滝	1.5	38.9	0.2	11.8	1.0	46.7
	置戸	1.3	37.6	0.4	18.2	0.9	41.7
	十勝三股	1.6	36.1	0.3	16.6	1.0	44.4
	赤井川	1.5	36.2	0.3	18.0	0.8	43.1
青森	小泊	0.9	38.4	0.4	20.8	0.9	38.7
	出来島	4.9	32.7	0.7	19.6	0.6	41.4
	鶴ヶ坂	1.7	36.6	0.4	15.1	1.0	45.2
	深浦	1.4	55.9	0.0	4.1	0.6	37.9
岩手	雫石	2.0	44.9	0.6	23.1	0.5	28.8
	折居	2.0	45.7	0.6	20.6	0.6	30.5
	花泉	2.1	45.7	0.6	22.3	0.5	28.7
秋田	金ヶ崎	1.9	39.1	2.1	26.9	0.6	29.4
	脇本	5.4	24.1	0.5	22.3	1.1	46.6
宮城	湯の倉	1.9	56.0	1.0	27.3	0.2	13.6
	色麻	3.8	55.3	1.1	24.3	0.2	15.2
	秋保	2.3	58.4	0.9	29.0	0.2	9.3
山形	月山	4.3	30.0	0.6	17.4	0.8	46.8
新潟	板山	3.3	29.0	0.4	17.7	1.1	48.5
栃木	高原山	1.4	48.5	0.6	20.7	0.6	28.2
	日光	1.7	62.1	0.8	27.5	0.1	7.8
長野	小深沢	3.7	28.2	0.1	14.7	1.8	51.5
	男女倉	2.5	32.0	0.4	16.1	1.0	48.0
	星ヶ塔	3.1	27.3	0.2	13.8	0.9	54.6
	麦草峠	1.6	33.8	0.7	17.2	0.6	46.0
神奈川	畑宿	2.4	61.4	1.0	23.9	0.1	11.3
静岡	上多賀	1.7	53.1	0.9	24.2	0.2	19.9
	柏峠	1.4	51.1	0.6	24.0	0.3	22.7
東京	神津島	3.2	33.8	0.5	19.1	0.6	42.8

その総和を 100 とした百分率で示した) を第 16 表に示した。

産地分析は先の 6 元素の測定 (測定 1) の結果をもとに、最遠距離法によるクラスター分析を実施し、産地黒曜石との類似性 (非類似性) を検討した。クラスター分析だけでは産地を絞り込むことが困難であった資料については、個々の資料と産地群とのクラスター分析による併合関係やその距離等の検討に加え、主成分 8 元素の測定 (測定 2) により推定する産地を絞り込んだ。なお、クラスター分析には、SPSS 社製 SPSS (Ver.14.0J) を用いた。

4. 産地分析の結果と考察

第 16 表に測定 1 による遺跡出土黒曜石の 6 元素組成と推定される産地等を示した。個々の分析資料と産地資料群の分析値をクラスター分析した結果、最も類似性の高い (非類似性の低い) 産地資料との併合距離 (以下、産地資料との併合距離をいう) も第 17 表に示した。

産地分析の結果は、産地別に高原山産 5 点、星ヶ塔産 2 点、神津島産 1 点と推定された。本遺跡は、栃木県の北西端、福島県会津地域に隣接する立地の影響もあるのだろう、会津地域等と関わりの深い土器群 (火炎系土器群等) が多数出土することが知られているが (たとえば塚本 2011)、黒曜石資料の産地分析結果は、平野部の遺跡と同様の傾向 (高原山産・星ヶ塔産・神津島産) を示し、興味深い。筆者らは、先の速報 (建石・三浦・村上・井上・朴・津村・二宮 2011) において、本報告の分析 No. 1 ～ 7 (高原山産または星ヶ塔産) の産地分析の結果を公表し同様の考察をおこなったが、その後に分析を実施した分析 No. 8 (神津島産) の結果を踏まえれば、産地分析からみた本遺跡の黒曜石利用のあり方が平野部の遺跡の傾向に準ずることが、より明確化されたといえよう。今後、周辺地域等において同様の分析事例をさらに蓄積することが望まれる。

第 17 表 仲内遺跡出土黒曜石資料の産地分析結果

(分析値は 6 元素の酸化物の総和を 100 とした時の百分率)

分析No.	時期	器種等	出土位置	MnO	FeO	SrO	CaO	Rb ₂ O	K ₂ O	併合産地	併合距離
1	縄文時代中期後半	搔器	A 区攪乱	3.2	22.0	0.2	14.1	0.8	59.7	星ヶ塔	0.416
2	縄文時代中期後半	剥片	A 区攪乱	1.5	44.8	0.7	23.2	0.6	29.3	高原山	0.402
3	縄文時代中期後半	剥片	C3-4 第Ⅳ層	1.5	45.2	0.7	23.6	0.6	28.4	高原山	0.472
4	縄文時代中期後半	剥片	C4-11 第Ⅳ層	1.8	46.6	0.6	20.7	0.8	29.6	高原山	0.297
5	縄文時代中期後半	碎片	D4-7 第Ⅲ層	2.9	25.5	0.3	15.1	1.0	55.2	星ヶ塔	0.379
6	縄文時代中期後半	剥片	C3-16 第Ⅲ層	1.7	46.6	0.7	22.5	0.6	27.9	高原山	0.394
7	縄文時代中期後半	剥片	C3-17 第Ⅳ層	1.3	46.1	0.7	21.9	0.6	29.3	高原山	0.179
8	縄文時代中期後半	石鏃	C3-22 第Ⅳ層	3.2	33.7	0.6	21.1	0.6	40.8	神津島	0.226

謝辞

本研究を実施するにあたり、財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター片根義幸氏、芹澤清八氏には全般にわたる多くのご協力・ご教示を賜りました。産地分析を実施するにあたり、東京学芸大学文化財科学研究室が所有する各産地黒曜石とともに、國學院大學研究開発推進機構考古学資料館所有の「吉谷昭彦博士寄贈黒曜岩資料」(國學院大學研究開発推進機構考古学資料館編 2008) のうち北海道・東北地域の産地黒曜石を基準資料として利用させていただきました。吉谷昭彦博士および、吉田恵二館長・内川隆志准教授をはじめとする國學院大學の皆様には多くのご協力・ご教示をいただきました。また、大工原豊氏、国武貞克氏、塚本師也氏、江原英氏、合田恵美子氏には、日頃より本研究にも関わる多くのご教示をいただいております。皆様方に厚く御礼申し上げます。

引用・参考文献

國學院大學研究開発推進機構考古学資料館編 2008『吉谷昭彦博士寄贈黒曜岩資料』國學院大學研究開発 推進機構考古学資料館

建石徹・坂上恵梨・柳田明進・二宮修治 2008「縄文時代草創期遺跡出土黒曜石の産地推定―新潟県内資料を中心として―」『津南学叢書第8輯 縄文時代の胎動』津南町教育委員会・信濃川火焰街道連携協議会

建石徹・三浦麻衣子・村上夏希・井上優子・朴嘉瑛・津村宏臣・二宮修治 2011「栃木県・群馬県内諸遺跡出土黒曜石の産地分析 ―旧石器時代・縄文時代資料を中心として―」『一般社団法人日本考古学協会 2011 年度栃木大会 研究発表資料集』日本考古学協会 2011 年度栃木大会実行委員会

塚本師也 2011「湯西川中内遺跡出土土器の検討―特に火炎系土器について―」『研究紀要』19 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

写真図版



仲内遺跡A区全景（南東上空から）



仲内遺跡B区全景（南東上空から）



SI-1180 炉跡（北西から）



SI-1239 炉跡（北から）



SI-1272 炉跡（北から）



SI-1272 完掘状況 南半分（東から）



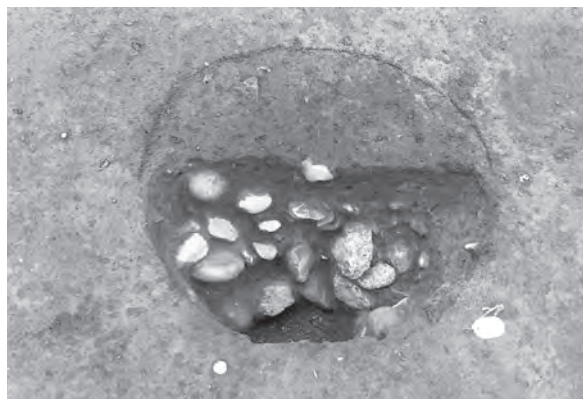
SI-1272 調査状況（東から）



SI-1289 調査状況（北東から）



SI-1289 炉跡（南西から）



SK-1182 土層堆積状況（南から）



SK-1182 完掘状況（西から）



SK-1187 土層堆積状況（南から）



SK-1187 確認面遺物出土状況（南西から）



SK-1187 完掘状況（南西から）



SK-1187 遺物（石器）出土状況（南から）



SK-1201 遺物出土状況（南から）



SK-1202 完掘状況（南東から）



SK-1197・1198 遺物出土状況（南から）



SK-1204・1205 完掘状況（南東から）



SK-1216 遺物出土状況（東から）



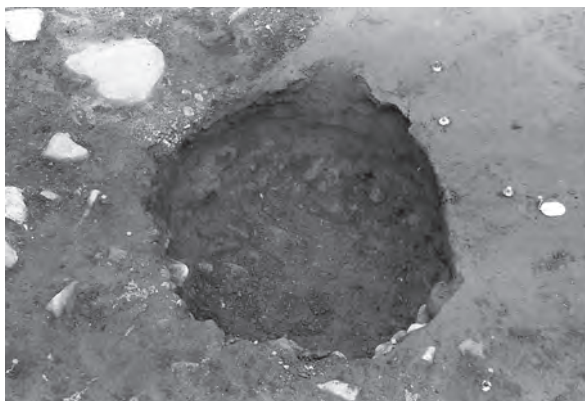
SK-1218 遺物出土状況（北から）



SK-1237・1240 完掘状況（東から）



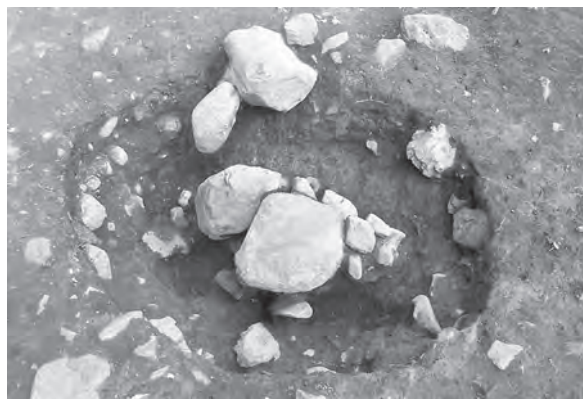
SK-1253 土層堆積状況（南から）



SK-1253 完掘状況（南から）



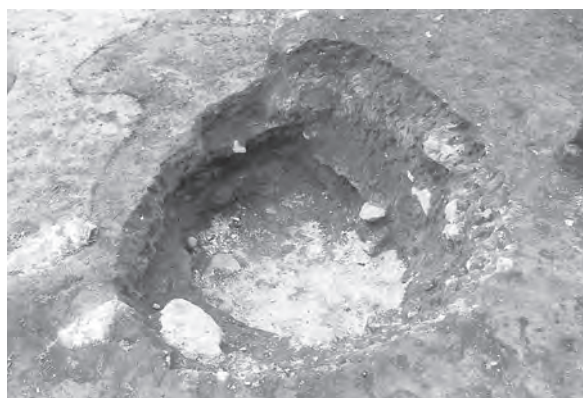
SK-1274 土層堆積状況（南から）



SK-1275 遺物出土状況（西から）



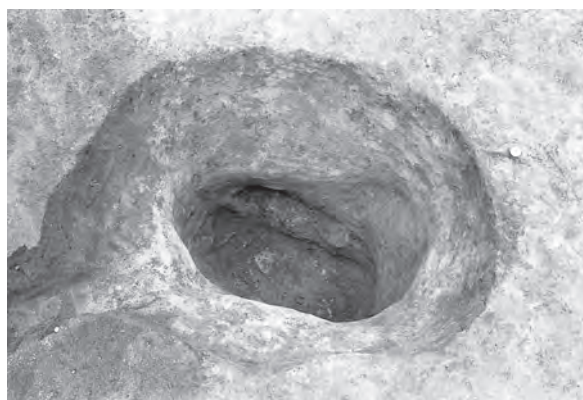
SK-1276 土層堆積状況（東から）



SK-1287 完掘状況（北西から）



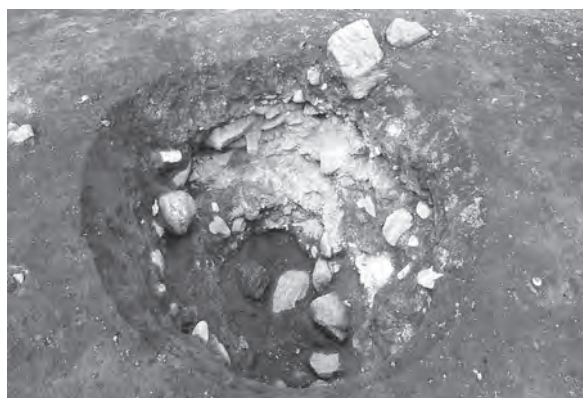
P-9 遺物出土状況（東から）



SK-1269 完掘状況（東から）



SK-1270 完掘状況（西から）



SK-1283 完掘状況（南から）



SK-1283 土層堆積状況（南から）



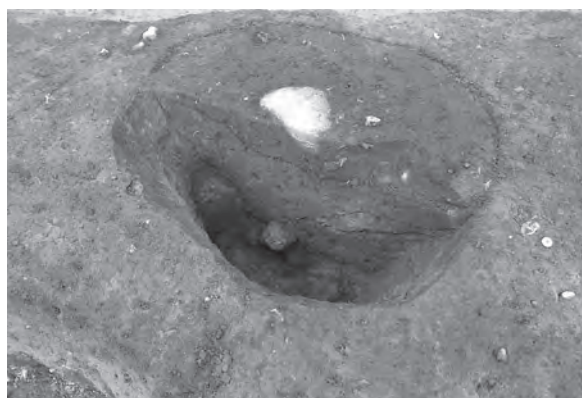
SK-1285 完掘状況（南東から）



SK-1285 土層堆積状況（北東から）



SK-1286 完掘状況（北から）



SK-1286 土層堆積状況（北から）



SX-1282 埋設土器確認状況（北西から）



SX-1282 埋設土器出土状況（北から）



SX-1291 埋設土器出土状況（北東から）



B3-10 グリッド 遺物出土状況（西から）



C3-4 グリッド 遺物出土状況（東から）



C3-4 グリッド 遺物出土状況（南から）



C3-18 グリッド 遺物出土状況（南西から）



C3-18 グリッド 遺物出土状況（北東から）



H19 発掘調査風景（西から）



H20 発掘調査風景（北東から）



H20 包含層グリッド全景（南東から）



H19 発掘調査風景（南西から）



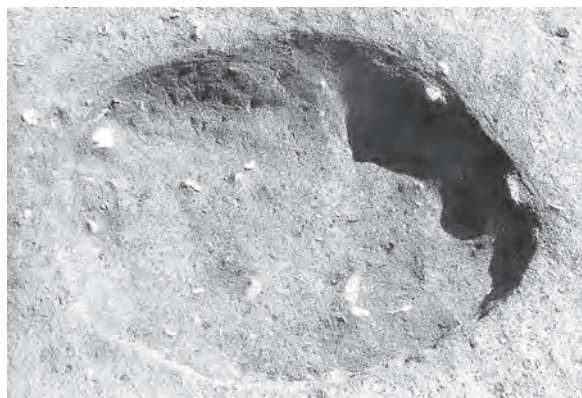
SK-1257 完掘状況（南から）



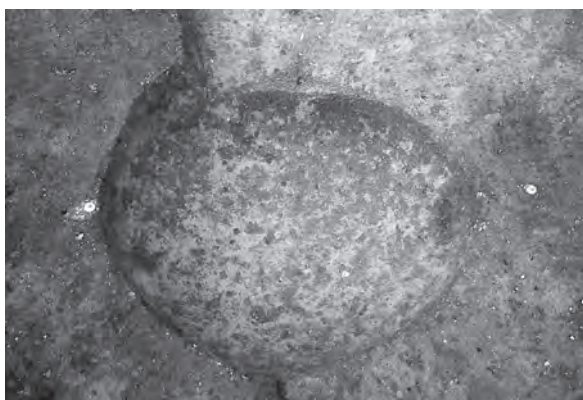
SK-1261 完掘調査状況（南から）



SK-1263 完掘状況（東から）



SK-1264 完掘状況（東から）



SK-1265 完掘状況（南から）



SK-1267 埋葬人骨出土状況（西から）



SK-1267 土層堆積状況（東から）



SK-1271 土層堆積状況（南から）



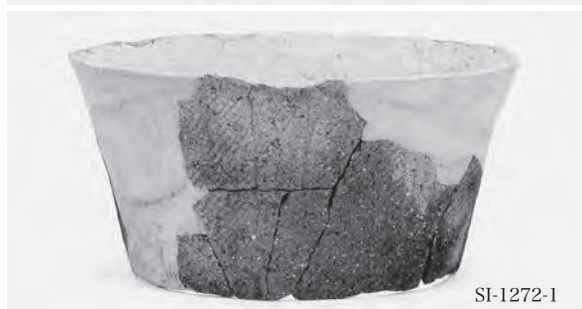
SI-1239-1



SI-1239-2



SI-1239-3



SI-1272-1



SI-1272-2

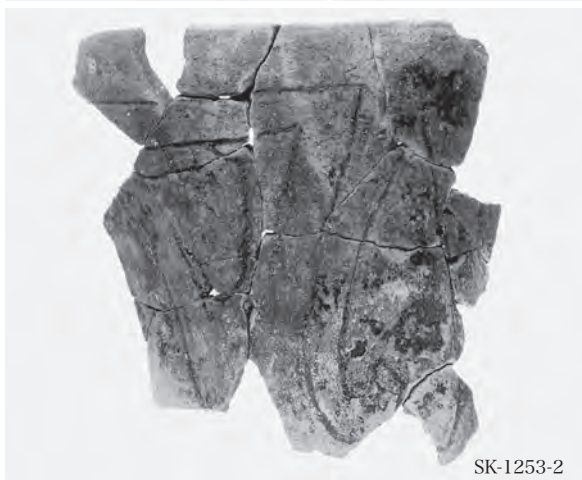


SK-1182-1

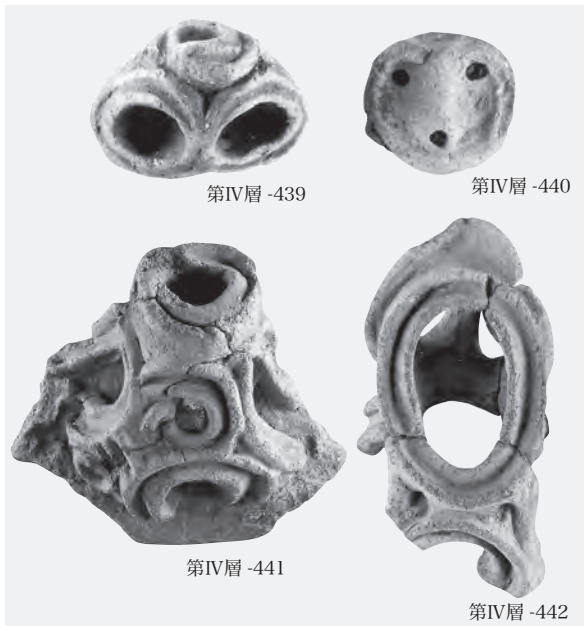
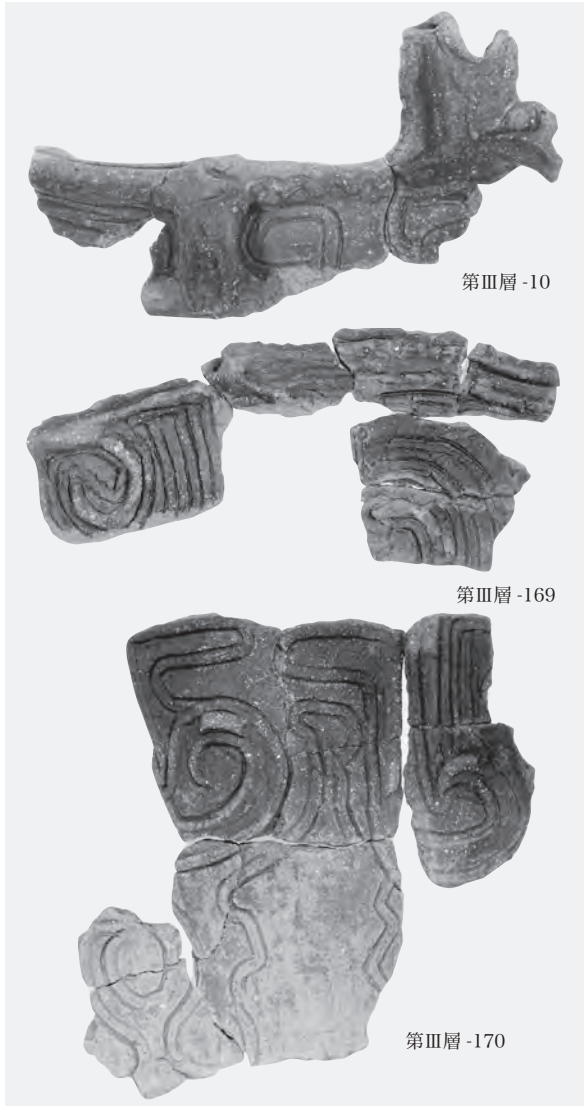


SK-1187A-1

遺構出土縄文土器（1）



遺構出土縄文土器（2）



包含層出土縄文土器 (1)



第IV層-523



第IV層-639



第IV層-640



第IV層-668



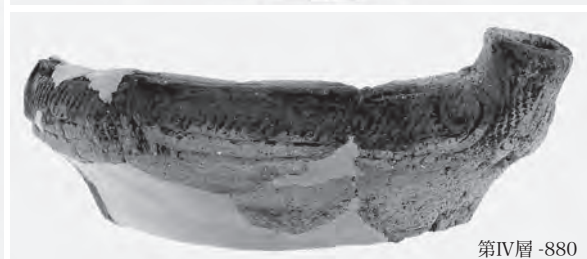
第IV層-669



第IV層-737



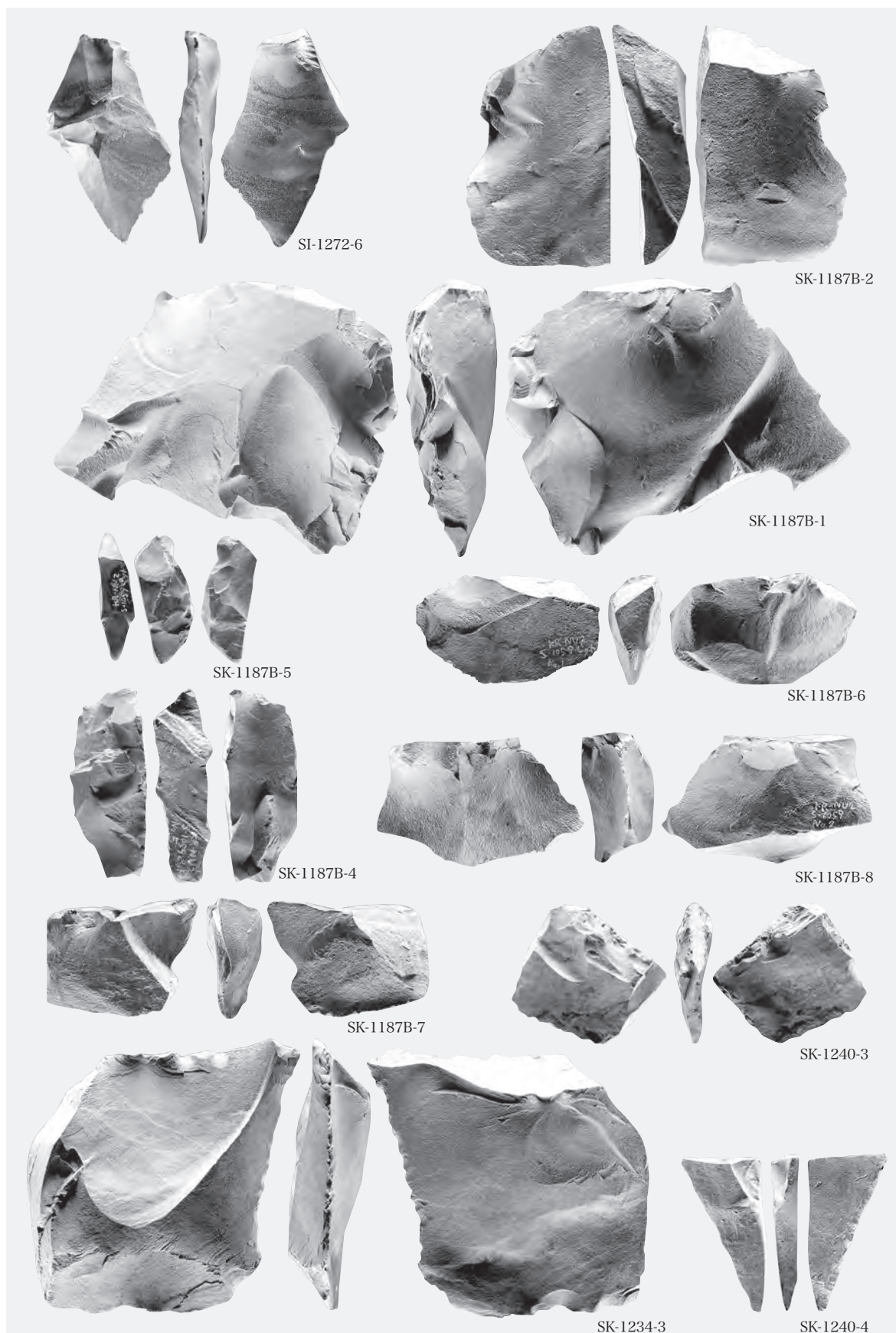
包含層出土縄文土器（3）



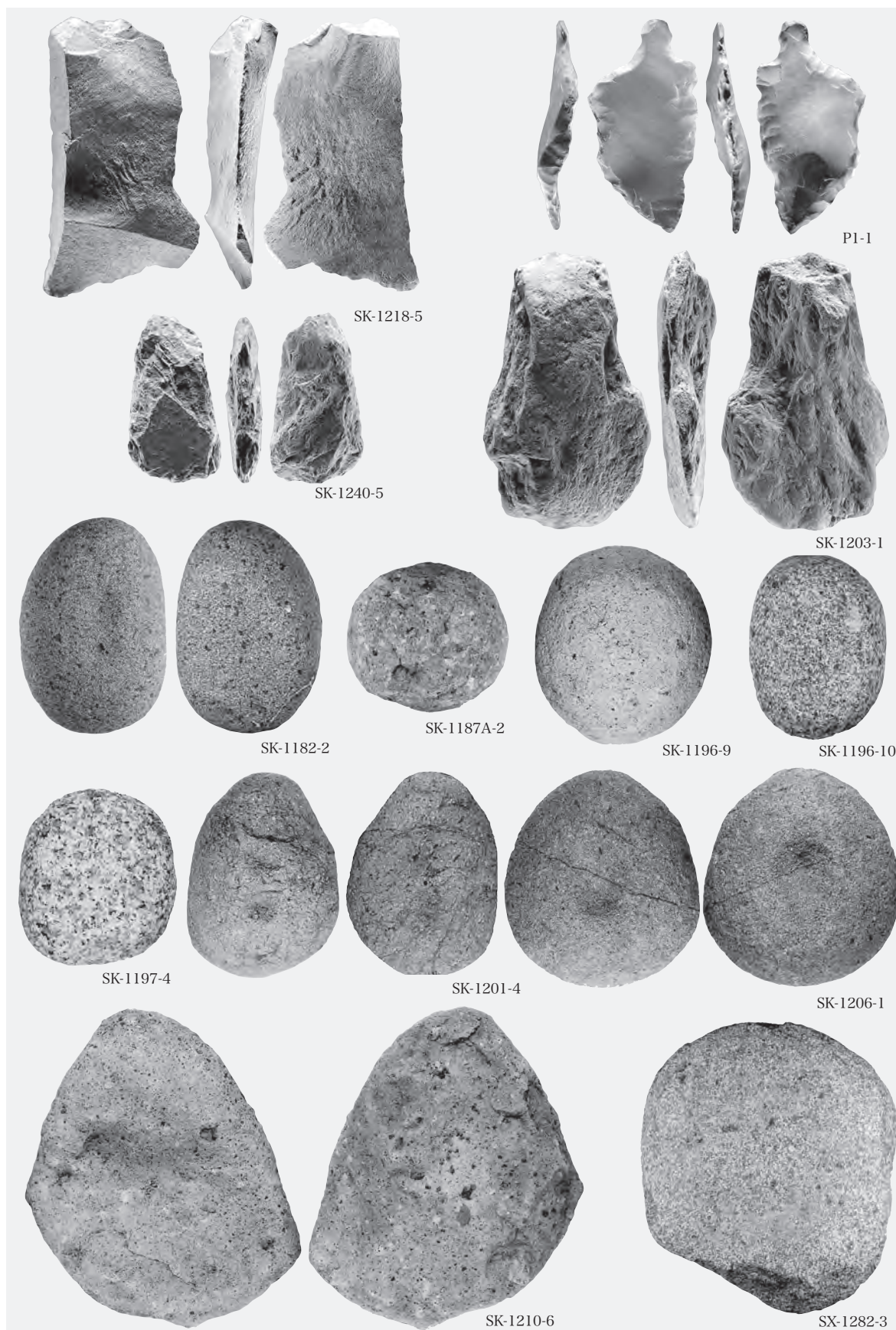
包含層出土縄文土器（4）



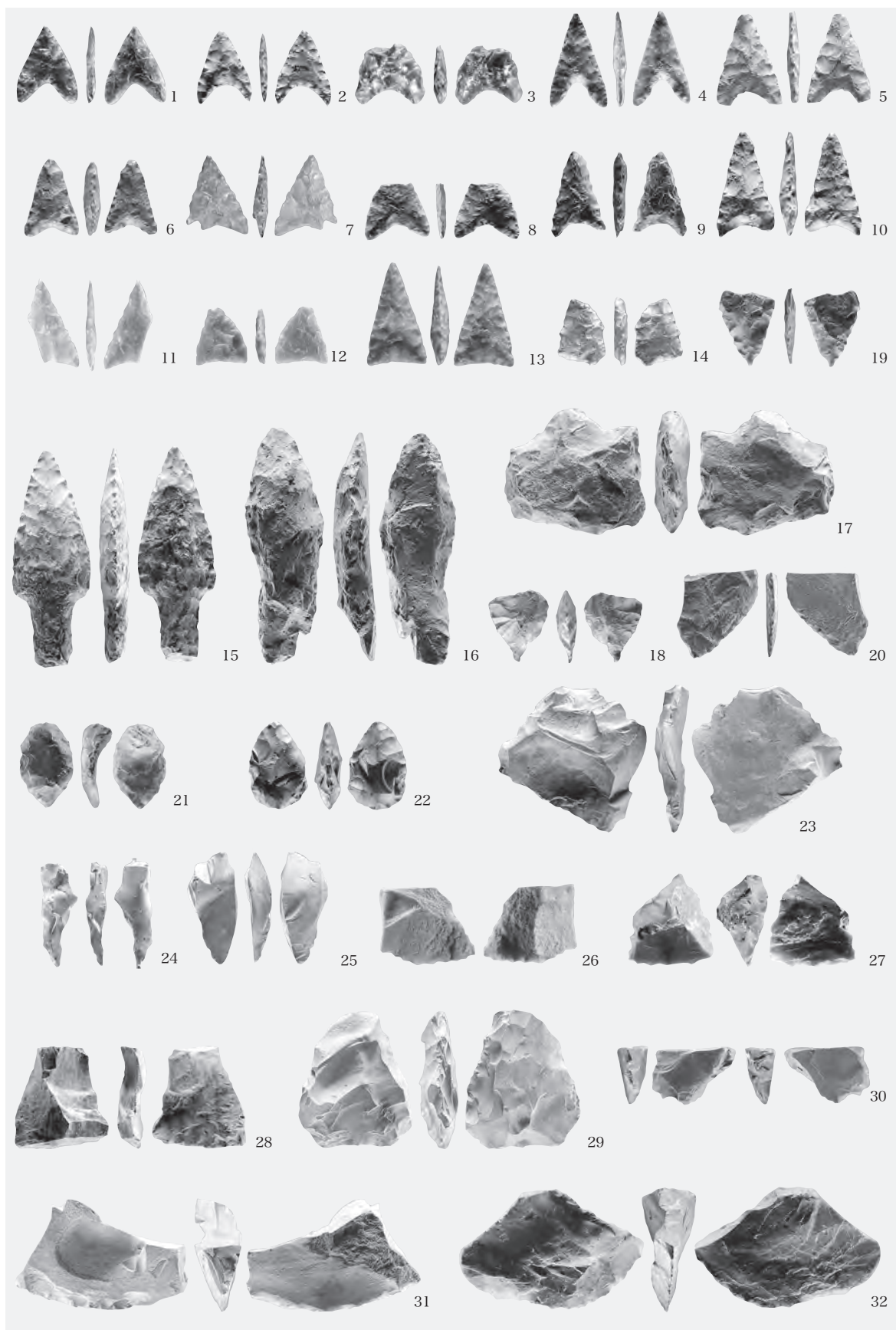
包含層出土土器（5）



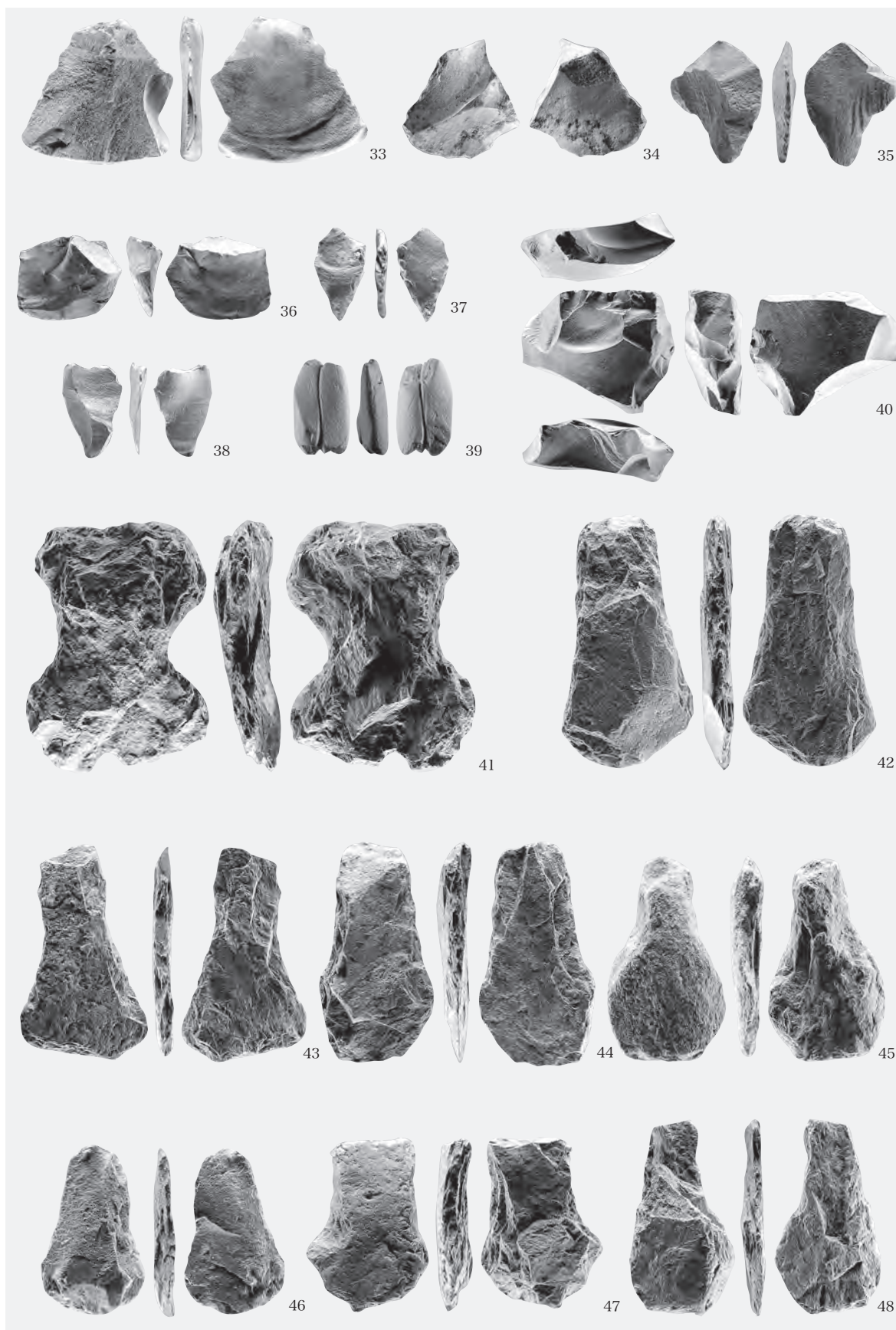
遺構出土石器（搔削器類・剥片・使用痕のある剥片）



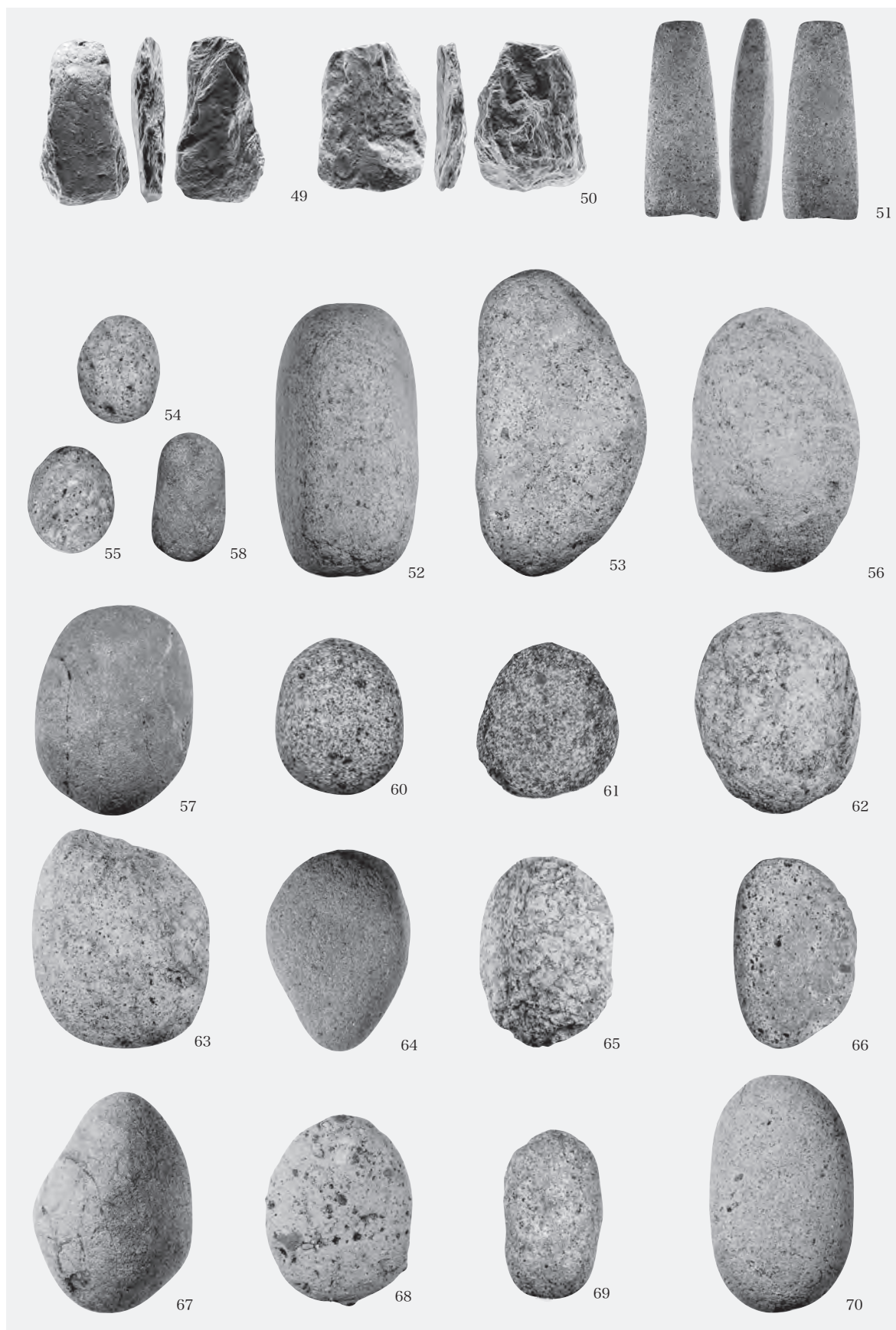
遺構出土石器（使用痕のある剥片・石匙・打製石斧・磨石類・石皿）



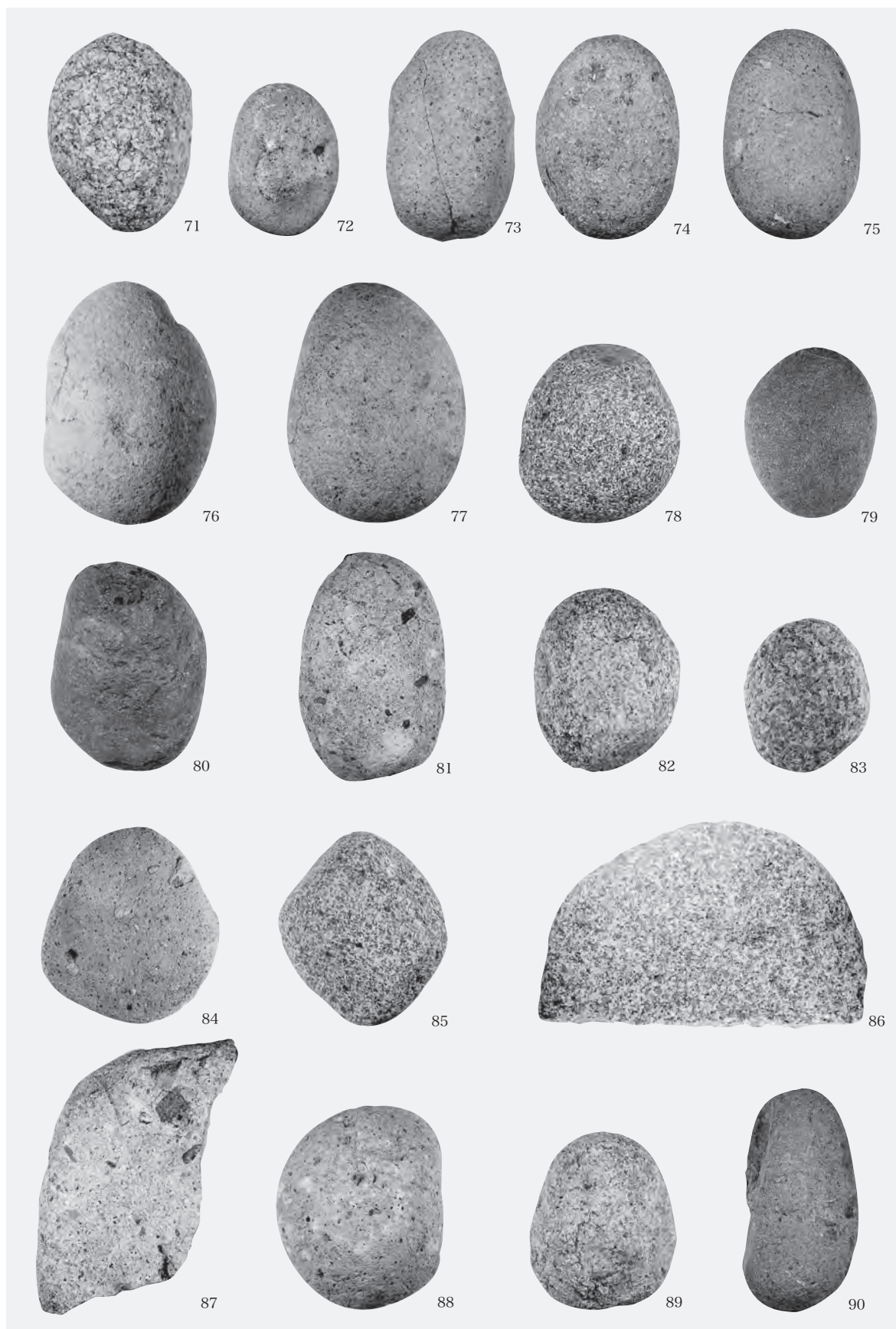
包含層出土石器（石鏃・石槍・石錐・石匙・搔削器類）



包含層出土石器（使用痕のある剥片・石錘・石核・打製石斧）



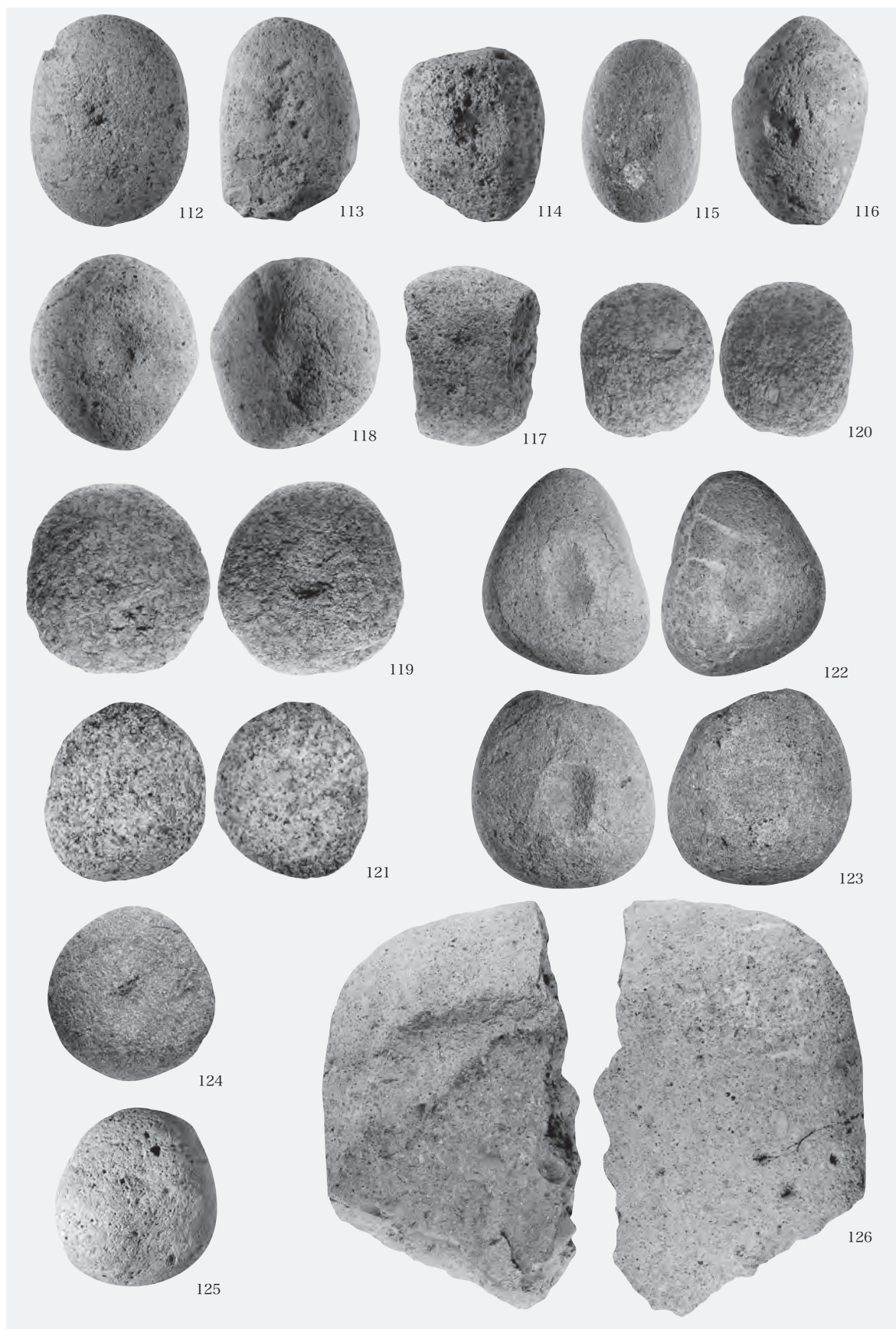
包含層出土石器（打製石斧・磨製石斧・磨石類）



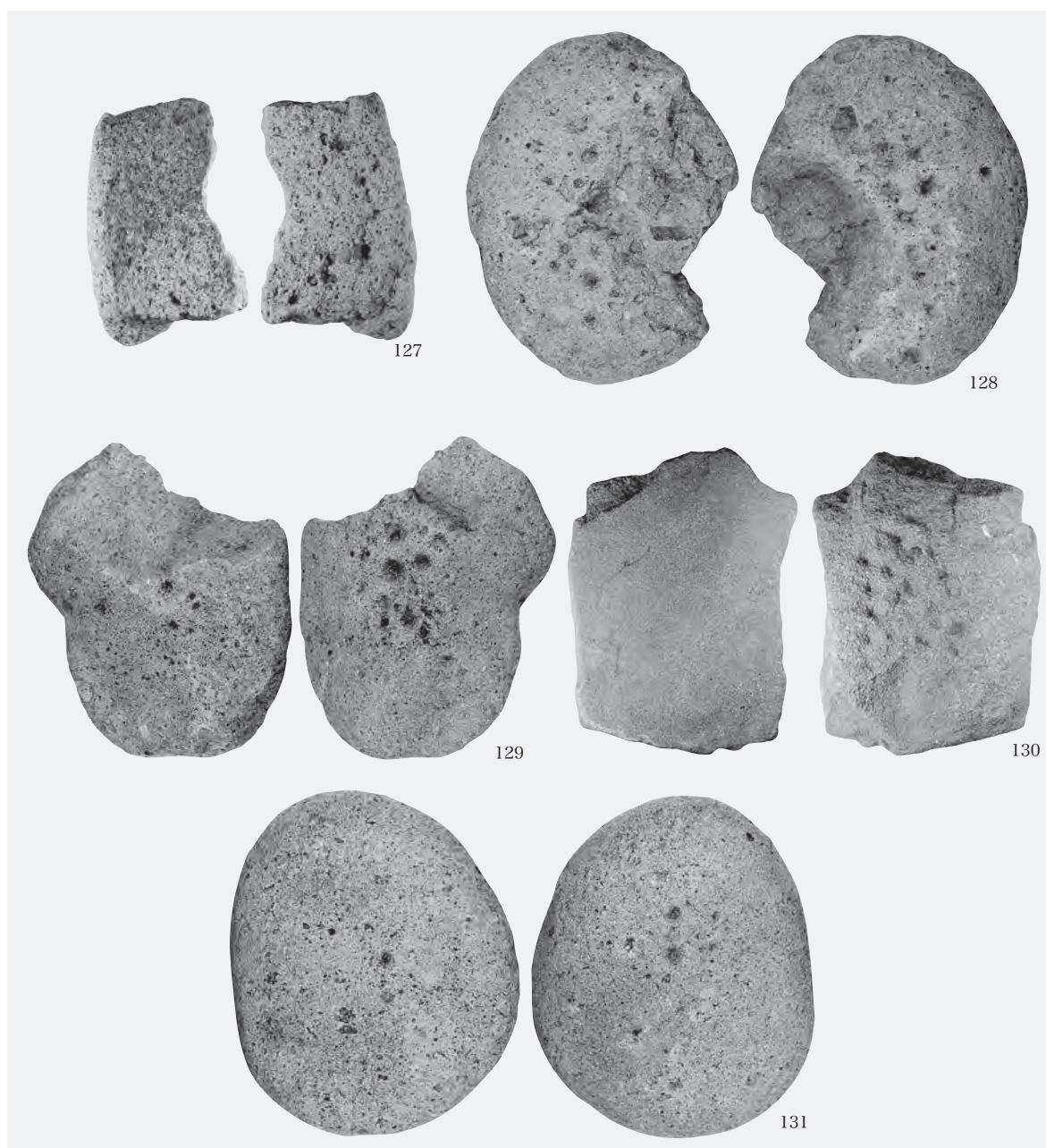
包含層出土石器（磨石類）



包含層出土石器（磨石類）



包含層出土石器（磨石類・石皿）



包含層出土石器（石皿・多孔石）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なかうちいせき
書 名	仲 内 遺 跡 2
副 書 名	国土交通省による湯西川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻 次	3
シ リ ー ズ 名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シ リ ー ズ 番 号	第349集
編 著 者 名	片 根 義 幸
編 集 機 関	財団法人とちぎ未来づくり財団 埋蔵文化財センター
所 在 地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発 行 機 関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ未来づくり財団
発 行 年 月 日	西暦 2012年3月30日 (平成24年3月30日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間 (断続調査)	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかうち 仲 内 遺 跡	にっこうしゅにしがわ 日光市湯西川 あざいどさわ 字井戸沢地内	09382		36° 58'00"	139° 36'42"	20060605 ～ 20081030	3,500	ダム建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特記事項
仲 内 遺 跡	集 落 遺物包含層	縄 文	竪穴住居跡 4軒 土坑 92基 小穴 10基 陥し穴 4基 屋外土器埋設遺構 2基 焼土遺構 3基 遺物包含層 近世以降 土坑 7基 墓坑 1基	縄文土器・石器	縄文時代中期 中葉～後葉を 中心とした時 期の環状集落

要 約	<p>湯西川源流域の右岸に位置し、帝釈山地の一部を構成する明神ヶ岳北麓の河岸段丘上立地する。遺跡の標高は約700m前後で、北側の湯西川に向かって緩やかに傾斜し、河床との比高は約7mである。</p> <p>前回の第1次調査では、竪穴住居跡23軒、土坑375基、土器埋設遺構4基などからなる縄文時代中期中葉から後葉を中心とした時期の環状集落を確認した。今回の調査区はこの環状集落の西側部分に相当する。</p> <p>縄文時代の竪穴住居跡は中期中葉から後葉のもので、壁の明瞭なものは少ないが、中期後葉の住居には複式炉が付設される。土坑は中期中葉から後期前半までのものが確認されている。貯蔵穴や墓坑と考えられるもののほか、小穴や陥し穴などがある。このなかには、多量の礫が入った土坑や石器を埋納した小穴も存在する。屋外土器埋設遺構は、土坑内に中期中葉の深鉢形土器を正位に埋設したものがある。</p> <p>土器は中期中葉から後葉を主体に、早期中葉から後期後半までのものを少量含む。石器は石鏃・尖頭器・石匙・石錐・搔削器類・打製石斧・磨製石斧・磨石類・石皿などがあり、磨石類が組成の大半を占めている。</p>
-----	--

湯西川ダム関連遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

1. 「仲内遺跡」 栃木県埋蔵文化財発掘調査報告書第 296 集 2006 (平成 18) 年 3 月
2. 「川戸釜八幡遺跡・石仏遺跡」 栃木県埋蔵文化財発掘調査報告書第 338 集 2011 (平成 23) 年 3 月

栃木県埋蔵文化財調査報告第 349 集

仲 内 遺 跡 2

－国土交通省による湯西川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－

発行 栃 木 県 教 育 委 員 会

宇都宮市埴田 1－1－20

T E L 028 (623) 3425

財団法人とちぎ未来づくり財団

宇都宮市本町 1－8

T E L 028 (643) 1011

平成 24 年 3 月 30 日発行

編集 財団法人とちぎ未来づくり財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

T E L 0285 (44) 8441

印刷 下野印刷株式会社
